

國學院大學學術フロンティア事業 研究報告

# 人文科学と画像資料研究

第 1 集

2004

# 刊 行 に あ た っ て

國學院大學學術フロンティア事業実行委員長  
小 川 直 之

平成 11 年度に、文部科学省の私立大学学術研究高度化推進事業として指定を受けた学術フロンティア構想「劣化画像の再生活用と資料化に関する基礎的研究」は平成 15 年度で最終年度を迎えましたが、ここに「國學院大學學術フロンティア事業研究報告 人文科学と画像資料研究」第 1 集を刊行いたします。

当事業にかかる研究報告は、平成 11 年度から 14 年度については、それぞれの年度末に刊行した『國學院大學學術フロンティア構想「劣化画像の再生活用と資料化に関する基礎的研究」事業報告』に収録していますが、本年度からこの論考部門を独立させ、新たに研究報告として出版するものです。本年度は、すでに別途、当事業の成果の一部として『柴田常恵写真資料目録』を刊行しており、出版物は事業報告、研究報告、目録の 3 部仕立てとなります。

本誌に収録した論考は、平成 15 年度に行ったフォーラム「人文科学と画像資料研究」ならびに「画像資料論の可能性」と題して行ったシンポジウムでの研究報告を中心とし、これに平成 14 年度末の研究會「画像資料と近代史 - 歴史学研究における記録資料の役割 - 」での報告と討論を加えたものであります。

平成 11 年度から 14 年度までの研究報告などについては、事業報告として出版したほか、当事業の Web ページ (<http://www2.kokugakuin.ac.jp/frontier/>) にも再録しております。本誌とあわせて閲覧くださいますようお願いいたします。

國學院大學には、当事業で研究を行ってきた大場磐雄博士資料、柴田常恵資料、折口信夫博士資料など膨大な画像資料が所蔵されております。さらに今後整理予定の画像資料として、宮地直一博士資料、坪井洋文博士資料も収蔵されていますし、これらに絵巻物類などの絵画資料を加えると、国内だけではなく国際的にも有数の画像資料コレクションを保有しています。

人文科学分野のみならず、さまざまな学術分野において、従来は実物資料、文字記録資料、伝承資料などによって研究が進められてきましたが、現在ではこれらに加え、画像資料が重要な資料群となっていることはいうまでもありません。とくに学術研究の高度化を推進していくにあたっては、画像は資料として存在するだけでなく、研究公開の手段としても有効であり、その資料化と活用に関する研究は喫緊の課題となっています。

平成 11 年度から開始した当事業の推進によって、画像資料の重要性に対する認識がさらに深まり、また本学がその研究拠点として位置付けられつつあると確信しております。平成 16 年度からは、今までの成果を土台として新たな研究展開を進めていく準備を進めております。本年度から研究成果の公開を、事業報告、研究報告、目録の 3 部仕立てにしましたのは、新たな研究展開に向けての準備の一つでもあります。

本誌が今後、多くの研究に役立てていただけることを願い、刊行のご挨拶とさせていただきます。

平成 16 年 3 月 20 日



# 前 言

- ・本誌に収録した論考は、國學院大學學術フロンティア事業実行委員会が平成 15 年度に開催したフォーラム・シンポジウムにおける研究報告と平成 14 年度末に行った研究会の内容を基としている。各会の詳細は以下の通りである。

學術フロンティア研究会 「画像資料と近代史 - 歴史学研究における記録資料の役割 - 」  
平成 15 (2003) 年 3 月 15 日 13:00 ~ 17:00 於 常盤松 1 号館 3 階 第三演習室

- 山内利秋氏 「文化財担当者柴田常恵の記録 大場磐雄との関連性を軸に - 」
- 光江 章氏・酒巻忠史氏 「“ 楽石雑筆 ” にみる君津地方の遺跡調査」
- 中野 宥氏 「登呂遺跡にみる記録写真と大場磐雄」
- 大久保治氏 「保存科学における記録」
- 加藤里美氏 「登呂遺跡関連大場磐雄資料 - ガラス乾板と大場資料 - 」
- 平澤加奈子氏 「近代初期における學術雑誌の写真利用 - 『考古学雑誌』を事例として - 」

學術フロンティア画像資料研究フォーラム「人文科学と画像資料研究」  
平成 15 (2003) 年 7 月 12 日 13:00 ~ 16:00 於 120 周年 1 号館 1401 教室

- 荒井裕介氏 「大場磐雄資料作業報告」
- 倉石忠彦氏 「画像資料と民俗誌」
- 小林達雄氏 「考古学的情報としての画像」

學術フロンティア画像資料研究フォーラム「人文科学と画像資料研究」  
平成 15 (2003) 年 10 月 25 日 14:30 ~ 17:30 於 120 周年 1 号館 1407 教室

- 田中秀典氏 「柴田常恵資料の保存・整理作業」
- 青木繁夫氏 「画像資料と保存科学」
- 宮家 準氏 「かたちとところ - 柱の信仰と儀礼をめぐって - 」

學術フロンティアシンポジウム「画像資料論の可能性」  
平成 15 (2003) 年 11 月 1 日 13:00 ~ 17:00 於 120 周年 1 号館 1105 教室

- 杉山林継氏 「學術フロンティア事業の成果と今後の展望」
- 池田榮史氏 「沖縄県における映像資料の保存と活用の現況」
- 小川直之氏 「画像資料と民俗学」
- 齋藤ミチ子氏 「記録されたイザイホー - 画像から見た祭祀状況と聖域の変容 - 」
- 黒崎浩行氏 「メタデータ配信による画像資料活用の可能性」

- ・各執筆者の肩書きは報告当時のものである。
- ・本誌刊行にあたっては、杉山林継・小川直之の指導の下に編集作業を平澤加奈子・中村耕作が行い、以下の協力を得た。  
青木良輔・宇野淳子・加藤里美・菊田龍太郎・田中秀典・菱田京子・日原史絵・村松洋介



# 目 次

刊行にあたって  
前 言

## I. 画像資料論の展開

画像資料と保存科学 .....	青木 繁夫	3
メタデータ配信による画像資料活用の可能性 .....	黒崎 浩行	11
沖縄県における画像資料の保存と活用の現況 .....	池田 榮史	19
柴田常恵資料の整理・保存作業 .....	田中 秀典	23

## II. 画像資料と考古学

考古学的情報としての画像 .....	小林 達雄	29
学術フロンティア作業報告—大場磐雄資料編 .....	荒井 裕介	41

## III. 画像資料と宗教学・民俗学

民俗宗教における柱の信仰と儀礼 .....	宮家 準	49
画像資料と民俗誌 .....	倉石 忠彦	65
記録されたイザイホ—画像から見た祭祀状況と聖域の変容— .....	齋藤 ミチ子	79
画像資料と民俗学 .....	小川 直之	95

## IV. 研究会 画像資料と近代史—歴史学研究における記録資料の役割—

文化財担当者柴田常恵の記録—大場磐雄との関連性を軸に— .....	山内 利秋	129
楽石雑筆にみる君津地方の遺跡調査 .....	光江 章	137
	酒巻 忠史	
登呂遺跡に見る記録写真と大場磐雄 .....	中野 宥	155
保存科学における記録 .....	大久保 治	173
登呂遺跡関連大場磐雄資料—ガラス乾板と大場資料— .....	加藤 里美	179
近代初期における学術雑誌の写真利用—『考古学雑誌』を事例として— .....	平澤加奈子	183
ディスカッション .....		189



# 画像資料論の展開

画像資料と保存科学

青木 繁夫

メタデータ配信による画像資料活用の可能性

黒崎 浩行

沖縄県における映像資料の保存と活用の現況

池田 榮史

柴田常恵資料の整理・保存作業

田中 秀典



# 画像資料と保存科学

青木 繁夫(東京文化財研究所 修復技術部長)

## 1. 保存科学における画像記録

保存科学の世界では、画像などの文化財情報をどのような目的で取得し、それをどのような形で取り扱っているのでしょうか。保存科学分野で、文化財情報を記録化するには2つの方向があります。

1つは文化財情報を自然科学的分析手法によって記録化する方向です。自然科学的手法によって得られる情報は非破壊で調査し、記録化するという条件があります。したがって文化財から分析試料を採取して調査を行うことはタブーになっています。しかし、どうしても情報化が必要であると判断された場合は、試料を採取して分析を行うこともあります。ここで問題になるのは化学分析、蛍光X線分析(写真1)、X線回折分析で得られる材質などの情報は局所的な情報でしかなく、面的な情報にはなり得ない問題があります。面的な情報を画像情報で得る方法があります。保存科学においては局所的な分析情報と面的な情報をどのように記録化して、相関性を持って理解するかは大きなテーマになっています。

2つ目の情報の記録化の方向としては、文化財修復における記録があります。修復時の記録は、医師が作成する診療記録と同じように必ず作成しなければならない原則があります。考古学を勉強している人達には、発掘調査に伴い作成される図面や写真などの記録と近いものであると考えていただければ理解してもらえらると思います。発掘調査が進行していくに従って、当然のことながら遺跡が破壊され属性情報が失われてしまいます。その破壊されていく情報は、図面や写真などの形で記録化され担保されます。それを「記録保存」という言葉でいいあらわしています。文化財修復の記録も考古学における「記録保存」と似たような考え方をとっていますが、文化財を理解するために修復時により積極的に情報を取り、研究などの新しい価値創造の場に還元活用しています。これは、担保された失われた情報は、常に利用できるような形にしておかねばならないということにも通じることです。

この記録には、当然のことながら今日のテーマである写真、映画、ビデオなどの画像が大きな比重を占めています。保存科学における画像記録は、文化財を単に記録にとどめるための通常の写真だけでなく、文化財情報を非破壊調査して記録化していくという意味では、自然科学的手法を駆使して得られた情報を画像に記録することがあります。その代表的なものとしてX線写真撮影があります。透過X線(写真2)の写真撮影は、かなり古く大正10(1921)年に我が国で最初に阿武山古墳から出土した人骨のX線調査を行なっています。1895(明治28)年にレントゲンがX線を発見してからわずか20年後には文化財調査に利用していて、世界でもかなり早い利用例だといえます。このほかにX線とコンピューター技術を融合させたX線断層写真などを使用した調査も実施しています。X線断層写真が最初に応用されたのは、昭和53(1978)年、神奈川県浄源寺の木彫仏の修復の際に、内部の損傷状態や構造を輪切りにして観察したいという希望から撮影したのが最初の例です。X線断層写真は、コンピューター技術の進歩によって内部構造を立体的に観察できるようになっています。とくに考古遺物の構造、製作技法や損傷状態の調査には必ず使用されるようになっていきます。通常の透過X線写真のほかに、反射X線で撮影するエミシオグラフィーという方法があります。普通の透過X線写真ですと、品物の中を通過した時のX線吸収の差をフィルム上に感光させます。エミシオグラフィーは絵画の調査によく使われますが、油絵や日本画の表面にフィルムをおき、その上からX線を照射します。照射されたX線が顔料とぶつかり反射X線が顔料から出てきます。それをフィルムに感光させます。

そのためフィルムは品物の表面に密着していなければなりません。この撮影法によって材質の分布などの情報が得られます。

X線の他に光を使用した方法としては、赤外線画像や紫外線蛍光写真などがよく使われます。赤外線は、有機物を分析する赤外分光光度計、絵画の下絵や漆紙文書の解読に使用できる赤外線テレビや赤外線写真、空洞や剥がれなどの損傷状態を表面の熱情報として表示する赤外線熱画像など文化財調査のさまざまな場面で応用されています。赤外線フィルムは、現在製造が中止されたため、デジタルカメラを使用して撮影しています。恐らく考古学や歴史学を研究している方々は「漆紙文書」の存在を知っていると思います。多賀城遺跡で皮製の座布団のようなものが出土しているが、どんなものか分からないので調査してもらえないかと持ち込まれたのが発見のきっかけです。持ち込まれたものを観察してみると確かに皮のように見えたが、動物の皮ならば埋蔵中に溶けてなくなるのが普通なので皮ではないと判断しました。しかし、薄い木の皮などは、今までにも出土例があるため可能性があるだろうと思いました。そこで斜光線や透過光などを用いて詳細な目視観察をしました。その結果、普通の状態では見えませんが、被膜の薄い部分を透過光で観察したときにぼんやりと文字が見えたわけです。この状態ならば絵画の下絵調査に使用している赤外線写真を撮影すれば可視光の下で人間に見えない文字が見える可能性があるかと判断して赤外線写真を撮影した結果、「文字」を発見しました。その後、被膜の顕微鏡観察や化学分析を実施した結果、被膜中の繊維の残り具合や分析結果から漆の可能性が大きいことが分かりました。要するに桶の中に保管されている漆は、そのままにしておくと固まってしまいます。今でも固化を防止するために漆の表面に和紙を置いて蓋をすることが行われています。その紙の中に漆が浸み込み固まります。それが廃棄され、土の中に埋ってしまえば紙の部分は腐食してなくなります。漆に固着された墨は、漆膜の中に封印されたような状態で保存されることになります。このようにして見えない文字を赤外線写真によって画像にすることが可能になりました。しかし、赤外線写真では撮影できる波長範囲に限られることと現場で観察できないことがあって赤外線テレビの開発につながっていきます。赤外線テレビが開発されて調査が簡単に行えるようになり、その後の「漆紙文書」の発見に貢献できるようになったわけです。

敦煌では昨年まで赤外線写真や紫外線蛍光写真を撮影したことがありません。敦煌莫高窟壁画は、礫岩の上にスサ入り粘土を塗り、その表面に様々な顔料を使用して絵を描いています。青色顔料、緑色顔料、赤色顔料などさまざまな色の鉱物顔料が使用されています。一般的に絵画の下書きは墨で描くことが多く、赤外線写真を撮影すると明瞭に映像化できます。敦煌の場合には割付線などの下書きを墨で描いていません。ベンガラを使って描いています。ベンガラは赤外線では映像化出来ません。紫外線を照射すると物質が蛍光を発することがあります。その光を上手に撮影すると下書き線の映像化が可能です（写真3）。この調査によって敦煌莫高窟53窟壁画の壁画はベンガラを使用して下書きされたことが判明しました。また、敦煌では壁画顔料を蛍光X線分析やX線回折分析で同定していますが、その情報は局部的な情報でしかありません。面的な情報や肉眼で確認できない情報は赤外線や紫外線などを使用した光学的調査が必要不可欠です。特に有機系顔料や膠着剤の調査には欠かせないものです。例えば青色顔料はアズライトあるいはラピスラズリ等の鉱物を砕いて使用しています。光学的調査手法を利用して同定することが可能になっています。最近では特定の波長範囲の光を出すポリライトという照明装置ができ、それとデジタルカメラと併用して多様な調査が出来るようになっていきます。鉱物顔料は基本的に蛍光をださないといわれていましたが、ラピスラズリに紫外線を当てると蛍光を発することがわかり、ラピスラズリと他の青色顔料とを区別することが出来るようになりました。また作品の材質情報や修復に使用された樹脂範囲を映像化することで、修復の記録化にも使用

できます。赤外線にしても、紫外線蛍光写真にしても、昔は銀塩フィルム媒体を使ってごく限られた波長範囲の撮影しかできませんでした。原理的にはまったく同じですが、デジタル技術などの周辺技術が進歩していくと、新しい情報が得られるようになります。中心になる原理は常に変わらないですが、螺旋状に周辺技術が進歩していくことによって新しい研究分野が展開することがあります。

高松塚古墳壁画は 30 年前に発見されましたが、当時、床に落ちていた顔料を分析しています。その分析ではどの絵の顔料かわからず、いわば戸籍のわからない不確かで限られた情報しか得られませんでした。現在は、モバイル型の蛍光 X 線分析装置が開発され、石室の中へ分析装置を入れて壁画から直接、顔料の材質分析をしています。

## 2. 残された画像の記録

日本における文化財の科学的な画像調査は歴史が古く、すでに触れたように透過 X 線写真は、大正 10 年に撮影されています。阿武山古墳から出た人骨の X 線写真が日本で最初に撮影された文化財関係の写真であろうといわれており、いまだにそのフィルムは保存されています。東京文化財研究所には X 線写真が 15,000 枚ほどあります。ほとんど重要文化財および国宝の資料です。順次デジタル化しており、考古編と工芸編がカタログとして出版されています。

重要文化財である熊本県江田船山古墳出土大刀に銘文が象嵌されています。3 年前に再修復していますが、その修復の事前調査として過去の写真資料を全部集めて銘文象嵌部分の変化を追跡しました。明治にはわずかに十数文字しか確認されていませんが、時代を経るにしたがい文字数が増えていきます。最も増えるのは昭和 10 (1935) 年頃の写真に写っているもので、それからは現在確認されている文字数と変わっていません。この事実は帝室博物館 (現東京国立博物館) 考古課長高橋健自が、刀の研ぎ師に命じて研ぎ出させたとされていたことと符合していました。3 年前に行われた修復時に文字がないかどうか改めて X 線透過撮影を行って調査しました。残念ながら新しい銘文は発見されませんが、鳥文の象嵌が新しく発見され、研ぎ出し処置が行われています。この銘文象嵌の調査は、文字が研ぎ出された歴史的経過を修復の場にフィードバックすることになりました。それは写真資料を積極的に活用した調査例として参考になると考えられます。江田船山古墳出土象嵌銘大刀の場合は、保存処理という言い方が適切かどうか分かりませんが、それなりの記録が残されて処理されたよい例だと思います。

浜田耕作がイギリス留学から帰国して昭和 11 (1936) 年に『通論考古学』を出版しています。『通論考古学』の中に保存の項がありますが、読んでみますと留学中に入手した文献を翻訳して掲載したようですが、保存の重要性を認識していたためかかなりの頁数をさいています。その中にはさまざまな保存処理の方法が記述されていて、幾つかの保存処理方法は実践されたようで、昭和 12 (1937) 年前後に帝室博物館収蔵の鉄製品や西都原古墳から出土した鉄製品は、『通論考古学』に書いてある方法で処理されています。宮崎県総合博物館には、西都原古墳出土の鉄器がパラフィン処理されたままの状態に保存されていて、このような雰囲気の中で江田船山古墳出土象嵌銘大刀も研ぎ出されたようです。東京大学では関野貞資料を整理していますが、その中に朝鮮半島関係の「保存」の写真があって面白いものがあります。現在、韓国弥勒寺址の花崗岩製の十三重塔の修理が現在行われていますが、この石塔は大正時代に当時の朝鮮総督府がセメントを使って修理をしています。日本でセメントを使用するようになったのが大正末期から昭和初期で、当時の日本でも最先端の技術です。セメントを使用した石塔修理は、恐らく当時の最新の技術を使用して実施しています。修理の時に新しく補充した石には「大正 14 年」の年号が刻まれています。慶州石窟庵には、神々しく美しい釈迦如来座像があり

ますが、花崗岩製の釈迦如来座像が置かれている石室の外側にはトンネルが掘られ、セメントを使用して大地から切り離されています。このような最新技術が使用された文化財修理は、日本においてよりも韓国において行われていた事例が多くあり、日本の保存科学の歴史を研究する上で、韓国で行われた保存修理を研究しなければ日本の保存科学の研究史を語れないことを痛感しています。韓国国立中央博物館には朝鮮総督府時代の文書や画像資料が保存されているそうですので、保存関係の行政文書も含めて調査したいと希望しています。

大谷探検隊の資料は、東京国立博物館と韓国国立中央博物館、それから中国旅順博物館に保存されています。韓国国立中央博物館には壁画などがありますが、去年から大谷探検隊が将来した壁画の保存修理を実施しています。この修理は私たちが技術的指導を行っています。

画像資料をよく利用するのは文化財の健康診断に使います。代表的な例は、鎌倉大仏ですが、鎌倉大仏は当然のことながら全身が錆びています。錆は、その種類によって固有の色を持っています。大仏の錆は、汚れもついていますから全て正しいというわけにはいきませんが、写真と色を測る機械(測色計)を併用することによって錆の色変化をマッピングして、その変化を時系列的に追っていき、錆色と表面の肌の状態から良性の錆と悪性ガンのような錆の分布と変化を把握して保存に生かそうとしています。この調査を5年毎に行って錆色情報を画像解析して劣化程度を知り保存に役立たせています。この診断に使用している基本画像は、撮影年代の明確なカラー写真を集め解析を行い、その結果を画像処理して錆色の分布地図を作成しました。しかし、色は光によって変化し、カラー写真は変退色するという問題があって必ずしも正確ではありませんが、昭和30(1955)年に撮影したカラー写真を画像解析して基本画像を制作しました。

コンピューターを利用した画像解析は、最近のものでは、源氏物語絵巻の解析を実施しています。

最近よく行われることですが、写真を利用してレプリカ作成を行うことがあります。一般的にレプリカは、シリコンラバーなどで型取りをして、それに樹脂を流して制作することが多いですが、写真と赤外線レーザーを使って三次元画像を取得して、三次元数値データから紫外線硬化型の樹脂を使ってレプリカを作る技術が急速に進歩しています。

### 3. イラクやアフガニスタンでの調査

現在、文化遺産の保存や修復の分野で積極的に国際貢献していくことが国の政策になっています。イラクやアフガニスタンでさまざまな文化財保存の国際貢献事業を行っています。新聞報道などでご存じのように、イラクでの文化財の破壊や盗難の現状を把握する調査団がユネスコによって組織され、7月に行われた調査に参加しました。そのことについて少しお話ししたいと思います。地震や台風などの自然災害あるいは火災によって文化財が消滅してしまうことがあります。戦争による破壊や略奪による文化財破壊は悲惨なものです。また、遺跡を軍事基地にしたり、組織的な盗掘被害に曝されたりして完全に消滅してしまう危険性が大きく、被害は甚大なものがあります。その消滅は民族としてのアイデンティティを失うことを意味しています。イラクには文化財保存のために日本がユネスコ信託基金を通じて100万ドルを支出しています。治安が安定してきて暫定政府ができれば向こう5年間ぐらいで10億程度の援助を行う予定になっています。これはバグダッドの国立図書館の写真です(写真4)。通常、よほどのことがないと本が芯まで燃えるのはありえないことです。このような状態では修復の余地もありません。写真資料はよく燃えます。また、消火に使用した水がフィルムのゼラチンを溶かし、フィルム同士が接着され、剥がれなくなって画像回復ができなくなる場合もあります。阪神大震災のときに古い写真を所蔵していた写真館が放水された消火水を浴びて、フィルムが接着し

たり、カビが発生して苦労した経験があります。イラク国立博物館は、イラクを代表する博物館ですが、展示室や収蔵庫、修復施設は破壊と略奪にあってひどい状況でした(写真5)。略奪された収蔵品は、収蔵品目録に残された写真をもとにインターポールがホームページを通じて世界各国に指名手配しました。この例はあまり歓迎できる写真の利用法ではありませんが、日本でも最近韓国の高麗ものの文化財がよく盗まれています。重要文化財が盗まれた例もあります。盗んでから手を加えて一見オリジナルのものと判らないようにして他国へ移動することが行われています。イラクやアフガニスタンの文化財盗難のこともあって昨年ユネスコの盗難防止条約に加盟しています。写真は、学術的に使うだけでなく、他に重要な使い方もあるということです。

アフガニスタンでは幾つかのプロジェクトが進行しています。1つは、ユネスコのプロジェクトとして進行しているものがあります。それはパーミヤンの保存に關してのことです。

パーミヤン遺跡を保存するためのマスタープラン作成

パーミヤン洞窟の壁画の保存と修復計画の作成

大仏の保存修復

保存マスタープランと修復計画の作成は、日本が担当することになりプロジェクトが進行しています。平成15(2003)年9月にパーミヤンに行って基礎的な調査をしました。

日本政府独自のプロジェクトとしては、パーミヤン遺跡の性格をより一層明確にしようとするプロジェクトがあります。これはユネスコのマスタープラン作成と連動してユネスコが出来ない部分を補うための調査です。現在、遺跡探査が行われています。この他には文化財の保存修復に關する技術移転と人材育成を行うプロジェクトです。11月にはカブール博物館で3週間程度の研修が実施されます。また、修復技術者を招聘して日本国内での技術移転と人材育成研修も行われています。日本国内でも進行している重要な仕事があります。過去に、日本の調査隊がパーミヤンで調査を行っていますが、最も早い調査は、東京文化財研究所の前身である美術研究所が昭和2(1927)年に行った調査です(写真6)。そのときの写真が文化財研究所に残っていてデジタル化の作業を行っているところです。昭和44(1969)年には名古屋大学が石窟の構造や壁画を、同45(1970)年頃には京都大学の調査隊が写真測量と壁画調査を、昭和50(1975)年には成城大学が壁画の調査を行っています。現在、パーミヤン溪谷の地形測量図を作成していますので、各大学と共同研究の形でそれらの写真をデジタル化して時系列ごとのパーミヤン遺跡の変化を、地理情報システムを用いて分析したいと思っています。それは保存のためのマスタープラン作りに大いに役立つものと考えています。また、画像による復元が出来れば現在との比較が可能になり、将来博物館が建設されれば、よい展示資料になると考えられます。パーミヤンの洞窟には昔から難民が住んでいます。その人達が洞窟の中で煮炊きをします。その煤が壁全体に厚くタール状に付着していて、ほとんど真っ黒で絵が見えない状態です、光学的な写真撮影調査をしてどのような画像があるかを調べる必要があります。敦煌莫高窟の保存状態に比べればとても厳しい状況です。敦煌莫高窟壁画も一部の洞窟はロシア革命で難民になったロシア人が洞窟に住んだことがあり、炊事による煤で汚れています。それは、ロシア革命の時に逃げてきた難民が洞窟の中に住むによって起きた汚れです。しかし、パーミヤンほどひどくはありません。

大仏は完全に爆破されてしまっています(写真7)。昭和2年の画像と比べて見てください。これは復元するのかこのままの状態にするのか、議論になっています。私は現在の状態もおろかな歴史的行為の一部ですから、そのまま保存すべきではないかと考えています。パーミヤン石窟の岩盤は、本能的には粘土と礫岩の塊ですから、1回崩壊したらそれをもとに戻すことはとても難しいことです。

#### 4．敦煌莫高窟壁画の修復記録

敦煌莫高窟は、小さい石が粘土の間に詰まったような礫岩に洞窟が掘られています。掘りやすい岩ですが、そのため逆に崩れやすい状態です。そのため洞窟が掘られた崖面は、コンクリートで覆われています。昔は洞窟を巡る回廊もなく、礫岩の崖がむき出しの状態でした。この礫岩や壁画の土壁の中には、沢山の塩が含まれていて、それが塩類風化の原因になっています。私たちは敦煌研究院と壁画の保存処理の共同研究をはじめて20年経ちますが、53窟をフィールドとして昨年からは修復を始めています。修復に際しては、何時、誰が、どの場所に、どのような材料で、どのような処置をしたかを記録しなければなりません。ここでは新しく「壁画修復履歴管理システム」(写真8)を開発して記録を行っています。そのシステムは、デジタルカメラを使用して壁画全体のデジタルオルソ写真地図を作成して、その地図上に損傷状態や保存処置の方法の情報を記号で地理情報システムを利用して描き込んでいきます。処置内容は文字や写真情報で書き込みます。損傷や処置情報は地理情報システムによって、個々の情報としてレイヤーとして取り出すことが可能です。修復終了後も定期的に劣化の状態を記録していけば、どの部位が、どのような経過で変化していくかを時系列的に追うことができます。このシステムを使用することによって処置面積とか材料使用量など積算することが出来ます。したがって予算積算も可能になります。敦煌では壁画の模写をしています。壁画のある場所で紙に引き写しています。その作業量は膨大で、壁に影響を与えることもありますから、できるだけ引き写しをさせたくないと考えています。このシステムを進歩させればオルソ写真を原寸大に引き伸ばして、そこに絵の具をのせて模写を作ることも可能になります。壁画の土壁の中には塩の結晶が含まれていますが、観光客が沢山洞窟に入ると湿度が上昇して70%を超えることがたびたびあります。その空気中の水分が塩に吸収され、塩が溶け始めます。反対に湿度が下がると水は空気中に放出され塩が再結晶します。この繰り返しが壁画を破壊してしまいます。したがって洞窟の中に人をなるべく入れないことが大切です。そのためには映像や模写を使ったガイダンス施設を作ることが必要になります。このシステムは、高松塚古墳壁画やキトラ古墳壁画の修復記録作成にも使用されています。

時間になりましたのでここで終わらせていただきます。有難うございました。



写真1 蛍光X線分析装置



写真2 X線発生装置

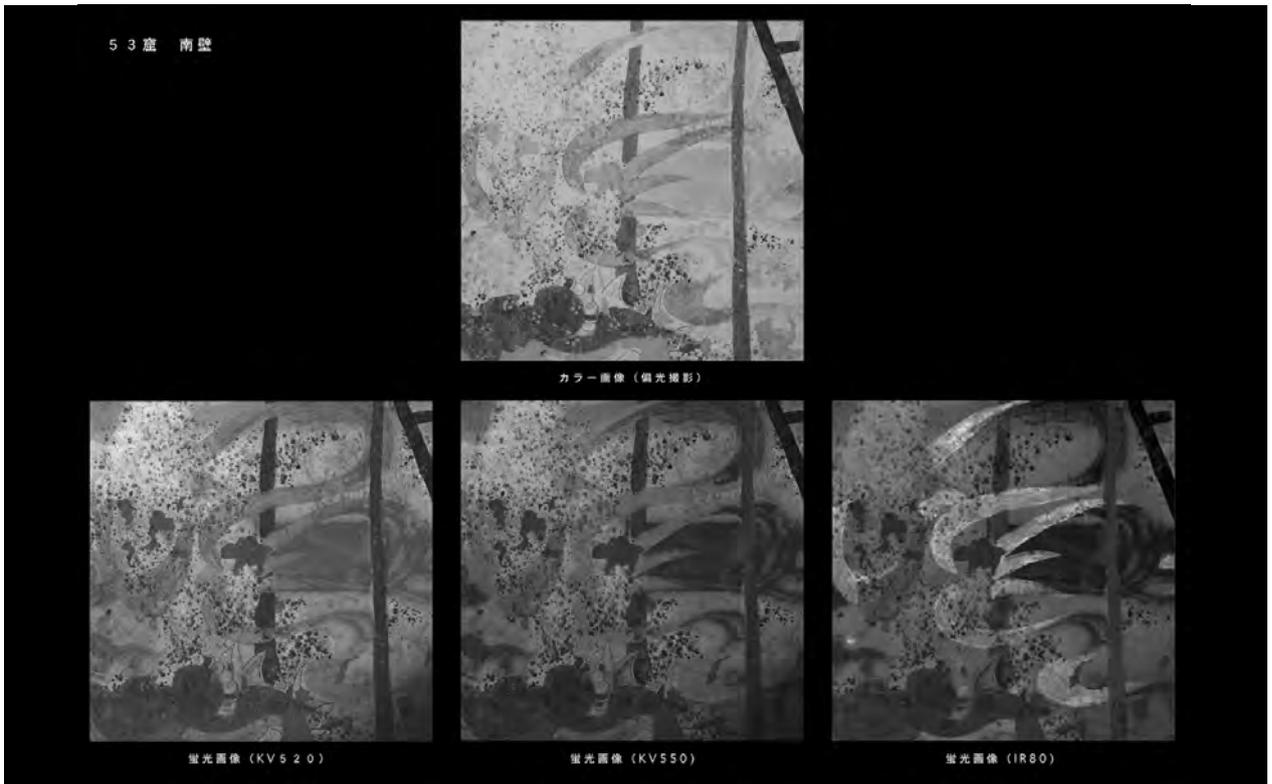


写真3 53室の光学的調査



写真4 イラク国立図書館の破壊状態



写真5 イラク国立博物館の略奪状態

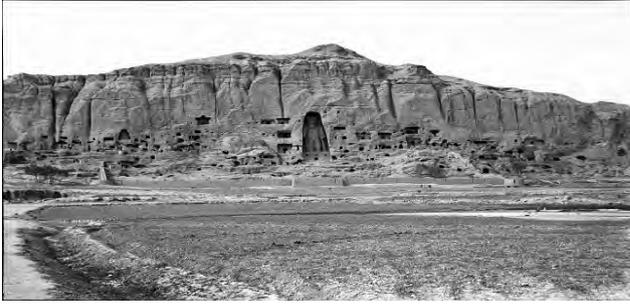


写真6 バーミヤン（左：1927年 右：2003年）



写真7 東大仏破壊前と破壊後の状況

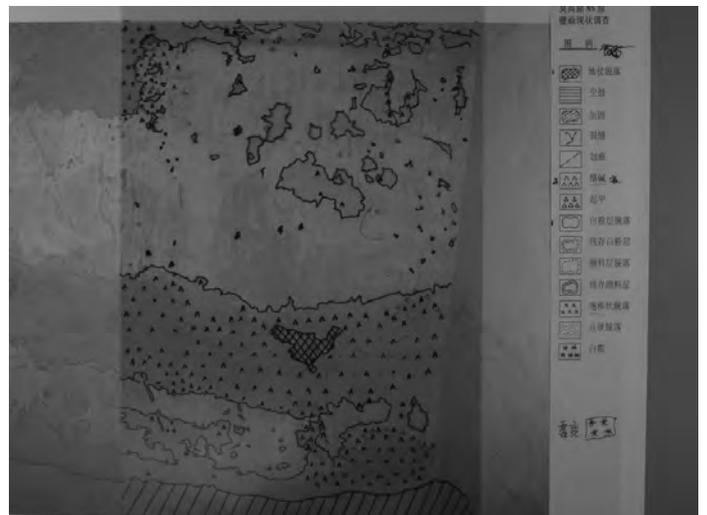


写真8 53窟壁画の損傷地図

## メタデータ配信による画像資料活用の可能性

黒崎浩行 (國學院大學神道文化学部専任講師)

はじめに：インターネット公開された画像資料を研究活用に結びつけるには

國學院大學学術フロンティア構想「劣化画像の再生活用と資料化に関する基礎的研究」では、大場磐雄・折口信夫・桜井満・柴田常恵・梶山林継写真資料のデジタル化が進められてきた。その成果の一部は平成13(2001)年10月から順次ウェブサイト上で公開されている(<http://www2.kokugakuin.ac.jp/frontier/>)。

事業の成果を広く公開し、国内外の研究目的利用に応え、さらには新たな研究の方向を創発していくために、この画像資料を含む成果のインターネット公開は、大きな意味を持っている。

だが、公開される画像資料の総体、あるいは個々の画像資料は、どのようにすれば、それを必要とする利用者の目に留まり、またその研究活用を促すことになるのだろうか。

このようなある種当たり前の問いを発すれば、各コレクションの概説や、画像データとともに入力された資料目録データを公開し、それに対する検索インターフェイスを提供することができれば、この要求に応えることができるのではないかと、即座に答えられるかもしれない。

実際はそう単純なことではない。インターネット上には今や膨大な量の情報が公開されている。利用者は、たまたま知っているサイトや、サーチエンジンで上位にヒットするサイトを訪れることで精一杯というのが現状だろう。

WWW (World Wide Web) の最大の特徴は、ハイパーリンクによって、情報間の関係の網の目を張りめぐらせることができる、ということにある。ウェブサイトの URL (Uniform Resource Locator: インターネット上の情報源のアドレスを一意に表す表記方法) をあらかじめ知っていれば、そのサイトに直接アクセスすることができるが、たいていはそうではなく、別のウェブサイト (サーチエンジンを含む) からのリンクの網の目を探索して訪れる。サイトを設置して発信する側は、このリンクの網の目に加わっていき、さらにはその形成に働きかけることによって、そのサイトが利用者にとって「たまたま知っているサイト」や、「サーチエンジンで上位にヒットするサイト」になるように、さまざまな工夫を凝らしてきた。その努力なしでは広範な利用が望めないからである。

それは従来、たとえばサーチエンジン対策として、適切なキーワードやタイトルをページに埋め込んだり、関係するサイトにリンク登録を依頼したりする、といった形で経験則的に取り組まれてきた。その一方で、情報間の意味のあるリンクづけをコンピュータによって自動化できるよう、データの「意味」についての記述・交換方式を定め、インターネット上のサーバ間での相互運用性を高めようという構想が提唱されている。これはセマンティック・ウェブ (Semantic Web) と呼ばれ、さまざまな分野でその実現が期待されてきた。本稿では、その動向を押さえつつ、とりわけ「メタデータ配信」という側面から、この事業の成果を有効ならしめる情報公開の方向性を考察してみたい。

### 1. セマンティック・ウェブとその技術動向

WWW の技術標準を協議する団体、W3C (World Wide Web Consortium) のウェブサイトには、WWW の提唱者であるティム・バーナーズ=リー (Tim Berners-Lee) が記した1999年の文書、「Web Architecture: Describing and Exchanging data」が公開されている。この文書のなかで、セマンティック・ウェブ

は「明示的に事物間の関係を記述し、機械によって自動的に処理できるように意図された意味論的情報を含んでいる文書群、またはその一部からなるウェブ」と定義されている (Berners-Lee 1999)。

機械可読な意味情報の記述は「メタデータ (metadata)」と呼ばれ、これに関連して RDF (Resource Description Framework) Model and Syntax という規格が、1999 年に提唱されている (W3C 1999, 図 1)。「メタデータ」とは、「データについてのデータ」ということだが、より具体的には、あるウェブ上のリソース (資源) について、そのプロパティ (特性、性質) を記述したデータを指す用語である。RDF Model and Syntax は、その記述方法を次のように規定している。

まず、リソースを指す主語 (Subject)。これは RDF においては、URI (Uniform Resource Indicator) という、それを一意に表す記法によって示される。次に、そのリソースがもつ性質を述べる述語 (Predicate)。さらに、述語が指し示す目的語 (Object)。RDF はこの基本 3 要素からなる。例えば、「<http://www2.kokugakuin.ac.jp/frontier/ooba/>の名称は大場磐雄資料目録である」や、「<http://www2.kokugakuin.ac.jp/frontier/ooba/>の制作者は國學院大學學術フロンティア事業実行委員会である。」という文は、RDF の要件を満たしている。<http://www2.kokugakuin.ac.jp/frontier/ooba/> が主語、「大場磐雄資料目録」、「國學院大學學術フロンティア事業実行委員会」が目的語、「~の名称は~である」、「~の制作者は~である」が述語にあたる。上記の例では目的語が字句 (literal) そのものだが、別のリソースによって表現することもできる。すなわち、先の 2 番目の例の「國學院大學學術フロンティア事業実行委員会」を <http://www2.kokugakuin.ac.jp/frontier/> という URI に置き換え、「その名称は國學院大學學術フロンティア事業実行委員会である」といった文をそこに加えてもよい。このように、RDF 文は入れ子構造にすることが可能になっている。

また、RDF 文は通常、上記のような自然言語ではなく、文書マークアップ言語である XML (Extensible Markup Language) を用いて記述する (図 2)。それによって、文をコンピュータが解釈し、処理を行うことが可能になる。

RDF は意味を記述するための「構文 (syntax)」を提供する規格であり、具体的な対象について、その「意味 (meaning)」をどのような語彙を使って表現するか、どのような事柄を「意味」として拾い上げるのか、ということについては定めていない。

これはオントロジー (ontology) と呼ばれ、しばしばクラス階層によって、語彙の体系をまとめあげていく試みとして研究されている (Maedche 2002)。

書誌情報に関するメタデータ語彙を定めた規格としては Dublin Core Metadata Element Set (IS015836) が有名である。ここには、書誌情報を記述するための 15 の要素が定められている (title, creator, subject, description, publisher, contributor, date, type, format, identifier, source, language, relation, coverage, rights)。

## 2. 人文科学での利用における問題

セマンティック・ウェブを構築し、データを広汎に流通させるには、意味記述に用いる共通語彙を確立し、それを定着させるオントロジーの普及がポイントとなる。そうしなければ、相互に互換性のない意味記述が交錯するにとどまると予想されるからだ。しかし、そのようなことは可能なのだろうか、という疑問が頭をもたげる。「...Semantic Web が提供する情報の共有は、人の思考資産というレベルの話でなく、企業間取引の様な定型の情報のみが対象となり、これに応える ontology は、データ交換用プロトコルとしての意味が表現できれば十分になる」(大矢 2001 P.15)。大矢は、それぞれの専門領域を背景にもつ人文科学研究者が望んでいるのは、ontology による定型的な共通語彙の提供で

はない、とする。そうではなく、むしろその基礎となっている SGML/XML によって「自然言語で示された情報を記述する一般的な手法を確立すること」(同) が重要なのだと主張する。

大矢の議論はおおむね、研究者が手持ちの文字資料に対してマークアップ (タグづけ) を行って、その構造と解釈を提示するような研究を視野に置いていると思われる。たしかにそうした視点からの研究では、記述のための一般的な「構文 (syntax)」の機械可読な形式・手法を第一に目指すことが妥当であろう。

だが、セマンティック・ウェブのコンセプトを人文科学研究に適用するさいには、機械可読な意味記述方法の追求という理論的な視点と同時に、未知のデータへのアクセスを容易にし、それによって知見を豊かにするという実践的な視点も考慮に入れなければならないだろう。

その有効な打開策にヒントを与えるような取り組みとしては、国立国文学研究資料館が開発を進めている「メタデータベース・システム」が挙げられよう。さまざまな研究機関が独自に構築・管理するデータベースを包括的に検索できるようなサービスを提供しようとするさい、一つのサービス提供組織にデータベース実体を寄託し、そこにおいて共通のデータ属性項目への統一的な変換を行い、そのように加工された包括的なデータベースに対して検索するインターフェイスを提供する、という方法が考えられる。この方法の最大の問題点は、データベース実体が、その構築に責任と権利をもつ研究機関の手をいったん離れ、サービス提供組織による変換・加工がなされることにある。また、実際の運用上の負担も大きい。これに対して「メタデータベース・システム」では、「ゲートウェイ・システム」の手法をとる。すなわち、インターネット上でデータベースを提供・公開している複数の研究機関のサーバに対し、それぞれのデータベースで用いられている多様な属性項目を共通の属性項目にマッピングし、これに対する検索インターフェイスを提供することで、複数のデータベースを結合した横断的な検索を可能にしているのである。共通の属性項目には Dublin Core メタデータが採用されている (原・安永 2001)。

つまり、人文科学分野においてオントロジーの共通規格を定めるさい、それを各資料の記述に直接利用することを想定する必要はなく、また望ましくもない。そうではなく、まずは資料の性質に即した語彙による機械可読な記述を行い、それらに対する包括的な検索が必要な場合に限り採用するものと考えべきだろう。ただし、データベース構築のさいに 5W1H のような基礎知識として Dublin Core などを習得すべき必要性はいうまでもない。

### 3. 一般ユーザーレベルの新たな兆候

実はこの一年の間に、以上のような専門研究レベルの動向とは全く別の流れから、RSS (RDF Site Summary) (Libby 1999) (Brickley et al 2000) という、RDF のひとつの応用形態が一般ユーザーレベルで注目され、新たな広がりを見せはじめている (図 3)。それは、ウェブログ、Web 日記、Wiki、CMS (Contents Management System) などといった、ユーザーがオンラインでコンテンツを更新管理できる Web アプリケーションの急速な普及と関わりがある。

これらのアプリケーションでは、更新手続きと同時に、更新内容を RSS 形式で自動的に出力、公開する機能が備わっていることが多い。RSS には、そのサイトの概要と、更新された各記事の要約、および記事本文へのリンクが記述される。RSS を自動的に作成する機能が Web アプリケーションに組み込まれているため、サイト管理者は特に意識することなくコンテンツそのものの更新に集中することができる。

いっぽう、公開された RSS データは、インターネット上の別のサイトが定期的に収集し、「ヘッド

ライン」などとして紹介することができる。また、個人ユーザーが、更新された情報のみを巡回したいときに、クライアントマシン上で RSS リーダーと呼ばれるソフトを用いて閲覧することができる。

サイトの最新情報が効率的に配信、閲覧できることにより、ユーザーが関心をもつ複数のサイトをまとめて訪れることが容易になっている。さらには、サイト同士の言及による相互リンクの活性化をも加速する結果を生んでいる。

ウェブログではさらに、「トラックバック」(trackback) という機能が相互リンクを促進している。代表的なウェブログ管理ソフトウェア、Movable Type (<http://www.movabletype.org/>) に実装されているもので、あるウェブログ運営者が他人のウェブログ記事に対してコメントしたいときに、記事を自分のサイトに掲載すると同時に、その URL と要約を含むデータ (XML 形式で記述されたもの) を、元記事のサイトに送信することができる。そのデータを受信した元記事のサイトには、コメント記事へのリンクが自動的に追加される。それにより、元記事の読者は、この記事に対する他のサイトでのコメントの存在を知り、リンクをたどってそれを読むことができる。これは従来、リファラー (リンク元) ログを公開するという手法でも行われてきたことだが、こちらがあくまで機械的にリンク元をリストアップしていく仕組みであるのに対し、トラックバックはサイト間の意味のあるインタラクション (相互行為) を可視化する効果を意図的に狙っているといえよう。また、掲示板などは同一サイト内に記事とコメントの双方を掲載していくが、それらとコミュニティ形成のうえで違いを生んでいく可能性にも関心が持たれている。

RSS の配信やトラックバックにより、そのサイトへの単なるリンクではなく、そのサイトの最新情報の要約を含んだリンクが可能となり、さらに共通の関心によるハイパーリンクの形成とそれを通じたアクセスが加速しているのである。

#### 4 . セマンティック・ウェブの展開が画像資料のインターネット公開に与える示唆

このように、一般ユーザーレベルでセマンティック・ウェブのインフラが急速に拡大しつつあるが、それらは「テキスト系サイト」と総称されることがあるように、文字情報が主体である。画像情報をセマンティック・ウェブのなかに生かすには、さらにもう一段階の仕掛けが必要となるだろう。

これまでのデジタル化された画像資料の公開は総じて、サムネイルギャラリー、スライドショーによる順次閲覧型のインターフェイスや、キーワード入力による検索型のインターフェイスによって提供されてきた。検索結果表示が画像資料のメタデータ提供になっていると言うこともできるかもしれないが、それとは分離して画像データのみがリンクされる可能性を否定することはできない。そうなった場合、元の検索結果に示されたメタデータ記述は、その検索インターフェイスを利用せずに直接リンクをたどってきたユーザーにとっては失われてしまう。

このことは従来、知的財産権保護の文脈から問題視されてきた。そのために、画像データの直接リンク禁止を主張し、また実際に直接リンクできないように技術的な対処を行うケースがしばしば見られてきた。しかし、画像資料のインターネット公開による研究活用促進という視点からすれば、むしろ発想を逆にすべきであろう。

すなわち、その画像データに直接リンクすることを許可し、それと同時に、その画像データにリンクしているサイトへの逆方向のリンクを、画像データ提供サイトにおいて行うのである。具体的な方法は、先に挙げたトラックバックやリファラーログの公開が考えられる。このようにすれば、画像データの提供のみでなく、その画像資料をめぐるインタラクションをすべてのユーザーにとって可視化できるようになる。リンクのなかには不適切なものが含まれるかもしれないが、そうした判断は可視

化によってはじめて可能になる。

また、画像データとともに付加情報として、その画像資料についてのメタデータを記述した RSS を提供する（図4）。これは、画像データベースから自動的に生成することが可能である。ユーザーはこの RSS にリンクを張るか、あるいは自サイト内に取り込むことで、画像資料への適切な参照を行うことが可能となる。

これはデータ提供者側にとってもメリットとなる。なぜならば、画像データのみが直にリンクされることにより不正確、不適切な文脈に置かれることを未然に防ぎ、また著作権表記などの配布条件に関わる情報をも付加することができるからである。

書誌情報をベースとした Dublin Core にもとづく RSS の記述語彙が、画像資料にとってどこまで妥当かという問題や、サイトの更新情報収集以外の場面でメタデータを自動的に集約し関連づけるためのサービスやツールが未成熟であることなど、いくつかの問題を抱えてはいるものの、本格的な公開データベースの構築時にはぜひ検討すべき課題として提案しておきたい。

#### 参考文献

- Berners-Lee, Tim. 1999 *Web Architecture: Describing and Exchanging Data*. W3C Note 7, June, 1999.  
<http://www.w3.org/1999/06/07-WebData>
- Brickley, Dan et al. 2000 *RDF Site Summary (RSS) 1.0*. RSS-DEV Working Group. <http://purl.org/rss/1.0/spec>
- 原正一郎・安永尚志 2001 「メタデータによるマルチメディアデータ統合の試み」『情報処理学会研究報告』2001-CH-51 (2001): 47-54。
- ISO TC 46/SC 4. 2003 ISO 15836:2003(E) *Information and documentation -- The Dublin Core metadata element set*. 2003-02-26, International Standard. <http://www.niso.org/international/SC4/n515.pdf>
- Libby, Dan. 1997 *RSS 0.91 Spec, revision 3*. Netscape Communications.  
<http://my.netscape.com/publish/formats/rss-spec-0.91.html>
- Maedche, Alexander. 2002 *Ontology Learning for the Semantic Web*. Boston: Kluwer Academic Publishers.
- 大矢一志 2001 「SGML/XML データと記述に関する規則: RDF と人文科学研究との接点」『情報処理学会研究報告』2001-CH-51: 11-16。
- World Wide Web Consortium. 1999 *Resource Description Framework (RDF) Model and Syntax Specification*. W3C Recommendation 22 February 1999. <http://www.w3.org/TR/1999/REC-rdf-syntax-19990222>

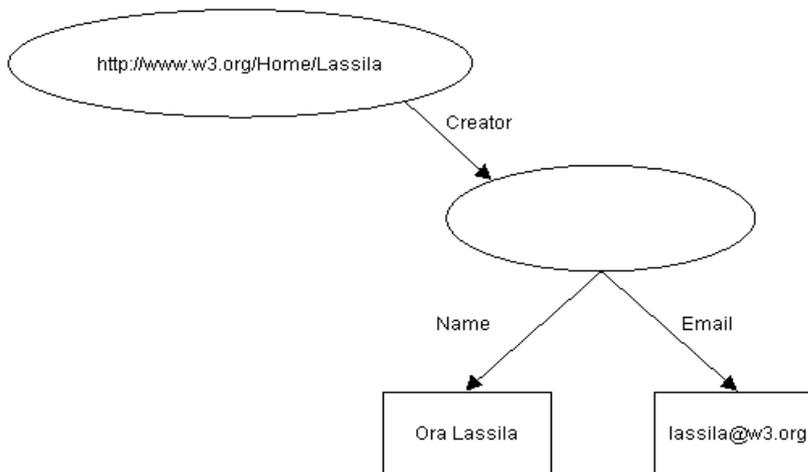
Subject (Resource)	http://www.w3.org/Home/Lassila
Predicate (Property)	Creator
Object (literal)	"Ora Lassila"

In this document we will diagram an RDF statement pictorially using directed labeled graphs (also called "nodes and arcs diagrams"). In these diagrams, the nodes (drawn as ovals) represent resources and arcs represent named properties. Nodes that represent string literals will be drawn as rectangles. The sentence above would thus be diagrammed as:



[D](#)

Figure 1: Simple node and arc diagram



[D](#)

Figure 2: Property with structured value

図 1 RDF の概念図 (World Wide Web Consortium1999)

```
<rdf:RDF>
<rdf:Description
about="http://www.w3.org/Home/Lassila">
<s:Creator>Ora Lassila</s:Creator>
</rdf:Description>
</rdf:RDF>
```

図 2 XML による記述例 (World Wide Web Consortium1999)

```

<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
<rss version="2.0"
  xmlns:dc="http://purl.org/dc/elements/1.1/">
  <channel>
    <title>神道と日本文化の国学的研究発信の拠点形成</title>
    <link>http://21coe.kokugakuin.ac.jp</link>
    <description>國學院大學21世紀COEプログラム</description>
    <lastBuildDate>Sat, 1 Nov 2003 3:11:51 JST</lastBuildDate>
    <docs>http://backend.userland.com/rss/</docs>
    <generator>XOOPS 2.0.2</generator>
    <category>News</category>
    <managingEditor>21coe-info@kokugakuin.ac.jp</managingEditor>
    <webMaster>21coe-info@kokugakuin.ac.jp</webMaster>
    <language>ja</language>
    <image>
      <title>神道と日本文化の国学的研究発信の拠点形成</title>
      <url>http://21coe.kokugakuin.ac.jp/themes/21coepurple/images/fujisanicon.gif</url>
      <link>http://21coe.kokugakuin.ac.jp</link>
      <width>88</width>
      <height>31</height>
    </image>
    <item>
      <title>ミニ・国際シンポジウム「神道 はどう翻訳されているか(2) 近現代の神道を中
        心に」</title>
      <link>http://21coe.kokugakuin.ac.jp/modules/news/article.php?storyid=53</link>
      <description>[中略] </description>
      <pubDate>Thu, 30 Oct 2003 5:20:26 JST</pubDate>
      <dc:date>2003-10-30T17:20:26+09:00</dc:date>
      <guid>http://21coe.kokugakuin.ac.jp/modules/news/article.php?storyid=53</guid>
    </item>
  </channel>
</rss>

```

図3 RSS の例 <http://21coe.kokugakuin.ac.jp/backend.php>



2023 伊号住居址炉  
昭和25年4月9日  
82mm×107mm



RDF

```

<?xml version=" 1.0 " ?>
<rdf:RDF
  xmlns:rdf="http://www.w3.org/1999/02/22-rdf-syntax-ns#"
  xmlns:dc=" http://purl.org/dc/elements/1.1/ "
  xmlns:kf=" http://www2.kokugakuin.ac.jp/frontier/ " >
  <rdf:Description about=" ... " >
    <dc:title>伊号住居址炉</dc:title>
    <dc:date>1950-04-09</dc:date>
    <dc:format>82mm×107mm</dc:format>
    <dc:creator>大場磐雄</dc:creator>
    <kf:image>
      http://www2.kokugakuin.ac.jp/frontier/ooba-photo/ob2023.jpg</kf:image>
    <dc:rights>Copyright © 2003 Kokugakuin University</dc:rights>
  </rdf:Description>

```

図4 メタデータ配信のもたらす可能性

画像資料公開のさい、説明・ナビゲーション・検索手段だけでなく、  
ユーザーが画像資料に対して「意味づけを行うリンク」をするためのデータを提供



# 沖縄県における画像資料の保存と活用の現状

池田榮史(琉球大学法文学部教授)

## 1. はじめに

沖縄県は九州島から台湾島までの間に点在する琉球列島のなかで、ほぼ中央に位置する沖縄諸島と南西に位置する宮古・八重山諸島、さらには東に位置する南・北大東島からなる島嶼県である。琉球列島の北端に位置する大隅諸島からトカラ列島、奄美諸島までの島々は、中世の段階まで沖縄島に王城を置いた琉球王国の版図であったが、近世にいたって裂き取られ薩摩藩の支配下に入った歴史を持つ。

このような日本本土との歴史・文化の相違とともに、沖縄県下の島々は太平洋西岸を流れる暖流(黒潮)の流路上に位置し、気候帯の上では亜熱帯に属する。このため、自然環境も日本本土とは異なり、亜熱帯特有の動物相や植物相が発達する。

したがって、沖縄県に残る画像資料は、写された被写体そのものが文化的にも自然的にも独自の特性をもっているだけでなく、その保存に関しても、湿度の問題をはじめとして、日本本土と異なる環境の中に置かれてきたこととなる。本稿では、このような沖縄県における画像資料の状況について、報告することとする。

## 2. 沖縄における画像資料の特徴

沖縄において、いつ頃から画像資料が作成され始めたについては、詳らかでない。その中で、比較的初期の段階の資料と考えられるのは、鳥居龍蔵氏による写真資料である。東京帝国大学理科大学の助手として勤務していた鳥居氏は、明治29(1896)年および明治37(1904)年の2回にわたって、沖縄調査を実施している。1回目の調査は台湾調査の帰路、沖縄に立ち寄った程度のもので、2回目の調査の予備調査的色彩が強いものであった。1904年に行った2回目の調査では、約二ヶ月間をかけ、沖縄島だけでなく、宮古・八重山まで足を延ばし、精力的な調査を行っている<sup>(1)</sup>。鳥居氏が東アジア各地の調査に際して撮影した写真資料は、東京大学総合研究資料館や韓国国立中央博物館などに保管されていることが知られている。この中で、沖縄での撮影資料については、東京大学総合資料館に写真乾板179枚が保管されており、これらは先の沖縄調査時のものと考えられる<sup>(2)</sup>。この他、鳥居氏以外にも、沖縄を訪ねた様々な分野の人々があり、多くの写真資料が遺されたものと推測されるが、比較的まとまった研究資料としては、鳥居氏の資料が出色のものである。

また、続く大正期から昭和期にかけては、写真の技術も一般化し、沖縄でも写真を撮影することが、それほど珍しいことではなくなっていくと考えられる。しかしながら、沖縄島を含む琉球列島では、太平洋戦争末期の昭和20(1945)年3月から7月にかけて、沖縄戦と呼ばれる日米両軍による戦闘が行なわれた。中でも、第32軍沖縄守備隊の司令部が置かれた沖縄島では、上陸した米軍と住民を巻き込んだ日本軍との間で、激しい地上戦が戦われ、人命はもとより、多くの自然と文化財が破壊された。また、戦後は米軍の支配下に置かれることとなり、昭和47(1972)年の日本復帰まで、朝鮮戦争やベトナム戦争の基地としての歴史を刻んできた。

このため、沖縄島をはじめとする多くの島々は、戦闘や戦後の動乱の過程で、戦前に作成された画像資料の多くが失われた。その結果、戦争以前の沖縄を視覚的に知る手段は、戦争以前に撮影された映像記録やそれが印刷された出版物、あるいは撮影されたフィルムそのものに寄らざるを得なくなっ

た。しかし、これらについての調査や保存のための活動は殆ど行われておらず、多くは沖縄戦で失われ、わずかに残る資料も戦後の混乱の中で潰えたものも多い。むしろ、戦前の画像資料については、沖縄以外で保管されて来たものが良く知られるような状況なのである。

また、沖縄戦および沖縄戦前後の段階で、日本軍による映像記録はほとんど残されていない。これについては、むしろ米軍によって撮影もしくは接收された静止および動画映像のみが残されており、今日ではこれが当時の沖縄の様相を知る大きな手がかりとなっている。

### 3. 沖縄県における画像資料の現況

沖縄県内各地では、戦前のものをはじめとして、画像資料を収集し、保存・活用する取り組みが進められつつある。ここでは、沖縄県が管轄するいくつかの機関において、どのような活動が行われているのか、簡単に紹介することとしたい。

#### 沖縄県公文書館

平成7(1995)年8月、沖縄島南部南風原町に沖縄県公文書館が開館し、沖縄県文書をはじめ、琉球列島米国民政府文書、琉球政府文書、琉球王国関係史料の収集・整理・保管・活用のための諸活動を開始した。沖縄県立公文書館の平成14(2002)年3月段階での収集・整理資料数は別添資料1の通りである<sup>(3)</sup>。

この中で、文書を撮影したものを除く画像資料は、米軍による「沖縄占領関係写真(空中写真を含む)」17265点と「沖縄関係映像資料」1503巻がある。これらは沖縄戦時および戦後に米軍が撮影した記録資料である。これらについては、米国立公文書館に保存されていたフィルムを複製しており、一部に紙焼写真を再撮影したのものがある。したがって、写真および映像資料とも原盤ではなく、近年の複製資料である。

沖縄県公文書館ではこれらの複製を下に、平成13(2001)年度より沖縄県緊急雇用対策特別事業の一環として、空中写真735点と沖縄戦関係資料4716点のデジタル化を図り、インターネットを通じて公開している。

#### 沖縄県立芸術大学

沖縄県立芸術大学附属図書・芸術資料館には、戦前の沖縄で活躍された鎌倉芳太郎氏の資料が寄贈されている。これらの資料は昭和61(1986)年の沖縄県立芸術大学開学に際して、寄贈されたものである。同大学では資料整理に努め、平成10(1998)年3月に『鎌倉芳太郎資料目録』を刊行しており、その内容は別添資料2の通りである<sup>(4)</sup>。

同書によれば、写真資料は鎌倉氏が沖縄各地で撮影されたガラス乾板とこれから焼付けられた紙焼写真であり、総数1287点という。同大学では紙焼写真をスキャナーで読み取り、画像データ化して、パソコン上で「鎌倉芳太郎写真画像データベース」を作成中という。ガラス乾板については、平成12(2000)年の段階では現状のまま保管されているとのことであった。

#### 沖縄県立博物館

沖縄県立博物館は沖縄戦後の昭和21(1946)年、沖縄民政府が現在の石川市で民家を借りて設置した東恩納博物館が母体となり、昭和28(1953)年に沖縄民政府立首里博物館と合併して首里に移転、昭和30(1955)年に琉球政府立博物館となった後、沖縄の日本復帰によって沖縄県立博物館となった。

同館には自然史・美術工芸・歴史・考古・民俗に分類された8万点余りの資料が収蔵されており、中には米国統治下に米国人によって収集・寄贈された資料も存在する。このような資料の中に、昭和32~34(1960~1962)年の間、沖縄諸島遺跡調査を行なった、アジア研究者ジョージ・H・ケア氏の採集

(平成 14 年 3 月 31 日現在)

資料群名	単位	資料収集数		資料登録数(*1)		
		H13年度	累計	H13年度	累計	
琉球政府文書	簿冊	0	161,868	118	160,956	
沖縄県文書	箱	1,821	27,430(*2)	0	8,341簿冊	
行政刊行物	件	2,235	32,673	1,879	31,480	
USCAR文書	マイクロフィルム(*3)	コマ	617,132	2,687,552	0	1,515,714
	映像フィルム	件	40	120	110	110
沖縄占領関係写真(空中写真含む)	件	1,041	17,265	7,888	16,959	
英文資料	マイクロフィッシュ	枚	0	5,198	794	5,198
	マイクロフィルム	リール	0	680	143	680
	文書	件	1,386	7,220	1,313	8,283
地域資料	冊	9,126	75,770	847	19,529	
中琉関係 档案史料	レプリカ	点	0	300	100	297
	マイクロフィルム	リール	0	14	0	12
	簿冊資料(11簿冊)	件	0	2,886	0	1,881
沖縄関係映像資料	巻	75	1,503	44	1,262	
沖縄関係音声資料	巻	4	2,996	4	90	
マイクロフィルム(*4)	琉政文書	リール (コマ)	146 (175,748)	1,588 (1,582,478)	0 0	1,442 (1,406,730)
	その他館撮影 ・複製(リール)	リール (コマ)	107 (17,913)	2,089 (1,563,302)	0 0	1,698 (1,309,051)
	その他館撮影 ・複製(ジャケット)	枚 (コマ)	8 (36)	84 (493)	0 0	0 0

注)

\*1 資料登録数とは、資料の目録がデータベース化され、検索可能な整理を完了した資料の数です。

\*2 沖縄県文書は箱単位で収集しています。書架総延長に換算すると9189,89mとなります。

\*3 USCAR文書は、国立国会図書館との覚書により収集予定数が確定しています(3,200,000コマ)。また、収集は保存用、保全用(バックアップ用)、閲覧用の3セットずつ行っており、ここに掲げた統計の値は1セット分です。

\*4 マイクロフィルムは、閲覧用と保存用等のデュープフィルム(複製フィルム)も含めた値です。また、収集及び登録数は、公文書管理部で撮影したものと個別収集したものを含めた値です。

考古資料と写真資料も含まれている。写真資料は 35mm スライドフィルムに撮影されており、同館ではこれらをフォト CD に集録し、デジタル画像としての活用を計画している。

#### 4. 沖縄における画像資料の特徴と今後の課題

冒頭でも述べたように、沖縄に残る映像資料は戦争の影響を大きく受けた資料である。戦前の段階において、撮影されたであろう資料の多くは失われ、地元以外で保管されたものだけが現存している。また、戦中、戦後しばらくの間の撮影資料は、米国の手によるものが多く、保管先の多くも米国内にある。したがって、この時期の映像資料は、沖縄以外の地を探さざるを得ない状況にある。

また、これらの資料は探し当てたとしても、原盤資料が手に入ることはほとんどない。特に米国の資料については、作成当初から国家的な事業としての映像記録であったため、原盤は米国立公文書館が保管し、沖縄には複製の形でもたらされる。この点において、映像資料の劣化についてはそれほど問題化していない、問題視されていない状況にある。

これに対して、これらの映像資料のデジタル化と活用化については、沖縄県公文書館をはじめとして、積極的な取り組みが見られる。これは戦争による官・民を問わない多様な映像資料の喪失が、戦後の公的機関によって収集された資料の公開・活用の促進を後押ししていると理解される。このことは、映像資料の活用という視点からは、高く評価される部分である。ただし、デジタル化に際して、使用する機器の性能については、各機関における予算などに左右され、その精度についてはそれぞれに相違が見られる。これについては、同様の目的をもった機関の間での情報の交換と作業の高度化が望まれる。

#### 注

- (1) 拙稿「鳥居龍蔵の沖縄先史遺跡調査」『平成 8 年度沖縄地区大学放送公開講座 琉球に魅せられた人々・外からの琉球研究とその背景・(テレビ講座)』テキスト 琉球大学公開講座委員会、平成 8 (1996) 年 8 月
- (2) 国立民族学博物館『民族学の先駆者 鳥居龍蔵の見たアジア』平成 5 (1993) 年 3 月
- (3) 沖縄県公文書館『沖縄県公文書館年報』第 4 号 (平成 13 年度) 平成 14 (2002) 年 8 月
- (4) 沖縄県立芸術大学附属研究所『鎌倉芳太郎資料目録』平成 10 (1998) 年 3 月

本目録は、鎌倉芳太郎氏が本学に寄贈された写真資料について、沖縄県立芸術大学附属研究所が平成 8 年度より行っている調査研究に基づくものである。写真資料の内訳は、鎌倉氏が大正から昭和にかけて沖縄各地で撮影したガラス乾板と、同乾板から焼付された紙焼写真である。現在紙焼写真をスキャンすることによって画像データに変換し、パーソナルコンピュータ上で「鎌倉芳太郎写真画像データベース」を構築中である。本目録は、この画像データベースの原資料である紙焼写真を対象としている。目録作成作業は各分野の専門家(後述)の協力を得て、原田が担当した。

資料の形態を大別すると、整理番号 1～421、1237～1287 は 300mm×255mm の印画紙が、422～1236 は 162mm×120mm の印画紙が、368mm×309mm の台紙に貼られ、表面には薄葉紙がかけられている。紙焼写真に番号が付されていなかった 1237～1287 は、ガラス乾板の乳剤面剥離によるものと考えられる焼きムラが著しい。なお、今回はガラス乾板に関する調査は行っていない。

資料 2 鎌倉芳太郎の「写真資料目録」凡例(注 4 文献 41 頁より)

## 柴田常恵資料の整理・保存作業

田中 秀典(國學院大學日本文化研究所共同研究員)

國學院大學学術フロンティア事業では、平成13年度から柴田常恵資料のデジタル化を行っている。本稿はその作業の成果についての中間報告である。

柴田常恵は、明治の終わりごろから昭和20年代まで50余年にわたって活動を行った考古学者であり、政府における数少ない考古学の専門家として全国各地の遺跡・史跡・文化財等の調査に従事した人物でもある。近代日本の文化財行政に深く関わった柴田常恵は、考古学だけでなく文化財関連分野等の研究史においても注目すべき人物であり、それらを研究する上で非常に重要な人物であるといえよう。また、その柴田が遺した資料は十分に研究対象となりうるものであり、デジタル化によってそれらの劣化を防ぎ再生・保存するに留めず整理・分析し活用することは、さらなる研究の進展に資するものであろう。だが、これまでは研究対象として柴田自身はほとんど扱われてきておらず<sup>(1)</sup>、どのような人物であるのかもあまり知られていない。そこで、まずその経歴の整理を行い<sup>(2)</sup>、柴田資料の全体像を概観した上で、作業について報告する。

柴田常恵は、明治10(1877)年7月18日、愛知県春日井郡大曾根村(現、名古屋市東区)の瑞忍寺住職である柴田恵明の三男として生まれた。名前が「じょうけい」ではなく「じょうえ」であることも、僧侶の息子であることから考えると納得がいくであろう。同30年には単身上京し、真宗東京中学校高等科を経て、32年、私立郁文館内の史学館で歴史学を学ぶ。34年、台湾総督府学校講師となるが、翌35年に帰京して東京帝国大学雇となる。39年、同大学人類学教室助手となるも、史蹟名勝天然紀念物保存法が施行された大正9(1920)年には東京大学を辞して史蹟名勝天然紀念物調査会の考査員となった。ここで文化財保護行政との関わりが始まる。それと同時に内務省地理課の嘱託となり、昭和2(1927)年には事務の移管に伴って文部省の嘱託となる。また、この間、大正10年には東京帝国大学文学部標本調査嘱託を兼務した。その後は昭和7年から慶応義塾大学において講師として教鞭をとり、11年からは重要美術品等調査会委員、皇室林野局嘱託を務める。戦後は、25年に文化財専門審議会委員となるが、その4年後の昭和29(1954)年12月1日、脳溢血のため77歳で没した。

柴田の研究分野の中心は考古学であるがその学問領域は広く、縄文・弥生・古墳の各時代の考古学や仏教考古学から郷土史・歴史学一般に及んでおり、『石器時代の住居址』や『中尊寺総鑑』をはじめとする、多岐にわたる著作をもっている<sup>(3)</sup>。このことから、柴田は文化財行政に深く関わった人物であると同時に、考古学だけでなく仏教史や郷土史等にも造詣の深い人物であったことがうかがえる。

現在、國學院大學には、柴田が遺した写真・フィールドノート・拓本・自筆原稿類・乾板等の資料が所蔵されている。その詳細な入手の経緯については、必ずしも全体が明らかになっているわけではないが、柴田を師と仰ぎ自らを「外弟子」<sup>(4)</sup>と称する大場磐雄教授(当時)の手によって、柴田の死後になされたものである<sup>(5)</sup>。これらは収蔵された後に整理作業が行われ<sup>(6)</sup>、その際に作成された、大場の手による目録の草稿等が遺っている。これによれば、資料の数量は、写真が5817枚、フィールドノートが83冊、拓本が5837枚、自筆原稿類が108冊<sup>(7)</sup>、乾板が177枚である<sup>(8)</sup>。

写真は47冊のアルバムに、基本的には県別に分けて収められているが(写真1・2)、1つの県が複数のアルバムにわたっているものや、1冊のアルバムに複数の県が収められているものが多い。また、県別の分類に含まれなかったものについては、「雑」・「補遺」・「不明」に収められている。写真には、柴田の手による撮影のもの、第三者から譲り受けたとと思われるものとの混在がみられる。被写体については、

考古遺物や遺跡・仏像・寺院建築が大部分を占めており、それ以外のものは僅かである。また、必ずしも書式が統一されているわけではないが、写真の多くには、裏面等に撮影場所、撮影日時、対象物の種類・名称・由来等が記載されている(写真3)。記載者については、筆跡から柴田自身と思われるものが多いが、それ以外の人物、例えば柴田以外の人物が撮影した写真である場合はその撮影者によると思われるものもある。県別枚数では、アルバム3冊にわたっている愛知県が最も多く、合計514枚である。一つの場所を対象とするもので、最も枚数が多くまとまって存在しているのが、独立して1冊のアルバムにもなっている中尊寺であり、その数は119枚である。

フィールドノートは、通し番号を付したラベルが貼付されている。これは、柴田が全国の遺跡や寺院等を調査した際に記録したものであり、その性格上、断片的なメモ書きや対象不明のスケッチなどが多く、解読するのが困難である部分が多く存在する(写真4)。

拓本は、対象物ごとに分類して封筒に入れられ、その名称、採取した場所、日付等を記載した上で保管されている(写真5)。

自筆原稿類・乾板等は、ほぼ未整理のまま保管されている(写真6)。原稿類の中には、第1次世界大戦後、柴田がパラオに行った際の調査日記のようなノートもある。これには、調査の準備段階での出来事、船の中で見た島の絵、島々の通過月日・時刻、島の住人の様子や人数・男女比率などが、事細かに記載されている。

当事業では、まずこの中の写真資料についてデジタル化を行った。はじめに写真を全てスキャナーで取り込み、印刷やWeb公開といったさまざまな活用方法への対応を考慮して解像度600dpi・24bitRGBカラーのTIFF形式で保存した。次いで、この画像情報を、Web公開のため150dpi(長辺700ピクセル・JPEG形式)に圧縮する作業を行った。同時に、データのバックアップとしてハードディスクに保存した。写真には元々アルバム内での通し番号が付されていたが、電子情報化するにあたっては、扱いやすくするため県ごとに固有のファイル名と通し番号をつけて整理した。また、写真の裏や台紙等に記載されているメモ書きの読み取りを行い、写真の検索・整理等のために、アルバム上の通し番号・保存ファイル名の通し番号・写真の裏書の対照表を作成した。

デジタル化による保存は便利で劣化しないという長所があるが、当然ながら万能なわけではなく、機械の調子によっては見られないということが起こり得るし、場合によってはデータそのものが壊れて消えてしまうことも考えられる。当事業で柴田資料に先駆けてデジタル化を行っている大場磐雄資料においても、保存したデータが一部壊れてしまうということが起こった。なお、大場資料ではDVDとしていたデータの保存先を、柴田資料を扱うにあたってはハードディスクに変更している。大場資料の保存を始めた当時はDVDに保存するのが最良のものだと思われたが、それから2年ほどが経過して、以前はあまり考えられていなかったハードディスクへの保存がより優れているという評価がなされるに至った状況に対応してのことである。データのバックアップを取っておくことが重要なのは当然だが、目まぐるしい技術の進歩に遅れずに対応していくことも必要であるということを、これらの作業の過程であらためて認識させられた。

これらの成果のうち、写真資料全体のおよそ半数に相当する部分については『柴田常恵写真資料目録』として刊行した。残りの後半部分についても、準備が整いしだい刊行する予定である。また、処理されるのを待っているフィールドノート・拓本・自筆原稿類・乾板等についても、今後、随時作業を進めていく。

注

- (1) 柴田を中心に扱っているものには、大場磐雄「学史上における柴田常恵の業績」(大場磐雄編『日本考古学選集 第12巻 柴田常恵集』昭和46(1971)年11月、築地書館) 山内利秋「画像資料と近代アカデミズム・文化財保護制度」(『日本写真学会誌』65

- 2、平成14(2002)年4月)が見られるのみである。
- (2)『職員録』等で確認することができる部分については確認したが、それが難しい部分については、大場前掲書や日本歴史学会編『日本史研究者事典』(平成11(1999)年6月、吉川弘文館)等の辞典類に拠った。
  - (3)この点について大場前掲書に詳しい。
  - (4)大場前掲書。
  - (5)大場前掲書に、柴田の没後に拓本・ノート・遺稿を國學院大學が購入したとの記述がある。他のものについての詳細は明らかではないが、拓本については残されていた書類から昭和32年度中に購入したものであることが判明している。
  - (6)拓本の整理については篠崎四郎が中心となって行われたこと明らかになっているが、それ以外のものについては、関係したと思われる人物の多くがすでに故人となっていることもあり、その経緯や作業内容についても詳らかになっていない部分が多い。
  - (7)目録の表紙部分には106冊と記載されており、目録内で一致を見ていないが、ここでは個々のタイトルを挙げて算出している目録本文の数を採った。
  - (8)これらの資料は40年間にわたって学内の各所に分散して保管され、その後も度々保管場所も変更されていることなどから、資料の全体像を把握することの困難さを招き、残念ながら現在は必ずしも正確な数量を把握するに至っていない部分もある。
  - (9)写真の中には出版社に貸し出した後に所在不明となったもの、その後に返却されて別置されているものなどもあり、これらが正確な枚数の把握を妨げる一因ともなっている。



写真 1



写真 2

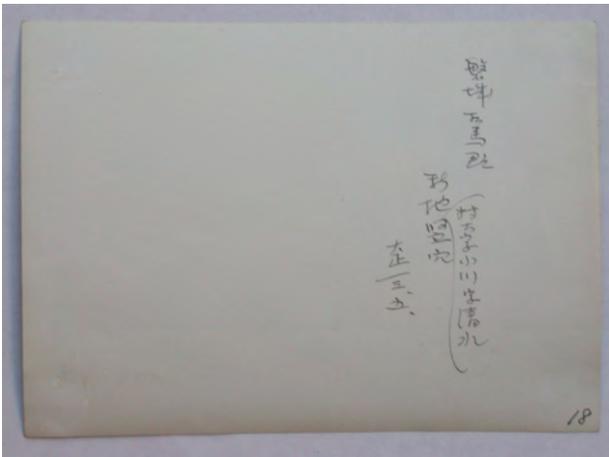


写真 3

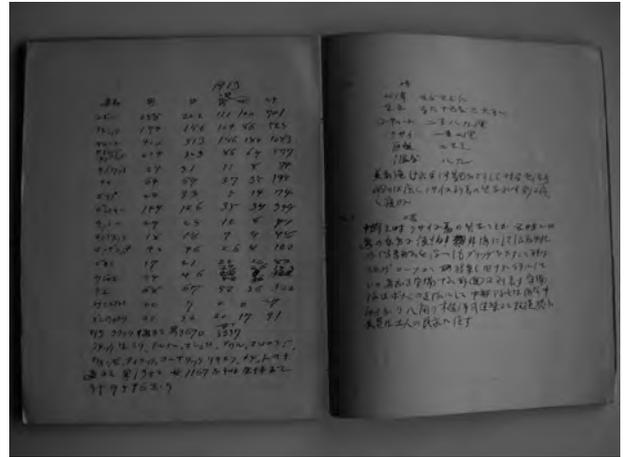


写真 4



写真 5



写真 6

# 画像資料と考古学

考古学的情報としての画像

小林 達雄

学術フロンティア作業報告—大場磐雄資料編

荒井 裕介



## 考古学的情報としての画像

小林 達雄(國學院大學文学部教授)

はじめに - 考古学とは -

今日は考古資料としての画像ということでお話させていただきます。まず、総論的に考古学というのはどういう学問なのか、その中で資料というのはどう位置づけていくのかということについて最初考えてみたいと思います。

結論からいいますと考古学というのは歴史する学問である、ということになるかと思いますが。歴史というと文献史学だとか民俗学だとか色々アプローチの仕方がある訳です。歴史するという意味でのアプローチの仕方が色々ありまして、そのアプローチというのは分析対象に何をを用いるのかということに根っこがある訳です。もっとも大きい顔しているのが、所謂1人で歴史学と名乗っている文献史学なんですけれども。別に文献史学だけが歴史学を名乗る必要はない訳ですが、一応、歴史する時の今まで主流を占めていたのは確かです。そういった意味での文献史学というのは実は、「文字資料から歴史を構築していく」ということになるかと思いますが。民俗学のことはさておきたいと思いますが、それと非常に対照的なのが考古学でして、その分析対象として「モノ」を扱うということでもあります。ここで、所謂文献史学と考古学との際だった相違がでてくる訳です。際だった違いというのは、とりもなおさず方法論の違いということになります。だから、文献史学やる人と考古学やる人、それから勿論民俗学とかです。そういうところと何が違うかといえますと、方法論が違ってくる訳です。

### 1. 考古学が対象とする資料

ところで、考古学が「モノ」を対象とするという場合、「モノ」がどういうのかといえますと、「カタチ」が1つあります。そして、「カタチ」には2つあります。平面的な「カタチ」、これはシルエットみたいなカタチですね。あるいは、投影図みたいなものをイメージして頂くと良いのですが、そういったカタチがあります。「モノ」はだいたい厚みをもっていて、具体的には3次元の立体的な「カタチ」を持つわけです。そういった「カタチ」というのは、目で見て確認することができるという特徴を持っています。それから、手で触る、時にはなめてみることもできる。先程倉石先生から、見る・聞く・感じるという様な分け方を示して頂きましたけれども、「カタチ」を観察する時にもそれはあてはまります。つまり、五感でその存在と言いましょか、対象とすべきものの存在を認知するというものになるかと思いますが。聞くというのは、「なんでも鑑定団」の時に中島誠之助が出てきて、焼き物がでてくるとピンピンと指で弾くんですね。あれは考古学のほうでは絶対やりませんから。骨董屋の旦那さんだけです。それから、ピンピンとやるのは、ひびが入っていると音が違ってくるんです。だから、そうじゃなくて見れば良い訳で、ピンピンはじくのは値踏みしてるんですよ。少しでも傷が入っているのを隠しているかもしれない。そしたら、値をぐっと下げなくちゃいけないという様なそういうところでもあります。それを人前でピンピンやるもんじゃないんです。こっそりとやるというのなら別ですけども、あれはものすごい誤解を招くものです。しかし、中島誠之助は瞬く間に時代の寵児になって、最近はお娘さんが焼き物をやっていて、これまた2人組で色々対談だのインタビューに出たり、2人で旅したりとか、なかなか素晴らしい生活をしています。閑話休題。

それから、「モノ」というのは、その「カタチ」をどうやって作るかという技術を伴います。これは、製作法とか築造法とかですね。そういうものの手作業を経て「カタチ」が実現するわけです。だから、「モノ」

を対象とする考古学はそこにも目をちゃんと光らせなければならない、目配せしなければならないということになります。

一方、文様というものがあります。文様はその「カタチ」自体がもつ機能と多くの場合、直接関係することは少ないんです。要するにほとんどないんです。ところが、中には文様も「そのカタチにとってこのカタチにはこの文様」としっかりと組み合わさったものもありますから、そう簡単に扱えないんですけれど。しかし、そういうのものであればカタチの中でしばしば論ずる、共にセットにして論ずることがあります。単なる装飾としての文様というのがあります。しかし、装飾的であればあるほど、「モノ」との関係が密接じゃないんです。密接ではないということは組み合わせが変化しやすいんです。だから、とんでもない文様がそこに飛び込んでくる場合もある。という様なことでこの時代性とか地域性とかいうのは、この文様を見るということで、相当我々はそのモノ自体について理解を深めることができます。

それから、材質です。何で作っているか。まず、第1が石・木・骨・角・貝、それから土です。こういった自然界にある第1次的なものを材料にして、物理的なカタチを表現します。第2は土を材料とした焼き物です。これは熱を加えることによって生ずる化学的变化を応用して、水に溶ける粘土を水に溶けない物質に変質させるわけです。そういった化学的变化の応用による性質を視野の中に入れたモノづくりです。先程からカタチとか技術とか文様とかいってききましたけれども、それぞれが独立してちゃんと存在するのではなくて、それらが絡みあっています。その次が金属。これは、冶金術なんかと錬金術ですね、これとまた結びついてきて。いろいろ単なる技術的な意味とは別に非常に呪術的な意味とか、そういったものがしばしば錬金術に重なってくるというのは、よく知られていることであります。こういう大きく分けると3つくらい。なんか突然出てきたものについては4つ目の座席を空けておくということが必要かもしれません。

ところで、「モノ」の存在を認識するというだけでは、資料とならないのです。従いまして資料化ということが必要となります。「資料化する」という作業を経て初めて「モノ」の存在がもっと、もう1つ別の次元での意味をもつのです。それは後でお話しします。

次に資料というものについてまた別の面から見てみたいと思います。資料というのはそれぞれ属性を持っております。機能とかそれも重要なんですけども、その機能をすぐに明らかにするというのは難しいことでして。まず、モノそのものの分析を通してさらに高次の次元といいますが、高次の認識の次元に進む訳でして、その挙句に機能を推定するということになります。その前に資料そのものの存在というものについてどう見るかという時は、その属性を我々は目につけていく訳です。その属性には、物理的属性と非物理的属性といいたし、仮にこういった2つに分けて考える必要があるだろうと思います。物理的属性というのは、先程申しました様なカタチ・技術・文様・材質等に関わるもので。それはいい方を替えますとそれプラスそれだけではなくて、そこに折るとか、割るとか、剥がすとか、研ぐとか、研ぎ減らすとかそういった物理的变化をそこに含むものです。こういった折る・割る・はがす・すり減らすという様なことの他に、継ぎ足す結合とか、さらに組み合わせるといふ様なことが入りこんできます。これはすべて物理的属性ということで括ることが出来るのではないかという風に考えます。そこで、実はこの物理的属性についても色々な見方が必要でして。この物理的属性というのは、しばしば身体的特性といいたし、身体の機能と結びついて1つの限定された範囲に収まるものです。例えば、割るとか折るといふのは、手だとか筋力の強さ程度とかです。それから、手の運動の仕方。斧で木を切り倒すなんていうと腕の弧を描く様なそういう運動とかそういう身体的特性とその運動の中の物理的属性から生み出されるという風にいえるかもしれません。これは人類の長い歴史の中では、指がいつ頃になって自由自在に使えるのか、あるいはどの程度の限界を超えることができないのかにも関わります。僕は足の指でものをつかんで

とることができます。遠いところに、足を伸ばして取ることができます。そういう人がだんだん少なくなってくると思うのです。僕は少し原始的な特性を残しているかもしれません。

ところが、それに対して非物理的属性というのがあります。これは一言でいうと、見た目の効果ということです。あるいは言葉を替えていうと、雰囲気です。「モノ」の持つ雰囲気。これは非常に大事なことです。これらが両輪になって「モノ」というものを性格づけるというべきであります。で、雰囲気というのはどういうことかという、五感に関わってくるものでして、手触りから始まって、見た目の心地よさから、それから量感とかそういうものです。なかなかこれは文字では表現できない部分をもっております。あるいは色々細かく分析して物理的属性というのは、分析していけばちゃんとそれに答えてくれる部分が必ずあるんですけども、この雰囲気とか見た目の効果というのは、よほどこちらがきちんと対応しないと浮かびあがってきません。例えば、「力強い」なんていうのは何を以て力強いというのかという様なこと。これに対してなんかだらしがないとか弱々しいとか、確かにモノにはあるのです。それも非常に大事なことです。「モノ」の評価、例えばある時代は雄々しく力強い、その「カタチ」が次第にだらしがなくなっていくとか。そういうことが現にあります。

例えば大森貝塚を発掘したモースです。あの人はすごい観察をしております、縄文土器の文様を観察しながら「この文様は、乾き上って焼く直前になって彫り込む様に文様をつけた」といっています。これは実は非常に力強い効果を与えます。つまり、力を込めて文様を彫り込む訳ですから、いい加減なひよろひよろと描いた様なものとは違います。その両極にあるもう一方は、粘土が柔らかいうちに文様を描くということ。これは、本当に軽い力で、スーッと線が描ける。相当太いやつでも線が描ける。ところが相当程度に乾燥が進んだものに太い線を刻み込むということになると、本当に必死になって彫り込まなくては行けないんです。それをモースは指摘しております。そのあたりはその後の縄文の研究なんかでは、抜けていくところなんですけれども、大変重要なんです。

一方、そういうことの他に上手もあれば下手もあるという事実。上手も下手もあるというのは現実に我々の世界にはいつもあるのにも拘らず、「モノ」を資料として見て取り扱う時に、そこまで踏み込まない。例えば、未熟であるとか熟練しているとかです。そういうところまで私たちは踏み込みさえすれば、ちゃんと余地があるといひましようか、本体に迫る道はあるんだということをもう少し心得ておく必要があるのではないかと思います。ですから、この非物理的属性というのは、より人間の心性と関わる部分があるという意味において重要であり、無視することのできない点であります。

それから、材質を選ぶ時も例えば黒曜石にこだわるとか頁岩とかサヌカイトにこだわるとか。決して黒曜石でなければ、鏝が作れないわけじゃないんです。しかしある時は相当遠方まで黒曜石を手に入れるための作戦をとったりします。これには単なる好みという次元があります。それから、相手方とのいろいろな交渉の仕方です。「そっちの黒曜石を採り入れる」、そういった様に、社会的な人間関係の中でも決まってくる場合があります。それから、加工のし易さだけではなくて、その材料が持つ柔軟性とかです。例えば、同じ石器を作るにも黒曜石よりも頁岩というやつのほうが、粘性が強いのです。そうするとその粘性の強いものでもって彫刻刀を作っているという様なことが、旧石器時代の終末期になりますと、行なわれる様になります。そういった物理的性質をちゃんとくみとって人間の心がそれに対応していくという様なことも重要な点ではないかと思います。

## 2. 資料化(データの公開性)

次に、そういった資料を資料化することについて考えてみたいと思います。資料化するというのは、資料化するには資料化の作業が必要であるということです。そういうプロセスをちゃんと踏むことに

よって、資料化が果たされるということです。この資料化はまず1番目に「モノ」の持つ情報をきちんと抽出するという。ただ眺めて観察して、写真を撮ったりスケッチしたりするというのではない。資料化というのは「モノ」のもつ情報をきちんと認識して、まず抽出してそれを資料化する。これによって個人的な認識を超えて、他の人と共有する資料となりうる前提になります。個人的な認識ではない。資料化というのはそれを他人への公開性を持つものにするということです。それから、2番目は今度はその資料化によって保存といいましょうか、資料を保存するということもあります。そういう要素も重要です。3番目が個人的認識の次元を超えて公開性・公共性といった様なことによって、これを今度は発信したり、あるいはそうなったものを今度は受信する、受け入れるという様な。そういう資料のいわば具体的な取り扱いが初めて可能になってくるということになります。

いよいよ今度は資料に近づいていきたいと思いますが、資料化という問題の具体的な方法です。1つは文字による記述です。先程の倉石先生のお話にもありましたけれども、文字による記述というのは非常に大事です。ところが、文字というのは非常に我々にとって便利な武器なんですけれども、一方、便利であればあるほどアキレス腱みたいな資料があって、その記述がうまくぴったりの記述が期待できるとは限らないんです。例えば、今私が話している時に実は僕はものすごく良いことを考えていて、それでみなさんに伝えようというか、それを表現しようと努力しようとしているんだけど、残念ながら体調によったりガソリンの入れ方が少なかったりすると、上手く表現できない時があるんです。その表現できない時というのは空回りして、「ああ全然手応えがないな」というのを自分で授業の時でも感じる時があるんです。

この言葉、文字というのはそういう意味では便利で、自由自在に操れ、口を開けば音が出るわけですが、だからこそ、いったん出してしまったものは、ずっと残像現象で次の言葉にもつながっていくということで、なかなか、コンピュータのスクリーン上で、先の全部を消して違うやつをいれるという様な、それとはまたちょっと違うんですね。口でいう、それから手書きもそう。例えそうやって十分じゃないから一生懸命変換したりします。そういった文字というのは、そういった意味ではなかなか言葉だけでは文字化だけでは資料化というのは難しいということです。

ところが、それを補完する意味で図化、図式化するということがあります。これは覚え書き程度のスケッチからちゃんとした建築家の設計図みたいなものまであります。それを見ると家が建つみたいな。最低限それはこういうものであるということを図の中に盛り込むことができる。この図化するという、模式化するというは実は文字による記述に匹敵するくらいに重要なものです。文字でどうしてもうまく言い表せないことが一目瞭然、図化することで可能となる場合があります。例えば、石槍があります。先がとがった石槍を作りあげている剥離面は沢山あるのですけれども、その剥離面は口で話できないんです。大きさから、どっちからどういう角度で剥ぎ取っているかなんてというのは到底いえない。1時間2時間かかっても剥離面の状態とか順序はいえない。ところが図を描く時は「この剥離面はこっちから打ってます。」というのは剥離に現われるリング、ちょうど池の中に石を投げた時に波紋が広がるみたいに剥離面にリングができるのです。それによって、「あ、こっちから力が入っているな」というのが分かります。さらにそのリングを次の新しい剥離面が切ったりすると、とすると、こっちよりこっちの剥離面が新しいという切り合い関係が全部分かるわけです。そういった意味で、図化というのは非常に重要なことです。そしてこの時に、図化する図式化する模式化するという時にはしばしば、記号を適宜に加えることによって効果を上げることができます。

文字による記述の時にも適宜この記号を用いるということが必要です。つまり一つあだなを用いるということはきわめて有効です。例えば、僕のような体格で顔も良いし、なんといいますか中肉中背で、そして非の打ち所がない、というのを「小林型」といえば、あとで誰かと話す時、「小林型」といえば、「ああ、

そうかああいう人ね」と分かるわけです。そのあたりが、記号化の効用です。それから記号化の時には例えば、縄なんかでもその右廻りと左廻りを廻り合わせたとか、太い右廻りの縄に細い左廻りの縄を巻き付けるとか。そういうものが記号化することによって一目瞭然となります(図1)。記号化することによって他のものとの区別もよくできるのです。比較検討ができるということもあります。

図式にもそういう意味において記号をその中に取り込むことによって、リングだけで、そしてリングの切り合いだけで剥離面の新古の順序、どっちが古い新しいというのをそこで表現する、あるいは読みとってもらおうが大変な時は、両面にまたがる短い線を加えて、切る側に丸をつけ、切られた側にバツ印をつける。そうすると剥離作業の段取りがはっきりと見えてくる。これだけのことをリングの表現のみで伝えることはむずかしい。それで矢印をずっとやっていけば剥離の進み方がわかります(図2)。

図化する時に一定の基準といいたし、方式、約束事を用いる場合があります。この約束事とは平面図、側面図とかいうものです。その約束事をきちんとやっておくとその資料が持つ情報を共有する時に、それを読みとる鍵をお互いに共有できる。私が読みとるのも、他の誰が読みとるのも、その図から読みとることのできる内容は同じになります。ところがスケッチとか、先程面白い画像がいっぱい出てきましたけれども(倉石発表)、これは今度、その人の思い込みとか「こういうことを伝えたい」というひとりよがりとかいうものが結構働いているのです。そこで - 実は図化もそうなんですけれども - これは画像にも関わってきますが、約束事だけでやっている面白味がないんです。例えば、民俗資料もそうですけれども、それを民俗資料とするためには、ある程度の約束事が必要かもしれないけれども、それをやっているみんなが同じ情報しかその写真から受け取るしかない。先程倉石先生が示された、手をずっと並べた写真だと、黙っててもなんか、どきっとします。そうすると働いている人とか、どういう職業の人とか、今度は手をいっぱい撮って、今度は年令にもよりますよ。例えば、我々の歯でもそうです。私の歯はここにいる若い人の歯よりもすり減っています。そういう風にして全部違ってくるのです。手なんかもそうです。あのしわの入り方なんか、たしかに伝わってくるものがある。自分の思い入れを入れた図とかも場合によると効果を発揮する。つまり画一化するとどうしても固定化していくんです。そこから新しい情報が生まれ出る余地がだんだん少なくなっていく。そして、それは今度職人技になってきて、「図は図を取る作業員さんにお任せしよう」とか、そういうことになるともう動かなくなります。だから、実は図を発注する方も作業員さんにこの図をどう描いてくれと注文する方も、1度2度ならず図を描くという訓練をしたり苦労をしたりという経験というものがあるって頼む時と、ただ「私は学芸員になりまして予算がこういう風にとれたので私は研究します。机の上で図なんかとっていただけません。図のほうはどうか作業員さんお願いします」といってるともう、だんだん固定化したものしか取れませんから。そして資料から図化した段階でそこに先程約束事という時には、大勢で渡れば恐くないぞみたいなですね、大勢がそれで合意してるんだから、他のいくつかの要素を切り捨ててもこれだけを盛り込めばそれで良いのだということになりかねない。なんか切り捨ててしまっている要素から「モノ」を改めて見いだそうということが困難になります。そういった意味では図化というのにも個人的表現というのがやはり、これからお話しする画像にも必要だということです。

実は民俗学のうち民具の研究なんかは考古学の方から相当影響を与えているんです。民具の資料化・図化にあたっては考古学の見方、視点が入っているはずなんです。それによって客観化された資料というものを共有することができるということにきています。実は考古学が民俗学に影響を与えるほど図化についての一つの方法をきちんと身につけることができたというのは、昭和の初年からなんです。つまり、弥生土器の研究をしていた故小林行雄氏からです。それまではついこの間まで民俗学がやっていた様なスケッチだったんです。ところが小林行雄氏は別の分野を経験して考古学に入ってきたんです。別の分野とは建築

学です。建築学から考古学に入ってきたものですから、建築学の約束事で図を作る様になったのです。建築、こういう家が作りたいんだといってスケッチではその家は成り立ちません。小林行雄のスケッチから客観的な約束事を持った一定の基準を満たした図が完成して、そして考古学の中に定着していくのです(その成果が『弥生式土器聚成図録』昭和13(1938))。今はもう相当それは行き渡っています。だから、それなりに図からだけでも今まで読みとれない様なものを性格に具体的に読みとる様なことができるようになっていきます。しかし、その一方で、モード化すると、そこから読みとることができる情報の種類と量が決まってしまう。

ですから、私が今危惧しているのは、考古学上の報告書では、実は写真を抜きにして、画像を抜きにしてみんな約束通りの図化をしようとしている傾向が強くなってきていることです。全てが同一基準によるモード図に取って替わろうとしているのです。どうも私はそれは困ると思っているんです。両方、どうしてもなくてはいけぬのがあります。それから、図なんかはいいと。そんな細かいところまで描いてもらわなくたって、僕には先程の荒井くんの写真みたいにピンぼけでも何を伝えようとしているかが分かる、という写真をやはりもう一度見直さなくてはいい。

### 3. 資料化としての画像

3番目にいよいよ資料化の中での画像です。画像、所謂写真です。静止画像と動く動画とがあります。さらに最近ではCGがあります。これらを全て画像ということにしたいと思います。それからまた、別の観点からすると、モノクロームがあり、カラーがあり、赤外線写真がある。そしてその他にフォルスカラーというのがありまして、これは赤外線写真のカラー版です。だから、赤外線写真というのはモノクロだけではなく、ちゃんと所謂カラー写真でもその赤外線のフィルムのカラー写真でやると見えぬものが見えたり、区別できないものが見えぬ。例えば、水分をあげないで枯れる寸前になっている緑の森を撮っても、見た目には隣の元気のいい葉っぱをつけている森と変わらない。区別できない様なものでも、フォルスカラーでやると違いが写るんです。例えば、ベトナム戦争の時にフォルスカラーはものすごく活躍するんです。ベトコンが自分たちで木を切ってカモフラージュするんです。このカモフラージュは葉っぱがなければカモフラージュできませんけれども、切った木は葉緑素や光合成を停止していますから飛行機でフォルスカラーで撮っていくと全部分かるんです。「あ、ここに枯れ葉を身にまとった集団が隠れているぞ」と。それからババババっと攻撃していくのです。そういうフォルスカラーや赤外線写真や普通のモノクロを応用すると、遺跡の遺構だとか、そういうものがクロップマークだとソイルマークだとか土地の地表にその色々な地下の遺構の存在を知らせるカタチが現れてきます。5年ほど前イギリスで、相当な干ばつがあったんです。そして、その時の航空写真で、今までは分からなかったローマ時代の遺跡がほぼ地表に痕跡を現して分かってきた。さらに今度はフィルターを使うんです。工夫によって、そして技術を駆使することによってどんどん情報をとり入れることができます。それから、見た目では分からない様な地層の断面で、phの違いが、そういった赤外線写真に反映されるんです。そういうことで肉眼で見て、いくら大和魂でがんばろうと思っても、区別がつかない。ところがそれなりの写真を撮るとちゃんとくっきり浮かんでくる。そういうことなんか画像による資料化の非常に重要な成果をもたらすわけです。資料化というのはそういうものなんです。

もう一つ、別の観点から画像について。どんなに私が目が良いからといって、じーっと睨んでいたら次から次へと沸く様に情報が入ってくるかというところじゃない。そこで、虫眼鏡を使ったり、そして顕微鏡写真で拡大したりして、肉眼では見えぬものを拡大して見る。そしてそれを資料化するためには顕微鏡写真が必要となる。その次元をさらに超えたものは、電子顕微鏡のレベルまでいきます。そうすると顕

微鏡レベルのレンズで解析できなかったものが、電子顕微鏡でこれはエゴマでこれは粟だとか、石器の使用痕の場合でも区別をするということが可能になります。そういったことも、現在考古学の方では相当活用されているということを知ることができます。

ところで、大まかなものなのですが、今日はちょっと遊び心ですね、文字による記述の資料化も図化も画像もひとつひとつ独立してはできないのですが、これを組み合わせることによってより効果をあげます。資料化について。そしてその資料化の時に大事なものは、一定の決まり - 約束事 - を持って資料化すると万人に対して文句なしに公開性を持つという特徴があります。けれども、困ったことに、それがずっと固定化するとどんどん狭い「closed(閉鎖的)の資料化」になります。だから、これをやはり打破しないと、資料化がただのルーチンワークとしての資料化の作業に終わってしまいかねない。そういう意味で、画像についてももう一度考え直してみたいと思います。画像には、非常につまらない決まり事からあるんです。正面を撮って俯瞰図を撮るとかね。ところが土器なんかだと、口縁の向こうの線がほんのちょっと見えるくらい。そうするとカタチがより正確に見えるというわけです。正確に見える様にするためには、口縁部を直線にしたらいじゃないかという、歪みが出てきます。これは遠くから望遠レンズで撮ればそれほどの歪みも出ないのですが、やはりこれも問題がある。ところが、カタチをよく表すために自分勝手な角度から写真を撮る人がいる。「これはだめだ」と怒られる。しかし、これは相当相対的な問題であって、どの程度でよしとするかというようなことには決まりがないのですけれども。だから、「いつまでたっても君、こんな写真を撮ってきちゃダメじゃないか。こういう写真にしなさいよ」となる。土器としての全体のカタチの雰囲気なんてものもあるし、ということでもいい加減な程度を奨励された訳です。という様なことで、結構考古学も大雑把なんです。そうすると、万人に共有されやすいのはその厳密な約束に則った写真だとする、しかし、これだと新しい可能性とか対話が出てこないのです。だから、時には、ものによっては、これでも良いじゃないかという思い切った挑戦を試みる必要があると思います。

つまり、時にはスナップショットみたいなもの。あるいは角度を正面から撮影するのではなく、斜め右上からレンズをのぞいて写真を撮るとかという様なことで。実は私たちが見逃しがちな - ここで大事なものは情報ですから - 情報を得るために、資料化のために、写真、画像を扱う訳ですから。目的達成のための工夫が求められる。写真をとりあえず撮れば良いというのではない。

例えば、考古学者が「こういう風に撮ろう」「模様は全部写らなきゃいけない」という時に岡本太郎は抵抗するわけです(図3)。考古学者が撮っていたり、あるいはそれまでの美術史家が撮った写真の常識から飛び出て、太郎は写真を撮る。土器のたった一部しか撮らなかつたり、それから陰影を殊更に強調する。だから影の部分の文様は見えなくなる。これだとみんなで共有しうる情報はごく限られている。どう違うかということ、部分だとかデフォルメだとかということです。ここに実は重要な情報があって、全体を見せられても、ああ、そうかということになるんですけれども、部分で迫られると、「おっと」と気を魅かれるんです。太郎の写真は、真正面から撮っているものはないんです。逆に裏面の真正面から撮ったりしている。ところが、考古学者が絶対撮るといような土偶の顔を見ながら、その顔の正面から撮っている写真がないんです。で、後ろはある。この太郎によって、初めて例えば考古学の世界だけじゃない世界に関心を抱いている人、何かないかなと狙いすましている人。そういう人にも縄文土器ここにありというのを太郎が写真の撮り方で、画像で訴えていきます。その時彼は文章でも表現します。「縄文土器論」というのを書きます。そうすると勝手なことを書いてるんです。「器面をのたうちまわる」なんてね。私たちは「のたうちまわる」なんてことはいわないんです。ちゃんとS字状の渦巻きが、こっち側が大きく、それが横位に、横の位置に展開するとか、あるいは斜めに来るとかそんなこと一生懸命やるんですけど。太郎は「のたうちまわって今にも口の縁から飛び出さんばかりの勢いがあり、俺を圧倒する」なんて、自由に表現する。

それでみんなが離子たてたわけです。

考古学者じゃないから、そういうことができた。じゃあ、考古学者はそういうことができないのという、そうでもない。私なんか段々年をとってくると、若い人と同じ様にこういう真正面からだけでは見なくなる。同じ見方で見ると僕の方が目が悪いし、根気が続かないから。そして観察力も落ちてるから負けちゃう。そこで一捻りきかすという時にはちょっと角度を変えたりとかということになります。そういう工夫によって逆に岡本太郎こそが、縄文土器の面白さ - 例えば縄文土器だけの面白さじゃなくて弥生土器とどこが違うのかというようなこと - をどんどんそこから発展させていくことができるのです。太郎はそういうことをいってないですけども、僕なんかは今度はいえるのです。今日は隠しておきますけど。

そこで、もう1度ちょっと整理しますと、約束事を守ること。これは画像だけに留まらないのですけれども、画像に焦点を移して考えていくことにしましょう。そうするとそれは画一化するということになります。画一化するというのは、その枠からはみ出すことができない、脱出できない。だから、みんなが同じ様に見ると同じ様にしか見えないし、他の人もそこから読みとる情報は同じになってしまって、個性的な情報をそこから読みとることができなくなる。難しい。全く出来ないわけではないのです。不可能ではないけれど、難しくなる。ところが、その約束事を守らない、もっと積極的な言葉で型破りというものを画像にも取り入れる必要がある。画像だからこそできる型破り方がある。その1つは陰影のつけ方です。それから、部分ショットです。全体ではなくて部分だけで、全体を表現しようとする。それによってその人が何をしようとしているかということが出てくるのです。本来ならば文様は、満遍なく見えるように撮らなくてははいけないんです。そういう風に我々は訓練されてきたのです。だから、誰の写真でも、上手下手は別として全部満遍なく撮れてます。しかし、この部分の表情になんか自分は惹かれる、こいつに物いわせたい。時代性だとか地域性というものがこの顔に表れているんだということを強調しようとする時、それをもっとやるためには光と影で演出する。

そこで型破り例として私が若い頃、インパクトを受けた写真があります。甲野勇先生が紹介された縄文中期の顔面付土器です(図4)。『多摩考古』に出てるのですけれども、勝坂式土器でちゃんと空ろな目玉を持つ顔が、土器の縁に付いている。それが角度によって目が動くんです。撮る角度によって。そして一番良い、迫力のある角度があるんです。それを示しているんです。この写真に出会うまでの若い頃は「あ、なるほど。土器のここに顔面把手があって、付いていて、顔面の形がどういうものか」という型式だけを追求していました。ところが、甲野的なそういう目で見ると顔面が生きてくるのです。迫ってくるのです。そうなった時、縄文人がどういうつもりで作ったかみたいなのに、少しだけでも近づけたかもしれない。一步でも二歩でも。そういうことを思うわけです。

例えば、この土器、これなんか面白い顔に見えるんです。こうやって見てみて下さい(図5)。全然違うんです。こっちの方が、何と申しますか、彼らはこういう表現をしようと思って作っていたかもしれない、というものをよりはっきり見せてくれます。これと全然違います。顔が。こっちは目が生き生きしているでしょ。そうやってこれを見てから、ここをあと目がちゃんと見えてですね、「あ、こっちを見ている」。ここが何か耳の穴みたいになっていて、ここはミミズクみたいになってる。ところが、時にはこの膨らみがちょうど我々がイメージしている所謂狸に見えるんです。私はだから狸、狸といってたんです。果たして狸かどうかは分からないんですけども。しかし、これよりはこっちのほうが狸みたいです。

それから、これなんかはコウモリみたいなんです(図6)。コウモリみたいなんです、コウモリみたいに見える様に、ライティングして光と影でやってるんです。演出してるんです。するとようやく、こういう風に見えるのです。実は黙って見ていたら、そういう風には見えないのです。「なるほど」という風には。しかも、もうちょっと面白おかしくやると、こういうのが出てくるんです。この影を、わざと。影なんて

というのは実はいらぬのです、土器の写真を資料化する時には、ところがその影を強調する時、この土器という存在をこの特殊性を強調したい時に、影をつけるとすぐ分かる。それから、これは釣手土器というものなんです(図7)。縄文時代中期。で、黙って撮っていたら何も出て来ない。しかし、影でこれの形がですね、この形が潜在的に持っている可能性が影となって表れるんです。だから、先程の倉石先生のお話は、相当違う分野のところを扱っているのだけれども、重なる部分がいっぱい出てきて面白かったというのはそういうことなんです。面白いというのは理解できるということであるし。先程は倉石先生が発表したんですが、僕が面白いと感じている様に私の発表も同じことということ、お叱りをうけるかもしれませんが、まあ似たようなことを考えているということにさせてもらえるわけです。だから、本は読まなくちゃいけない、読み始めて面白くなかったらすぐ止めなさい。面白かったら、その本に書いてあることは自分が考えていることなのだから。ということで少し思い切って踏み込んで一緒になって考えを進展させたら、ということをお話することがあるんですけども。理解できるということは同じことを実は考えているということなんです。

ということで、釣手土器のさっきの写真というのは実はこの間お亡くなりになった、浅川利一先生が撮った写真なんです。考古学にほとんどプロに近い程のめり込んだ方なんですけれども、所謂考古学者としてそれを肩書きにしていた人じゃないんです。そういう人が例えば影によって、あの釣手土器の存在というものといひましようか、影を取り込むことによって、写し出すことによって、そういうものを我々に訴えてきます。

話は横道にそれました。これは普通の拡大写真です(図8)。表面に小さな傷があります。磨製石器を一生懸命使っていた時の傷がある。こういう傷が見えるように撮るためにちゃんとライティングしているんです。この傷がさらにどういう性質のものか、皮をなめす時の傷なのか、木のようなものを切ろうとしているのかという様なことは、今度は電子顕微鏡レベルで分かるんです。

それから、色々私のところに入りにしているプロ写真家がいます。「これは僕がこういう風に見えるんだけど、それが見えるように撮ってくれ」と注文したりするのです。特にまだ発展途上の写真家だったら、僕のいう通りにやってくれる。そうじゃない大御所の写真家だと「俺がこの土器と対峙して、それとの関係から何かを作り出そうというんだ。そして、それを表現しようとするんだ、映像で。」という様な、無駄なことを主張する。そうではない人と僕はやってます。そしてそれがこういう写真になるわけですね(図9)。これは評判の写真なんです。120周年記念の展覧会の時にこれを貼り出したんです。北海道の今金町で6月にオープンした博物館でこのポスターを使ったんです。町長以下、これは小林が推薦した写真だっていうので喜んでるんです。これは旧石器。そしてちょうど発掘実習の打ち上げの日。飲んでたらですね、満月が上がってきたんです。飲んで勢いで、普通は思いやりがあって、「暗い夜道を遺跡に行つて石器と月と一緒に撮って来い」なんていう筈ないんです、心の優しい私は。ところが、酔っ払っていたから、口だけが動いてしまったんです。「行って来い」といったら、ちゃんとこれだけの写真撮ってくるわけです。そして、この石器が生き生きとしてくるじゃないですか。中天に浮かぶ満月と、相呼応して、まるで狼が月に向つて吼えているみたいじゃないですか。こんなことをいうとちょっと馬鹿にされるから、これで止めておきましょう。つまり、私は伝えたいことがある、個人的に。そうじゃない時は画一的なことでやっても良いけれども、もう一つそれを型破りでやろうとする時には、文章でもできない、そして映像でしかできないことがありますよ、と。「モノ」自体が物いわないから、「モノ」に物いわせる時には画像が非常に有力な媒体になる。ということを改めて私は強調したいという風に思うのです。

(土偶の出土状況と写真による情報化については、省略)

それから、大形建物が富山県の不動堂遺跡というところで昭和48(1973)年に見つかりました。これが見

つかった時、僕が見に行ってもすぐこういう写真を撮れと注文して、撮ってもらったんです(図 10)。実はこれが初めてなんです。遺跡で、写真を撮るといって人をみんな排除するんです。せめてポールくらい入れる。それで大きさの目安にした。それを僕は人を入れて撮れということをやった最初の写真です。その後、ここに寝転んだり色々やる人います。あれは、ここから始まったということをつけ加えておきましょう。どうも、時間になりました。すいませんでした。

図版出典・写真提供

- 図 1 山内清男 1979 『日本先史土器の縄紋』先史考古学会
- 図 2 松沢亜生 1959 「石器研究におけるテクノロジーの一方」『考古学手帖』37
- 図 3 川崎市岡本太郎美術館提供
- 図 4 甲野 勇 1961 「顔面土器について」『多摩考古』2 口絵
- 図 5 國學院大學考古学資料館提供
- 図 6 堀越知道氏提供
- 図 7 浅川利一氏提供
- 図 8 小林達雄氏提供
- 図 9 堀越知道氏提供
- 図 10 富山県埋蔵文化財センター提供

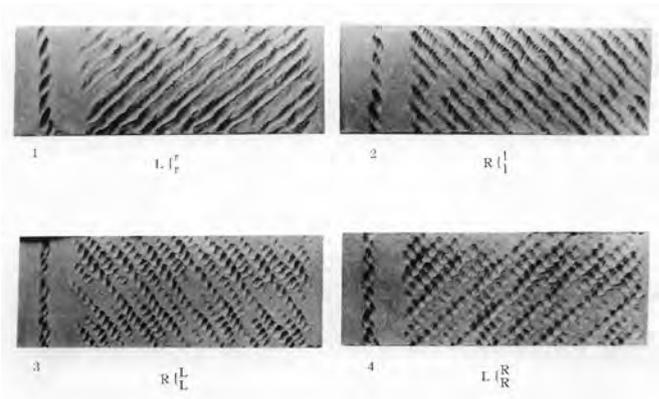


図1 山内清男氏による縄文施文方法の表記例

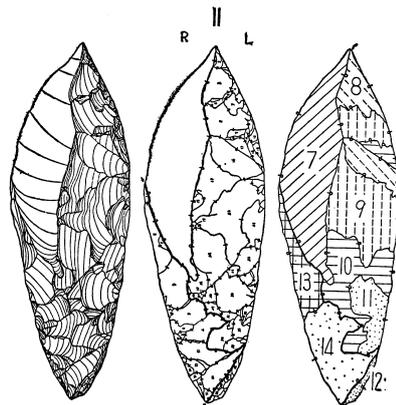


図2 松沢亜生氏による石器の剥離順序の表記例



図3 岡本太郎の撮影した縄文土器（1956年）



図4 顔面付き土器  
（東京都保谷遺跡出土 甲野勇氏撮影）



図5 「タヌキ形土器」



図6 釣手土器  
（東京都武蔵台東遺跡 堀越知道氏撮影）



図7-1 釣手土器  
(東京都清水上遺跡 浅川利一氏撮影)



図7-2 釣手土器  
(東京都清水上遺跡 浅川利一氏撮影)



図8 石器の使用痕跡  
(新潟県小瀬ヶ沢洞窟)



図9 満月と旧石器  
(北海道ピリカ遺跡 堀越知道氏撮影)



図10 大形住居  
(富山県不動堂遺跡)

# 学術フロンティア作業報告 - 大場磐雄資料編

荒井 裕介(國學院大學大学院特別研究生)

平成 11 年度から実施してきたプロジェクト「国學院大學学術フロンティア構想「劣化画像の再生活用と資料化に関する基礎的研究」事業(以下、フロンティア事業)も、本年度で最終年度を迎えた。フロンティア事業のなかで、大場磐雄資料を振り返り作業を通じての反省点と今後の展望を述べてみたい。

## 1. 大場磐雄資料とは?

大場氏は大正 14 (1925) 年に内務省神社局考証課嘱託となる。その後、國學院大學教授として広く全国を調査する傍ら、幅広い見識で当時としては貴重であった写真撮影により埋蔵文化財を含めた文化財の資料化を行なった。当時は国産の乾板が流通を始めた時期で写真(乾板)それ自体が非常に高価なものであった。そうした大正年間から第二次世界大戦の前後を通じ、昭和までの文化財の記録が、現在我々が取り扱う所謂“大場資料”である。

大場氏が収集した資料の貴重性は単なる古写真という枠に留まらない。その資料は遺跡・遺物といった埋蔵文化財をはじめとした考古資料や神社の御神体・御神宝といった神社関係資料、人物やスナップといったものがある。どれも、既に失われた文化財や景観を記録した極めて重要な情報を内包している。

## 2. 大場資料の概要

大場資料の具体的な数量は写真原版としてガラス乾板 3704 点・硝酸セルロースフィルム 574 点・35mm フィルム 322 点がある。このほか、他機関に貸し出していたため別置されていたガラス乾板約 850 点があり、一部は 14 年度事業報告で報告しているが、本格的な整理作業は来年度以降に着手する予定である。

また、それ以外に大場氏が自ら収集・調査した図面類や拓本、実測図、紙焼き写真、報告書等の書類、地図、カード、新聞等の切り抜き、絵葉書、書簡といった資料や寄贈を受けたものがあり、保管箱に納められている。総点数は箱数にして旧石器時代 1 箱、縄文時代 18 箱、弥生時代 13 箱、古墳時代 32 箱、歴史時代 53 箱、祭祀 42 箱、民俗 1 箱、外国 6 箱、ほかに十二支 3 箱を数える。各保管箱にはその内容毎に名称が付与されており、更に内容物を細分した分類袋が納められている。

ではこうした大場資料をフロンティア事業でどのような目的をもって展開していったのかを示してみたい。フロンティア事業が目的とするところは、プロジェクトの題目にも掲げているとおり「劣化画像の再生活用と資料化に関する基礎的研究」であり劣化画像をデジタル化することで画像の再生と保存・活用を促すといったものである。具体的な活用例は後に示すが、自治体などでは市史・町史の編纂や文化財の再検討に使用されているようである。

## 3. 資料の保管状況

保管に関しては現在、本学本館地下の“資料デジタル化研究室”で資料化作業と併行して保管されている。資料デジタル化研究室ではどのような(具体的)保管方法をとっているのかということだが、前提として行なわねばならないことは空調の管理である。特に湿気に気を付けねばならない。空調の管理はあくまで大前提だが、現在のところ我々が行なっている保管の実態としては棚分けをして個別

の管理をしている。乾板・硝酸セルロースフィルムは従来の箱(写真1・2)から取り出し、60枚を一箱に収め、箱の蓋にはシリカゲルを備えている(写真3)。35mmフィルムは専用のファイルに、その他の資料類は箱のまま保管している。

#### 4. 作業工程

ではこれら資料をどのような手順で資料化していくのか、その手順を大まかに説明していく。

##### 写真原板

まずクリーニングと整理番号割り振りを行なう。整理番号はガラス乾板・硝酸セルロースフィルムについては一連の番号を付している。次に、透過原稿スキャナで取り込み、画像の明るさや陰影の補正等を行ない保存する(写真4)。保存先はDVDライブラリを採用してきたが、現在ではさらに万全を期すために外付けハードディスク2個をバックアップとして利用している。

画像処理作業自体はこれに留まるが、併行して以前保管されていた様々な包み紙に残された“メモ書き”を読み起こすことで資料のテキストデータ化作業を行なっている(写真5)。本作業においては複数方向からのクロスチェックとして大場資料の現実性が増すため、単に“メモ書き”を読み起こすに留まらず、『楽石雑筆』『神道考古学論攷』『祭祀遺蹟』『神道考古学講座』といった大場氏の著作などから事実確認、撮影日時・場所・資料の特定といった補足作業も進めている。現在では、こうした画像のデジタルデータ化作業はほぼ終了しており、現在はテキストデータとの照合に移行している。テキストデータは、稲生典太郎氏・小出義治氏ら大場氏を直接知る方々の協力を得ながらノートに書き起こし、そこから項目を選択し、エクセルを用いてデジタルデータ化する。項目は、整理番号、グループ名、撮影日時、撮影場所、対象時代、箱書、撮影対象(封筒書)、撮影対象(現在)、原版種類、原版サイズ、文献、備考の12項目である。

なお、35mmフィルムについては、複写および“メモ書き”を読み起こしは終了しているが、それらのデジタルデータ化については未着手である。

##### 乾板類以外

乾板以外の大場資料は平成12年度事業報告以来、毎年目録を掲載しており本年度も同様の成果を公開するための作業を行なっている。

作業手順として、まず保管箱の時代・地域区分と内容物の相互確認を行ない、次に保管箱に納められた封筒を開封して、収められた資料を確認する(写真6・7)。資料は地名(都道府県)、遺跡名・所蔵者・日付等、資料の種別と資料の保存形式を確認し、エクセルを用いて台帳化していく(写真8)。15年度中に、旧石器時代から歴史時代前半までの目録化を終える予定である。

#### 5. 問題点

このような手順で資料化し保管していくに当たってはこれまでのシンポジウムなどでも常に様々な問題点が叫ばれてきた。そこで、実際に作業を通じて感じたことが幾つかあるのでその点について少し述べてみたい。

先述した前提条件には、絶えず管理する人間が必要となることを示している。現在、資料デジタル化研究室において乾板資料を4人で、乾板以外を2人で担当している。しかし、今後の作業展開を考えた場合に常時研究室に在駐して、資料を管理する人間の必要性を感じている。

単に保管・保存に終始しては生産的ではなく、資料は活用してこそ意味のあるものなのである。とするならば、既に資料の活用を具体的にし、着手しなければならない時期にきている。それで、ここ

までのフロンティア事業経過を概観したうえでどのような活用をしてきたのか説明しようと思う。

## 6. ここまでのフロンティア事業経過

文部省（現、文部科学省）高等教育局は平成9年から私立大学ハイテクリサーチセンター整備事業及び学術フロンティア推進事業を設けた。これを受けた國學院大学日本文化研究所では、学内にある画像資料のデジタル化と保存・再生活用するため、平成11（1999）年1月に平成11年度「ハイテクリサーチセンター整備事業及び学術フロンティア推進事業」の構想調書を提出した。

### 平成11年度

大場磐雄資料の電子情報化にむけ、資料デジタル化研究室を開設。デジタル化に関する試験的運用の準備段階。

### 平成12年度

事業報告で縄文時代篇目録・平出遺跡関連写真資料を公開。

### 平成13年度

縄文時代篇目録・平出遺跡関連写真資料をWebサイトで公開開始。

事業報告で弥生時代篇目録・登呂遺跡関連写真資料の公開。

### 平成14年度

弥生時代篇目録・登呂遺跡関連写真資料をWebサイトで公開開始。

事業報告で古墳時代篇目録、常陸鏡塚古墳・信濃浅間古墳関連資料の公開。

### 平成15年度

常陸鏡塚古墳・信濃浅間古墳関連の資料をWebサイトで公開開始。

これまでどおりのデジタル化作業を行なっているが年度内に画像データベースシステムの完成を念頭に置き行なっている。

冒頭でも述べたように本年度で、一応の終了を迎えるフロンティア事業であるが、現在の我々が示すことのできる“資料デジタル化の完成形”は、検索可能な画像データベースシステムである。このシステムとWebサイトでの成果公開を併せて、資料の活用の第一歩としたいと考えている。

## 7. 反響

先述の通り、最終年度での完成形態を待たずに、各年度の作業成果を事業報告書とWebサイトにおける作業成果として公開してきた。こうした情報化した資料の公開に伴い、これまでに研究機関や研究者個人の問い合わせをうけた。以下はその反響の一部である。

長野県塩尻市立平出博物館：大場磐雄ガラス乾板写真資料（パネル展示）

茨城県立歴史館：大場磐雄ガラス乾板写真資料（特別展）

千葉県史編纂委員会：大場磐雄ガラス乾板写真資料・関連資料（県史編纂事業）

長野県松本市教育委員会：大場磐雄ガラス乾板写真資料（浅間古墳群の再検討）

千葉県立上総博物館：資料化と整理に関して

## 8. 今後の展望

結局のところ、現場から現時点で見えてくる問題点として、長期間複数の人間により資料化の作業

が進められると、作業の全体像を把握できる人間が限られてしまうことがある。全体を把握できる人がいないということで今後資料の管理でも課題となると思われる。しかし、常駐管理者がいないとしても完全な第三者が作業と管理の全体像を把握可能なマニュアルを作成することも求められると思われる。我々が取り組んできた大場資料の作業から得た経験は、大場資料に留まらず古写真などの整理作業の取り扱いに共通した部分が多く、十分に活用できる。それだけに、作業マニュアルを先駆的な取り組みのモデル事業として公開していくことは、新たな活用方法をもたらすことに繋がるといえよう。



写真 1



写真 2



写真 3



写真 4



写真 5



写真 6



写真 7



写真 8



# 画像資料と宗教学・民俗学

民俗宗教における柱の信仰と儀礼

宮家 準

画像資料と民俗誌

倉石 忠彦

記録されたイザイホ——画像から見た祭祀状況と聖域の変容——

齋藤ミチ子

画像資料と民俗学

小川 直之



# 民俗宗教における柱の信仰と儀礼

宮家 準(國學院大學神道文化学部教授)

## 序

縄文時代を代表する三内丸山遺跡では、6本の巨大な柱を立てて西方のはるか彼方の山に沈む太陽を拝し、さらに柱を天と地を結ぶ架け橋としたことが推測されている<sup>(1)</sup>。また日本では古来神格の名数として柱が用いられている。このハシラの語義に関しては「ハシ」は屋根と地のハシ(間)にある物の意、ラは助辞(『古事記伝』『雅言考』『大言海』)。ハシラ(間等)の義(『言元梯』)。ハは永久の義、シラはシルシ(標)の義(『古史通』)とされている<sup>(2)</sup>。これを宗教的に敷衍すると、ハシラは上と下の間にあつて両者を永久に結びつける標と考えることが出来る。なお日本の民俗宗教では、柱は神霊の「依り代」とされており、このことが神格の名数を柱とする根拠となっているのである。

本講演ではこうしたことを考慮に入れて、日本の民俗宗教に見られる柱の信仰と儀礼を民俗儀礼に見られる柱、記紀神話の天の御柱、中世神話に於けるその解釈、伊勢神宮の心御柱、吉田神道の大元宮の柱、修験道の柱源護摩や柱松、天理教のかんろだいの順に比較検討し、最後にこれらをアジアの民俗宗教に見られる柱の信仰と儀礼と比較してみることにしたい。

なお本講演の視点は柱という宗教的なシンボル、それをめぐってなされる儀礼の根底にひそむ意味を解明するという視点に立っている。その際に柱にかかわる種々宗教現象を相互に比較して本質を解明するという視点に立つものゆえ、歴史学などのように史料の吟味を厳格に行うものではなく、その現象をどう読みとるかということをも目的とするものであることを、あらかじめおことわりしておきたい。

## 1. 民俗儀礼に見られる柱

一般の民家で最も重要視されるのは土間との境に立つ大黒柱である。この柱は建前の最初に御神酒や塩で清めた礎石の上に立てられ、御幣をつけ、蓑と笠がぶらさげられる。そして家を建て終えると大黒柱の上方に大黒と恵比寿をまつり、粥などを供えて守護を祈願する。なおすでにある家に転居した際にも、まず大黒柱に粥を供えて守護を祈っている。そこで暮らすようになると正月に粥を供えて祈願したり、主婦が布を織りおえたり、夫や子供の衣物を縫いおえると、まず大黒柱に懸けて、祈りをこめていた。ちなみに童謡に「柱の疵はおとしの五月五日の背くらべ」と歌われているが、この柱は子供の成育を見守る大黒柱を意味している。このように大黒柱は家屋を支えるのみでなく、家族を守護し、その成育を助けると信じられたのである。こうしたこともあつて、一家を支える人を大黒柱といたり、主婦をうちの大黒と呼んでいる。

神社の祭礼などで神霊の「依り代」として柱を立てることは、つとに柳田国男、折口信夫によって指摘され<sup>(3)</sup>、全国各地の事例が報告されているが、ここでは卯月8日の「天道花」と盆の「柱松」について簡単に紹介しておきたい。卯月(4月)8日は、柳田民俗学では水分神と祖霊の性格を持つ山の神が里人に迎えられて田の神となり、稲の生長を守り始める日とされている。この神は収穫後の秋に子孫と新穀を共食したうえで再び山に帰って山の神となる。これが神社の春祭り、秋祭りのはじまりとしている。この卯月八日に山の神を里に迎えるにあたって、里人はツツジ、シャクナゲ、ウツギなどの花を長い竿の先につけた天道花を庭や軒先に立てている。これは山の神霊の「招ぎ代」ともいえるものである。この天道花は八日花、夏花、立て花とも呼ばれている。日本の仏教では4月8日

を釈迦の誕生日とし、各寺では屋根を花でかざった小さな花御堂に誕生仏を安置して甘茶を灌いで祝っている<sup>(4)</sup>。

盆には寺院の境内などに柴草で作った柱の先端に御幣や榊をつけたものを立てて、下から松明などを投げて御幣への点火を競う柱松という行事が畿内、長野、山口などで行われている。また各地で新仏が迷わずに家に帰るように頂に葉をつけた杉、檜、竹を立て、中ほどにこれも葉をつけた横木をわたす「高灯籠」が立てられている。この両者はともに祖霊を迎える招ぎ代と考えられるものである。ただ後述するように戸隠、英彦山などでは「柱松」とよばれる独自の修験行事がある。

## 2. 記紀神話に見られる柱

今は日本神話といった場合は、まず『古事記』があげられるが、これは本居宣長が『古事記伝』を著わして以後のことで、本講演で主にとりあげる中世神話、吉田神道、修験道では、『日本書紀』の影響がより強く認められる。そこで、ここではまず、『日本書紀』の天地開闢と国土形成の神話に見られる柱にかかわる記述を紹介しておきたい<sup>(5)</sup>。

『日本書紀』の本文では天地開闢に関しては天地陰陽が分れず鶏卵のように混沌とした状態の時、ほの黒い中に「牙」<sup>きざし</sup>があらわれ、清く明るいものがたなびいて天、重く濁ったものが土となった。そしてこの後に「神聖」<sup>かみ</sup>が生まれた。なお天地開闢の始めの大地は、水の上に浮かぶ魚のような状態であった。その時天地の中から「葦牙」<sup>あしかび</sup>のようなものがあらわれ、それが国常立尊になったとしている。ここでは混沌の中からまず「牙」があらわれ、ついで天地・陰陽が成立し、神聖が出現していること、天地の中から葦牙のようなものが生じ、それが国常立尊となっていることに注目しておきたい。一方『古事記』では、天地開闢の時、高天原に天御中主神、高皇産靈神、神産巢日神の独神が現れて身を隠した。ついで国が稚く浮脂のようにただよっている時葦牙のように萌えあがるものがあらわれ、そこから宇麻志阿斯訶備比古遲神、天之常立神の独神が現れて姿を隠したとしている。このように『古事記』では、まず高天原での独神の出現が語られ、葦牙から生まれた神も、天之常立神とするというように天界に力点が置かれているのである。

国生みに関しては『日本書紀』の本文では伊弉諾尊と伊弉冉尊が天浮橋に立って、この底つ下に国があるに違いないと云って「天の瓊矛」<sup>あまぬぼこ</sup>を下して探ると青海原があった。さらに矛の先からしたたり落ちた潮がかたまって島が出来た。そこで二人の神はこの島をオノコロ島と名づけ、そこに降って、この嶋を国中の柱として、男神は左から女神は右からまわって「ミトノマグワイ」をして日本の国々山川草木、神々を生んだとしている。なお『日本書紀』の一書では二神はオノコロ島に降って八尋の殿を化作<sup>みた</sup>て、また天の御柱を化作<sup>みた</sup>てて、その柱をまわってミトノマグワイをしたとしている。ただし『古事記』では、天つ神が二神にただよっている国を固めるよう命じて、天の瓊矛を与え、それに応じて二神が矛で海を探り、潮が固まって出来たオノコロ島に降りて、天の御柱を見立て、さらに八尋殿を見立てて、その周囲をまわってミトノマグワイをし、国生みを行ったとしている。いずれにしる国生みの話では海をかきまぜ、天の瓊矛からしたたりおちた潮がかたまって島となり、その島に天降った二神が八尋殿に安置されたと思われる天の御柱をまわって日本の国土、山川草木、神々を生むというように、矛、柱が国を始め万物を生み出す根源ともいえる重要な要素となっている。その際『日本書紀』では、伊弉諾尊と伊弉冉尊の二神が相談の上で国生みをしているのに対して、『古事記』では天の神の命令でなされているということが大きく異なっている。

### 3. 中世神話に見られる柱

中世になると、伊勢神道などで『日本書紀』に見られる天地開闢や国土の形成の神話を仏教、とくに密教の視点から捉えなおすことが試みられた。周知のように伊勢神道は鎌倉初期から中期にかけて成立した「神道五部書」に始まり、度会家行（1256—1356）の『類聚神祇本源』によって大成された。本書の中で家行は日本の天地開闢神話を論じるにあたって官家（『日本書紀』『先代旧事本紀』など）・社家（「神道五部書」など）・積家（『大和葛城宝山記』など）のそれぞれ括弧内に入れた書物などを引用している<sup>(6)</sup>。ここでは後にとりあげる修験道や吉田神道にもその影響が見られる、葛城を拠点とした修験者の手による『大和葛城宝山記』の開闢神話を検討することにしたい<sup>(7)</sup>。

本書ではまず冒頭に「神祇」の項を設けて、水が変じて天地が生じたとし、その経緯を次のように説明している。十方の風が相触れて大水を保っていた。その水の上に1000の頭2000の手足を持つ異形の神聖が化生した。この神はヴィシュヌ神で常住慈悲神王と名づけられた。この神の臍から多くの太陽が照らすような明るい光を発する金色の1000の花弁を持つ妙宝蓮華が出現し、その中に結跏趺坐した人神がやはり無量の光明をはなっていた。この神は梵天王と名づけられたが、その心から八子が生まれ、八子は天地人民を生んだ。なおこの梵天王は天神とも名づけられ、天帝の祖神であるとしている。ヴィシュヌ神は紀元前12世紀から、紀元前3世紀頃に成立したリグ・ヴェーダに見られるヒンズー教の太陽神で、迦楼羅（金翅鳥）を乗り物とし、大蛇を敷物とするとしている。ちなみに日本では迦楼羅は鳥天狗とされている。一方梵天王は万物の根源であるブラフマンを神格化したもので、諸王の長である。なお上記の記述のうち、最初から梵天王の八子が天地人民を生むとの記載までは『雑譬喩経』（一名『菩薩度人経』）の引用である。そしてこの経の記載をうける形で梵天王は天神で天皇の祖神としているのである。

国生みに関しては「大日本洲造化の神」の項に、第六天宮の主の自在天王でもある伊弉諾尊、伊弉冉尊の二尊は「皇天」（「天神」か）から天の瓊矛を受けて、その呪力を用いて日神、月神を作り、四天下を照らすとともに山川草木を加持して、種々の未曾有のを行なった。そして中国やインドの衆生を救済し、現在は日本の金剛山にいるとしている。ここでは諾・冉二尊の本地を第六天宮の主の自在天王としている。そして天の瓊矛は日月を作り、山川草木に奇瑞をもたらす呪具としている。

なお『大和葛城宝山記』では、上記の冒頭の天地開闢の記述の他に「水大の元始」の項で、高天の海原に生じた葦牙のような靈物から神聖が化生し、天神、大梵天王、尸棄大梵天王と名づけられた。この靈物は天帝の御代には天の瓊矛、金剛宝杵と呼ばれ、神人の財とされた。地神の御代には天の御量柱、国の御量柱とされ、日本の国の中央に立てて、常住慈悲心王の柱、正覚正智の宝として心の御柱と名づけられた。なお天地人民、東西南北、日月星辰、山川草木のすべては天の瓊矛の応変ゆえ、不二平等である。そして葛城山の守護神の発起王が「心柱の三昧耶形は独鈷、すなわち金剛宝杵で独一法身の智剣である。この不動明王の大悲の徳を示すために海の水が変じて独鈷の形となったのである。さらに独鈷は俱利迦羅竜王、明王、八大竜王となった。そして十二神将が常に心柱を守護している。これは不動明王が本尊であることによる」としている。また「大八州、国の神の座処」の項では、この間のことを日の御子の伊弉諾尊と月の御子の伊弉冉尊が皇天の詔に従って天の瓊矛を山跡（大和）の中央に立てて、国家の心柱として八尋殿を造った。さらに2神は真経津鏡（八咫鏡）を捧持して、日神、月神と化生して天下を治めたとしている。そしてここで国家の心柱としているものは具体的には伊勢神宮の内宮・外宮の本殿下にある心御柱をさすとしている。そこで次にはこの心御柱について検討することにしたい。

#### 4. 伊勢神宮の心御柱

心御柱は伊勢神宮の内宮及び外宮の正殿の御霊代の鎮座している床の真下に奉建されている聖なる柱である。この柱は持統天皇の代以来、20年に一度の式年遷宮のたびに建立され、延暦23(804)年になる『延暦儀式帳』にも記載されている。中世期の心御柱は、鎌倉初期になる『宝基本記』に忌柱、天御柱、天の御量柱ともいうとし、「一気から生起し天地の形、陰陽の根源、万物の本体で、皇帝の命、国家の固、富の物代で永遠に不動の存在で、大地の底の岩に大宮柱として建立して、神徳を崇めるもの」としている<sup>(8)</sup>。また鎌倉初期成立の度会行忠『心御柱記』によると、心御柱は経4寸(天の四徳を示す)、高さ5尺の柱に五色の線をまき(五行を示す)、先端に8枚の榊の葉をつけたものである。そして伊弉諾尊と伊弉冉尊が陰陽変通の本基にもとづいて、諸神を生み出すもととし、万物が天皇に帰し、国家を助け、天下を固めることを示すもので三十六禽、十二神、八大竜王が守護している。それ故これに欠損が見られると、天災がおこるとされ、新たに奉建されている<sup>(9)</sup>。

一般には式年遷宮に際して、木元祭、地鎮祭、奉遷、奉建の順序で心御柱建立の儀式がなされている。その概要を簡単に紹介すると<sup>(10)</sup>、まず心御柱に用いる木の根元で山の神をまつる木元祭を行なったうえで伐採し、長さ5尺経4寸の柱にして宮地に運ぶ。宮地ではまず心御柱を立てる土地の神を鎮める地鎮祭をし、穴を掘って、地符、鎮謝符、鬼符を各1つおさめ、石上に賢木を立てて祭りを行なう。いよいよ柱を立てる際には、元の柱の四方に<sup>すわえ</sup>を立って、そこから元の心御柱の頂に<sup>けた</sup>を渡して、高さをはかる(図1「元の心御柱と榊・桁」参照)。そして元の柱を掘り出して、忌穴を掘り、その穴の中に守護神や祭物(<sup>しとぎまい</sup>、<sup>いらか</sup>、天平の瓮と呼ばれるカワラケ800枚など)をおさめる。この守護神は「神道五部書」の1つ『御鎮座伝記』によると、竜神と土地神とされている。そしてこの穴に五色の糸を巻き、上に8枚の榊の葉をつけた新しい心御柱を地上からの高さを前のものと同じにして立てる「心御柱奉遷の儀」が行なわれる。なおこうして床下に心御柱の建立をおえると、そこに幡を立てて五穀の粥を供物として献上している。

時代は下るが寛文年間(1661-73)に自省軒宋因の書写した「大神宮心御柱記異本」によると、心御柱にする檜は長さを8尺に切り八角に削って朝廷に差し出し、天皇の身長の外に印をつけてもらって、そこで切ったという。そしてこの柱に鏡をかけて、黄金の鉢にのせ、これも黄金の榊をそえて立てた。それゆえ、心御柱は天皇の玉体そのものである。また黄金の色は葦牙を示している<sup>(11)</sup>。

ところで真言宗広沢流の智円は正中元(1324)年、伊勢に参宮した際に当山正大先達の伊勢の世義寺の治部律師の所に泊って、彼から「御即位辰狐法」を始め伊勢に伝わる秘法を授かった。彼がこれらをまとめたのが『鼻帰書』である<sup>(12)</sup>。本書によると大日本国の義は天照大神と大峰に示されている。天照大神は智種をはじめ一種の義を含む独鈷形をなす日本の仏法の棟梁であり、大峰は国の軸で、両界曼荼羅を石面に顕わしている。このように日本は天然<sup>ほうじ</sup>法璽の真言の国で顕密兼帯の地なのである。この日本を代表する行人は、役行者と大師(弘法)で、行人の居処は弁財天を祀る竹生島と吉野の金峰山であるとする。このように本書は『大和葛城宝山記』と同様に修験的な色彩の強いものである。この『鼻帰書』では国生みについて、「大梵天王(天照大神)が第六天の魔王の指示で大日本国を得るために天<sup>あまのさかほこ</sup>逆鉢を外宮の酒殿(逆殿)に下した。この天逆鉢は独鈷のことであり、そのこともあって大日本国は独鈷の形をしている」とする。さらに本書では独鈷をいわば護法として自由に操作する乙護法<sup>おとごほう</sup>についてもふれている。そして心御柱というのは独鈷の形をした天逆鉢のことでその下には白蛇すなわち福の神の弁財天が住している。心御柱は龍樹ともいうが、この龍は白蛇、樹は心御柱を示している。ちなみに本書では外宮の豊受大神の「豊」は蛇形の福神が与える豊穰を意味し、「受」は内宮の神がそれを享受することを示すとの度会常昌(1263-1339)の説をあげている。なお修験道では役行者

が白鳳 20 (692) 年に箕面<sup>みのお</sup>の滝穴で龍樹菩薩と弁財天から秘密の灌頂を授かり、箕面寺を開く話が伝えられている<sup>(13)</sup>。また相応 (831-918) が葛川から京にむかう途中で川に念珠を落とした際に、乙護法を修して独鈷を川に投じると、独鈷が蛇が蛙を追うように念珠を追い掛けてとりもどした話も知られている<sup>(14)</sup>。このように独鈷は修法者の意に応じて験力を行使する呪具ともされているのである。

『鼻帛書』はこれにつづいて心御柱は閻浮堤の衆生の心法をあらわす須弥山であるともしている。そして須弥山は難陀竜王、抜難陀竜王によって守られているとの『俱舍論』の説を紹介している。さらに心御柱の料木とする檜には根を四方にはり、枝も 4 本出ていて須弥山を思わせる木を選ぶように指示している。ちなみに『溪嵐拾葉集』でも、伊勢の神殿中央下の心御柱は須弥山と同じで、難陀、抜難陀の竜王が擁護しているとしている。なお『鼻帛書』では、神宮の建物は床は方形で地、神座は円輪で水、屋根は三角で火、千木は半月形で風、堅魚木は円形で空を示すというように、五輪をあらわすとしている。また心御柱を黄・白・赤・黒・青の五色の糸でまくのは、地水火風空の五輪になぞらえてのことである。特に外宮の心御柱には上部に五輪を示す 5 つの丸印が付されている (第 2 図「心御柱と天の瓊矛」参照)。このように天の瓊戈を天逆鉞と呼び、大日如来が変化した独鈷とすることに加えて、これを五輪の卒都婆とすることには、伊勢の西南に位置し、東大峰とも通称される仙宮院に伝わる『伊勢瑞柏鎮守仙宮祕文』にも記載されている。

## 5. 吉田神道の大元宮と十八神道

吉田兼俱 (1435-1511) が伊勢神道の影響のもとに樹立した吉田神道 (卜部神道、唯一神道、元本宗源神道) は、江戸幕府が寛文 5 (1665) 年 7 月に「諸社禰宜神主法度」によって吉田家の諸社への支配権を公認したこともあって宗教界に大きな影響を及ぼした。その基本的な性格は兼俱の著書『神道大意』『唯一神道名法要集』、斎場の「大元宮」、十八神道・宗源・護摩の三壇行事などから知ることが出来る。ここでは「大元宮」の中央に立てられている心柱と三壇行事の基本をなす十八神道を紹介することにしたい<sup>(15)</sup>。

大元宮は文明 16 (1484) 年に吉田兼俱が吉田神社内に再建した茅葺きで八尋殿を思わせる八角形の独自の堂舎で、吉田神道の主神大元神ならびに日本国中の八百万神が祀られている。(図 3「吉田社図」参照) なおこの本殿の後部には図に見られるように唐破風造、桧皮葺の後房がつけられている。この後房の後部の棟には十八神道を示す○印が描かれている。大元宮の側面正面、縦断面、横断面は図 4～7 に示す通りである。なおこの本殿の向かって右側には東国 32 箇国、左側には西国 33 箇国の式内社の神々、後方右側には伊勢神宮の内宮、後方左側には外宮が勧請されている。なお明治政府が江戸に神祇官を設置するまでは、後方中央に神祇官の八神殿 (8 つの祠) が設けられていた。大元宮の心柱は図 6 及び図 7 に見られるように土台の亀腹上の二段の石壇の下壇を礎石とし、上の石壇の中央を貫き、さらに天井、鬼板付きの箱、棟の中央、八角の銅製の露盤、八角の銅製の台、覆鉢を貫いて頂の宝珠に達している。そしてその宝珠の周囲には 7 本の金具が火炎を示すように付けられている。心柱は節を抜いた竹筒で天の雨水がこれを通して地下に達するという天地一貫の理を示すとしている (図 6・図 7 参照)。なおこの棟上の中央の飾りつけは八咫の壺<sup>やたじ</sup>と呼ばれている。また図 7 に見られるように、心柱の正面には輪宝<sup>ちんぎ</sup>があって、前面の開口部から拝することが出来る。

大元宮の屋根は妻入りで、屋上の前と後には破風板の先を延ばした形の千木<sup>ちぎ</sup>がある。この千木は前方のものは内そぎ (水平に切る)、後方は外そぎ (垂直に切る) である。なお中央の宝珠の前方 (宮殿の正面側) には丸材を品字型に重ねた三本の堅魚木 (陰を示す)、後方には 3 本の角材の堅魚木 (陽を示す) が置かれている。なお正面と側面には五段の階段が付けられているが、これは五行を示すとさ

れている（図6・図7）。この宮殿内には近世末迄は鎮魂の具とされる十種神宝（沖津鏡、辺津鏡、八握劍、生玉、死反玉、足玉、道反玉、蛇比礼、蜂比礼、品物比礼——まとめると鏡、劍、玉、比礼）と三種神器（八咫鏡、八坂瓊曲玉、草薙劍）が収められていたが、この両者は神籬と磐境に充当されていた。また口伝ではこの亀腹の下には五輪塔が埋められているとされている。

十八神道の修法壇は、前方正面中央に宝珠のついた柱、その左に白和幣、右に青和幣、手前に小鳥居があり、四隅には小さな柱が立てられ注連が張られている（図8「十八神道行事壇舗設図」参照）。鳥居の左右には八角の台にのった八角の筒があり、左の筒には大麻、右の筒には岐神（天の瓊矛をあらわす1尺2寸の桃の杖）が立てられている。鳥居の前方には菱形状の黒漆の板があって、その中央に大元器（台に乗った器）その上手に神鈴、四隅にお宮（丸い器）が置かれている。修法壇手前の祭主の座る円座の左には次第書と供米桶、右には打鳴とその撥、榊の葉をさした葉挿、打ならしを置いた小机がある。修法は1「導入」、2「宇宙形成」、3「神勧請」、4「神人合一」、5「祈願」、6「終結」の6つの部分から成っている。まず1「導入」では、祭主は十宝印相によって大元器の上に岐神を置き、大麻をとって二拝し、天地人を加持し、自己が神通力を持つことを観じる三種加持を行なう。2「宇宙形成」では、大元器に水を灌いで岐神でこの水をまぜることによってオノコロ島、八尋殿を建て、水を象徴する神と大元神を供養する。3「神勧請」では、大元神の根本印を結ぶことによって陰の神の天御中主神など、陽の神の国常立神など、造化三神を始め全国の神々、道教や陰陽道の神を勧請する。4「神人合一」では、特に天・地・人を代表する各6柱の計18柱の神名をあげながら、葉挿の榊を大元器に入れる（十八神道の名はこれに因んでいる）。これによって天地人の合体、諾冉二尊の婚合、天地の和合によって万物が生じることを観じる。5「祈願」ではこれらの修法によって、祭主が神力、加持力、神通力を得たことを観じたうえで、「中臣祓」をあげて祈念する。そして最後の6「終結」で十宝印相によって勧請した神々を送り返して修法をおえている。

このように吉田神道の修法の基本をなす「十八神道」では、万物の根源とされる大元器に入れられた水を、天の瓊矛を象徴する岐神でかきまわすことにより、天地、陰陽、具体的にはオノコロ島や八尋殿がつくられている。その際、大元宮に安置されている石上神宮の十種の神宝を思わせる十宝印相が神勧請や神送りの印相として用いられていることが注目される。

## 6. 修験道の柱源神法と柱松

修験道では室町時代中期になる石上神宮の神宮寺である内山永久寺に伝わる『峰中灌頂本軌』に修験道独自の修法である「柱源神法」に関する切紙が納められている。この柱源神法は天然自然の原理、万物能生の理を明らかにして、宇宙万象の和合の根源を表示する作法である<sup>(16)</sup>。この柱源の「柱」は宇宙万物の柱をさし、「源」は天地陰陽和合の本源を示すとされ、宇宙の形成や修験者の天と地を結ぶ柱として再生を示す儀礼がなされている。その修法壇（図9「柱源神法の法具」参照）は中央の壇板（天地陰陽未分を示す—以下括弧内にその意味をあげる）の上の奥に鼎状の水輪（天地、陰陽和合の場所）を置き、その中央の穴に金欄に包まれ赤い房がついた闕伽札（修法者自身を示す）、その両脇の穴に黒い布に包まれた乳木（金剛界・胎蔵界、父・母）をいずれも自由にとりはずしが出来るように差しこんでおく。そして水輪の手前には穴があって水が灌げるようになっている。水輪の左右には花皿（榊の葉が入れられている）、前には舍利器（飯器—米を入れる）、その手前には独鈷、左右には杓と蓋がついた闕伽器（水が入っている）が置かれている。修法座の左脇机には柄香炉・小刀・火箸・小木など、右脇机には肘比と箇打木（ともに小丸太）・打鳴などがおかれている。

修法全体は1「導入」、2「床堅」、3「柱源」、4「護摩」、5「終結」の部分に分けることが出

来る。まず1「導入」で、修法者が本尊に帰依し菩提心を開く。2「床堅」では修法者が肘比と箇打木を打ちあわせ、両者を腰にあてることによって、自分は大日如来と同じ五大を備えた仏ゆえ、成仏が可能であると観じる。修法の中心をなす3「柱源」の前半部では、まず閻伽器の水を中央の水輪に灌いで「天地の潤水ここに至る」と唱える。そして天地の水が交わることによって父母が生じることが観じられる。次に水輪上の2本の乳木をとりはずして虚心合掌した両掌にはさむ乳木作法によって、胎児が生じることが示す。この胎児は修法者と金剛界・胎藏界の種子を記した中央の閻伽札に象徴されているように、大日如来と化した修法者を示している。後半部に入ると修法者が宇宙そのものを示す大峰山でこの修法を行なうことによって、即身即仏の境地に達したとの啓白をする。そしてこのことを確信するかのように今一度さきの乳木作法を行なったうえで、2本の乳木を水輪上に返して不動明王の慈救の呪を唱えながらその胎児の成育に欠くことが出来ない水と米を供えている。これはこの成育が不動明王の助けのもとに行なわれていることを示している。4「護摩」は修法者が煩惱を焼尽することによって大日如来として再生することを示す作法である。そして最後の5「終結」では、中央の柱を虚心合掌した手にはさんで、自分が大日如来（宇宙）として再生したことを示すとともに、万物が仏性を持つことを確認している。

このように修験道の柱源神法では、混沌の状態から天地が形成され、天地の合体により父母、その父母の和合により修法者が仏として再生することが演じられている。しかもこうして再生した修法者は、水軸中央の閻伽札（柱）によって象徴されている。そしてこの柱は天と地を結ぶ軸であるとしている。それ故この柱源神法を行なうことによって修法者は自分が天と地を結ぶ軸となったと観じているのである。

九州の彦山、戸隠山、妙高山、羽黒山などの修験霊山では松などの柱の先端の御幣に火を転じる、柱松と呼ばれる儀礼が行なわれている。ここでは室町後期になる即伝の『三峰相承法則密記』の「柱松作法事」に見られる彦山のものを紹介しておきたい<sup>(17)</sup>。この作法は彦山の修験が春の峰入に先立って行なう神事で、まず道場の正面に頂に上るための縄索を巻いた足場をつけ、その上端に大幣をつけた松の柱が立てられる。そして峰入の山伏がこの柱の三方に並んで錫杖経や慈救の呪をと念えている間に「松山伏」が柱にのぼって火を燵<sup>う</sup>って御幣につけたうえで、切りおとす（図10「彦山松会幣切り図」）。すると駟出の法螺が吹かれ、峰入の行列が出発するというものである。

近世期には彦山最大の行事である松会の時に柱松や金棒振りがなされていた。その概要を示すと、まず松会に先立って2月13日に道場に柱松を立てる松おこしがある。この柱松の根元には五大明王を示す五本の杭と幣束を立て、その中央の先端に青と白の幣束をつけた柱松を立て、6本の又木<sup>またぎ</sup>で支え、柱松の上方から東西に2本の大綱をはって木などにむすびつける。この大綱は二大竜王または天の男女二神、上端の青と白の幣は春秋の幣と呼ばれる。なお柱松は神の御柱、大日如来の三昧耶形、五鈷杵を示すともされている。そしてこの柱の下で、2月15日には稲作の模擬儀礼の御田祭と刀衆が刀・鉞・金棒を用いて呪力を誇示する金棒振りが行なわれる。このうちの金棒は先の鉄の部分（陽・伊弉諾尊）と手元を五色の布で巻き櫛をつけた部分（陰・伊弉冉尊）から成り、これを持って舞うことによって諾・冉二尊のマグワイで万物が化生したことを示している。そしてこの金棒は伊勢神宮の心御柱にあたるが、修験では金棒と呼ぶとしている。この日の最後には柱松の周囲を4人の先山伏が3度まわったうえで、柱の四方に立って「法華懺法」を唱える。この間に幣切山伏がやはり柱松の周囲を3度まわったうえで、柱松にのぼり、御幣に火をつけて、切りおとして下りる。このあと年番の合図で柱松を倒している<sup>(18)</sup>。

なお天保年間（1830—1844）になる『大祭頭状略考』の「先山伏之事」の条によると、この柱松に

日本六十余州の大小神明、仏陀、十方三世一切の諸神諸仏が来臨影向して、頂上の御幣に点じられた火によって衆生の罪を焼尽して安穩をもたらすとしている。とこでききに述べたようにこの柱松は伊勢の心御柱に準じるものとされている。また金棒振りでは、諾冉二尊のまぐわいによる万物の化生が演じられている。これは『大和葛城宝山記』などで伊勢の心御柱を金剛杵になぞらえたのと同じ信仰にもとづくと考えられるのである。

## 7. 天理教のかんろだい

天理教は中山みき（1798—1887）が天保9（1830）年10月26日に開教した宗教である。その開教の経緯は次のようである。みきは長男が足の病になったので、当山正大先達内山永久寺の配下の山伏市兵衛に祈禱を依頼した。けれどもその時市兵衛が災因を明らかにするためにする憑祈禱の依り坐が不在だった。そこでみきが依り坐となった。すると何時もの神霊とは全くちがう「元の神、実の神」（現在は親神天理王命と称している）が憑依してみきを神のやしろとして貰いたいとの神託があった。夫の善兵衛はこれを拒否したが、憑依状態がつづいた。そこで最終的に10月26日に夫がこれを承諾した。天理教ではこの日を開教の日としているのである。ちなみに内山永久寺は石上神宮の神宮寺で、さきに紹介した『峰中灌頂本軌』（柱源神法に関する切紙集成）を伝える修験の古刹である。なお天理教はみきの開教後の他宗や村人たちの迫害を避ける為に慶応3（1867）年に京都の吉田神社管領の公認を得ている。

明治8（1875）年、みきは人間創造の場であり、親神天理王命が鎮まっている人間の守護や救済が展開する根源の地点である「ぢば」を明示し、そこに「かんろだい」を建設し、その周囲で幹部が「みかぐらうた」にあわせて「かんろだいのつとめ」をするように指示した。璽来このかんろだいとかんろだいのつとめは天理教の信仰と儀礼の中核をなしている。そこで以下その概要とその意味について紹介することにした<sup>(19)</sup>。

かんろだいは本部神殿中央の一段低い所の「ぢば」に設定された神域の中心に立てられ、その周囲が礼拝所となっている。またこの中央神域の上方の屋根には6尺四方のくりぬきがあって空が見とおされ、雨水が直接入るようになっている。その位置はみきが指示して以来不動である。かんろだいは正六角形の立方体を13段積み重ねたもので、台座とも思える1段目は径3尺厚さ8寸、2段目は径2尺4寸、厚み8寸、3段目から12段目までの10個はいずれも径1尺2寸、厚さ6寸となっている。そして13段目は2段目と同じく径2尺4寸だが厚さは6寸である。全体の高さは8尺2寸である。なお各段の上中心に深さ5分、直径3寸の丸い穴、下部中央には同じ寸法のほぞがつくられていて、上段の立方体が下段のそれにはめこむようになっている。（図11「天理教本部のかんろだい」参照）なお材質はみきは当初石造りを指示し、その試みもなされたが、現状は檜である。教義のうえでは、この台の上に5升入りの平鉢をのせ、台の下でつとめ衆が「かんろだいのつとめ」を陽気につとめると、天の親神天理王命から115才までの定命を保つ「かんろ」が授けられるとしている。ちなみに天理教では神殿の四方に配された教団の建造物のすべてをかんろだいの礼拝所とし、全国の各教会の神殿も「ぢば」の方向にむけて建てられている。

「かんろだいのつとめ」は真柱（教主）が選んだ真柱夫妻を含む、男・女各五人の教団幹部によって、かんろだいの周囲の神域で行なわれる。なお「かんろだいのつとめ」が実施されるのは、毎年、元旦祭（1月1日）、春の大祭（教祖の命日、1月26日）、秋の大祭（立教の日、10月26日）、教祖誕生祭（4月18日）、毎月26日の月次祭である。つとめ衆の10人は図12「かんろだいのつとめの配置図」に示すように親神（日月親神とも）・天理王命を示す「かんろだい」の八方（男女8人）と東側に男女

各1人のように配される。そして、北と南の人は獅子面、西北の男性は天狗面をつけ背に鯪、東南の女性は女面で亀を背におう。他は男性は男面、女性は女面をかぶる。服装は男性は紋付で黒袴、女性は紋付で帯をしめている。そしてこの10人は、神楽歌の地唄、鳴物にあわせて、それぞれ独自の特徴的な所作を行なう。

その基本は天理教の経典「こうき（泥海古記とも）」に記載の、人類誕生と陽気ぐらしの起源を演じることによって、始源の陽気ぐらしの生活に立ちかえって再出発をはかるというものである。人類の起源神話は、宇宙の元初のどろ海を味気なく感じた日月親神（天理王命）は、人間を造り、その陽気ぐらしをするのを見て楽しもうと思われた。そこでどろ海の中から「うを」（岐神）と「み」（白蛇）をとりよせて、「うを」を男雛型、「み」を女雛型とした。次に西北の鯪から男の道具をとり出して「うを」につけて「つきよみのみこと」（神名以下同様）、東南の亀から女の道具をとり出してこれを「み」（くにさこづちのみこと）につけた。ついで東の鰻に飲み食いのわざをつけて「くもよみのみこと」、西南の鱒に息ふきのわざをつけて「かしこねのみこと」、西の黒蛇に引き出しのわざをつけて「をふとのべのみこと」、東北の河豚に切るわざをつけて「たいしよくてんのみこと」と名付けた。こうして陽気ぐらしの道具をすべて整えたうえで、どろ海の中の泥鰻を食べて、これを人間のたね（魂）とした。そして月の親神は東の男性のいざなぎのみことの身体に、日の親神は西の女性のいざなみのみことの身体に入って、人間創造の方法を教え、3日3夜の間9億9万9999人の子種をいざなみのみことの胎内に宿しこんだ、というものである。

かんろだいのつとめにあたっては、10人のつとめ衆のうち8人はかんろだいの周囲、2人の男女は東側（本来は中央だが、台があるのでここに位置する）でこの神話を演じている。まず親神が鯪（男）①と亀（女）②に男女の道具を与える。次いでこの二神の尾にむすばれた③・④・⑤・⑥の四人の神が陽気ぐらしに必要な道具をととのえる。そのうえで親神の日の性格が東のいざなぎ、月の性格が西のいざなみの身体に入る。その際いざなぎは種、いざなみは苗代を示し、そのまじわりで数多くの子供が生まれ、その子供は飲み食い、息、引き出し、切るなどの道具衆の神々の助けで陽気ぐらしを行なっていることが演じられている。そしてこの陽気づとめが楽しくなされると、それを祝がれた親神、天理王命が天から甘露の法雨をそそがれるとしているのである。

## 8. アジアの柱の信仰と儀礼

柱の信仰はヨーロッパのメイポール、クリスマスツリーなど、世界各地の民俗宗教に認められる。しかしここでは日本の民俗宗教とかかわりを持つ、東アジアの諸宗教に於ける柱の儀礼と信仰について簡単にふれておきたい<sup>(20)</sup>。

古代中国では天地往来の柱に関する伝承が早くから知られている。ここでは日本文化の原郷ともされる中国南部のミャオ（苗）族の伝承や儀礼を紹介しておきたい。貴州省凱里近くのミャオ族の間では香炉山の頂上に黄金の玉石を9層つみあげた天柱がある。この山は歌垣<sup>うたがき</sup>の場所として広く知られている。ここには天女（天帝の娘）がこの天柱を下って香炉山で若者と歌垣をして交わり娘をもうけた。けれども天帝に見つかり、夫は香炉にされ、天女は天の牢に閉じこめられた。山頂に残された娘は山の水を飲んで成長し、歌垣で結ばれた若者と結婚したとの伝説があり、これにちなんだ爬坡節<sup>パーポーセツ</sup>という祭りが行なわれている。もっとも古代にはこの天柱には生命の木と呼ばれた桑が用いられていた。ちなみに浙江省余姚県河姆渡遺跡から出土した新石器時代の陶盤には中央に生命の樹、その根元の左右に雌雄を示すと思われる魚が描かれていた。また四川省成都市の後漢時代の画像墓には桑の木の下で男女が交合している図が認められた。これらから宇宙木が死と再生の場所と信じられていたことが

推測される。なおミャオ族は正月から3月に、上端に花をつけた花杆、木彫の鳥をつけた鳥竿を立てて、これを先祖の霊の招ぎ代として、そこで歌垣を行なった。これは祖霊の加護のもとに子孫の繁栄を願う祭りと考えられる。これらは形のうえでは天理教のかんろだいつとめと似ているとも思われる。

湖南省西部のミャオ族の間では秋の収穫前にあたる7月15日頃に村落の外の平坦な広場に5色の段で飾った通天柱を1本立てて、そこで牛を供犠して先祖に村落の平安、村民の長寿、豊作を祈る椎牛祖先祭が行なわれている。今少し具体的に述べると、広場には儼公と儼母（共に疫鬼）の塑像、ミャオ族の始祖や儼の群神を描いた絵、祖先の霊を祀る3層の白い紙の幡、紙銭などを置いた霊棚と呼ばれる祭壇が設けられる。中央の通天柱の下方には、竹を薄く割って作った輪をはめて、これに雄牛の鼻に通した麻縄をむすびつける。こうした準備のうえで、主家の者が親類の人を会場に招き入れる。やがて巫師が霊幡や祭具をもって呪文を唱えながら通天柱と牛の周囲をまわり、主人一家がこれにつづく。次に祭りを主催する法師が儼舞をしながらやはり柱の周囲を回り、親類のものがこれに従う。これをおえると2人の若者が竹で牛を駆りたてて柱を回らせ、牛を槍でつき殺し、牛がミャオ族発祥地の東を向いて倒れると吉とされる。一方祭壇ではミャオ族の始祖を示す紙の人形や紙幡、紙銭などを焼く。若者は牛の首を切りおとし、それを主家の者に渡す。主家ではこの頭を1年間家の堂屋の主柱に供えてまつ。4本の足は親類の者に与えられ、その他の部分は参加者が共食する。その日の夜は跳鼓（豊作の模擬儀礼）がなされ、あと長老によってミャオ族の神話（天地開闢など）が語られる。

ベトナムのクバン県のバナ人もコーサ・ユパ（水牛を神と食べる意）と呼ばれる水牛供犠を行なっている。この祭りではまず初日に広場に山から切り出した生木の柱（プラン）と牛をつなぐ供犠柱を建て、2日目に水牛を死霊がいるとされる森に連れて行って先祖を祭り、3日目の最終日に供犠柱につないだ牛を戦士が剣でさし殺す。このあと女たちが水牛の口に草をつめる。これは再生を祈る為とされている。ちなみに古代日本に於いても各地で牛を殺して天神に祈願する祭りが行なわれていた。

ネパールのカトマンズでは雨期が終わる9月初旬から中旬の8日間、旧王宮広場でインドラの幡と称する柱を立てて、王権の更新を祈るインドラ祭が行なわれた。この祭では、まず山で森の女神に祈願したうえで、神木を切って旧王宮広場まで引いてくる。そしてバラ・グルジュ（王の導師）の立ちあいのもとに王宮付きの警官が護摩をたいたうでで柱を立てる。そしてこの柱の根元に金のインドラ神の像をまつり、柱の周囲には結界を示す8本の黒木の柱が立てられる。このあと王の剣を先頭に導師、祭官など要人が柱の周囲を3回まわる。これは柱に象徴されるインドラ神に国の平穩、王と民の守護、豊穰を祈る祭りとされている。

朝鮮半島には『魏志』東夷伝の「韓伝 馬韓条」に「蘇塗という大きな木を立てて、鈴鼓を懸けて鬼神を祀った」と記されている。この蘇塗は現在韓国各地で村の入口や境、村の中心に立てられている頂に鳥状のものを置いた「ソッテ」また「鳥竿」と呼ばれる長い棒か、石柱をさすと考えられる。ソッテは毎年村祭りのたびごとに新しいものが立てられるが、古いものもそのまま放置されている。ソッテの下には厚い板の上部に顔を描き、その下に「天下大將軍」・「地下大將軍」と書いた「チャンスン」と呼ばれるものが立てられている。そして、ソッテやチャンスンがある場所は「ソナンダン（城隍堂）」または「ダンサン（堂山）」と呼ばれ、聖域とされている。ソッテ・鳥竿の上に鳥状のものを置くのは、13世紀頃に編まれた『旧三国大逸文』によると、高句麗の始祖、朱蒙が大樹の下で母の使者である鳩から麦の種を受けられた故事にちなむとされている。ちなみに彼の母は日光の精を受けて卵を産み、この殻を破って自ら出生したのが、朱蒙であるとされている。

韓国の江原道江陵市の端午の祭りでは先端に華蓋、頂に金属の宝珠をのせた笠をつけた10m近い芋蓋（「クエテ」）と呼ばれる柱を上下に振ることによって、山神を降臨させて豊穰を祈っている。これ

はクエテが万物を成長させる生命の本であることによるとされている。ちなみに東京の府中の大国魂神社の暗闇祭のあとの田植祭の時にも近年まで白鷺をつけた傘鉾を立てて豊穰が祈られていた。

シベリアに近い中国黒竜江省に住むホジェン族のシャマンは家の庭に神梶しんかんと呼ばれる木の柱を3、4本立てている。そのうちの最も高い頂に鳩をつけた柱の下には朱林（「チュリン」）と呼ばれる男女の人形をおき、柱の下部から上部にかけて蛇、亀、蝦蟇、トカゲ、愛米（子供の姿をしたシャマンの守護霊）の絵を描いている。そしてシャマンは神がかってこの柱をのぼって、鳩の案内で他界に旅立つとしている。なおホジェン族のシャマンの巫術では神鼓、神刀、神杖、神竿（色のついた布をまいた杖）などの法具が用いられている。このうち特に神杖、神竿は、密教で用いる独鈷、修験が採灯護摩に用いる杖のように呪力の根源をなすと考えられるものである。

## 結

本講演では日本の民俗儀礼、記紀神話、中世神話、伊勢神宮の心御柱、吉田神道の大元宮、修験道の柱源と柱松、天理教のかんろだい、アジア諸地域の柱の信仰と儀礼を概説した。そこで最後にこれを理論的に整理しておきたい。

本講演でとりあげた柱の儀礼や信仰を見ると、大きく5種類のものが考えられる。まず第1は柱を他界から神々や祖霊を招き、それにつける招ぎ代とする思想で神道や民俗宗教の多くはこれである。第2は逆にシャマンや、修験者がそれを登って天に行く儀礼である。ホジェン族のシャマン、修験の柱松、本講演ではとりあげなかったが、10の剣の階段をのぼる御嶽教の刀わたりがこれにあたるものである。第3は柱そのものを神と考えるものである。神の数を何柱と数えるのはこの信仰にもとづいている。ちなみに天理教では教主を真柱と呼んでいる。これが更に展開すると第4の柱を天と地を結ぶ、宇宙軸とする見方となる。伊勢神宮の心御柱を天皇の身長にあわせていたのは天子を天と地を結ぶ軸とする思想にもとづくと思われる。修験道の「柱源神法」では、この修法を行なった修験者は天地を結ぶ軸となっていた。ちなみに如来教では教祖をお軸様とよんでいた。なおこの柱を宇宙軸とする思想は第5の中世神話に見られたように、心御柱を宇宙山ともいえる須弥山になぞらえるものに展開する。吉野の金峰山を国軸山と呼んだり、大峰山系を金剛界・胎蔵界の曼荼羅とするのはこの思想にもとづいている。第6は記紀神話で諾・冉二尊が天の瓊矛でオノコロ島を生み、さらにその周囲でミトノマグワイをして万物を生んだとの話のように柱を万物を生み出す力の根源とする思想である。中世神話では心御柱は密教の修法で力の根源とされ、加持などに用いられる金剛宝杵（独鈷）としていた。そしてさらに修法の本尊である不動明王やその法具である剣と索を象徴する俱利伽羅不動（竜王）と結びつけていた。また吉田神道では大元宮の心柱を、鎮魂の作法に用いられる石上神宮の十種神宝と関係づけていた。さてこうした日本の民俗宗教に見られる柱の儀礼や信仰は最後に紹介したアジア各地の民俗宗教の柱の儀礼や信仰と酷似している。これは日本の柱の儀礼や信仰がアジアのそれから影響を受けたことによる面もあるが、今一方で、ほぼ同じ水田稲作を営むことや、日本人が人種的にモンゴロイドであることから通底する面があるとも考えられ、今後より詳細な比較宗教学的研究を試みる必要があるとされるのである。

## 注

- (1) 小林達雄『縄文人追跡』日本経済新聞社、平成12(2000)年
- (2) 『日本国語大辞典』16、小学館、昭和50(1975)年、p.234
- (3) 柳田国男「神樹篇」(『定本柳田国男集』11、筑摩書房、昭和38(1963)年)、折口信夫「髯龍の話」(『古代研究』民俗編1、

- 1929年、のち『折口信夫全集』2、中央公論社、昭和30(1955)年)など参照
- (4) 宮家準「修験道の峰入と卯月八日」『日本民俗学』128、昭和55(1980)年
- (5) 以下の『日本書紀』の記述は、黑板勝美校訂『日本書紀』(岩波文庫、1943年)、また『古事記』に関しては幸田成友校訂『古事記』(岩波文庫、昭和18(1943)年)をもとにしている。
- (6) 度会家行『類聚神祇本源』(『神道大系』論説編5 伊勢神道上、神道大系編纂会、平成5(1993)年、p.396)
- (7) 『大和葛城宝山記』(『中世神道論』岩波書店、昭和52(1977)年、p.58-68)
- (8) 『造伊勢二所太神宮宝基本記』(『神道大系』論説編5 伊勢神道上、平成5(1993)年、神道大系編纂会、p.58)
- (9) 度会行忠『心御柱記』(大永2(1522)年大司伊長朝自筆本、寛政2(1790)年正月書写) 國學院大學図書館所蔵本
- (10) 詳細は山本ひろ子「心の御柱と中世の世界」1~25(『春秋』302-339、昭和63(1988)-平成4(1992)年) 参照
- (11) 『大神宮心御柱記異本』(『神道大意他六篇』との合巻本) 國學院大學図書館所蔵
- (12) 『鼻帰書』(『神道大系』論説編2 真言神道下、神道大系編纂会、平成4(1992)年、p.505-521)
- (13) 「諸寺略記」『阿婆縛抄』文永12(1275)年所収「箕面寺の縁起」
- (14) 『溪嵐拾葉集』87巻(『大正新修大蔵経』76)、p.783
- (15) 宮家準「吉田神道と修験道—大元宮と柱源・柱松を中心に」『國學院雑誌』104-11、平成16(2004)年
- (16) 詳細は宮家準『修験道思想の研究』春秋社、昭和60(1985)年、p.213-233 参照
- (17) 「柱源作法事」『三峰相承法則密記』(『修験道章疏』2、名著出版、60(1985)年、p.462-463)
- (18) 村上龍生『英彦山修験道絵巻』かもがわ出版、平成7(1995)年、p.10-11、p.46-47 参照
- (19) 松本滋「宗教教団における象徴—とくに天理教の場合」(『人類科学』13、昭和36(1961)年)、『天理教事典』天理教おやさと研究所、1997年
- (20) 「柱のダイナミズム」(『自然と文化』33、平成3(1991)年)、「アジアの柱建て祭り」(『自然と文化』61、平成11(1999)年)、萩原秀三郎『神樹—東アジアの柱立て』小学館、平成13(2001)年参照

#### 図版出典

- 図1 國學院大學日本文化研究所編『神道要語集』祭祀編1、神道文化会、昭和49(1974)年、p.140
- 図2 山本ひろ子『中世神話』岩波書店、平成10(1998)年、p.103
- 図3~図7 福山敏男『神社建築の研究』、中央公論美術出版、昭和59(1984)年、p.304-305
- 図8 『神道大系』論説編9 ト部神道下、神道大系編纂会、平成3(1991)年、p.27
- 図9 宮家準『修験道思想の研究』春秋社、昭和60(1985)年、p.215
- 図10 村上龍生『英彦山修験道絵巻』かもがわ出版、平成7(1995)年、p.46-47
- 図11 『天理教辞典』天理教おやさと研究所、平成9(1997)年、p.238

#### 付記

本講演は國學院大學21世紀COEプログラム『神道と日本文化の國學的研究発信の拠点形成』における宮家担当の「神道儀礼と諸宗教文化の比較宗教学的的研究」の一部をなすものである。

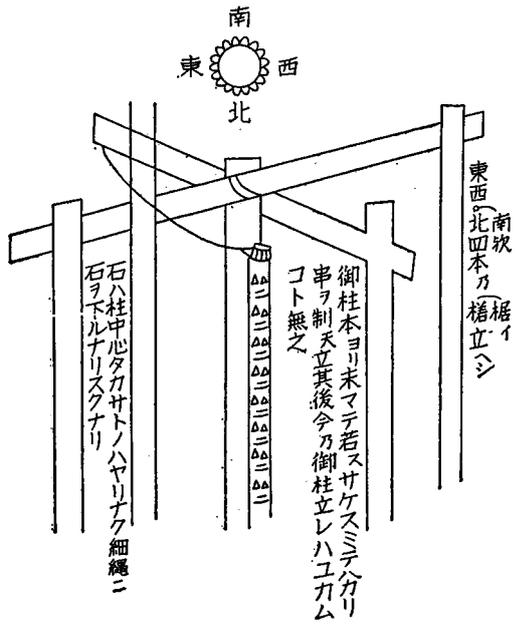


図1 元の心御柱と櫛・桁

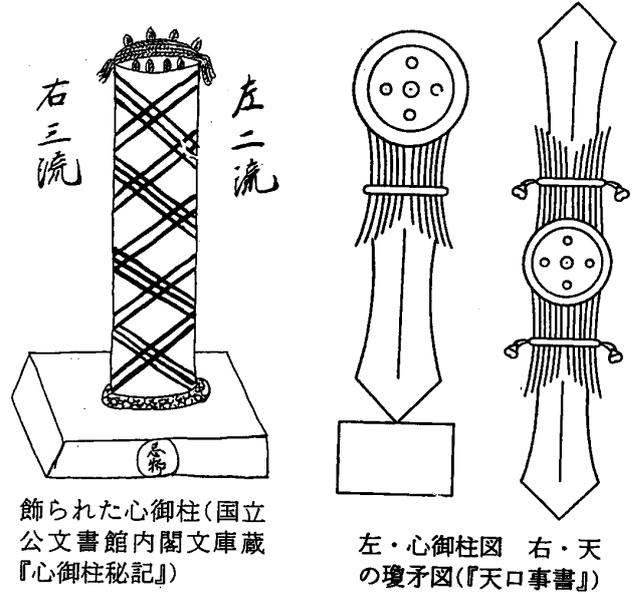


図2 心御柱と天の瓊矛

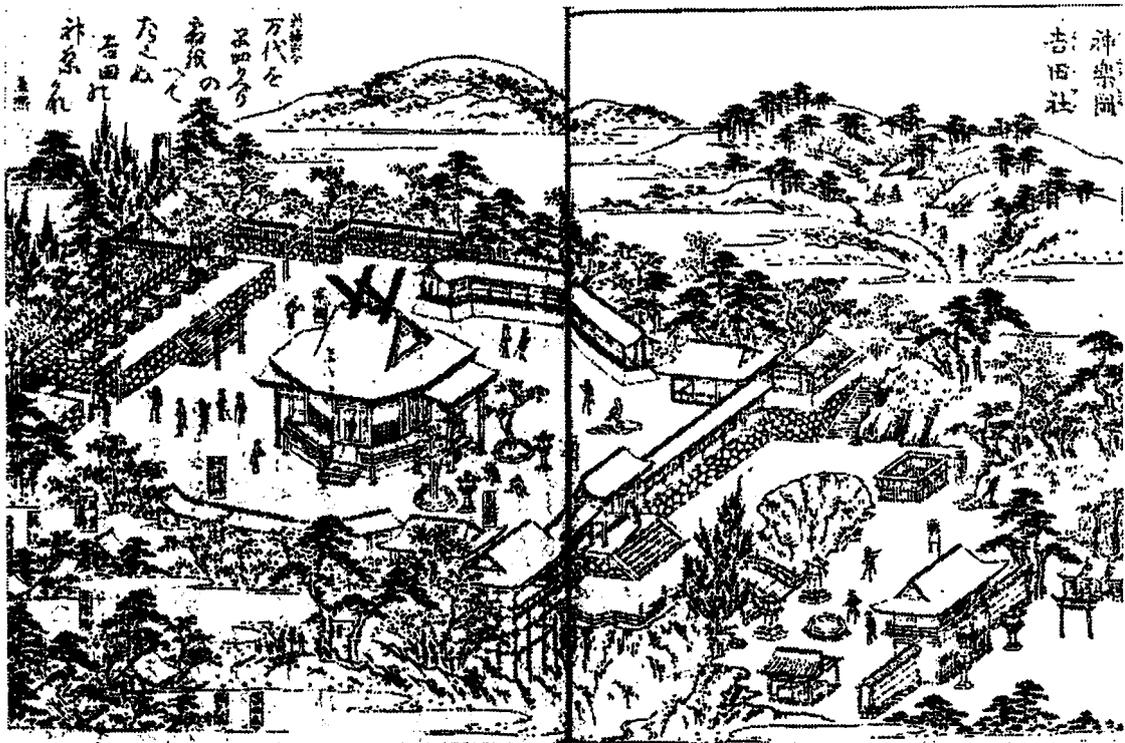


図3 吉田社図(『都名所図会』)

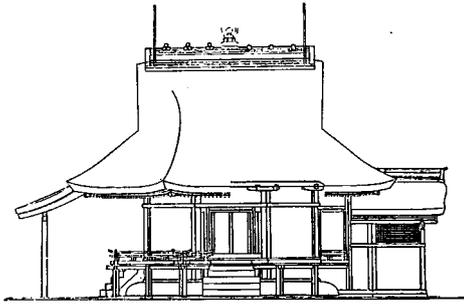


図4 大元宮側面実測図（左側が前面）

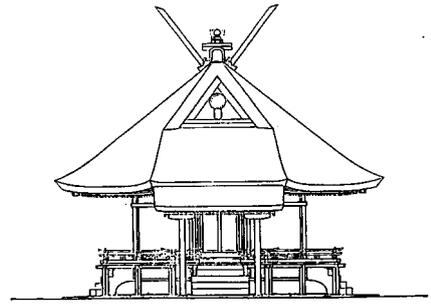


図5 大元宮正面実測図

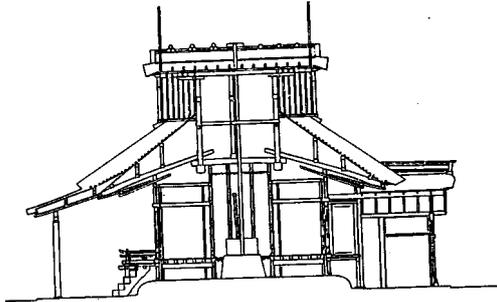


図6 大元宮縦断実測図（左側が前面）

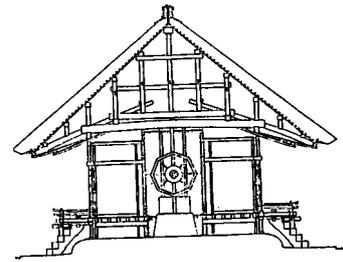


図7 大元宮横断面実測図

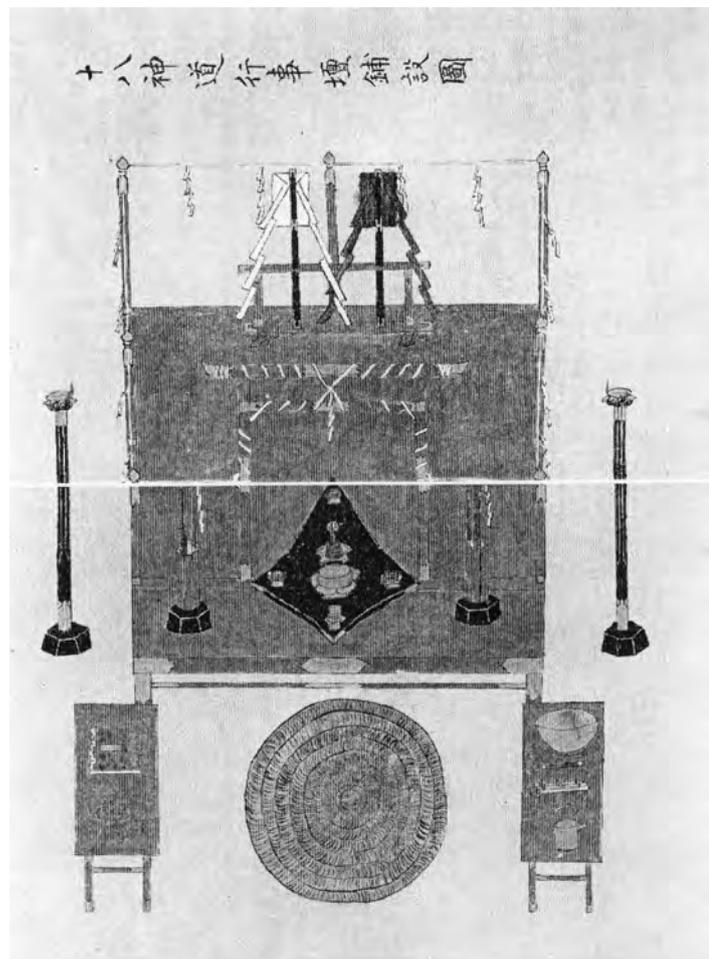


図8 十八神道行事壇鋪設図

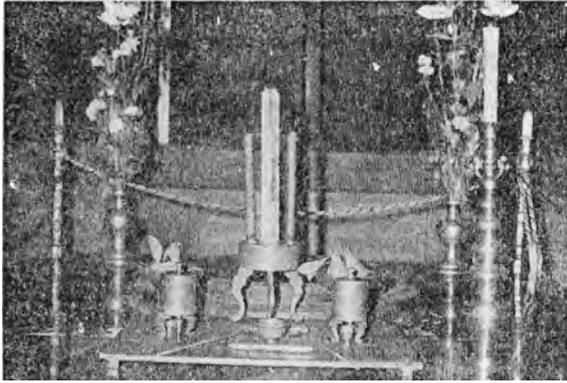


図9 柱源神法の法具

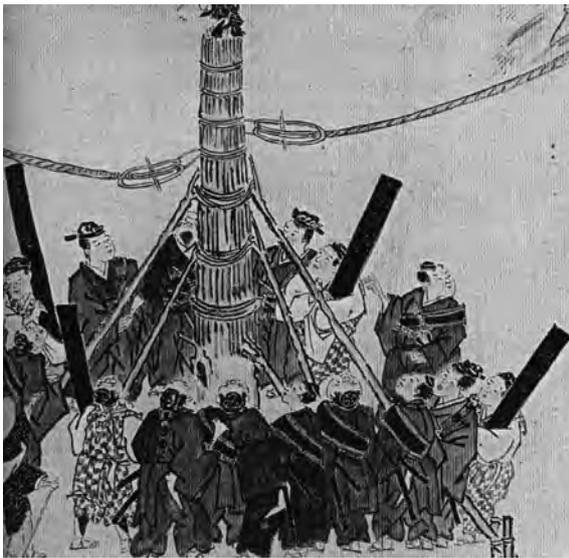


図10 彦山松会幣切り図

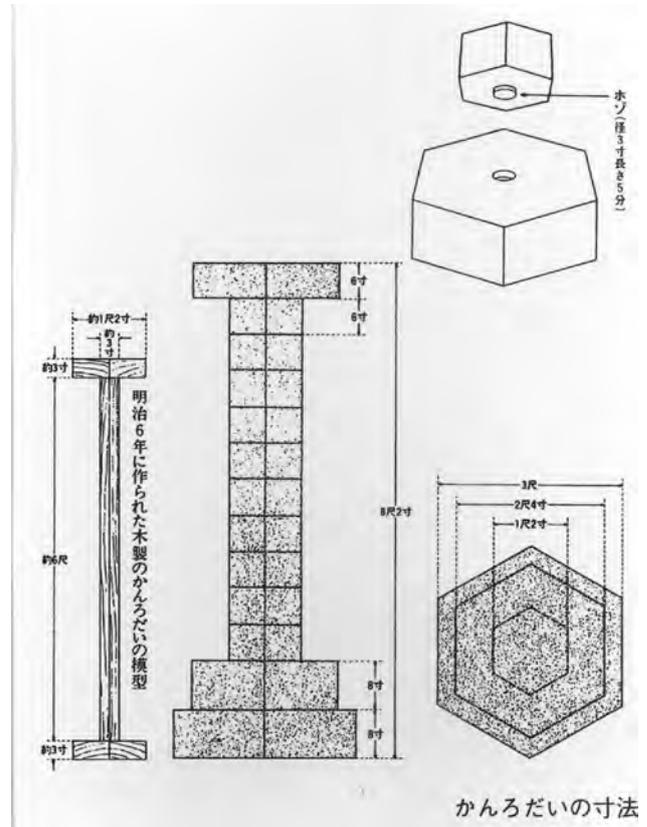


図11 天理教会本部のかんろだい

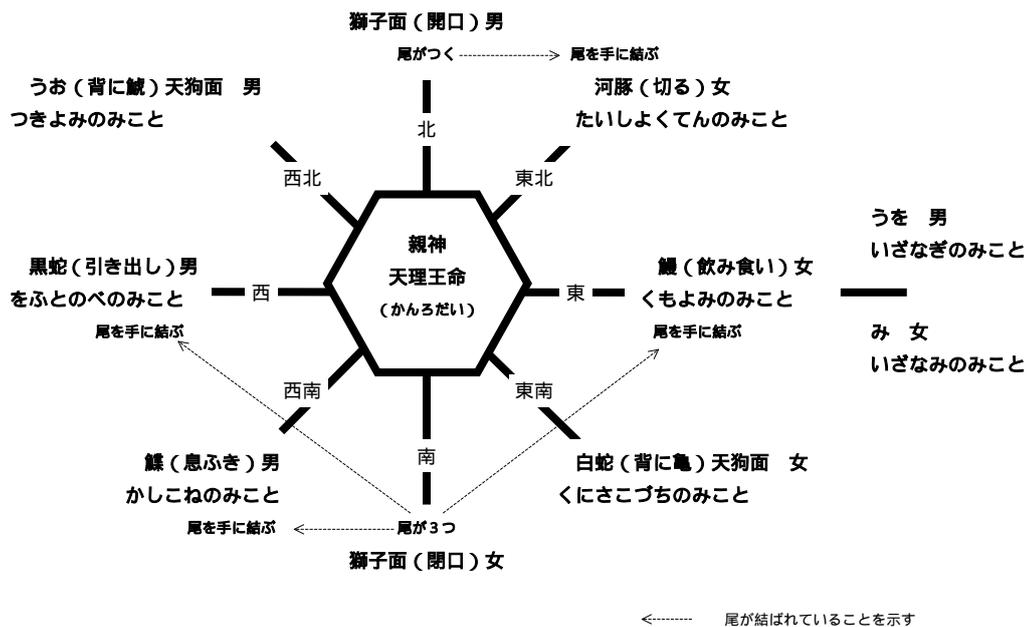


図12 かんろだいのつとめの配置図



## 画像資料と民俗誌

倉石 忠彦(國學院大學文学部教授)

倉石です。よろしくお願い致します。この学術フロンティアにつきましては、当時大学院委員長だった小林(達雄)先生のご提案によって、日本文化研究所、あるいは小川(直之)先生に働きかけをして始まったという事で、当時から関わっていたんですけれども、こうして機会を与えて頂きました。できるだけ有効に使わせて頂こうと思っています。

実は、OHP も今日が初めてなんです。機械を使う機会がなくて、上手くいくかどうか自信がありません。もし齟齬がありましたらお許し頂きたいと思います。

「画像資料の可能性」という題で、民俗学における画像資料を、民俗誌との関わりについて少し考えてみたいと思っております。といいますのは、画像資料を民俗誌として扱うことは出来ないだろうか、という思いがあるからです。お手元にお届けいたしました簡単なレジメにそって、お話をさせていただきます。

### 1. 民俗誌

「民俗誌」と申し上げましたが、民俗誌の概念規定につきましては、必ずしも一定した見解が出されているとは思われません。取り敢えずはレジメに示しましたように、まずは「一定の生活空間や集団における伝承文化を体系的に把握し、記述したもの」と考えておきたいと思っております。つまり、私達の生活の中に遍在する民俗の発見と再構成の過程を経て作り出された、民俗的世界。それが民俗誌だろうと思っております。つまり、別の表現をすれば、民俗の顕在化の過程であるということが出来ようかと思っております。

私は、生活文化を連続の視点から捉えようとするのが、民俗学の基本的な視点であると思っています。そして、現在我々が生活している、生活そのものが民俗であるとも考えています。つまり民俗というのは、あまりにも身近にありすぎて、普段は意識する必要もないような存在であるという事です。従って、これがそうした連続する文化の存在なんだと認識し、確認するのが民俗学の1つの役割でもあるとも思っております。それを具体的・個別的な事象としてではなくて、体系的な把握と記述のなされているものが、民俗誌であると考えたいわけです。そこに記述の問題が出て参ります。

### 2. 民俗誌の記述

勿論、具体的な民俗事象が重要ではないという意味ではありません。そういう民俗事象が民俗の存在を確認するものであり、また保証するものだからです。そういう存在を、民間伝承として把握し、資料として羅列的に記述する。それが調査報告書になる訳です。

ただ、生活そのものが民俗だ、ということになりますと、民俗事象も個々に孤立したものではなく、様々な条件下において、様々な関係を結びながら、私達の生活を作り上げている訳ですから、それらの個別民俗事象を関係付けながら、生活を把握しなければならない、ということになるかと思っております。つまりそれは民俗的生活世界の再現を行うことになる訳です。その再現したものは普通、文字表現によってなされております。しかし生活というのは当然、精神的世界も含む訳ですから、そこには、「モノ」と「ココロ」とを同時に把握しようという志向性も存在する筈です。そういう精神世界は、物や形、あるいは行為として具体化されるものであるわけです。

ともかく、民俗誌的な民俗世界の再現には、まずは民俗的生活世界の把握が必要である、ということになります。それは民間伝承の体系的把握というものが伴うものだろうと思っております。

その民間伝承の把握の為に最もわかりやすい視点を提唱したのは、柳田國男でした。柳田は、民間伝承の存在を、見る・聞く・感じる、という私達の五感を通して認識しようとした。そして、見る事が出来るのが第一部。耳で聞く事が出来るのが第二部。心で感じたのが第三部です。それは同時に、第一部は生活諸相とされます。すなわち、生活の様々な姿です。第二部の、耳に聞こえる言語資料というのは、その生活諸相を解説するものです。そして、そういう姿や生活を解説する背後に「観念」というものがある。その生活観念というのは心で感じられる、と柳田は考える訳です。先程の言葉でいえば、これが「ココロ」であり、「モノ」ですね。「モノ」はあるいは「コト」でもあります。

こういう、五感を通して把握しようというのは、誰でもが容易に認識できる、という事があったからなんだろうと思います。ともかく我々の民間伝承の背後、すなわち一番根底にあるのは心意伝承である、と考える訳ですね。こういう考え方は「モノ」より「ココロ」により重点を置こうとする姿勢があるからです。従いまして、民俗誌でも「ココロ」を把握し、記述しようとする志向性というものが強く見られました。目に見る事が出来ない「ココロ」をどう把握するか、という事が問題になってくる訳です。

かつて国立歴史民俗博物館の民俗展示の時に、最も議論を呼んだのがこの点でした。「ココロ」を展示しなければ意味がない。それでは、目に見えない、形のない「ココロ」をどう展示するか、という事です。その結果が所謂「坪井曼荼羅」の提唱であったわけですね。それが具体化されたものが、歴博の民俗展示という事になります。

つまり、都市展示では水掛不動が人々を迎えます。農村展示におきましてはモミダワラが天井を回っています。都市人の不安というものと、稲魂の世界をそうした形で表現しようとしたわけです。見えないものを見る形で表現しようとしたわけですが、そこには必ずしも「モノ」として、その通りに存在している、ということとは落差が生じてきます。どこの村に行ってもモミダワラが空を飛んでいる、ということは無いです。

そういう見えないものを見出して、文字によって表現するというのが、ごく普通の民俗誌であるわけです。そしてその時に、形あるものを、その形のまゝに示す手段の一つが写真であり、スケッチである、という形で民俗誌に関わって参ります。

### 3. 民俗資料と写真資料

#### (1) 民俗誌における写真

ただ、所謂民俗誌に写真が登場致しますのは、それほど古いことではありません。代表的な民俗学の雑誌であります、『郷土研究』 - これは大正2(1913)年に創刊されます - に写真が登場するのは7巻1号です。これは途中で休刊致しまして、復刊されたものです。大正時代のものには、写真はございません。7巻1号というのは昭和8(1933)年1月号になります。

所謂民俗誌で最も早いものの一つは、小池直太郎『小谷口碑集』(「爐邊叢書」郷土研究社、大正11(1922)年)であろうかと思われます。小さなものなんですが、その口絵として6枚程の写真が載せられています。そのうちの1枚が小正月のモノヅクリの写真になります(図1)。これは、本文中の解説では中々イメージしにくい、という事で口絵が添えられる訳ですが、その解説に該当致します箇所は、こんな風に書かれています。「此地方の物作りで一風變つた作法は、直径二尺乃至三尺もある巻藁を作り、その輪の上へ胡桃の木でいろいろの農具類(鍬・萬能・幅廣・代車<sup>しろぐるま</sup>・鎌・山刀・鋸等)、履物類什器類の形を小さく拵へたのを立て、真中に繩を張つて、立臼の模型及びケイダレ(紙幣<sup>ぬま</sup>)を吊し、これを出入の土間から茶の間<sup>ま</sup>へ上り端の大黒柱に近く、馬物(馬の飼料)を煮る竈の上方へ吊るのである。その後方の梁へは、半紙へいろいろの文字や繪を描いたものを貼り下げる。」と書かれています。つまりは口絵写真の下のご

ざいます様に、「129 頁参照」ということになる訳ですね。文字表現されたものよりわかりやすくする為の、補助的資料として写真が使われており、いふなれば、「百聞は一見にしかず」という事でしょう。

しかし、こうした写真の存在というのはまだ稀なものであるといっても良からうと思います。それだけに貴重な資料です。これより 10 年程後なんですけれども、昭和 6 (1931) 年刊行の同じ地域を対象とし致しました『北安曇郡郷土誌稿 年中行事篇』の、ものつくりの記事にはスケッチが添えられております(図 2)。しかしここには、巻きわらの飾り方の記事は見当たりません。分解いたしまして、一つ一つのつくりものがスケッチされています。どちらの方がわかりやすいか、ということになる訳ですね。個々のものをここでは取り出して示す。そして『小谷口碑集』の方は実際に使われている様子を写真で示している、ということになります。『北安曇郡郷土誌稿 年中行事篇』の中にも口絵に 3 枚の写真がありますがけれども、本文中に写真は一切使われておりません。こうしたスケッチだけです。いふなれば、民俗誌の中で写真を使うことはごく稀で、寧ろこの時代にはまだスケッチが主流であった、といって良いんだらうと思います。

『北安曇郡郷土誌稿』とほぼ同じ頃、田中喜多見の『山村民俗誌』(一誠社、昭和 8 (1933) 年)が出版されています。これには柳田國男の序があります。これも、本文中はスケッチだけが載せられています(図 3)。これは、焼き物を積んで置いてある様子です。わかりはよくありませんけれども、一応描いてある。要するにこんなものですよという、概念的な、形だけを示しているわけですね。こういう状況であるならば、写真の方がよほど分かりやすい、ということなんですけれども、こういうものが主流であるわけです。これは個人のものですけれども、もっと規模の大きな、民俗誌的なものもまだスケッチです。

この時期からはちょっと遅れますけれども、大きな、民俗誌的なものとしましては柳田國男編の『山村生活の研究』(民間伝承の会)が昭和 13 (1938) 年に出ています。よくご承知の様に、所謂全国的な調査を行ないました、学史上記念すべき調査の成果ですが、調査項目ごとにまとめられています。これにも写真は使われておりません。非常に簡単なスケッチだけです。こういう傾向というのは、戦後になりましても同じ状況です。昭和 26 (1951) 年に、各調査地点毎の民俗誌叢書というものが出されます。

大間知篤三の『常陸高岡村民俗誌』(刀江書院 昭和 26 (1951) 年)に掲げられておりますものもスケッチです(図 4)。これを見ますとどうも写真を撮って、その写真をトレースしたものではないか。あるいは、それに基づいて作図したものではないか、という風に思われます。調査・研究の進展の中で、写真等の画像資料の有効性というものを十分認識しながら、経済的、技術的な理由等によってなんだろうかと、写真を十分に取り込む事が出来なかった、ということなんだらうと思います。

しかし、こうして見て参りますと、そこで取り扱っているものはやはりモノですね。モノを写し留める。その手段として写真が用いられる。あるいはスケッチが用いられる、ということが出来ようかと思えます。モノさえそこに写し取ることが出来るならば、写真でなくてもスケッチであっても十分だ、ということです。

こういうあり方というのはかなり一般的でして、民俗学研究所編の『年中行事図説』(岩崎書店、昭和 29 (1954) 年)にも、一つの行事が写真とスケッチの両方で示されております。これは、ナマハゲですね(図 5)。写真が使えれば写真の方が良いのか。それとも、スケッチの方がわかりやすいのか、ということになりますが、どちらとも一概には言えない様な気が致します。

これは小正月の火祭りですが、同じものが 3 枚、『年中行事図説』の中にあります。これは色付きのもので、口絵に出てくるものですね(図 6)。

これも小正月の火祭りの絵になりますがこの頁は全部スケッチになります(図 7)。

次に、これは、小正月のつくりものです(図 8)。これは写真ですが、写真でなくても良いということにもなります。ただ、段々にこういう資料写真という様なものが集まって参りますと、写真を使う機会も増

えてくることとなります。

その一つの集成が、昭和 30(1955)年に作られました、民俗学研究所編の『日本民俗図録』(朝日新聞社)です。これはその代表的なもので、各項目毎に写真が掲げられております。項目毎ですから、各地の資料を比較するのがかなり容易になります。

これは田植えを各地でどのように行っているか、という様子がわかります(図 9)。しかし、これが正条植えであるとかという様な説明は一切ここにはありません。

これは子供の育児の様子ですがイズメに入れてあります(図 10)。そのイズメの様子等も各地の比較ができる。ちょっとご注意頂きたいのは、全部子供が入っているということですね。子供が入っているということは子供の顔が見えるということです。それから、イズメの中にどういう詰め物があって、どういう形で子供が入れられているかということがわかるということです。

これは若者宿です(図 11)。若者宿は建物なんですけれども、その中での男と女の集団のあり方が示されているということですね。写真ですけれども、こういうものを組んで入れてありますと、どうもモノだけではない。もう少し違うものを表している。あるいはそこから読み取ることが出来る、ということが出来るわけです。

これは麻の栽培から糸にするまでのものです(図 12)。今は、麻は大麻 - アヘン - の原料になるというので一切栽培されていませんけれども、当時、ごく普通に見られた情景ですね。これも人がここにあります。これは、麻の長さだとかというものの一つの縮尺になるでしょうけれども、もう一つは、それがモノだけじゃなくて、コトにまで展開させようという意図がある様な気が致します。

これは、呪いで、コト、あるいはモノなんですけれども、呪う心持ちというものが、この中に入ります(図 13)。これをどう読み取るかというのは、また別の問題ですが、様々な様相を写真によって把握しようとする意図が、こういうものの中には見られる。つまり、写真は補助的なものとしてだけではなくて、写真を中心としてある一つの世界を示そう、という様な意向が読み取れるだろうと思います。

## (2) 民俗写真集

これは民俗写真集と呼ばれるものですが、その動きは昭和 10 年代から見られます。一番早いものが、熊谷元一の『会地村 - 一農村の記録写真 - 』(朝日新聞社、昭和 13(1938)年)という写真集です。戦争が激しくなりはじめる頃に出されたものですが、最も早く作られた民俗写真集といっても良いだろうと思います。ここにはモノだけではなくて、時代や、人々の気持ちをも写し撮ろうとする、そういう意向を見て取ることができます。

これは正月の子供ですけれども、羽つきをしている様子だけではなく、顔の表情、あるいは遊んでいる情景というものを写しています(図 14)。

これは、彼岸なんです、お墓は出てこないんですね。お参りしている姿は出てこない(図 15)。彼岸参りに行く老人の姿の中に、その彼岸に対する人々の、何かを写し取ろうとしている様です。

昭和 19(1944)年に出ました、柳田國男・三木茂の『雪国の民俗』(甲鳥書林)も同様のものです。これが『雪国の民俗』の第 1 頁です。出てくるのはモノではなくて、人の顔なんです(図 16)。ここから何を読み取るか。つまり、この民俗誌の中で、この写真を通して何を表現したかったのか、ということが問題になるだろうと思います。やはり気持ち、ココロ、というものを写し取ろうとしているのではないかという風に思います。その生活の厳しさというのは、顔の皺でもよくお分かりだろうと思います。その次の頁に顔が幾つか出てくるんですが、次が手なんです(図 17)。手を並べることによって、何かを主張しようとするわけですね。これは後でもう一度御覧頂くつもりでおります。具体的なモノやココロではなく、人の体の

一部を切り取って、何かを表そうとする。言わばこれらは日常態、つまり生活の「ケ」の部分を書し取ろうとするわけです。この『雪国の民俗』の中にはそういう「ケ」の部分が沢山出てきます。

これは節分の豆まきです(図 18)。一升枧に入れた豆を撒くだけではなくて、正装していますね。紋付羽織です。これも説明の中には、あまり表現されていないのですけれども、一枚の写真の中で、そういう、行事にかける人々の気持ちというものを読み取ることが出来る訳です。

これは文字通り「ケ」ですね。労働です。稲刈り。だからこれは忙しい時の子供の世界です。子供達が小さな子供を見ている。そして親達は、子供に背を向けて仕事をしている(図 19)。他にはこのような表現はありませんが、ここから何を読み取るかですけれども、かなり色々な情報を読み取ることが出来ると思います。逆にいえば、こうした写真はいろいろな情報を示すことが出来るということなんだろうと思います。

これはココロです。この写真から何を感じるかですね。一つ一つの手だとか、色々なものをさびれた祠のところに供えている(図 20)。こういう情景で何かを示そうとしている、いわばココロを書し取って表現している、といっても良いんだらうと思います。

### (3)行政史(誌)『民俗編』

最近の行政史(誌)『民俗編』でも、写真資料 - 画像資料 - が沢山使われております。これは、対象とする読者が基本的に住民ですし、若い世代にもわかるようにということで写真が多く使われることになりました。

私に関わりました『民俗編』等でも、大体中学二年生から理解できる。つまり、義務教育が修了しない者でも理解できるということの一つの基準とする事が普通でした。という事になりますと、世代間におけるモノやコトやココロの違いの落差をどういう風にして埋めるか、ということが問題になり、そうした時に画像資料が使われることが多いわけですね。

現在、生活が大きく変化する中で、直近の過去のでありまして、行われなくなったことが多く、それに伴って具体的なものもあまり目にしなくなったものが沢山あります。コタツは今ありますけれども、コタツに「おき(燠)を入れる」と言ってもその「おき」がわからない。当然「じゅうのう(十能)」がわからない。犬が後ろ足をあげるのとは何か、といった時に、神様が五徳の足を一本取って与えて下さった足だから勿体無い、といって後足をあげるという民話も、「五徳」がないと全く想像もつかない、という様にモノが違ってきている。その為に、生活事象を文字で表現しただけでは全く解からないということが出てきます。そこでまず資料補助、つまり文字表現の補助として、写真が用いられる。先程申しました「百聞は一見にしかず」ということになるわけです。この場合はまず目で捉えることが出来る、個別の形あるモノ・コトというものが対象になります。

こうした写真は記録資料ですから、撮影した場所・日時等というものが必ず明記されなくてはならない筈なんですけれども、案外書かれていないものがあります。生活そのものである民俗は、どこにでもあるものですから、あえて時や所にはそれほどこだわらなくても良かった時代がありました。ところが、変化の激しい現代では、写真の持つ歴史的な資料性が従来よりも高くなりました。つまり史料の方にウェイトがかなりおかれてくるということになりました。変化や地域性を知る為にも、出来るだけ詳細なデータが明記されることが必要になるわけです。

これは解説を読むとわかりますけれども、写真だけを見ますと何を写したのかがよくわからない、という事になります。ここにサカイウツギがあります。サカイウツギというのは耕地の境のところに空木という木を植えるんです。この奥にありますのがサカイウツギですね。その前の方には境標が置かれているんです(図 21)。この写真だけで変化がわかるんです。かつては境標がなかった。空木だけだった。ところが、

時代の変化の中でこういう境標が立会いの上で設置される様になった、ということになるわけです。しかしこのままですと、この木が何のことかわからなくなって、切られてしまうという可能性があります。いつ位まで、こうした習慣があったかということになりますと、平成3(1991)年に撮ったという記録によって少なくともこの時点までは存在していたという歴史資料にもなり得るということになるわけです。

変化や地域性を知る為に、出来るだけ詳細なデータが必要になってくるということですね。どこにでもあったものが、どこにでもある、ということにならなくなってくるということです。単独の事象ではなく、背景と共に写された事象がどういうものであるかというのは、実はもう既に生活絵引きが作られています。須藤功さんの写真に小川直之先生が詳細な解説をつけております。これは記録資料として、生活の中に存在するモノとコトとを認識しようとしたものだと思います。

ただ、既に触れております様に、画像資料としての民俗写真というのはそれだけに留まらないのではないだろうかと思えます。

#### 4. 民俗写真(画像資料)の可能性

勿論、モノと事象 - コト - とを記録するという役割を軽視する訳ではありません。基本的には画像によって、民間伝承の固定化・資料化を図るという上では非常に有効な手段であると思えます。

ただ、画像・写真として切り取られた民俗事象はそれのみに留まらずに、そこから民俗的生活世界を再現することが出来ます。つまり、単に固定的な存在だけではないということです。

どういうことかと申しますと、民俗的世界を再現することが出来るということは、つまり、作る方から見れば、民俗誌としての写真を撮ることが出来るということです。題材・対象を選ぶ一定の意思 - 意図 - を持って臨むということになるわけです。勿論シャッターを切る時には誰でも対象を選んでるわけですが、さらにそれをある意図の下に行なうということなんですね。

これは先程のものに関連するんですが、何を写したかわかりでしょうか。この2枚の写真は同じ場面を写しているんです。これは、空木の木なんです。これを撮影した人は昆虫の研究者なんで、空木にやってくるモンシロチョウを写しているんですね(図22)。ところが、これはそうした蝶が止まるだけのものではありません。こういう撮り方をしますと、これがサカイウツギだ、ということがわかります(図23)。従って、どういう風に切り取ると何が写るかということで、民俗的世界を再現しやすくなるかどうかが決まる、ということになります。

これはありふれた情景ですが、実は、これが表通りで(図24)、これが裏通りなんですね(図25)。一街区裏なんです。こうして並べてみると、街の様相がどういう風に変わっていくのか。どういう風に変わったのか、同じ地域の中での変化を読み取ることが出来る。これは皆さん方が実際には感じているわけですね。渋谷駅から大学へ来る間に、ビルの谷間に古い家が一軒ある。これを比較するとどちらが古い家か、どういう風に建物が変わってきたかというのが一見してわかる。という様な事も、撮り様によっては出来るんだ、ということになります。

写真などの画像資料を作る側で、何を表現しようとするかというときに、独り善がりになる恐れはあるんですけども、モノやコトだけではなくココロをも写し取る事の出来る可能性というものも秘めている、ということです。

写されて示されたものから何を読み取るか。つまり、どういう民俗的世界を再現するかというとき、写真・画像資料を民俗誌として読む(理解する)ことが出来るのではないかと思います。これは読者・利用者側の視点ですが、見方によっては様々な世界をそこから読み取ることが出来る。つまり、見る人の立場や考え方をそこに投影することが出来る、ということですね。

これは長野県下伊那郡阿南町新野です。よくご存知の雪祭り(図 26)の時に焚く松を子供達が集めています(図 27)。つまりこれは新野の伊豆神社を中心としたものです。そこから 200m 位離れた家ではこういうことをやっています。これは、便所の年取りと呼んでいる行事です(図 28)。神社では、神社の神を祭る田楽の祭りが行なわれる。ところが、家では便所を拝んでいる。これが終わってから年取りが行われるんですね。

この雪祭りは非常に有名なもので、時にはここで日本民俗学会が開かれるという程、多くの研究者が行くんです。折口信夫が名付けたことによっても有名ですけれども、この便所の年取りの行事がある事は全く報告がなかったんです。昭和 53(1978)年になりまして初めて報告されました。ですから、新野は雪祭り一色で大晦日、あるいは正月 14 日の夜を迎えるんじゃないで、実はもう一つ、全く性格の違う行事が行なわれているという、いわば立体的なものもこうした写真を並べることによって見る事が出来るだろうと思います。

これは子供を中心にした写真ですね(図 29)。この家は女系三代になります。初めて男の子が産まれた。女の喜びみたいなものがあるのでしょうか。これはもう少し新しいものですが、お七夜の祝いですね(図 30)。家の中における祝いの仕方、喜びの表現の仕方が、こういう組み合わせで読み取ることが出来るだろうと思います。

これは大豆を選り分けているんです(図 31)。こういう写真というのは、調査の時にもあまり問題にならないですね。米のしいなと実の入ったものをどうやって選り分けるか、というのは時々聞くんですけども。虫の喰った豆と丸い豆をどうやって選り分けるかなんてというのはあまり出てこない。こういう、何気ないものを撮っておく、資料化しておく、ということが、民俗世界の厚みというものを見る事が出来るだろう、ということですね。

これは小正月のものです。これは道祖神の祭りです。これを青年達が持って各家を回るんですね。時々一升瓶なんか貰います。それから、お賽銭を貰っていますね。これは若者達のお正月の道祖神のお祭りです(図 32)。これは、道祖神碑の前で厄年の厄落としをしています(図 33)。箆を使っている女性が厄年の人ですね。村の人に集まってもらって、酒を飲んでもらっています。小正月のあり方というものをこういうところからどうやって読み取っていくか、ということは問題なんです、いろいろなことを読み取ることが出来るのではないかと思います。

これは手の表情だけで何がわかるか、というので、急いで手近なところで手を集めてみました(図 34)。いかにも仕事をしていない手ですね。肉体労働をしない手です。しかし、爪はそんなに伸びていません。手の表情によって、その人の生活のあり方や、時代の変化みたいなものが、何か読み取ろうと思えば読み取ることが出来るんじゃないかと思います。指の長さや仕事の内容というのは対応するのか、ということなども考えられます。

つまり、どういう写真を撮るか。その写真をどういう風に見るか。そこに如何に豊かな民俗的な生活世界を作り上げることが出来るか。そういうことも考えていく必要があるんじゃないか、と思います。それによりまして、画像が事象の記録という機能だけで留まるのか。それとも民俗誌にもなり得るのか、という事が決まってくるのではないかと思います。出来れば、民俗誌としての画像資料の活用、ということをもっと考えて良いんじゃないか、というようなことを考えております。

それではお前は具体的に何をしているんだ、と言われてしまうと困ってしまいますけれども。私も、そういう可能性をこれからも探っていきたいと思っております。以上です。

図版出典

- 図1 小池直太郎編 大正11(1922)年 『小谷口碑集』郷土研究社 巻頭
- 図2 信濃教育会北安曇部会編 昭和6(1931)年 『北安曇郡郷土誌稿』第3輯 郷土研究社 巻頭
- 図3 田中喜多見 昭和8(1933)年 『山村民俗誌 - 山の生活篇 - 』 一誠社 p82-83
- 図4 大間知篤三 昭和26(1951)年 『常陸高岡村民俗誌』刀江書院 p111
- 図5 民俗学研究所編 昭和29(1954)年 『年中行事図説』 岩崎書店 p99
- 図6 民俗学研究所編 昭和29(1954)年 『年中行事図説』 岩崎書店 巻頭
- 図7 民俗学研究所編 昭和29(1954)年 『年中行事図説』 岩崎書店 p93
- 図8 民俗学研究所編 昭和29(1954)年 『年中行事図説』 岩崎書店 巻頭
- 図9 民俗学研究所編 昭和30(1955)年 『日本民俗図録』 朝日新聞社 p54
- 図10 民俗学研究所編 昭和30(1955)年 『日本民俗図録』 朝日新聞社 p120
- 図11 民俗学研究所編 昭和30(1955)年 『日本民俗図録』 朝日新聞社 p115
- 図12 民俗学研究所編 昭和30(1955)年 『日本民俗図録』 朝日新聞社 p37
- 図13 民俗学研究所編 昭和30(1955)年 『日本民俗図録』 朝日新聞社 p166
- 図14 熊谷元一 昭和13(1938)年 『会地村 - 一農村の記録写真 - 』 朝日新聞社 p12
- 図15 熊谷元一 昭和13(1938)年 『会地村 - 一農村の記録写真 - 』 朝日新聞社 p20
- 図16 柳田國男・三木茂 昭和19(1944)年 『雪国の民俗』 甲鳥書林 図版1
- 図17 柳田國男・三木茂 昭和19(1944)年 『雪国の民俗』 甲鳥書林 図版18~20
- 図18 柳田國男・三木茂 昭和19(1944)年 『雪国の民俗』 甲鳥書林 図版46
- 図19 柳田國男・三木茂 昭和19(1944)年 『雪国の民俗』 甲鳥書林 図版160
- 図20 柳田國男・三木茂 昭和19(1944)年 『雪国の民俗』 甲鳥書林 図版353
- 図21 長野県史刊行会 平成3(1991)年 『長野県史 民俗編』第5巻(総説) p229
- 図22 那須野雅好氏撮影 平成15(2003)年 長野県南安曇野郡三郷村
- 図23        "
- 図24 著者撮影 平成11(1999)年 長野県長野市
- 図25        "                "
- 図26        "        昭和51(1976)年 長野県下伊那郡阿南町
- 図27        "        昭和51(1976)年        "
- 図28        "        昭和51(1976)年        "
- 図29        昭和15(1940)年 長野県長野市
- 図30 著者撮影 昭和47(1972)年        "
- 図31        "        昭和52(1977)年        "
- 図32        "        昭和52(1977)年 長野県上伊那郡戸隠村
- 図33        "        昭和47(1972)年 長野県木曾郡穂川村
- 図34        "        平成15(2003)年 東京

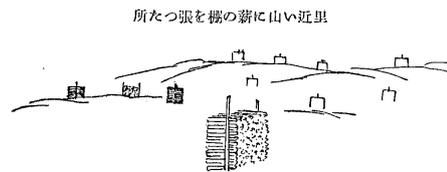


(照参頁九二一) リ作物の方地島鹽村城北

図 1



図 2



例一のみ積木春

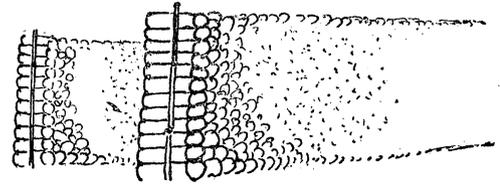


図 3

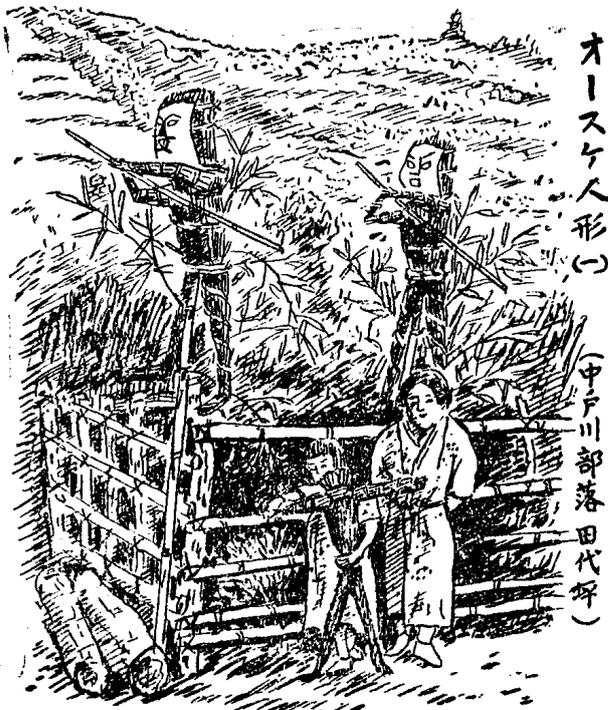


図 4



図 5



図 6



小正月の火祭は、一般に東北地方に例が少ないようである。また九州では鬼火などといって、正月六日から七日にかけて、火祭をする所が多い。

- 1 長 野 三九郎
- 2 神奈川 さいとうばらい
- 3 静 岡 門入道
- 4 神奈川 門入道
- 5 長 野 道祖神

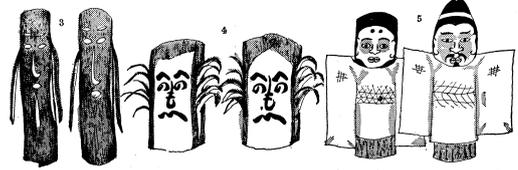


図 7

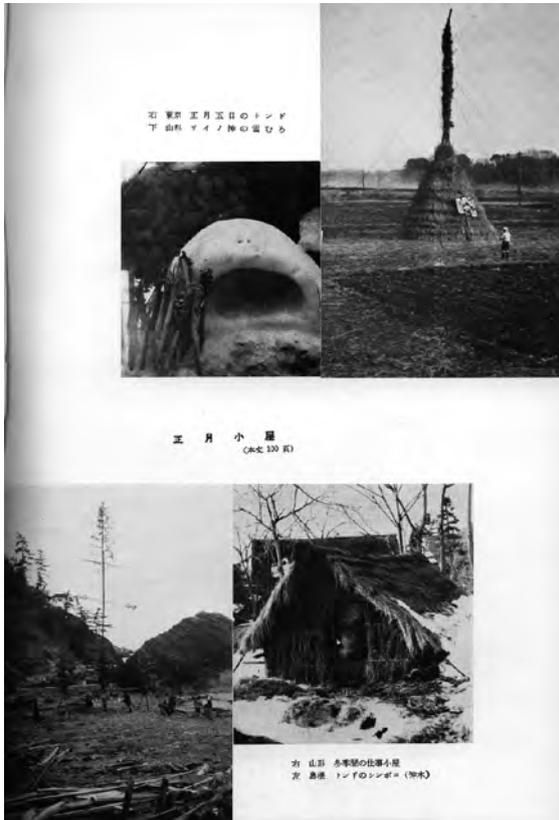


図 8



図 9





图 14



图 15



图 16



图 17



图 18



图 19



图 20



図 21



図 22



図 23



図 24



図 25



図 26



図 27



図 28



图 29



图 30



图 31



图 32



图 33

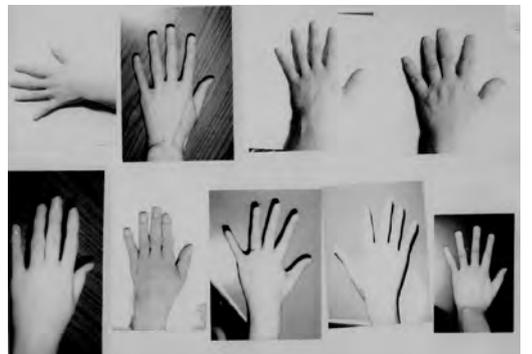


图 34

## 記録されたイザイホー - 画像から見た祭祀状況と聖域の変容 -

齋藤ミチ子(國學院大學日本文化研究所助教授)

はじめに

画像は可視的世界を時には文字表現を越えて、あからさまに表現できるが、心意的側面の掘り下げに関する表現には適しておらず、その機能はあまり期待できない。一方、文字表現は、記録のリアルな表現に限界があり、人の記憶に左右される人為的な側面が否めない。

そこで今回は試みとして、イザイホー消滅にいたる諸要因について、まず文字表現による記述をし、要所所について、画像表現手法の方が一層効果的、あるいは画像表現ならではの考えられる事項については、画像を援用した。この過程で、何が画像では表現しきれないか、何が画像表現に適しているか、さらには文字表現、画像表現双方の適切な兼ね合いはどのようなものであるのが望ましいか、今後の追求すべき課題の一端を抽出しようというのが本稿の主たる狙いである。

### 一．久高島の概況

第二次世界大戦は沖縄の伝統的社会に大打撃を与え、しいては有形無形の伝統文化に綻びをもたらせた。その後の昭和47(1972)年の本土復帰も、沖縄社会の変容を加速させ、一層の都市化を促した。こうした過程によってもたらされた情報伝達、物流機構の発達、人々の日々の営みにおける価値観の転換を促し、生活の様態を変化させていった。久高島も例外ではない。しかもこの島は、長年離島苦ともいえる環境下におかれてきた。今日では必須とされているライフラインも、久高ではかろうじて昭和50(1975)年に電気がつき、昭和53(1978)年に各家庭に水道が敷設されたという状況であった。

久高島と本島との間の荒海、痩せた零細な農地、他に副業もままならない立地条件下で、女性たちは整然と分与される地割りによる農地を耕作し、年間の祭事を遂行し、男性は遠海に出て、長期にわたって帰島しないという久高特有の生活パターンがあった。それゆえ、女性は篤い信仰心をもって、オナリ神として男たちを守り、また家レヴェルの司祭につとめ、家の実質的運営にも励んできたのである。

しかし、かつて勇壮果敢な優れた漁民として名を馳せた久高のウミンチュ(海人 漁師)たちも、島に近代化が波及すると、漁業以外の生業を追求し始め、島外に活路を見出すようになり、そのまま彼の地で家庭を築く例を少なからず見るようになった。そのためもあって女も島を離れる。加えて若者の島外に就職を求めての流出もあるなど、過疎化現象に一層拍車がかかってゆく状況にある。

さらに生活の変化に伴って価値観も変わると、神事に対する意欲も稀薄になっていく。いわゆる神人たちも、かつてはある種のエリートとして、誇りさえ持てた神人という役割を、昨今では煩わしく、重荷に感じるようになるらしく、継承するべき該当者がいても、継承を回避する傾向を見せるようになる。神役継承忌避による神慮への恐れや想像力も薄れてきている。こうして刻々と神人組織が弛緩し、祭祀構造の空洞化が進むのである。

### 二．イザイホー消滅への経路

かつては整然とした祭祀組織のもとに、12年ごとの午年に行われてきたイザイホーは、往古の祭祀を彷彿とさせる行事とみなされて、長らく視界の注目を集めてきたが、1978年を最後に途絶えてしまい、以後平成2(1990)年庚午、同14(2002)年壬午にも、ついに挙行されることなく過ぎた。たとえ今後復活することがあるとしても、恐らく本来の形で行われることはないであろう。

形式のみの踏襲であれば、収録されたVTRや画像、夥しい量の関連報告書や著書の類を参照すれば、型通りの再現は可能であろう。しかし、担い手のひとたび萎えた祭儀への心意性の復活は期待出来ない。イザイホーにおいては、何にも増してこの心意性こそが必須な要因なのである。

**1. 大戦後初めてのイザイホー** イザイホーの続行については、実はかなり前から危惧されていたのである。第二次世界大戦後の混乱期もどうやら治まった頃の昭和29(1954)年甲午のイザイホーには、研究者も大挙して渡島した記録があるが、大戦終結後10年も経ぬ時期の祭儀挙行とあって、古式を忘れた若者がいたり、一時は迷信だとして、中止説もあったという。

**2. 昭和41(1966)年のイザイホー** その後1966年丙午のイザイホーは、時勢もかなり落ち着いてきており、行政機関も関心を寄せ、メディアなども多く取沙汰するようになった。島の人々もそれに呼応するかのような、意気込みがあったようである。この時新たに加入するカミンチュ(ナンチュ)は28人おり、イザイホー挙行に必要な神人たちの顔ぶれもほぼ揃っていて、12年後の昭和53(1978)年戊午に較べると、この時期の祭祀遂行のメンバーはかなり充足している。

**3. 昭和53(1978)年のイザイホー** 最後になった1978年戊午は、衰退の兆しが明らかに窺え、その最たる点は、カミンチュ(ナンチュ)候補者が8人に激減していること、また、イザイホーの祭儀に欠かせぬ、重要な役割を果たすべき外間根人が欠員で、止むを得ず本来担うべき立場にない久高根人が急遽代役となった点である。その頃の新聞に、「イザイホー開催危ぶまれる」(『琉球新報』1978.06.10)、さらに「イザイホー実現の見通し 久高根人が誕生」(『琉球新報』1978.06.12)など見え、ここから、本来の根人不在のため、当初はイザイホーをする見通しがたたず、苦肉の策として、変則的な形で当座を凌いださまが如実に窺える。ここにすでに破綻の徴候が見られたということができよう。

しかし、皆が皆、最後のイザイホーであると予想したわけでもないであろうが、この時の島外からの観察者は、島の人口をゆうに凌ぐといわれた規模で、祭儀も変則した側面を補って余りあるほどに、カミンチュはもとより、島を上げて対応し、終始伝承に則って厳粛に行われたのである。

**4. 平成2(1990)年のイザイホーもどき** 1990年庚午には、久高ノ口没、外間ノ口闘病中、根人不在、新たなナンチュの候補者も0人という状況の中、外間ノ口の最終的決断と区長の同意によって、イザイホー中止が決定した。故櫻井氏および齋藤たちは、その際のカミングワウの反応や島民の思考模様について窺知しようと、中止を承知であえて渡島したが、島の人々の精神的な動揺は、予想した以上のものであった。とりわけサーダカ(霊威が及びやすい資質)の度合いが強い人ほど、体調に不調をきたすという現象が見られた。シム門中の神役の人たちは、以下のように、特異な反応すら示した。

イザイホー発祥譚に関わる伝承をもつシム門中では、ウクリガミ5名によって、イザイホーもどき風のこと、内輪で秘かに行われた。イザイホー中止という事態のウクリガミたちへの精神的ダメージは深く、身体に変調をきたし、止むに止まれずとった行動であったという。5人はまずムトドクノを拝み、久高ノロドンノチ、外間ノロドンノチを拝み、深夜、ウドンミヤーのカミアシャギへ神がおられると思われる頃合を見計らって行き、アシャギの前に七つ橋があるとみなして、エーフアイを唱えながら、7度行きつもどりつを繰り返したというものであった。この件は、ノ口の意向を無視して、独断で突如行ったという点で、人々の顰蹙をかった。その後10年もたたぬ間に、実行した5人のうちの4人が亡くなり、男性のウクリガミであるハリマンガナシー(現：外間根人)1人が残ったという現実を、神の批判と受け止めている

人々は少なくない。

5. **イザイホーが全くなかった平成14(2002)年** さらに12年後の2002年壬午には、イザイホー不履行も2度目とあって、今やカミンチュも平静に対応するさまが見届けられた。ウクリガミたちは各々、管掌する拝所で拝みをし、クニガミの1人である外間掟神も島外から来島して、外間殿で祈願をした(写真1・2)。

総じて、初めての中止の時(1990年)のような、島内の沈んだ雰囲気とは打って代わって、平穏な明るさともいえる空気に満ちており、イザイホーのない現実がすっかり定着した様相を呈していた。

かつてイザイホーが行われていた旧暦11月15日の島の人々の様子に注目してみると、当日の一般の人達の動向はさまざまで、本来は静かに過ごすべき聖なる日であるとして、家で落ち着いている者のいる一方で、かつてはイザイホー期間中は進入禁忌であった地帯で、平然と農作業に励む、かつてのタマガエーのカミンチュもいた。両者の中間ほどの反応を示す例が、茅の葉を結んで作ったサンを身につけて、いわゆる聖域に入る人々であろう。

島内にある施設「久高島交流宿泊センター」では、若年の有志が、かつて由緒ある祭が行われていた日であるとして、島外からミュージシャンを招いて、音楽会を中心としたイベントが行われた。参加者は同施設に滞在して、島内の中・小学校に通学する留学生徒やその父兄たちで占め、島の人たちの参加は少なかった。因みに、現在郡の教育委員会も関与した企画で、島内外の交流を活発にして島興しにつなげるとして、そのための施設を建築中である。

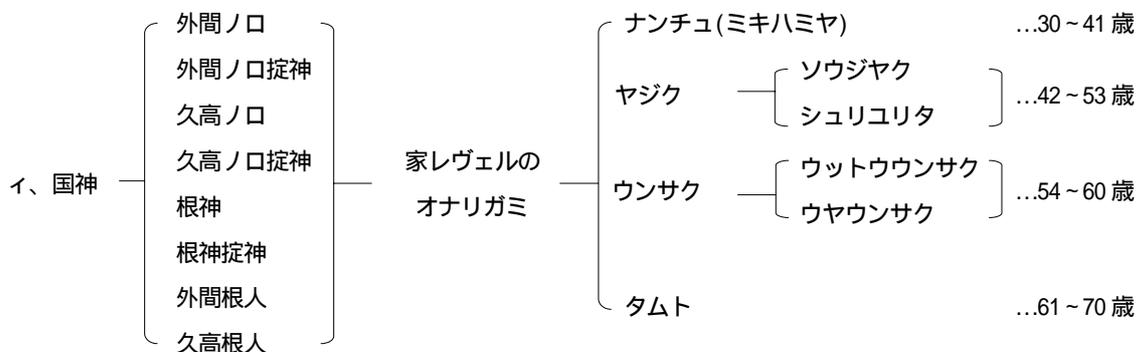
### 三. イザイホー消滅の背景

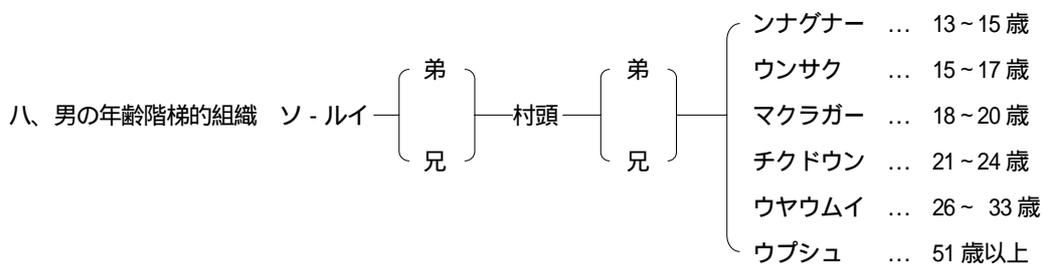
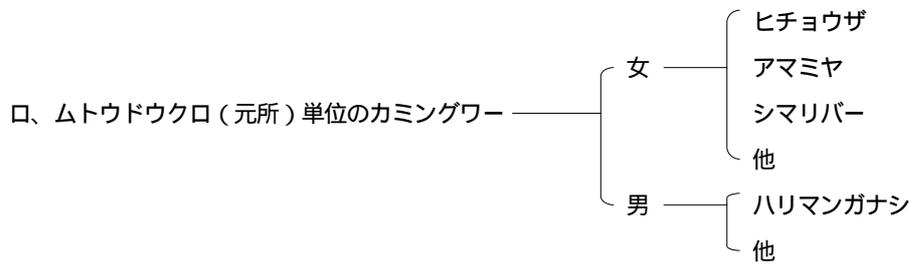
#### 1. 祭祀行事の担い手たちの変動

すでに指摘してきたように、イザイホーの衰退過程は、この行事を遂行するカミンチュが欠落したまま補填できず、祭祀組織の崩壊にまずは依拠する。さらにその因由を辿れば、経済機構の転換、生活形態の変容、これらに関連した価値観の変化、それに起因する過疎化、さらに伝統的信仰行事への関心と熱意の枯渇へと及ぶなど、その誘引は多岐にわたる、きわめて近代的な問題をはらんだものである。

これらの諸要因のうち、まず祭祀組織の衰退の様相を、祭祀の担い手、就中カミンチュの消長について、具体的に示すことにしたい。以下は過去3回、1966、1978、1990年の時点での様相である。

#### 神役たちの本来の形態





イザイホー執行に必須な要人

	平成 14 (2002)	平成 2 (1990) *	昭和 53 (1978)	昭和 41 (1966)
久高ノロ	×	×		
外間ノロ				
久高ノロ掟神	×	×	×	
外間ノロ掟神		×		
国神 根神(外間)	×	×		
根神掟神	×			
外間根人		×	×	
久高根人	×	×		
ニ－ブトイ	×	×		
イテイテイグルー	×			
ナナテイグルー				
ナンチュの数	0 人	0 人	8 人	25 人

ウクリガミ ( 在任、× 空任、 闘病中、 島外在住 )

シジが 若く、未認知状態

イザイホ - もどき挙行者

	平成 14 (2002)	平成 2 (1990)	昭和 53 (1978)	昭和 41 (1966)
女性	フアーガナシー	×	×	
	ウミジル	×	×	
	ウミトウク (ウミスク)	×		
	イティティグルー	×		
	ナナティグル			
	ムンブジ	×		
	ウブンシミノウヤガミ	×		×
	ヒチヨーザ			
	アジガユーカーガミ	×		
	アカハンジャンナシー	×		
	アオカンジャンナシー			
	アマミヤー			×
	シマリバー			
	大里根神	×		
男性	ハニマンガナシ			
	アカチュミー	×		
	カネノカンジャンナシー	×	×	
	ソールイガナシ外間	×		
	久高	×		

イザイホ - もどきの挙行者 (いずれもシム門中) 印

イ、シム門中は、イザイホー起源に関わる伝承を持つ。イザイヤーというシジダカの幼女がいて、5歳のときに、イザイホーの七つ橋の遊びを始め、7歳の時にこの橋を渡って昇天してしまったというもので、この伝承に因み、イザイホーの行事のときのみ活躍するイティティグルー、ナナティグルー2名の神役がこの門中からでる。前者はナンチュを遊ばせる役。遊ぶ時、先導し、先頭に立って舞う。姪継ぎ。後者もナンチュを遊ばせる役。

ロ、ウブンシミノウヤガミ 島建ての祖、シラタル・フアーガナシーとも呼ぶ。本島に居住していたが、生活能力も行動力もすぐれており、サーダカでもあったため、島内の神事に関して、ムトウ神の権限を越えて発言し、影響力を持っていた。

ハ、アジガユーカーガミ 按司の世の神。イザイホーのさい、カミアシャギの戸の開閉をする役を持つ。

ニ、ウミトク 女神。ウドンミヤーの最高座に坐る。ウミスクと対。

ホ、ハニマンガナシ 本来の神役。鍛冶を司る神。男のウクリガミの上位を占める。平成2(1990)年の段階では、空席の外間根人の代役を果たしていたが、6年ほど前に外間ニツチュウになった。しかし、この例は伝統的な本来の継承原則に基づいてはいない継承である。彼は現在2つの神役を兼任する。この変則的な継承は故ウブンシミノウヤガミの強い推挙によるという。

### イザイホー後に認知されたウクリガミ（1978年のイザイホーのさいはシジが低いとされた）

イ、アマミヤー アマミヤーは島の拝屋。本島在住。行事ごとに帰島する。

ロ、シマリバー 祖母から継承。忌引きで、2002年の神事（アミウルシ）には欠席。彼女の夫は亡久高根人。1978年のイザイホーには外間根人の代役を務めたが、その後急死した。

ハ、大里根神 外間ノロの嫁。継承後、喘息で急死。カメるべき筋ではなかったという。

### 近年生まれたウクリガミ

・アマミウヤ カミダリーになり、最近カメた。五穀の神。アカチュミーと対になる。本島在住。島内に家を新築し行事との兼ね合いで、島内外を行ったり来たりしている。本島に居住するウクリガミたちは、おおむねこの形態をとっている。

### 現存のクニガミ・ウクリガミ

#### ・クニガミ

イ、外間掟神（ウッチ神、ウメーギともいう）兎生まれの人が出るべきであったが、いなかった。外間ノロの娘。本島在住。

ロ、外間根人（ホカマニツチュウ） ハニマンガナシの項参照。

#### ・ウクリガミ

イ、ヒチョウザ（チマリヤ門中）港の神。

ロ、アオカンジャンナシー シラタルの息子もカメる（48歳の時）。現在、島内のウトウト（祈願活動）をほとんど引き受けている。本島の人（職能的霊能者、ユタ）のように、謝礼金は受け取らない。極めてサーダカ。本人も神威が高いので、祭の時など、ノロがウンサク（神酒）をくれるときでもノロより位が高いので、ノロの手が震えたなどという。

ハ、アマミヤー 1978年のイザイホーの時は、継承はしていたが、まだ若年で、未承認で、披露の儀式も行っておらず、正式には継承していなかった。

ニ、シマリバー 同上。

### 返上されたソールイガナシ（竿取神）のシンボル

2001年、久高ソールイは受け継ぐ者がいないため、竿とソールイのおコーロを、ノロドンノチに返し、2002年には外間ソールイも外間拝殿に返してソールイの役を返上した。

これにより、ソートリ神（棹取神 漁業神役）を頂点として構成されてきた、男性の年齢階梯的組織も崩壊したといつてよい。したがって、イザイホーに対置して午年ごとの8月10日に行われてきた男性の成人認証の儀式であるナージキも消滅した。また、この神役が担ってきた、年中の祭儀における祭料や魚を中心とした捧げ物の醸出システムもなくなってしまった。

### 村頭

往古の素朴な祭政一致の残滓として、主に島内の伝統的な行事運営の一翼を担ってきた村頭も、その主要な役割に久高ノロのエラブー（海蛇）漁（燻して食用にするまでを行う）を担う一方、祭儀遂行の補助的労力奉仕をしてきたのであるが、久高ノロが不在となったのを期に崩壊現象を示すに至っている。

エラブー漁獲権は、久高の頂点に位置する神役久高、外間両ノロと外間根人のみがもつ特権であった。

このうち久高ノ口の所有高は突出していたが、ノ口没後、利権を村に寄付した。現在は村内の希望者を募って捕獲させている。

#### 四．変貌した島のたたずまい

##### 1．分布図から概観した島の変容（図1）

渡島するごとに島の様相が変化していることに気づかされる。まず目につくのは、コンクリートで塗り固めた設えの建造物が増えていることである。それらは道、港、戸建ての家、塀、拝所、墓所などであるが、他に進行中の公レヴェルの建設事業に類する港湾事業などもある。

家屋も過疎化につれて、空き家、廃屋が増加しているが、そのうち空き家は貸家として島外からの移住者、あるいは新家庭の創設者が住んでいる例が少々見られる。廃屋は、そのまま朽ち果てるのを待つ体のもの、家屋を撤去した後、屋敷跡にグونسなどを祀る小祠（中に先祖霊を祀るお香炉などを設置）を建てる例が多くなっている。旧家で、それもムトヤー（元屋）であった家の廃屋の場合は、お香炉を祀っていた部屋を拝所として、一門が御願をしている例、また家屋の近辺に新たに拝所を建立する例もある。かねてからあった門中レヴェルの拝所も、木造からコンクリート製への立て替えもよく見られる。このような建造物の転換は、潮風に耐えうる素材を模索した結果という側面がある。比較的古い居住地帯と思われる祭場や、かつての主要な神役の家が散在する地域に空き家や空き地になった箇所が多く、島の出入口である徳仁港に近い地帯には少ないという傾向が見られ、しかも新築家屋が集中している。

図に三角モーとあるのは道が交叉して三角形をなした芝地で、モーは草の意。このような場所は悪い所、あるいはまた逆に、神様の場所であるともいうなど、いわば聖域とみなされている。往時は年中行事執行の場の一端ともした。またの名をバンドクロ（番所）というように、今日の公民館のような役割をし、ここに集まって村の自治に関する話し合い、年頭には地割りの相談、祭の穀物や経費の徴収が行われた。今日では利用は皆無となり、他の目的で使われることもなく、雑草が繁茂するままになっている。

三角モーに類する聖地にハンチャタイと呼ばれる一角がある。ハンチャは神田の意で、神田原を意味するという。島の臍にあたり、天に通じる箇所であるといつて、神聖視してきた。8月の男の祭の時には、ここの脇の道を集合、出発の地点として使用した。

##### 2．島のなりわいの変化

本島と島とを繋ぐ海路は、現在、定期便の高速船が走り、島人の往来を至便にしている。さらに2002年からフェリーポートが開通したため、今後は車輛も多数上陸して、早晩、島の様相に少なからぬ影響をもたらすことになるだろう。

島の中央付近の耕地は、地割の原則の埒外なのか、地割特有の細長い区分けをしておらず、境界のための石塊も置いてない。そのためか作物も豊かに育っている。

島は五穀発祥譚にあるように、米は作ってこなかった。往時から畑に栽培する作物は、主食としていた甘藷、麦（大麦、小麦、裸麦）それに豆類、玉蜀黍、粟と大根などの野菜を少々作ってきた。大戦後昭和38（1963）年頃をピークに、砂糖黍も大量に作り、土質に合って作高もよかったが、流通機構の理由から作らなくなってしまった。その後玉葱、大根その裏作としての西瓜作りという耕作パターンが久しく続いた。

現在、畑では女性や熟年男性の姿が目につく。地割制度も往時の分配原則を時宜に応じて変革してきているが、今や概して形骸化しており、耕作権も慣習的固定化現象を呈しつつある。

その他の島内での生業は、これまでウニの漁獲、もずくの養殖など、年々試行錯誤をしてきており、こ

こ数年は、“海葡萄”の養殖を始めた家がある。いずれにしても少数派で、島の公的建設事業に臨時的に雇われる人々も多いが、総じて壮年者の仕事はさしてない。漁業も往時と異なって近海で行い、漁場から魚市場に直行して捌いてくる。

島の中央を北東にむけて突端の聖域、カベール（神屋原）まで続く道は、途中までは舗装され、その付近の西側地域に新たに観光にそなえてロマンスロードが敷設された。一方で、人の誕生や死に関わりのある海ぎわの井戸（ミーガー）へ降りる、コンクリート造りの階段などは、もう使用する風もないらしく、損傷したまま放置してある。この井戸のほか、祭の時に禊ぎをする時に使うヤグルガー、イザイホーの時のみ使ったイザイガーなどの儀礼用の井戸を入れて、もともと井戸はナナツガーというように七つあった。かつて飲料としての天水利用のほか、カーはポンプで汲み上げて各戸に供給する簡易水道の一時期を経て、昭和 53（1978）年 8 月に水道が敷設されて生活用水も確保され、儀礼にも用いなくなった現在では、いずれも使用されず朽ちるにまかせている。

電話もそれまで小・中学校と区長宅に各一台ずつであったのが、1978 年 10 月に一挙に 63 台に増設された。水道といい、電話といい、敷設の時期から推して、イザイホーが視野におかれての実現であろうことは否めない。

### 3. 画像から見た島の変貌

島の入り口(写真 3・4)

新旧の地割の耕地(写真 5・6)

祭場の変化(写真 11~16) 写真 16...パイカンヤ・シラタルはもともとここに祀られていた

ボンカー...聖域境界としての辻(写真 7・8)

廃屋とグونس(写真 9・10)

## 五. イザイホーの画像の周辺

### 1. 故櫻井満氏の画像

櫻井満氏が初めてイザイホーを観察されたのは、昭和 41(1966)年丙午の時であった。この時は毎年 12 月 13・14 日の 2 日間(現行は 14 日のみ)にわたって行われる行事である、アミウルシも観察されている。この行事はちょうどイザイホーが始まる前日に終わる日程であるため、双方の行事を続けて観察されたものと見られる。因みに、この行事は棹取神が司祭する漁労に関する祭で、いわば男の祭とあって神役以外は女人禁制である。

司祭者たる棹取神も不在となった今日では、本来なら棹取神の指揮のもとに、神に捧げる魚を捕るのであるが、現在では個々に船を出して漁をするかたちで続行している。

この折に櫻井氏はイザイホーおよびアミウルシに関しての画像を、プリント約 75 枚、スライド 83 枚に残している。この時は、1978 年ほどには、人もいない良い時期だったかと思われ、実際その後 1978 年の時であれば、とても構えられない位置や狙いどころでシャッターを切っている。秀逸なアングル画像が、1978 年に比べて多いように看取される。もちろん氏の、事前の入念な資料収集による予備知識に裏付けされてこそのもではあろうが、一体、氏の穏やかな物腰は、話者との信頼関係の構築に幸いし、それに基づいて的確なアングルの時と場に関する情報を得、確保している様子が察知される。この辺りについては、われわれ後学の習うべき点であろう。

1978 年は、見学者、報道関係者などが大挙して渡島し、カメラを構える状況は一段と厳しくなったといえる。この時は櫻井氏が代表の「古典と民俗の会」のメンバーが十数名で訪れ、齋藤も同道した。この折、

櫻井氏は、イザイホー関係のプリント約 110 枚ほどを残されている。2 回目の観察とあって、画像収録のポイントの選定は的確さを増している。

翌年参加者によって、共著『神の島の祭りイザイホー』が出されたが、同著は観察後いち早く纏めた報告書であって、要所要所に画像が挿入されているが、総体的に少量である。しかし、今日からみれば資料的に要点をついたものが少なくない。しかし、いかにも紙質が悪く、見にくいのが難点である。この時にメンバー各自が撮影した画像資料を一堂に集めることが可能であれば、最後のイザイホーの有効な画像による資料集ができよう。

## 2. 画像からイザイホーの要点を探る試み

イザイホーに関する画像は、見学者が多だけに、少なからぬ量が各所各人に所蔵されているであろうが、今回は身近にあるささやかな量の画像から、イザイホーが衰退に至る要因について、何らかの読みとりができるか否か、試みようとの意図がある。

画像から得られる可能性について検討してみたとき、以下のようなろう。

イ 画像ならではの効果的側面 恣意的な文字表現と異なる細部に亘る描写が可能。

例 花挿しの頭部...この例は、先輩格のカミンチュが、新生のナンチュに対してそれとなく助言や細やかな介添えをする一瞬を捉えている(写真 17)。

ロ 画像によって補強される資料 効果的側面を援用して、聞き書き、文献操作による資料の充実をはかる。

例 花挿し遊び (写真 18)

ゲキマーイ(御家廻り)(写真 19~21)

ウケマーイ(桶廻り)(写真 22~24)

## ハ 画像による比較

例 行事に参加するカミンチュの相違。

A カシラタレナンチュの数(写真 25・26)

B 根人の違い アリクヤーの綱引きの画像(写真 27・28)

写真 27・28...アリクヤーの綱引きの儀の時のティルルによると、

「フカマウブグローガ(外間大男が) ホーイホー

ヌクバカマヌクヌク(貫袴を貫き貫き) ホーイホー

シルチュチュビ シルシル(白袴を 締め締めして) ホーイホー」

(『久高島の祭りと伝承』P.41「神々の船 - 久高島の外来神の去来 -」畠山篤、平成 3 (1991) 年)

とあり、1966 年のイザイホーの時は、外間根人はこのティルルの内容そのままの身支度をしているが、1978 年の久高根人はウフチン(白装束)の着流しである。

祭祀施設の変化

A 祭場 (写真 29~31)

B 聖域 (写真 32~38)

写真 36~38 ミーガー...人生儀礼において、清めの時使用する。

二 画像の限界 表層的な資料にとどまりやすい。画像を深く読み込むためには、多様な手法によって得た資料の援用を要する。

・ナンチュと家族、ナナツヤーへの差し入れ

例 可視的ではない事項の調査に基づく資料による裏付け。

A 家族を挙げての協力（写真 39...イザイヤーにこもるナンチュへ差し入れに向う娘と姑）

B 島民の意識（写真 40...聖域に入り込んだ者がいたため海水をまいて祭場を清める）

東方遥拝のために、クバを敷く神女（ヤジク）（写真 41・42）

むすび - 画像と文字表現 -

記述によってイザイホー行事が遂行された状況とその後の衰退、消滅に至った因由について、主に島内の祭祀構造の弛緩、祭祀組織の空洞化、また関連した島の意識の変容について述べた。その一端として、まず家の盛衰の一表現として家屋の分布図を作成し、その際に、主に家の象徴といえるお香炉の動向に注目した。その様相は、島の祭祀の基底をなす家、個々人の祭事に対する心意性を反映しているとみるからである。

また、祭祀の担い手としての神人組織の欠損状況について、イザイホーが挙行されるべき年度に照準を当てて、2002 年、1990 年、1978 年、1966 年の時点での動態について、員数によって神人組織の衰退現象を表示したが、イザイホーによって、新たに神女となるべき候補者が年をおって減少の挙げ句、1990 年には皆無になってしまい、この祭儀の核心的な欠落ぶりが看取される。

さらに、往古の祭政一致の素朴な名残りを留めたムラガシラの消滅などについても言及したが、これらの現象の依拠するところが、イザイホー消滅の因由と通底するとみられるからである。

以上の諸事象の発表過程で、画像資料を利用してまず 12 年の間隔を経た画像の比較によって、変貌の把握を試みた。

最後に、画像と言語表現の各々の機能について、以下のような面も特筆しておきたい。要するに自国においても、研究領域を異にする研究者が、学際的な研究を意図して、各々情報発信を行うにあたって、画像を用いた表現は、理解度を増幅させるために大変有効であるという点についてである。まして諸外国において、複数の国の多様な言語を有する研究者が共同の研究活動を遂行しようとするとき、その機能はいっそう有効となる。つまり、多量の言語を駆使する説明に対して、画像は視覚を通して理解を早めることを可能にするからである。世界のグローバル化が刻々と進む今後にあっては、これらの側面での画像の可能性の展開が大いに期待される。

付記

写真撮影者は次の通りである。写真 18～20、25・26...櫻井満氏、写真 37...山内利秋氏、その他...齋藤ミチ子



- 居住
- 空家
- 貸家
- 島内外を出入り
- x 空地
- 田 グワンスのみ建つ
- 山 拝所
- 三角モ-
- ( は現存せず)
- 聖地など

- 従来の拝所
- A: 大里拝所
- B: 久高拝所
- C: イチャリ拝所
- D: 西銘拝所
- E: アマミキヨ拝所
- F: 下茂拝所

第1図 家々の変容



第2図 久高島全図 ( 1/10000)



写真1 ウトウトするウクリガミ  
(大里家の拝所 2002年)



写真2 ウトウトする外間ノ口  
(外間殿 2002年)



写真3 島の入り口 (1978年)



写真4 島の入り口 (2002年)



写真5 新旧の地割の耕地 (1978年)



写真6 新旧の地割の耕地 (2002年)



写真7 ボンキヤー (1978年)



写真8 ボンキヤー (2002年)



写真9 グونس(1978年)



写真10 グونس(2002年)



写真11 イザイホーの祭場(1978年)



写真12 シラタル(1978年)



写真13 アシャギ(1978年)



写真14 バイカンヤ(1978年)



写真15 バイカンヤ(2002年)



写真16 バイカンヤ内のコーロ(1978年)



写真 17 花挿し ( 1978年 )



写真 18 花挿し遊び ( 1978年 )



写真 19 グキマーイ ( 1978年 )



写真 20 グキマーイ ( 1978年 )



写真 21 グキマーイ ( 1978年 )



写真 22 ウケマーイ ( 1978年 )



写真 23 ウケマーイ ( 1978年 )



写真 24 ウケマーイ ( 1978年 )



写真 25 カシラタレナンチュの数多数 (1966年)



写真 26 カシラタレナンチュの数 8 名 (1978年)



写真 27 外間根人 (1966年)



写真 28 久高根人 (1978年)



写真 29 外間殿 (1978年)



写真 30・31 外間殿のコーロ・火のカン (左: 1978年 右: 2002年)



写真 32 ハンチャタイ (1978年)



写真 33 ハンチャタイ (2002年)



写真 34 クボーウタキのイビ (1978年)



写真 35 クボーウタキ (2002年)



写真 36・37 破損したミーガーへの道 (2002年)



写真 38 破損したミーガー (2002年)



写真 39 家族を挙げての協力 (1978年)



写真 40 島民の意識 (1978年)



写真 41 東方遥拝のためにクバを敷く神女 (1978年)



写真 42 同左 (1978年)

# 画像資料と民俗学

小川 直之(國學院大學文学部教授)

## 1. 学術資料としての画像

本稿では、民俗学の立場から画像資料がどのように位置づけられるのか、また画像資料が民俗研究においてどのような可能性をもつのかについて検討しておきたい。もちろん画像資料というのは、学術研究においては、資料の一部、つまり対象をどのように資料化していくかという、資料化の1つの手段、方法として存在していることはいままでもない。

例えば考古学でいえば、発掘によって遺構が出てきて、そこに土器が残されていた場合、それをそのままの状態に常に保ったり、持ち歩いたりすることはできない。従って、学問的な検討を加えていくときには、それを何らかの形で資料化することが必要になってくる。その方法が、例えば図面であったり、写真であったりするのである。至極当然のことで、民俗学も全く同じで、例えば1つの祭りや儀礼、習俗があっても、その状態を保ったり、持ち歩いたりすることはできないので、何らかの方法で資料化を行ってきた。

つまり、こうしたことからいえば、資料化の手續というのが学問の方法の基礎をかたちづくっていると見える。どのようにして対象を学術資料として定着させていくのかということである。その手続きや方法として民俗学では、「聞き書き」ということを行い、あるいは実際にその祭りや儀礼、習俗を「観察」という手法によって資料化を計ってきた。具体的には「聞き書き」や「観察」で得られた情報を文章によって表現する、これがひとつの方法として行われてきたのである。また、それをスチール写真とか映画によって、画像として資料化し、表現することも行われてきた。さらにまた、物質文化を扱う場合には、民具研究として対象を図面にして資料化し、表現していくことが、特に昭和50年代以降行われてきたのである。

画像というのは、このように対象を資料化し、これによって表現を行っていく手段であるということ、まず認識することができる。しかし画像には一方では、ある情感を伝える機能があることも、敢えていう必要がないことである。写真を見て、そこから私たちは何らかの思いをもつのであり、その思いというのは、感情的な情感だけではなく、学問的な意味での「実感」など、理論的な情感という二面性をもっている。このように画像資料といった場合には、資料化の方法としての画像と、情感を伝える画像という2つの面があるということをお忘れはならない。

資料としての画像とは、当然ながら、いつ、どこで、誰が、何を撮影したのかということが明確になっていない限り、その資料的な価値は低いといわざるを得ない。撮影した人が何を意図して撮影したのかということも重要になる。少なくとも、写されている場がどこであるのかが分かっている必要がある。現在では、写真を撮るという行為は日常的になっているわけで、この時にそれぞれの写真について、いつ、どこで、何を撮ったのかを明確にしておくことは、わけもないことだと思っている人がいると思う。ところがこれがなかなか厄介なことで、例えば私は民俗学を勉強し始めて30年余り経つが、この間に撮影した写真全てについて、こうした情報を確実に残しているのかというと、そうではない。多くの写真について、記憶にとどめていても、その基本情報を放置してしまっている。歳をとって体が動かなくなったり、死没したりして記憶が失われた後に、これらが学問的な画像資料になり得るのかということ、それは難しいといえる。

個人の性格にもよるのであるが、撮影者が画像資料の個々について基本的な情報を残すというのは

そんなに容易ではなく、画像によって対象を資料化していくということは、いうのは簡単だが行うには難しということになる。

國學院大學折口博士記念古代研究所には、折口信夫が沖縄で撮影した写真、それ以外の日本各地で撮影した写真が多くある<sup>(1)</sup>。これらは、いつ、どこで、誰がということがわかっていても、後にそれぞれの写真は、撮影者の意図とは別の読みが行われていくことがある。場面の瞬間を切り取った画像というものは正直な面をもっており、1枚の写真の中には撮影者の意図とは別の情報が収められていて、撮影者以外の者が写真を読み取っていく場合には、撮影者の意図とは別の読みをすることが十分あり得る。

この学術フロンティア事業で扱っている古写真の場合には、このことが大変重要である。撮影者の意図とは別の読み取りが成り立ち得るということは、別のいい方をすると、画像そのものには撮影者が意図しないにも拘わらず、さまざまな情報が盛り込まれているということである。そもそも画像というものには、文章では表現しきれないほどの豊かな情報が含まれているのである。

画像を資料として扱うときに、今回のシンポジウムのタイトルのように「画像資料論」と、「論」を付けなければならない理由は、画像にはここまで述べてきた3つの面があるからである。つまり1つには、画像は、ある対象を学術資料としていくときの手段であり、資料化の方法としての議論が必要になる。それは、写真そのものが何らかの情感を伝える、また、写真の内容には、撮影者の意図とは別の読み方ができる場合があるという特質があるからである。「画像資料」というだけではなく、ここには当然ながら何らかの議論、つまり資料批判を行うという意味での「論」がなければ学問的には十分ではないといえる。画像には、上に述べてきたことの裏返しの面があって、いつ、どこで、誰が撮影したのか明確であっても、その写真は嘘であるという場合がある。たとえば折口信夫の『古代研究』国文学篇に収められた写真には「寄り神をまつたタブの杜」がある。よく知られている写真だが、これは嘘の写真といえる。すでに池田弥三郎が指摘しているように<sup>(2)</sup>、これは能登の一宮である気多大社の写真で、折口は、ある意図をもって杜の手前にある石垣を全部消して使っている。なぜ消したのかというと、石垣があると、折口が持っている古代のタブの杜というものの情感が伝わらないと考えたからであろう。写真をよく見ると、うっすらと石垣が残っており、また、鳥居を写真から抜くことは技術的にできなかったのではないかと思う。

画像を、対象の資料化の手段として、あるいは何らかの情感を伝える手段として、さらに逆に画像からどのように情報を読み取るか、これら3つの面から画像についての議論を進めていくのであるが、表現の手段ということに重きを置くなら画像を加工して、実際とは違ったものとして使っていくこともあるわけで、こうしたことが画像資料のひとつの落とし穴になっているということができる。折口の例ばかりではなく、有名なものとしては湾岸戦争のときに、真っ黒に油まみれになった水鳥の写真が、イラクが軍事作戦の1つとして意図的に原油をペルシャ湾に流した、というアメリカの主張とともにグローバルに配信され、さまざまなメディアで取り上げられたことがある。しかし、この報道写真にはトリックがあったことが検証されており<sup>(3)</sup>、こうしたところに「論」という言葉をつけなければならない理由があるといえる。

## 2. 民俗学における画像資料の利用

それでは次に、民俗学では、画像資料をどのように使ってきたのか、あるいはその利用にどのような可能性があるのかについてみていきたい。まず民俗学関係の学会創設をたどっていくと<sup>(4)</sup>、ここには日本が明治維新を迎え、その後欧米から文明の摂取を盛んに行っていくのと同じような状況を見

ることができる。具体的には表1のように、いわゆる人類学という用語で表現できる、欧米の文明としての学術が日本に入ってきて、東京帝国大学を舞台に明治17(1884)年に人類学会が創設される。坪井正五郎など何人かが参加して組織され、明治19(1886)年には『人類学会報告』という会誌が発行されるが、この会は同年には東京人類学会と改称され、会誌も『東京人類学会報告』となる。この学会の流れは現在も続いていて、途中、明治44(1911)年には『人類学雑誌』という名称になり、現在では『Anthropological Science』として刊行されている。つまり、文明の摂取のなかでいち早く国内に学術が根付いたのは東京帝国大学で、それは欧米から移入された人類学会として組織化されている。

民俗学のような日本国内の、しかも庶民文化に対する視点が徐々に育っていくのは、明治末・大正期からといえる。それは欧米からの文明摂取が少し落ち着き始めてからであった。柳田國男は東京帝国大学で農政学を学び、明治33(1900)年には官僚として農商務省に勤務するが、当時の地方改良運動を批判しながら地方の生活実態に目を向けるようになる。明治42(1909)年には椎葉村の狩猟伝承を中心とした『後狩詞記』、明治43(1910)年には佐々木喜善から聞いた遠野の伝承に基づいた『遠野物語』を執筆し、さらに南方熊楠との交流の中からヨーロッパの民俗学を知るようになる。こうした流れのなかで、大正2(1913)年には柳田國男と高木敏夫編集による『郷土研究』が発刊されていくのである。この雑誌は、すでに明治43年に設立されていた「郷土会」の活動を背後にもちながら発刊されたといえる。「郷土会」というのは、新渡戸稲造を会長に仰ぎ、柳田が主導した会で、その設立は新渡戸が提唱していた「地方学」と、柳田が考えている郷土研究がリンクして行われ、歴史学、地理学、農学などさまざまな分野の研究者が参加し、民俗学固有の会ではなかった。一方では、石橋臥波・坪井正五郎などが中心になって明治45(1912)年に日本民俗学会を設立し、『民俗』という雑誌が刊行されるが、この会は短命で、学問的世界への影響力はなかったといえる。

柳田國男を核にして、現在の民俗学につながる雑誌としては『郷土研究』があるわけだが、これには挿絵はあるものの写真の掲載は行われていない。画像資料である写真が掲載され始めるのは、『郷土研究』が休刊し、その後を継ぐかたちで折口信夫らによって発刊される『土俗と伝説』である。大正7(1918)年8月に創刊される『土俗と伝説』のなかには写真が多く使われている。喜田貞吉が主宰する『民族と歴史』(大正8(1919)年創刊)の場合は表紙に写真や図版が用いられ、その後、柳田國男・石田幹之助・田辺寿利・奥平武彦・岡正雄・有賀喜左衛門が編集をして大正14(1925)年に創刊される『民族』にも画像資料の掲載が行われていく。さらに折口信夫が積極的に関わって昭和2(1927)年に民俗芸術の会が設立され、昭和3(1928)年に創刊される『民俗芸術』では写真が重要な位置をもち、また、昭和3年に創刊される『旅と伝説』にも写真が資料として掲載されている。民俗学関係の研究雑誌を見ていくと、このように大正時代半ばから徐々に写真掲載が行われるようになっており、画像による対象の資料化と表現ということでは、大正時代半ばがひとつの区切りとなっている。明治22(1889)年から刊行が始まる『風俗画報』では、その書名の通り、各地の祭礼や行事等々が盛んに図版で紹介されるが、大正7年の『土俗と伝説』以降は、学術雑誌にも写真掲載が行われていくのである。

例えばここであげた『土俗と伝説』、『民俗芸術』、『民族』について、具体的にどのように画像資料が使われているのかを見ていくと、表2のように、まず初めの『土俗と伝説』第1巻1号では、ニコライ・ネフスキーによる陸中遠野の「獅子踊り」写真が表紙に使われ(図1)、さらに折口信夫が「岡本彦七」の名で執筆した「だいがくの研究」には「だいがく」の写真と図(図2)、佐々木喜善の「おしら神異聞」には「おしらさま」の写真が掲載されている。『土俗と伝説』は結局は第1巻4号で終刊

表1 民俗学関係学会創設と会誌の発行

西暦	和暦	学会及び誌名
1885	明治 18 年	人類学会 東京人類学会
1886		『人類学会報告』『東京人類学会報告』
1887		
1888		
1889		『風俗画報』
1890	明治 23 年	
1891		
1892		
1893		
1894		(明治 27 年 11 月 『國學院雑誌』 創刊)
1895	明治 28 年	
1896		
1897		
1898		
1899		
1900	明治 33 年	
1901		
1902		
1903		
1904		
1905	明治 38 年	
1906		
1907		
1908		
1909		
1910	明治 43 年	
1911		『人類学雑誌』
1912		日本民俗学会 柳田國男・高木敏雄
1913		『民俗』『郷土研究』
1914		
1915	大正 4 年	
1916		478 号
1917		折口信夫 4 卷 12 号
1918		『土俗と伝説』 喜田貞吉
1919		4 号 『民族と歴史』
1920	大正 9 年	
1921		
1922		改称
1923		日本社会学会 『社会史研究』
1924		『社会学雑誌』

1925	大正 14 年			柳田國男ら 『民族』				
1926								
1927							折口信夫ら	
1928			折口ら				『民俗芸術』『旅と伝説』	
1929			『民俗学』	4 巻 3 号				
1930	昭和 5 年			岡村千秋				
1931			『郷土研究』復刊			5 巻 6 号		
1932							『ドルメン』	
1933				5 巻 11 号				
1934			日本民族学会	7 巻 7 号		関敬吾		民間伝承の会
1935	昭和 10 年		『民族学研究』			『昔話研究』		『民間伝承』
1936								
1937								
1938								
1939						5 巻 7 号		
1940	昭和 15 年							
1941		日本人類学会						
1942								
1943								
1944								17 巻 1 号
1945	昭和 20 年							
1946								
1947								
1948								
1949					『岡山民俗』			日本民俗学会
1950	昭和 25 年							
1951		『地方史研究』						
1952								
1953							『日本民俗学』	
1954					『山陰民俗』『民俗』			
1955	昭和 30 年							
1956			『社会と伝承』					
1957					『西郊民俗』			
1958							『日本民俗学会報』	
1959								
1960	昭和 35 年							
1961								民俗芸能学会
1962								『民俗芸能』
1963								
1964								
1965	昭和 40 年			昭 52				
		『Anthropological Science』『社会学評論』『民族学研究』			『日本民俗学』昭和 45 年 1 月から			

となるが、各号とも表紙に民俗写真を掲げ、本文中にも何枚かの写真を使っているのであり、民俗学関係の学術雑誌では、これが画像資料利用の嚆矢といってよい。次の『民族』になると、民俗学の研究者だけではなく、鳥居龍蔵や原田淑人、浜田青陵など、人類学や考古学研究者たちも参加していて、多岐にわたる画像資料が使われているのが特色である。

個々の掲載写真についての説明は省くが、現時点までに検索を終えた、大正7(1918)年から昭和5(1930)年6月までの学術雑誌・研究書における掲載画像資料一覧をあげると表2のようになる。写真を論文などに使って何らかの表現を行っていくということでは、早川孝太郎や折口信夫が積極的であるのがわかる。柳田國男の論文でも写真が皆無というわけではなく、昭和3(1928)年6月の『民俗芸術』第1巻6号の「島の歴史と芸術」に「布さらし節」の写真、昭和4(1929)年4月の『民俗芸術』第2巻4号の「人形とオシラ神」に「鳥取の流し雛」「紀州湯川明神の人形」「八王子の車人形」の写真などが使われている。ただし、これらについては柳田自身が掲載を指示したのか、雑誌編者が関連写真を挿入していったのかは不明である。

画像資料による民俗の資料化と表現ということでは、『土俗と伝説』『民俗芸術』という雑誌が重要であることは明らかである。『郷土研究』の表紙は挿絵であったのが、『土俗と伝説』表紙では写真となり、『民俗芸術』では口絵写真を付けて解説がなされる(図3)というように、画像資料の扱いが重くなっていくことも指摘できる。さらに注目されるのは、折口信夫の「だいがくの研究」を見ると、ここでは図2のように写真と図解とが並置されていることである。これは現在の学問水準からいうなら特記されることではないかもしれないが、大正7年時点で、論文のなかでこうした表現の方法をとっていることは刮目すべきだといえよう。折口の場合、こうした手法は図4A・Bのように大正12(1923)年の沖縄調査の時にも行っており、対象である民俗事象の資料化には極めて高い客観性を与えていたといえることができる。

学術雑誌・研究書における掲載画像資料一覧以降のものでは、やや時代は下るが、昭和12(1937)年5月に、渋沢敬三が主宰したアチック・ミュージアムが刊行する『民具問答集』では、図5のように写真カタログともいえるような、対象写真を掲げてこれについての解説を施していくという表現方法がとられている。現在、盛んに作成公開されつつあるWeb上での資料データベースやデジタルミュージアムの手法は、多くが基本的にはこの『民具問答集』の延長線上にあるといっても過言ではなからう。『民具問答集』の場合には、それぞれの民具の写真がなければ全く意味のないものになってしまうわけで、対象が写真によって表現されていることが重要な意味をもっている。

### 3. 柳田國男と折口信夫の画像資料の位置づけ

大正期から昭和初期にかけての民俗学における画像資料利用の概略は以上のようなになるが、ここで当時の柳田と折口の画像資料の位置づけについて触れておくと、両者には大きな差があるといえる。

例えば柳田國男は、郷土会のメンバーを中心に、民家研究会の白茅会の会員を加えて大正7年8月15日から25日にかけて内郷村で共同調査を行っている。この調査は郷土会に参加しているさまざまな分野の研究者たちが1つの村落で調査を行ったもので、いわゆる組織的なフィールドワークの嚆矢といえることができる。参加しているメンバーは柳田以下、地理学や農学、植物学など多分野の人たちで、もちろん総合的な村落調査としても初めてのものである。この調査は、事前に調査内容の検討が行われ、調査項目を作成して臨むというもので、現在は神奈川県相模湖町となっている内郷村の小学校長・長谷川一郎、青年団長・鈴木重光などによる全面的なバックアップがあって実現し、郷土誌の作成が目指された<sup>(5)</sup>。しかし、調査終了後の柳田の発言を見ていくと、総合的な村落共同調査は失

敗であったと、成果については否定的である。調査結果は、参加者が『都市及農村』という雑誌に論考、見聞録、エッセイを執筆するにとどまっておらず、柳田はこの調査が失敗だったことを踏まえて「村を觀んとする人のために」という論考を著わし、フィールドワークの方法について再説していく<sup>(6)</sup>。また、「相州内郷村の話」と題して共同調査の成果を発表し<sup>(7)</sup>、大正 11 (1922) 年 3 月に発刊する炉辺叢書の 1 冊である『郷土誌論』(郷土研究社)に収録していくのである。

この「相州内郷村の話」では、実際の現地調査では「最優良の人足が、延べにして九十二、三人程出たのであります。とんと田植を見たやうな騒ぎで、いや此二万分一図は古いことの、わざわざ印刷して持つて往つた一万分一が違って居るから直すのと、其は其は綿密な穿鑿を致しました」と、調査の充実ぶりを述べ、続いて「カメラなども大小四つか五つ有りまして、少くとも百枚以上ぱちぱちとやりました」と言っている。そして、この調査については「同行の諸君の意見は未だちつとも承はつて居りませぬが、私だけの実験は、一言を以て申せば村落調査と云ふものは、非常に面白いと同時に、非常に六つかしい仕事だと云ふ、是だけであります」と感想を述べている。

大正 7 (1918) 年の内郷村調査には、このように複数のカメラが持ち込まれ、当時としては多くの写真が撮影されているが、「某会の席上にて」と副題された「相州内郷村の話」では、発表時には「残念ながら今晚は其地図も写真も、悉皆持参することを忘れまして」と写真の提示は行われていない。これは意図的に持参しなかったのか、うっかり忘れたのかはわからないが、少なくとも調査後に『都市及農村』に寄せた論考にも写真の使用は行っていないのであり、こうしたことから、どうも柳田國男は画像資料というものに重きをおいていなかったのではないかと思われる。口頭発表にも論考にも写真を使っていないことには何らかの理由があると考えられよう<sup>(8)</sup>。これについては今後の課題となるが、ここで指摘できるのは、柳田の文章を見ていくと、その表現は紀行文が土台になっていることができ、これは画像でいえば、動画の世界が柳田の世界だといえるのではないかということである。描写の連続性のなかで思索を展開し、結論を導き出していくという方法で、瞬間的にある場面を写し取るスチール写真の発想はなかったのではないかと思う。

これに対して折口信夫の場合は、大正 10 (1921) 年の沖縄調査、壱岐調査にカメラを持参して撮影を行い、自分の著作にも画像を入れていく。先述したように大正 7 年 8 月に『土俗と伝説』に発表する「だいがくの研究」では、「だいがく」の写真と図解とを並置して論述し、前掲したように大正 12 (1923) 年の沖縄調査でも、写真と図解を並行して資料化を進めている。

このような折口の画像によって資料化を進めるという発想については、例えば大正 4 (1915) 年 4 月 22 日の「日記」の記載内容からその一端をうかがうことができる。4 月 22 日の「日記」の、25 日の「追ひ書き」には「ひる三越で糸はがき写真をとる。金ちゃんと喜三ちゃんとの為である。よっぽど手札形にとらうとしたが、例の焦慮がゆるさなかった。子どもの時から、瞬間の猶予もなく対象を把握せんとした癖が、今に残ってゐる」<sup>(9)</sup>とある。重要なのは「瞬間の猶予もなく対象を把握せんとした癖」という表現で、ここからは瞬時にしてある情景を読み取っていくという感覚が折口のなかにはあったということである。

つまり、柳田國男の文章が紀行文の発想で、画像でいうなら映画の世界ならば、折口信夫はスチール写真の世界といえるわけで、何十分の一、何百分の一秒というシャッタースピードで情景を写し取っていくのと同じようにして、瞬時に対象を捉えて短歌として表現していくことを繰り返している。いわば写真表現と近い感覚が折口の中にはあったと思われるのであり、これは、写真の世界でいうなら、ほぼ同時代に「光と其諧調」を重視する風景写真論を展開した福原信三の「俳句写真論」と相通ずるところがあるようにも思われる<sup>(10)</sup>。

折口がさまざまな人に出した書簡<sup>(11)</sup>を見ていくと、大正7年4月12日付けで胡桃沢勘内に宛てた封書では、今度、自分が編輯人になって『伝説と民俗』(実際は『土俗と伝説』という雑誌名で発刊)という雑誌を出すことになったが、これは「まじめな、かたはら、多少通俗的に、絵や、写真も入れて出すことになってみます。何分の、御手助けを願はねばなりません。今度は、ねふすきいさんも、書いてくれるはずになって居ります。どうぞ、小篇・報告・写真の類、御めぐみを願ひます」と記している。「通俗的に、絵や写真も入れて」と言っているが、この表現は次元を下げてということではなく、当時の社会情勢にあわせて出版物にも絵や写真を入れたいと理解できる。明治33(1900)年に私製葉書が解禁になって絵葉書の発行が始まり、ニュース性の高い絵葉書が次々に発刊され、多くの人がこれを買って求めたという状況があったのである。折口は画像のもつ有用性をいち早く認識していたと考えることができよう。折口の書簡では、明治40(1907)年9月2日付けで蛸谷金太郎に宛てた葉書は絵葉書だし、大正8(1919)年9月8日には郡上八幡から柳田に宛てた葉書には「焼けた町々の写真は、その節、下から見舞に来た人々が、買って帰って、一枚もありません」として、焼け残った郡上八幡全景絵葉書を使っている。さらに、大正9(1920)年10月頃と思われる新野の仲藤増蔵宛の未投函書簡では、明年1月に参る際には「写真機持参仕り、舞人などの風姿永遠に残し置き度存じ候」としている。

民俗学界における画像資料論については、菊池暁『柳田国男と民俗学の近代 奥能登のアエノコの二十世紀』(吉川弘文館、平成13(2001)年10月)、矢野敬一「戦前における映像メディアと『郷土』の表象 - 熊谷元一『会地村 一農村の写真記録』と民俗学 - 」<sup>(12)</sup>などにとどまっているのが現状である。画像資料論については、学界での議論は極めて低調であったといわざるをえないのであるが、矢野はこの論文で熊谷元一の『会地村 一農村の写真記録』について、当時の社会情勢のなかでの位置づけを試みるとともに、民俗学における写真利用について分析している。熊谷の写真帳の位置づけはともかくとして、民俗学における写真利用の分析については、状況的であり、しかも画像資料に積極的であった折口信夫やアチックミュージアムに言及されておらず十分とはいえないが、柳田國男とその周辺において確認できるのは「記録と表現の技法としての写真は昭和10年代前半と後半とでは、その位置付けに大きな転換があるという点だ。萌芽的ではあれ、写真を調査の技法の一環として受け止めようという姿勢から、逆に写真の記録手段としての独自性への関心を後退させていく姿勢へと。一言で言えば転換の内実はこのようなものとなる」という重要な指摘をしている。

矢野のいうように、いわば民俗学の本流での画像資料の認識と扱いが、民俗学における画像資料論の低調さにつながっていることはいうまでもなからう。しかし、折口信夫や渋沢敬三・アチックミュージアムを視野に入れるなら、やや異なった状況が見えてくることは、前述の通りである。

すでに別稿で述べたように<sup>(13)</sup> 國學院大學折口博士記念古代研究所には、大正10(1921)年以降、折口あるいは調査同行者が撮影した民俗写真が約2200点、折口のコレクションになる戦前までの歌舞伎絵葉書が約2500点残されており、画像に対する思いは柳田のそれとは全く異なっていたということができそうである。折口による画像資料については別途稿を改めて論じることを考えているが、画像による対象の資料化と表現ということでは、早川孝太郎、そして昭和初期以降の渋沢敬三・アチックミュージアム資料が重要なもので、あわせての検討が必要になってくる。未刊ながら、本学術フロンティア事業では平成14年度に「近代庶民生活と画像資料」と題して、須藤功、香月洋一郎、斉藤多喜夫、田辺幹、山内利秋、そして小川直之によるシンポジウムも行っており<sup>(14)</sup>、この成果刊行もあわせて行っていく必要がある。

#### 4. 画像資料から民俗を読む

学史的には検討しなければならないことが多くあるが、今後の画像資料論にむけて、従来の民俗学の成果をもとにして、ここで画像資料の可能性について検討しておくことにする。

画像資料論を行っていくときに、まず初めに取り上げなければならないのは、アチックミュージアムである日本常民文化研究所が、渋沢敬三の発案で行った絵巻物の研究である。渋沢は昭和4(1929)年に早川孝太郎に誘われて奥三河に行き、花祭りや当地の生活のあり様などを見学する。そして、花祭りを中心とした奥三河の暮らしを記録映画化していく。渋沢は民俗の映像記録をいち早く手がけていくのであり、こうした画像資料の着想が基になったとも思われるのが、昭和15(1940)年に開始される、画像記録ともいえる絵巻物を用いた生活文化研究である。アチックミュージアムによって絵巻物研究会として開始され、第二次世界大戦によって中断した後、昭和30年代に再開されて絵巻物の複写を行いながらそこに描かれている場面の解説、各場面に登場する行為やものについての分析が行われていく。その成果が『絵巻物による日本常民生活絵引』全5巻<sup>(15)</sup>として刊行されるのであり、この研究は今日的な画像資料研究の先駆的な業績として、高い評価が与えられている。

この成果を現在から振り返ってみて、こうした研究が意味するところを考えると、これは描かれた画像を見ながら民俗を発見していく作業だといえよう。つまり、定型的な、伝承されている生活様式を見出ししていく研究だと理解することができるのである。こうした手法は現在私たちが写真を撮影するとき、あるいは古写真を見るときにつなげることができるわけで、画像から民俗を発見していく、そしてその画像の細部の把握ということが画像資料論のなかでは必要であるといえよう。

『絵巻物による日本常民生活絵引』では、図6のように画像の細部に番号をつけて、これに従って逐一説明しているのであって、細部の読み取りを行っていることがわかる。これとまったく同じ手法で編まれたのが須藤功編の『写真でみる日本生活図引』全9巻(弘文堂、平成5(1993)年刊)である。この本の第1巻である「たがやす」は、各章の概説を編者の須藤が執筆し、個々の写真の概説と写し込まれた細部の説明は筆者が執筆した。編者の須藤が写真を選び、解説すべき細部に番号を付したものを渡され、これに従って解説を行った。つまりは、番号が付された細部の読み取りと、1枚の写真全体が表している主題を読解していくことが要求されたわけで、この作業が民俗の発見と細部の読み取りということになる。

しかし、この作業は先程も述べたように、撮影者の意図を離れて筆者がこの写真をどのように読み取っていくかということであり、撮影者の意図と同じように筆者が読み取っているとは限らない。画像資料論というような議論が必要になる理由は、こういうところにもあるわけである。たとえば図7にあげた写真は、須藤によって「山村の畑」という画題が与えられ、これに従って写真解説と細部の説明を行ったが、写真の読みによっては、手前に写っている6人の少年たちの農作業というところに撮影者の意図があったのかもしれない。そうであるならば、確かに山村の畑作業には違いはないが、少年の集団作業に大きな意味があるともいえよう。

図8の写真の場合は、母親が赤子をあやしている場面と水田の脇の小屋のようなところで家族がそろって昼食をとっている場面である。これらの写真は「昼どき」であることには違いなく、民俗学からはここにあるような読解ができるが、この一家団欒の光景は、例えば家族史からの観点、歴史学からの観点からだとどうなるのか、母親が赤子をあやしている写真は、この場面をめぐって家政学や教育学からさまざまな議論が可能になってくる。このように考えると、画像資料をめぐっては資料論と、もうひとつ非常に重要なことは、画像読解をめぐる議論を行い始めると、ひとつの学問分野

ではおさまらない、濃密な情報が写真には内包されているということである。1枚の写真には、その読解に関して深い学際性が要求されるのである。

画像資料論を展開させるのなら、そこには学際的な研究の必要性が生じてくるわけで、さらにこれを推し進めていくと、近代以降創り上げられてきた学問的なディシプリンの組み替えが課題となってくる。たとえば画像資料学会のような学会が立ち上がってこない、1枚の画像資料を十分に活用していくことができないのではなかろうかということである。

もうひとつ例をあげると、図9は京都市文化財保護課が刊行した『一枚の写真 - 近代京都庶民生活写真引き -』（平成11(1999)年11月）に収録されたものである。これは『写真でみる日本生活図引』と全く同じ手法で作成されたもので、ここにある場面は、民俗学だけでは十分な説明ができないというまでもない。左側の「お祓いを受ける兵士たち」の読解には、近代史とか神道史の研究者の参画が必要になるし、右側の「戦地での慰問団」についても近代史、芸能史などの研究者の読みが重要になる。

図10は、私が編集を行った神奈川県『山北町史』別編民俗（山北町、平成13(2001)年3月）の写真読解である。これも『絵巻物による日本常民生活絵引』・『写真でみる日本生活図引』と同じ手法で写真を扱ったもので、画像資料が地域史研究のなかでどのように活用でき、文章による表現と比べてどのような利点があるのかといった議論が必要になってくる。自治体史編纂のなかに図録編を作成することは従来から行われ、ビジュアルであるということにその特色がいわれてきたが、さらに一歩深めて、画像資料の資料的批判や歴史叙述のなかでの意味を検討する必要がある。

次の図11は、香月洋一著の『景観のなかの暮らし - 生産領域の民俗 -』（改訂新版）（未来社、平成12(2000)年12月）に収録されているもので、ここでは写真からある見解を叙述していくということが行われている。香月は写真と図を組み合わせることで、ひとつの情報を読み取って表現しようという手法を示している。単に写真を読解していくというのではなく、そこに別の表現を加えることで新たなものを発見していくという手法が目できよう。

ここまでは、1枚の写真の読解と細部の読み取りの例だが、図12はこれらとは違って、変化をどのように表現していくかという例である。これは滋賀県立琵琶湖博物館が刊行した『私とあなたの琵琶湖アルバム』（平成9(1997)年10月）から採ったもので、同じ場所を昭和30年代と現在とを比較して見せている。つまりは変化を叙述するという手法を画像に与えているのである。同じことを文章で行えるのかといえば、それは無理ということになる。次の図13A・Bは、昭和30(1955)年3月に長野県教育委員会から発行されたもので、1つのモデルとなり得る優れた写真集といえる、「写真信濃風土記」2として発刊された『雪まつり』で、いうまでもなく阿南町新野が舞台になっている。これは発刊前年の昭和29(1954)年に新野で、ある意図をもって写真を撮り、その写真によって暮らしぶりを叙述している。つまり、共時的に生活全体を写真によって資料化して表現したものである。図14は『山に生かされた日々 新潟県朝日村奥三面の生活誌』（「山に生かされた日々」刊行委員会編、昭和59(1984)年12月）から引用したもので、ダム湖に水没する三面に撮影者が1年住み込んで村人たちの生活をつぶさに撮影して編んだものである。共時的な生活叙述を写真によって行っているのである。

画像資料から民俗を読むといったときに何ができるのかというと、それは、1つには民俗の発見と細部の叙景であり、もう1つは変化の叙景、文章では限界がある景観などの変化を画像によって表現していく、さらにもう1つは、共時的に暮らしのありさまを叙景していく手法で、これは写真民俗誌とも言い得よう。

これらとは異なった手法での、画像資料のもう1つの可能性をあげておくと、柳田が主宰した民俗学研究所が編集して昭和30(1955)年4月に朝日新聞社が発行した『日本民俗図録』の手法があげられる。この書は、主に昭和初期に行われた、所謂山村調査や海村調査、そして戦後の離島調査などによって集められた写真を編集したもので、柳田國男監修となっている。図15にはそのなかの「喪服と新墓」の頁で、ここには点数は少ないものの比較の意図がうかがえる。こうした手法は、主に図版を用いたものだが、同じく民俗学研究所編の『年中行事図説』(昭和28(1953)年刊、昭和50(1975)年10月復刊、岩崎美術社)にもうかがうことができる。ある民俗事象を写真によって全国的に比較することは容易ではなく、先の『日本民俗図録』は、おそらく偶然に撮影されたものを用いているために、その萌芽が見られる程度にとどまっているのである。これに対して、図16にあげた松村利規による「宮崎の精霊棚」<sup>(16)</sup>は、1つの県とはいえ宮崎県内の盆棚を実見しながら写真に撮って歩き、これを用いて比較してみせた論文で、画像資料を用いた優れた論文といえる。この論文で用いている比較写真は、いうまでもなく偶然に撮影されたものではなく、比較を意図して撮られたものである。これを並べていくことによって画像から盆棚の形態が比較ができ、文章では見えてこない新たな問題や特色が明確になっている。

画像資料を用いて対象を比較する場合には、偶然的に撮影された写真では十分ではないことはいうまでもなく、比較すべき基準を定めての撮影が必要になってくる。考古学や民具研究といった物質文化研究では、ものの比較を見据えた撮影基準が議論されているが、静物以外についてはまだ実例が少なく、撮影基準も含めて今後の課題となろう。

本稿で検討したかったことは、さまざまな写真を画像資料として学問的に位置付けていくためには、資料論として議論を行っていくことが必要で、これを踏まえて表現の手段としていかななくてはならないということである。また、資料論として議論することからは、画像がもっている高い学際性が明らかになってくるのであり、それによって資料を基にした新たな学問的なディシプリンを立ち上げていくということが必要ではなからうかということである。

注

- (1) 小川直之「折口信夫のまなざし」(『折口信夫全集月報』22、中央公論社、平成9(1997)年1月)、小川直之「折口信夫研究の資料群」(『日本文学論究』第61冊、國學院大學國文學會、平成14(2002)年3月)などで概要を述べた。
- (2) 池田彌三郎「折口信夫の『古代』 - あとがきにかえて - 」(池田編『講座古代学』中央公論社、昭和50(1975)年3月)で「折口は石の鳥居も石垣も気に入らず、さりとて鳥居はうまく塗りつぶせないで、石垣だけを消してしまったのだ。だからこれは写真とはいえず、けっして実景ではない」、「この修正写真の『たぶの杜』は、いわば折口の心象風景であった」と述べている。
- (3) 新藤健一『新版 写真のワナ』情報センター出版局、昭和59(1984)年4月
- (4) 福田アジオ「日本民俗学研究史年表」(『国立歴史民俗博物館研究報告』第2集、昭和58(1983)年3月)をもとに作成した。
- (5) 郷土会による内郷村調査については、小川直之「柳田國男と郷土会・内郷村調査」(『國學院大學紀要』第40巻、平成14(2002)年2月)に詳述した。
- (6) 『都市及農村』(洛陽社)の第4巻11号(大正7(1918)年11月)には、柳田國男「村を觀んとする人の為に」、小田内通敏「内郷村踏査記」、石黒忠篤「内郷村の二日」、今和次郎「内郷村にて見たる居住状態」が掲載され、柳田の「村を觀んとする人の為に」は第5巻2号まで4回にわたって連載されている。
- (7) 大正7(1918)年9月8日の「流行会」での発表
- (8) 柳田為正『父柳田國男を想う』(筑摩書房、平成8(1996)年4月)のなかで、柳田は貴族院書記官長退職の記念に写真機

と録音機をもらっているし、ドイツ製のテナックスカメラも持ち、D P 器具一式もあったが、ほとんど使うことがなかったことを述懐している。

- ( 9 ) 『折口信夫全集』34 巻(中央公論社、平成 10(1998)年 8 月)所収
- ( 10 ) 福原信三は、「国際サロン鑑査について」(『日本写真会会報』第 2 巻 5 号、昭和 2 (1927)年 5 月)で、「私にとっては光と其諧調が私の魂其のものである」「光と其諧調は福原信三の名によって代表されて居る個性そのものである」などと述べている。「諧調」というのが注目される表現である。
- ( 11 ) 『折口信夫全集』34 巻(中央公論社、平成 10(1998)年 8 月)所収
- ( 12 ) 矢野敬一「戦前における映像メディアと『郷土』の表象 - 熊谷元一『会地村 一農村の写真記録』と民俗学 - 」『日本民俗学』235 号、日本民俗学会、平成 15(2003)年 8 月
- ( 13 ) 小川直之「折口信夫のまなざし」(『折口信夫全集月報』22、中央公論社、平成 9 年(1997)年 1 月)、小川直之「折口信夫研究の資料群」(『日本文学論究』第 61 冊、國學院大學國文學會、平成 14 年 3 月)
- ( 14 ) 学術フロンティア事業「劣化画像の再生活用に関する基礎的研究」によるシンポジウム「画像資料と近代生活誌」、平成 13(2001)年 12 月 8 日
- ( 15 ) 初版は昭和 41(1966)年から角川書店によって刊行され、昭和 59(1984)年 8 月に神奈川大学日本常民文化研究所の編集で平凡社から改訂新版が刊行されている。
- ( 16 ) 松村利規「宮崎の精霊棚」『民具研究』第 120 号、日本民具学会、平成 11(1999)年 10 月

表2 民俗学系学術雑誌・研究書収録写真一覧(大正7(1918)年8月~昭和5(1930)年6月) ※写真表題欄の●は表題が銘記されていないもの

写真表題	撮影者	著者	論文名・書名	雑誌・巻号	発行年月	西暦年月	掲載頁	その他
獅子踊り(陸中遠野)	ねふすきい	岡本彦七	表紙	『土俗と伝説』1-1	大正7年8月	191808	表紙	
第一図(七いしがく)		佐々木喜善	『たいがく研究』	『土俗と伝説』1-1	大正7年8月	191808	10	
(おいらさま)		佐々木喜善	『おいら神異聞』	『土俗と伝説』1-1	大正7年8月	191808	21	
(おいらさま)		佐々木喜善	『おいら神異聞』	『土俗と伝説』1-1	大正7年8月	191808	23	
おぼすけ(大助)人形		ネフスキー	表紙	『土俗と伝説』1-2	大正7年9月	191809	表紙	
(まじない)人形		ネフスキー	『遠野のまじない人形』	『土俗と伝説』1-2	大正7年9月	191809	15	
(まじない)人形		ネフスキー	『遠野のまじない人形』	『土俗と伝説』1-2	大正7年9月	191809	16	
(まじない)人形		ネフスキー	『遠野のまじない人形』	『土俗と伝説』1-2	大正7年9月	191809	16	
かくらさま 陸中遠野		ネフスキー	表紙	『土俗と伝説』1-3	大正7年10月	191810	表紙	
(たいがく)		岡本彦七	『たいがくの研究』2	『土俗と伝説』1-3	大正7年10月	191810	13	
三社田楽 東京浅草		高柳光寿	表紙	『土俗と伝説』1-4	大正7年11月	191811	表紙	
第一図(びんざさら)		高柳光寿	『びんざさら祭り』	『土俗と伝説』1-4	大正7年11月	191811	38	
第三図(びんざさら)		高柳光寿	『びんざさら祭り』	『土俗と伝説』1-4	大正7年11月	191811	38	
(重軽石・カ石)		本山桂川	『重軽石とカ石』	『民族』1-1	大正14年11月	192511	150	
第一図		小牧実繁	『北陸地方に於ける漁民の季節的移動に関する報告』	『民族』1-1	大正14年11月	192511	167	
第二図		小牧実繁	『北陸地方に於ける漁民の季節的移動に関する報告』	『民族』1-1	大正14年11月	192511	168	
第三図		小牧実繁	『北陸地方に於ける漁民の季節的移動に関する報告』	『民族』1-1	大正14年11月	192511	168	
第四図		小牧実繁	『北陸地方に於ける漁民の季節的移動に関する報告』	『民族』1-1	大正14年11月	192511	169	
第五図		小牧実繁	『北陸地方に於ける漁民の季節的移動に関する報告』	『民族』1-1	大正14年11月	192511	170	
第六図		小牧実繁	『北陸地方に於ける漁民の季節的移動に関する報告』	『民族』1-1	大正14年11月	192511	170	
第七図		小牧実繁	『北陸地方に於ける漁民の季節的移動に関する報告』	『民族』1-1	大正14年11月	192511	171	
第八図		小牧実繁	『北陸地方に於ける漁民の季節的移動に関する報告』	『民族』1-1	大正14年11月	192511	172	
第一図 成廣澳ベシュレンにある石造物		鳥居龍蔵	『台湾の古代石造遺物に就て』	『民族』1-3	大正15年3月	192603	123	
第二図 成廣澳ベシュレンにある石造物		鳥居龍蔵	『台湾の古代石造遺物に就て』	『民族』1-3	大正15年3月	192603	124	
第三図 草間に露出する石造物		鳥居龍蔵	『台湾の古代石造遺物に就て』	『民族』1-3	大正15年3月	192603	125	
モールス先生(大正十四年一月撮影)		松村 暁	『モールス先生の人類学上に於ける功績』	『民族』1-3	大正15年3月	192603	142	
第一図		原田淑人	『楽浪の画像専』●	『民族』1-4	大正15年5月	192605	3	
第二図		原田淑人	『楽浪の画像専』●	『民族』1-4	大正15年5月	192605	4	
第三図		原田淑人	『楽浪の画像専』●	『民族』1-4	大正15年5月	192605	5	
第四図		原田淑人	『楽浪の画像専』●	『民族』1-4	大正15年5月	192605	6	
第五図		原田淑人	『楽浪の画像専』●	『民族』1-4	大正15年5月	192605	7	
殷墟小屯子村落北方		浜田青陵	『殷墟の白色土器』	『民族』1-4	大正15年5月	192605	104	
殷墟発見白色土器 京都帝国大学蔵		浜田青陵	『殷墟の白色土器』	『民族』1-4	大正15年5月	192605	105	
勳黒色雷紋土器(上) エウモルフオブローロス氏所蔵		浜田青陵	『殷墟の白色土器』	『民族』1-4	大正15年5月	192605	107	
北方文明研究会小集		内藤吉之助	『兎戯と法制史』	『民族』1-5	大正15年7月	192607	112	
バツテルハイム記念碑除幕式		赤松秀景	『Hautes Etudes』	『民族』1-5	大正15年7月	192607	130	
支那発見彩色土器(京都帝国大学蔵)		浜田青陵	『漢式の彩色土器』	『民族』1-6	大正15年9月	192609	84	
満州蘆家屯 墓発見彩色土器(京都帝国大学蔵)		浜田青陵	『漢式の彩色土器』	『民族』1-6	大正15年9月	192609	84	
支那発見磨研模様土器(京都帝国大学蔵)		浜田青陵	『漢式の彩色土器』	『民族』1-6	大正15年9月	192609	89	
●		長山源雄	『香掛の風習』	『民族』1-6	大正15年9月	192609	154	

これは神の御座の入口なる奥の六脚神門の前に額突いて雨乞ひの熟袴を擧げてゐるところ。ここは巫女達の折願する所で、一般人の礼拝する所はこの前面の一棟である					「鳩間島記事」	『民族』2-1	大正15年11月	192611	151	
大正12年旧八月七日の雨乞ひの時、友利御嶽の神木清葉(斜)に尻ゆるが其幹の下で撮す。前列白衣、頭に長簪を頂ける四人が巫女、後の男が総代の大工恵理君、石垣の内は神の御座である。		宮良当壮		「鳩間島記事」		『民族』2-1	大正15年11月	192611	152	
第一図		喜田貞吉		「東北石器と支那文化」	『民族』2-2		昭和2年1月	192701	4	
第二図		喜田貞吉		「東北石器と支那文化」	『民族』2-2		昭和2年1月	192701	7	
第三図		喜田貞吉		「東北石器と支那文化」	『民族』2-2		昭和2年1月	192701	8	
上図は戸金の神楽 幕の舞 才藏は多田翁		早川孝太郎		「三州戸金の神楽村及び神楽の才藏のこと」	『民族』2-2		昭和2年1月	192701	153	
下図は戸金神楽の才藏多田愛之助		早川孝太郎		「三州戸金の神楽村及び神楽の才藏のこと」	『民族』2-2		昭和2年1月	192701	153	
●		橋浦泰雄		「五島の鬼の火」	『民族』2-2		昭和2年1月	192701	195	
(法然上人絵伝から)第2図		高橋健自		「直垂の起原」	『民族』2-3		昭和2年3月	192703	6	
(文永賀茂祭草子から)第3図		高橋健自		「直垂の起原」	『民族』2-3		昭和2年3月	192703	7	
(春日験記一七から)第4図		高橋健自		「直垂の起原」	『民族』2-3		昭和2年3月	192703	8	
(融通念仏縁起下から)第5図		高橋健自		「直垂の起原」	『民族』2-3		昭和2年3月	192703	8	
●		藤木喜久磨		「新島に於ける子守のこと」	『民族』2-4		昭和2年5月	192705	167	
●		藤木喜久磨		「新島に於ける子守のこと」	『民族』2-4		昭和2年5月	192705	168	
●		宮良当壮		「石垣島のミンサー」	『民族』2-4		昭和2年5月	192705	178	
周防国吉敷郡下宇野合村養福巴形銅器(約二・五分一丈)(東京帝室博物館蔵)		津田敬武		「太陽崇拜と宗教観念の発達」	『民族』2-5		昭和2年7月	192707	4	
池城墓の外景	島袋源七	伊波普猷		「南島古代の葬儀」	『民族』2-5		昭和2年7月	192707	18	
池城墓の内部	島袋源七	伊波普猷		「南島古代の葬儀」	『民族』2-5		昭和2年7月	192707	20	
●		清野謙次		「日本石器時代に関する考察」	『民族』2-6		昭和2年9月	192709	9	
第一図 敦煌出土漆杯		原田淑人		「支那杯の器形と用途とについて」	『民族』2-6		昭和2年9月	192709	46	
第二図 内蒙古肯特山出土漆杯		原田淑人		「支那杯の器形と用途とについて」	『民族』2-6		昭和2年9月	192709	46	
第三図 遼陽出土土杯		原田淑人		「支那杯の器形と用途とについて」	『民族』2-6		昭和2年9月	192709	48	
第四図 秦浪遺跡出土漆杯		原田淑人		「支那杯の器形と用途とについて」	『民族』2-6		昭和2年9月	192709	49	
第五図 内面漆塗銅杯		原田淑人		「支那杯の器形と用途とについて」	『民族』2-6		昭和2年9月	192709	50	
第六図 秦浪遺跡出土青銅杯		原田淑人		「支那杯の器形と用途とについて」	『民族』2-6		昭和2年9月	192709	51	
第七図 武氏前石室画像第七石		原田淑人		「支那杯の器形と用途とについて」	『民族』2-6		昭和2年9月	192709	52	
第一図 魏子高発見彩色土器		浜田青陵		「魏子高の土器」	『民族』2-6		昭和2年9月	192709	71	
第二図 魏子高発見彩色土器		浜田青陵		「魏子高の土器」	『民族』2-6		昭和2年9月	192709	71	
第三図 魏子高発見彩色土器		浜田青陵		「魏子高の土器」	『民族』2-6		昭和2年9月	192709	73	
第四図 魏子高発見彩色土器		浜田青陵		「魏子高の土器」	『民族』2-6		昭和2年9月	192709	73	
第一図 魏子高遺跡全図	島田貞彦	島田貞彦		「魏子高遺跡発掘記」	『民族』2-6		昭和2年9月	192709	80	
第三図 日地点発掘風景	島田貞彦	島田貞彦		「魏子高遺跡発掘記」	『民族』2-6		昭和2年9月	192709	85	
第四図 ■複原	島田貞彦	島田貞彦		「魏子高遺跡発掘記」	『民族』2-6		昭和2年9月	192709	86	
第五図 単 ■子発見	島田貞彦	島田貞彦		「魏子高遺跡発掘記」	『民族』2-6		昭和2年9月	192709	89	
●		清野謙次		「北海道東北部に於ける人類学的探究紀行」	『民族』3-1		昭和2年11月	192711	114	
●		ネフスキ		「故シユルンベルグ氏一真小伝と著作」	『民族』3-2		昭和3年1月	192801	101	



●		清野謙次	「扶餘の旧都」	『民族』3-5	昭和3年7月	192807	92
●		清野謙次	「扶餘の旧都」	『民族』3-5	昭和3年7月	192807	93
●		清野謙次	「扶餘の旧都」	『民族』3-5	昭和3年7月	192807	93
●		清野謙次	「扶餘の旧都」	『民族』3-5	昭和3年7月	192807	94
●		清野謙次	「伯耆出雲より周防へ」	『民族』3-6	昭和3年9月	192809	154
●		清野謙次	「伯耆出雲より周防へ」	『民族』3-6	昭和3年9月	192809	154
●		清野謙次	「伯耆出雲より周防へ」	『民族』3-6	昭和3年9月	192809	158
●		清野謙次	「伯耆出雲より周防へ」	『民族』4-1	昭和3年11月	192811	135
●		清野謙次	「伯耆出雲より周防へ」	『民族』4-1	昭和3年11月	192811	135
●		清野謙次	「伯耆出雲より周防へ」	『民族』4-1	昭和3年11月	192811	137
●		小泉 鐵	「シーバウ社の記録」	『民族』4-2	昭和4年1月	192901	135
●	三河砥神社の田遊祭		解説	『民俗芸術』2-1	昭和4年1月	192901	口絵
●	御祭用具廃物利用の一例 図師嘉彦	図師嘉彦・井上 錦明	「庭飾と注連」	『民俗芸術』2-1	昭和4年1月	192901	10
●	黒島どき		解説	『民俗芸術』2-2	昭和4年2月	192902	口絵
●	高砂そうたい	西角井正慶	「万作芝居の話」	『民俗芸術』2-2	昭和4年2月	192902	36
●	広い大寺	西角井正慶	「万作芝居の話」	『民俗芸術』2-2	昭和4年2月	192902	39
●	シビリヤでれる国民の刺縫		解説	『民俗芸術』2-3	昭和4年3月	192903	口絵
●	第二図	図師嘉彦	「見世物小屋に就いて」	『民俗芸術』2-3	昭和4年3月	192903	2
●	第三図	図師嘉彦	「見世物小屋に就いて」	『民俗芸術』2-3	昭和4年3月	192903	3
●	第九図	図師嘉彦	「見世物小屋に就いて」	『民俗芸術』2-3	昭和4年3月	192903	10
●	第十図	図師嘉彦	「見世物小屋に就いて」	『民俗芸術』2-3	昭和4年3月	192903	10
●	シビリヤ西部かちんつ国民の夜の遊戯				昭和4年3月	192903	26
●	細田川	西角井正慶	「万作芝居の話」	『民俗芸術』2-3	昭和4年3月	192903	50
●	たぶと権との杜	坪井忠彦	「尾張岩塚のつうくろ祭」	『民俗芸術』2-3	昭和4年3月	192903	76~79
●	辺戸名のろ	折口信夫	『古代研究』民俗学篇1		昭和4年4月	192904	巻頭
●	国頭村辺戸の神人	折口信夫	『古代研究』民俗学篇1		昭和4年4月	192904	64~65
●	久高島久高のろ	折口信夫	『古代研究』民俗学篇1		昭和4年4月	192904	64~65
●	久高島久高のろ	折口信夫	『古代研究』民俗学篇1		昭和4年4月	192904	80~81
●	摩文仁のろ	折口信夫	『古代研究』民俗学篇1		昭和4年4月	192904	96~97
●	八重山大阿母	折口信夫	『古代研究』民俗学篇1		昭和4年4月	192904	96~97
●	だいがく	折口信夫	『古代研究』民俗学篇1		昭和4年4月	192904	304~305
●	花祭りの翁(豊根村上黒川)	故千家経麻呂	『古代研究』民俗学篇1		昭和4年4月	192904	514
●	門神社(下伊那・北設楽)	早川孝太郎	『古代研究』民俗学篇1		昭和4年4月	192904	607
●	あかたび(たぶ)能登一の宮	折口信夫	『古代研究』民俗学篇1		昭和4年4月	192904	608~609
●	ひらたび おたび様(塚)	折口信夫	『古代研究』民俗学篇1		昭和4年4月	192904	608~609
●	めたび(俣袴肉桂たび)	折口信夫	『古代研究』民俗学篇1		昭和4年4月	192904	608~609
●	早処女(羽後飽海郡女鹿)	宮本勢助	『古代研究』民俗学篇1		昭和4年4月	192904	619
●	丘のたぶ	折口信夫	『古代研究』民俗学篇1		昭和4年4月	192904	624~625

花舞ひ・森の手	故千寮経麻呂	折口信夫	『古代研究』民俗学篇1		昭和4年4月	192904	632
八百比丘尼	穂積忠	折口信夫	『古代研究』国文学篇		昭和4年4月	192904	口絵
久高島外間のろ	折口信夫	折口信夫	『古代研究』国文学篇		昭和4年4月	192904	口絵
久高島外間のろ	折口信夫	折口信夫	『古代研究』国文学篇		昭和4年4月	192904	口絵
漂著神を祀ったたぶの杜		折口信夫	『古代研究』国文学篇		昭和4年4月	192904	口絵
岬のたぶ		折口信夫	『古代研究』国文学篇		昭和4年4月	192904	口絵
あかたび(二)		折口信夫	『古代研究』国文学篇		昭和4年4月	192904	口絵
さいの神	穂積忠	折口信夫	『古代研究』国文学篇		昭和4年4月	192904	口絵
さいの神	穂積忠	折口信夫	『古代研究』国文学篇		昭和4年4月	192904	口絵
第1図	金関丈夫・田幡丈夫	金関丈夫・田幡丈夫	『アイヌ婦人の頭部変形(就て)』	『民族』4-3	昭和4年4月	192904	42
第一図 コリヤークシャマン	関下大慧	関下大慧	『シャマンの服装と持物とその意味』	『民族』4-3	昭和4年4月	192904	66
第二図 ヤクトシヤマン 前面 背面	関下大慧	関下大慧	『シャマンの服装と持物とその意味』	『民族』4-3	昭和4年4月	192904	67
第三図 Bエニセイシャマンの上衣	関下大慧	関下大慧	『シャマンの服装と持物とその意味』	『民族』4-3	昭和4年4月	192904	69
第四図 ソヨシヤマン(前面)	関下大慧	関下大慧	『シャマンの服装と持物とその意味』	『民族』4-3	昭和4年4月	192904	71
第五図 ソヨシヤマン(背面)	関下大慧	関下大慧	『シャマンの服装と持物とその意味』	『民族』4-3	昭和4年4月	192904	71
第六図 カラガスシヤマン(前面)	関下大慧	関下大慧	『シャマンの服装と持物とその意味』	『民族』4-3	昭和4年4月	192904	73
第七図 カラガスシヤマン(背面)	関下大慧	関下大慧	『シャマンの服装と持物とその意味』	『民族』4-3	昭和4年4月	192904	73
第八図 ゴールドシヤマン 前面	関下大慧	関下大慧	『シャマンの服装と持物とその意味』	『民族』4-3	昭和4年4月	192904	74
第九図 Bエニセイシャマンの長靴	関下大慧	関下大慧	『シャマンの服装と持物とその意味』	『民族』4-3	昭和4年4月	192904	77
第十図 アルタイシヤマンの前面	関下大慧	関下大慧	『シャマンの服装と持物とその意味』	『民族』4-3	昭和4年4月	192904	79
第十一図 エニセイシャマンの円形太鼓(表面)	関下大慧	関下大慧	『シャマンの服装と持物とその意味』	『民族』4-3	昭和4年4月	192904	88
第十二図 エニセイシャマンの円形太鼓(裏面)	関下大慧	関下大慧	『シャマンの服装と持物とその意味』	『民族』4-3	昭和4年4月	192904	88
第十三図 エニセイシャマンの円形太鼓(裏面)	関下大慧	関下大慧	『シャマンの服装と持物とその意味』	『民族』4-3	昭和4年4月	192904	88
文楽座の新口村の舞台面			解説				口絵
鳥取の流し雛(土の頭・紙の衣装)	柳田國男	柳田國男	『人形とオシラ神』	『民俗芸術』2-4	昭和4年4月	192904	9
紀州湯川明神の人形	柳田國男	柳田國男	『人形とオシラ神』	『民俗芸術』2-4	昭和4年4月	192904	8
●	柳田國男	柳田國男	『人形とオシラ神』	『民俗芸術』2-4	昭和4年4月	192904	14
八王子の車人形(日向景清矢島日記)	柳田國男	柳田國男	『人形とオシラ神』	『民俗芸術』2-4	昭和4年4月	192904	24
秩父人形 意の菓子別れ	柳田國男	柳田國男	『人形とオシラ神』	『民俗芸術』2-4	昭和4年4月	192904	25
日向岩川八幡の大人弥五郎	折口信夫	折口信夫	『偶人信仰の民俗化並びに伝説化せる道』	『民俗芸術』2-4	昭和4年4月	192904	31
七尾の山車人形	折口信夫	折口信夫	『偶人信仰の民俗化並びに伝説化せる道』	『民俗芸術』2-4	昭和4年4月	192904	36
陸中の草人形	にこらい・ねぶすき	にこらい・ねぶすき	『偶人信仰の民俗化並びに伝説化せる道』	『民俗芸術』2-4	昭和4年4月	192904	37
まじない人形			『偶人信仰の民俗化並びに伝説化せる道』	『民俗芸術』2-4	昭和4年4月	192904	38
まじない人形			『偶人信仰の民俗化並びに伝説化せる道』	『民俗芸術』2-4	昭和4年4月	192904	39
陸中遠野のおひら様	にこらい・ねぶすき	にこらい・ねぶすき	『偶人信仰の民俗化並びに伝説化せる道』	『民俗芸術』2-4	昭和4年4月	192904	52
武蔵西多摩のおひら様	村上清文	村上清文	『偶人信仰の民俗化並びに伝説化せる道』	『民俗芸術』2-4	昭和4年4月	192904	53
薩摩雑(帝室博物館蔵)	折口信夫	折口信夫	『偶人信仰の民俗化並びに伝説化せる道』	『民俗芸術』2-4	昭和4年4月	192904	55
三河雑(帝室博物館蔵)	折口信夫	折口信夫	『偶人信仰の民俗化並びに伝説化せる道』	『民俗芸術』2-4	昭和4年4月	192904	55
元禄時代の立雛(帝室博物館蔵)	折口信夫	折口信夫	『偶人信仰の民俗化並びに伝説化せる道』	『民俗芸術』2-4	昭和4年4月	192904	56
淡路地方の伝説による百太夫の図	吉井太郎	吉井太郎	百太夫考	『民俗芸術』2-4	昭和4年4月	192904	70
百太夫社(向つて右)	吉井太郎	吉井太郎	百太夫考	『民俗芸術』2-4	昭和4年4月	192904	71
淡路若屋神社に於ける人形操の光景(太閤記)				『民俗芸術』2-4	昭和4年4月	192904	74
人形吉遺品 八重垣姫	鷲尾正久	鷲尾正久	『西宮人形座の餘業』	『民俗芸術』2-4	昭和4年4月	192904	76
人形吉所可さね	鷲尾正久	鷲尾正久	『西宮人形座の餘業』	『民俗芸術』2-4	昭和4年4月	192904	77

ピラのいろいろ				小澤愛園	『日本と欧州の系図』	昭和4年4月	192904	89
結城孫三郎一座晝飯の舞台面				小澤愛園	『日本と欧州の系図』	昭和4年4月	192904	90
正チャンの冒険							192904	92
古代イタリーの人形				南江二郎	『我偶人劇の世界的地位と其特色』	昭和4年4月	192904	98
セイロンの操り人形				南江二郎	『我偶人劇の世界的地位と其特色』	昭和4年4月	192904	103
ジャバの影絵				南江二郎	『我偶人劇の世界的地位と其特色』	昭和4年4月	192904	106
支那の影絵				南江二郎	『我偶人劇の世界的地位と其特色』	昭和4年4月	192904	108
吉田冠十郎の車人形松王丸				南江二郎	『我偶人劇の世界的地位と其特色』	昭和4年4月	192904	111
文楽座の八百屋お七(吉田文五郎)				南江二郎	『我偶人劇の世界的地位と其特色』	昭和4年4月	192904	114
秩父人形の骨組				小寺融吉	『人形と人形つかひ』	昭和4年4月	192904	132
心中天網島の舞台面				小寺融吉	『人形と人形つかひ』	昭和4年4月	192904	156
第二図				小田内通久	『佐渡のノロマ人形の機構』	昭和4年4月	192904	166
第四図				小田内通久	『佐渡のノロマ人形の機構』	昭和4年4月	192904	170
第五図				小田内通久	『佐渡のノロマ人形の機構』	昭和4年4月	192904	171
吉田の足				大亦詮一郎	『秩父に於ける人形芝居』	昭和4年4月	192904	182
吉田の首				大亦詮一郎	『秩父に於ける人形芝居』	昭和4年4月	192904	183
秩父人形の衣裳				大亦詮一郎	『秩父に於ける人形芝居』	昭和4年4月	192904	185
秩父人形の頭				大亦詮一郎	『秩父に於ける人形芝居』	昭和4年4月	192904	186
カラクリ				大亦詮一郎	『秩父に於ける人形芝居』	昭和4年4月	192904	188
鳴門のお鶴				座間太郎	『安房平群の人形芝居』	昭和4年4月	192904	191
巡礼とばらの舞台面				上原七六	『花やしきの糸あやつり』	昭和4年4月	192904	198
松根義雄氏				上原七六	『花やしきの糸あやつり』	昭和4年4月	192904	199
車人形の三番叟				萬屋長右衛門	『玉川文楽の車人形と写し絵』	昭和4年4月	192904	219
人形の頭一				萬屋長右衛門	『玉川文楽の車人形と写し絵』	昭和4年4月	192904	220
人形の頭二				萬屋長右衛門	『玉川文楽の車人形と写し絵』	昭和4年4月	192904	221
写し絵の機械				萬屋長右衛門	『玉川文楽の車人形と写し絵』	昭和4年4月	192904	222
写し絵の原画				萬屋長右衛門	『玉川文楽の車人形と写し絵』	昭和4年4月	192904	223
結城孫三郎のうし絵 舌切雀の原画				萬屋長右衛門	『玉川文楽の車人形と写し絵』	昭和4年4月	192904	224
結城孫三郎一座の写し絵				萬屋長右衛門	『玉川文楽の車人形と写し絵』	昭和4年4月	192904	225
京都團圓堂狂言(でんでん虫)				永田衛吉	解説	昭和4年5月	192905	口絵
日向の臼太鼓踊り					解説	昭和4年6月	192906	口絵
大久保踊小道具				図師嘉彦	『採集図』	昭和4年6月	192906	7
日向片湯郡の臼太鼓踊				図師・竹内	『採集図』	昭和4年6月	192906	10
京都六斎念仏小道具				宮尾・図師	『採集図』	昭和4年6月	192906	16
大斎念仏の獅子頭				図師嘉彦	『採集図』	昭和4年6月	192906	22
図版第四 和野野川大入川奥地 長野県下伊那郡大下條村早稲田 愛知県北設楽郡豊根村小田第一二図 舞戸飾付(振草系中在案)			早川孝太郎(大正15年1月)		『花祭』前編	昭和5年4月	193004	20~21
第一七図 花の舞のちほや(振草系月)				早川孝太郎	『花祭』前編	昭和5年4月	193004	66
図版第九 さざちの各種				早川孝太郎	『花祭』前編	昭和5年4月	193004	71
図版第十 花の舞(下黒川)			高橋文太郎 昭和4年1月		『花祭』前編	昭和5年4月	193004	90~91
図版第十 さかきともしき(御園)			早川孝太郎 昭和4年1月		『花祭』前編	昭和5年4月	193004	96~97
第二七図 「つじがため」の一形式(大入系御園)				早川孝太郎	『花祭』前編	昭和5年4月	193004	98

図版第十一 高嶺祭りの棚	早川孝太郎 昭和4年1月	早川孝太郎	『花祭』前編		昭和5年4月	193004	100～101
図版第十一 つじがためのお供物(足込)	早川孝太郎 昭和5年1月	早川孝太郎	『花祭』前編		昭和5年4月	193004	100～101
第三六図A まつりの場所(大人系上黒川にて)		早川孝太郎	『花祭』前編		昭和5年4月	193004	132
第三六図B 舞ひを待つ間(振草系月)		早川孝太郎	『花祭』前編		昭和5年4月	193004	132
図版第十二 鬼の舞(祭具は各所取合せ製作せるもの)		早川孝太郎	『花祭』前編		昭和5年4月	193004	134～135
図版第十二 北設楽郡園村足込の一農家写生		早川孝太郎	『花祭』前編		昭和5年4月	193004	134～135
図版第十四 さかきの舞ひ(下津具)	早川孝太郎 昭和3年2月	早川孝太郎	『花祭』前編		昭和5年4月	193004	172～173
図版第十四 やまみ・さかき・伴鬼((白))	早川孝太郎 昭和4年1月	早川孝太郎	『花祭』前編		昭和5年4月	193004	172～173
第五八図 地固めの舞の一形式(振草系古戸)		早川孝太郎	『花祭』前編		昭和5年4月	193004	187
第六二図 「三ツ舞扇の手」おしめこし(振草系中在家)		早川孝太郎	『花祭』前編		昭和5年4月	193004	194
第八一図 花の舞「ひらき」の型(大人系上黒川)		早川孝太郎	『花祭』前編		昭和5年4月	193004	213
第八二図 三ツ舞扇の手(振草系月)		早川孝太郎	『花祭』前編		昭和5年4月	193004	215
図版第二 扇の手	早川孝太郎 昭和3年2月	早川孝太郎	『花祭』前編		昭和5年4月	193004	224～225
図版第二 扇の手背部(下津具)	早川孝太郎 昭和3年2月	早川孝太郎	『花祭』前編		昭和5年4月	193004	224～225
第九一図 湯ばやし(舞(振草系中在家))		早川孝太郎	『花祭』前編		昭和5年4月	193004	228
第九三図 「さかき」の場面(振草系月)		早川孝太郎	『花祭』前編		昭和5年4月	193004	233
第九七図 伴鬼の一種(振草系古戸)		早川孝太郎	『花祭』前編		昭和5年4月	193004	236
第一〇二図 「やまみ」の舞(振草系月)		早川孝太郎	『花祭』前編		昭和5年4月	193004	241
図版第二四 面を著ける		早川孝太郎	『花祭』前編		昭和5年4月	193004	244～245
図版第二四 面を著ける		早川孝太郎	『花祭』前編		昭和5年4月	193004	244～245
図版第二四 さかきの五方見		早川孝太郎	『花祭』前編		昭和5年4月	193004	244～245
図版第二四 面を持ちて		早川孝太郎	『花祭』前編		昭和5年4月	193004	244～245
第一〇五図 「さかき」の出の型(振草系古戸)		早川孝太郎	『花祭』前編		昭和5年4月	193004	245
第一〇七図 「さかき」の後姿(振草系古戸)		早川孝太郎	『花祭』前編		昭和5年4月	193004	246
第一一〇図 「さかき」へんべの型(振草系古戸)		早川孝太郎	『花祭』前編		昭和5年4月	193004	250
第一二〇図 右よりしをふき みそぬり ひのねぎ おかね(振草系足込)		早川孝太郎	『花祭』前編		昭和5年4月	193004	267
第一二六図 「もどき」役(振草系古戸)		早川孝太郎	『花祭』前編		昭和5年4月	193004	286
図版第二七 北設楽郡園村足込		早川孝太郎	『花祭』前編		昭和5年4月	193004	424～425
図版第二七 振草たがね峠の中途		早川孝太郎	『花祭』前編		昭和5年4月	193004	424～425
第一三〇図 園村足込の「みやうど」屋敷		早川孝太郎	『花祭』前編		昭和5年4月	193004	431
図版第二八 本郷		早川孝太郎	『花祭』前編		昭和5年4月	193004	436～437

図版第二八 御殿山遠望			早川孝太郎	『花祭』前編		昭和15年4月	193004	436～437
第一一三 一 下川村下田			早川孝太郎	『花祭』前編		昭和15年4月	193004	446
第一一三 二 振草村神田にて			早川孝太郎	『花祭』前編		昭和15年4月	193004	449
図版第二九 さかき		早川孝太郎 昭和15年1月	早川孝太郎	『花祭』前編		昭和15年4月	193004	456～457
図版第二九 さかき裏面(古戸)天地一尺四寸		早川孝太郎 昭和15年1月	早川孝太郎	『花祭』前編		昭和15年4月	193004	456～457
第一一三 三 振草系中在家の面			早川孝太郎	『花祭』前編		昭和15年4月	193004	468
第一一三 七 右より茂吉 伴鬼(大人系御園)			早川孝太郎	『花祭』前編		昭和15年4月	193004	473
第一一四 七 図 I 「やまわり」 II 「さかき」(振草系足込)			早川孝太郎	『花祭』前編		昭和15年4月	193004	481
図版第三二 才次(古真立)天地一尺二寸		早川孝太郎 昭和15年1月	早川孝太郎	『花祭』前編		昭和15年4月	193004	486～487
図版第三二 茂左衛門(古真立)天地一尺三寸二分		早川孝太郎 昭和15年1月	早川孝太郎	『花祭』前編		昭和15年4月	193004	486～487
図版第三三 さかき(古真立)		早川孝太郎 昭和15年1月	早川孝太郎	『花祭』前編		昭和15年4月	193004	500～501
図版第三三 やまみ(古真立)		早川孝太郎 昭和15年1月	早川孝太郎	『花祭』前編		昭和15年4月	193004	500～501
図版第三四 さかき・やまわり		佐々木嘉一 昭和15年1月	早川孝太郎	『花祭』前編		昭和15年4月	193004	502～503
図版第三四 さかき・やまわり 裏面(中在家)		佐々木嘉一 昭和15年1月	早川孝太郎	『花祭』前編		昭和15年4月	193004	502～503
図版第三五 1 中央藤田彦(旧さかき) 右須佐之男命(旧やまわり) 左茂吉 2 右ヨリ ひのねぎ おきな・みこ 3 しづめ 4 伴面(中設楽)		岡田松三郎	早川孝太郎	『花祭』前編		昭和15年4月	193004	504～505
図版第一 ゆはぎの一種(古戸)			早川孝太郎	『花祭』後編		昭和15年4月	193004	巻頭
図版第二 神楽屋敷と古戸の部落 上 中央高所にあるが神楽屋敷 其上段杉の立てるは「みるめ」の祠(古戸)		早川孝太郎 大正15年11月	早川孝太郎	『花祭』後編		昭和15年4月	193004	6～7
図版第二 神楽屋敷と古戸の部落 下 古戸字下古戸		早川孝太郎 昭和2年1月	早川孝太郎	『花祭』後編		昭和15年4月	193004	6～7
第三 図 竹内吉郎次氏			早川孝太郎	『花祭』後編		昭和15年4月	193004	19
図版第三 神楽伝法書 神楽口伝書(古戸佐々木充爾家蔵)			早川孝太郎	『花祭』後編		昭和15年4月	193004	22～23
図版第四 神下し行列と御神楽の面 上 北設楽郡富山村河内諏訪神社(御神楽神渡り)		作者不明 昭和2年1月	早川孝太郎	『花祭』後編		昭和15年4月	193004	176～177
図版第四 神下し行列と御神楽の面 下 北設楽郡富山村 大谷龍野神社御神楽の面(上段右ヨリ鬼神・兄弟鬼 中段右ヨリ 禰宜・はなうり 下段右ヨリ 風ふく・みこ)		早川孝太郎 昭和2年1月	早川孝太郎	『花祭』後編		昭和15年4月	193004	176～177
図版第五 西浦の部落 上 西浦鞆音堂より東方部落を望む		早川孝太郎 昭和3年1月	早川孝太郎	『花祭』後編		昭和15年4月	193004	206～207
図版第五 西浦の部落 下 はだれの山(西浦鞆音堂を主題に製作せるもの)		早川孝太郎 昭和3年1月	早川孝太郎	『花祭』後編		昭和15年4月	193004	206～207
第二三 図 別当屋敷の「おとこ木」(西浦田楽)			早川孝太郎	『花祭』後編		昭和15年4月	193004	232

図版第六 西浦田楽 上 庭ならしの前 図版第六 西浦田楽 下 くらま天狗(長刀を持て るが弁慶)	早川孝太郎 昭 和3年2月 早川孝太郎 昭 和3年2月	早川孝太郎 早川孝太郎 早川孝太郎 早川孝太郎	『花祭』後編 『花祭』後編 『花祭』後編 『花祭』後編	昭和15年4月 昭和15年4月 昭和15年4月 昭和15年4月	193004 193004 193004 193004	234~235 234~235 311 312~313
第三〇図 黒倉田楽舞台 図版第七 黒倉田楽の面 下段右ヨリ ささら・鈴・ はやし面・獅子・駒 図版第七 黒倉田楽の面 上段右ヨリ 一の鍵取 り・松風丸・四寸の鍵取り・太郎鬼・次郎鬼・茂吉 鬼	早川孝太郎 大 正15年11月 早川孝太郎 昭 和2年1月 早川孝太郎 昭 和5年1月	早川孝太郎 早川孝太郎 早川孝太郎	『花祭』後編 『花祭』後編 『花祭』後編	昭和15年4月 昭和15年4月 昭和15年4月	193004 193004 193004	316~317 316~317 380~381
図版第八 段戸山と栢立の部落 上 三河北設楽 郡振草村塚石峠より西方段戸山を望む 図版第八 段戸山と栢立の部落 下 三河北設楽 郡段續村折立部落 図版第九 古戸田楽の面(一) 上 かんの人(天 地一尺)	早川孝太郎 昭 和5年1月 早川孝太郎 昭 和5年1月	早川孝太郎 早川孝太郎	『花祭』後編 『花祭』後編	昭和15年4月 昭和15年4月	193004 193004	380~381 380~381
図版第九 古戸田楽の面(一) 下 くにしげもどき (右 天地六寸五分 左 五寸八分)文化八年巳正 月氏子古次郎作の銘あり	早川孝太郎 昭 和5年1月	早川孝太郎	『花祭』後編	昭和15年4月	193004	389
第三七図 笹竹政十氏(古戸田楽)	早川孝太郎 昭 和5年1月	早川孝太郎	『花祭』後編	昭和15年4月	193004	402~403
図版第一〇 古戸田楽の面(二) 上 右ヨリ a不 明 bみややならし cはねひろ太夫 図版第一〇 古戸田楽の面(二) 下 上段右ヨリ 1不明 2せんだの尉の婆 3不明 下段右ヨリ 1 不明 2堂めぐり 3なりひら	早川孝太郎 昭 和5年1月 早川孝太郎 昭 和5年1月	早川孝太郎 早川孝太郎	『花祭』後編 『花祭』後編	昭和15年4月 昭和15年4月	193004 193004	402~403 406~407
図版第一一 古戸田楽面(三) 上 鶴頭(左右一 尺一寸五分) 図版第一一 古戸田楽面(三) 下 右ヨリ ab不 明 cもちあぶり	早川孝太郎 昭 和5年1月 早川孝太郎 昭 和5年1月	早川孝太郎 早川孝太郎	『花祭』後編 『花祭』後編	昭和15年4月 昭和15年4月	193004 193004	410 410~411
第四五図 和尚の衣を着た佐々木氏(古戸田楽)	早川孝太郎 昭 和5年1月	早川孝太郎	『花祭』後編	昭和15年4月	193004	410~411
図版第一二 古戸田楽の面(四) 上 向ッテ 右・ おきな 左・さんばそ 図版第一二 古戸田楽の面(四) 下 向ッテ 右・ みこ 左・しづめ	早川孝太郎 昭 和5年1月 早川孝太郎 昭 和5年1月	早川孝太郎 早川孝太郎	『花祭』後編 『花祭』後編	昭和15年4月 昭和15年4月	193004 193004	532 540 552 568~569
第四六図 円谷狂言の伝承者瀧美利三郎氏と猿 面	早川孝太郎 昭 和5年1月	早川孝太郎	『花祭』後編	昭和15年4月	193004	568~569
第四七図 田峰観音舞台	早川孝太郎 昭 和5年1月	早川孝太郎	『花祭』後編	昭和15年4月	193004	570
第四八図 狂言舞台北設楽郡本郷町	早川孝太郎 昭 和5年1月	早川孝太郎	『花祭』後編	昭和15年4月	193004	587
図版第一三 念仏踊り 上 道行き	原田清 昭和3年	早川孝太郎	『花祭』後編	昭和15年4月	193004	589
図版第一三 念仏踊り 下 おかさき(本郷町三ツ 瀬)	原田清 昭和3年	早川孝太郎	『花祭』後編	昭和15年4月	193004	590~591
第五三図 鳳来寺下の舞台(金剛堂)跡	早川孝太郎 昭 和5年1月	早川孝太郎	『花祭』後編	昭和15年4月	193004	587
第五七図 粟代石仏	早川孝太郎 昭 和5年1月	早川孝太郎	『花祭』後編	昭和15年4月	193004	589
図版第一四 獅子舞 上 獅子舞(幕を持つは才 藏)	早川孝太郎 大 正15年10月	早川孝太郎	『花祭』後編	昭和15年4月	193004	590~591

図版第一四 獅子舞 下 おかめの舞(共に戸金神楽組)	早川孝太郎 正15年10月	大	早川孝太郎	『花祭』後編		昭和15年4月	193004	590~591	
第六四図 ござへい餅(足込花祭りにて)	早川孝太郎 正15年1月	大	早川孝太郎	『花祭』後編		昭和15年4月	193004	628	
図版第一五 松飾りと餅花 上 松飾り(最も近代化であるもの)	早川孝太郎 正15年1月	大	早川孝太郎	『花祭』後編		昭和15年4月	193004	628~629	
図版第一五 松飾りと餅花 下 餅花(長野県下伊那郡但祖村新野)	早川孝太郎 正15年1月	大	早川孝太郎	『花祭』後編		昭和15年4月	193004	628~629	
図版第一六 墓地と「はざ」上 塚ごはざ	早川孝太郎 正15年1月	大	早川孝太郎	『花祭』後編		昭和15年4月	193004	642~643	
図版第一六 墓地と「はざ」下 墓地とたっしや木(長野県下伊那郡但祖村新野)	早川孝太郎 正15年1月	大	早川孝太郎	『花祭』後編		昭和15年4月	193004	642~643	
第六七図 古真立の面 左ヨリ婆・「みこ」爺	故千家経麻呂		折口信夫	『花祭』後編		昭和15年4月	193004	644	
朝鬼(又、四つ鬼)(豊根村上黒川)	早川孝太郎		折口信夫	『古代研究』民俗学篇2		昭和15年6月	193006	644	
北設楽の村	早川孝太郎		折口信夫	『古代研究』民俗学篇2		昭和15年6月	193006	644~645	
北設楽の村	早川孝太郎		折口信夫	『古代研究』民俗学篇2		昭和15年6月	193006	644~645	
にう木の一例(下伊那新野)	早川孝太郎		折口信夫	『古代研究』民俗学篇2		昭和15年6月	193006	646	
おしらすさま(陸中遠野)	ねふすき		折口信夫	『古代研究』民俗学篇2		昭和15年6月	193006	706	
王護の五郎あごかけ(巨人譚の印象)	折口信夫		折口信夫	『古代研究』民俗学篇2		昭和15年6月	193006		
師の房(田川村諸吉の福順)	折口信夫		折口信夫	『古代研究』民俗学篇2		昭和15年6月	193006	768~769	
春岐の住宅の型	折口信夫		折口信夫	『古代研究』民俗学篇2		昭和15年6月	193006	768~769	
納屋(右)・牛屋	折口信夫		折口信夫	『古代研究』民俗学篇2		昭和15年6月	193006	780	
対馬の「やぼさ」	後藤守一		折口信夫	『古代研究』民俗学篇2		昭和15年6月	193006	784~785	
大人弥五郎 大隅岩川八幡宮祭礼の節うつす	折口信夫		折口信夫	『古代研究』民俗学篇2		昭和15年6月	193006	1052~1053	
七尾の山車人形(一)			折口信夫	『古代研究』民俗学篇2		昭和15年6月	193006	1057	
七尾の山車人形(二)			折口信夫	『古代研究』民俗学篇2		昭和15年6月	193006	1058	
七尾の山車人形(三)			折口信夫	『古代研究』民俗学篇2		昭和15年6月	193006	1059	
てすり及びびみづひぎの例(一) 上村(淡路)源之丞一庵	吉井太郎		折口信夫	『古代研究』民俗学篇2		昭和15年6月	193006	1060	
てすり及びびみづひぎの例(二) 八王寺車人形			折口信夫	『古代研究』民俗学篇2		昭和15年6月	193006	1061	
陸中の草人形	にこらい・ねふす せい		折口信夫	『古代研究』民俗学篇2		昭和15年6月	193006	1065	
まじなひ人形	にこらい・ねふす せい		折口信夫	『古代研究』民俗学篇2		昭和15年6月	193006	1066	
まじなひ人形	にこらい・ねふす せい		折口信夫	『古代研究』民俗学篇2		昭和15年6月	193006	1067	
鳥取の流し雛(土の頭・紙の衣裳)			折口信夫	『古代研究』民俗学篇2		昭和15年6月	193006	1086	
紀州湯川 明神の人形			折口信夫	『古代研究』民俗学篇2		昭和15年6月	193006	1087	
武蔵西多摩のおひら様	村上清文		折口信夫	『古代研究』民俗学篇2		昭和15年6月	193006	1088	
南多摩元八王寺村字八幡宿下庭場 蚕日待のオシラ様の御表具(古)	村上清文		折口信夫	『古代研究』民俗学篇2		昭和15年6月	193006	1090	

南多摩元八王寺村字八幡宿下庭場 蚕日待のオシラ様の御表具(新)	村上清文	折口信夫	『古代研究』民俗学篇2		昭和15年6月	193006	1091
八王寺市外小宮村字西中野 蚕日待のおしら様の御表具	小池・村上	折口信夫	『古代研究』民俗学篇2		昭和15年6月	193006	1092
薩摩繻(帝室博物館蔵)		折口信夫	『古代研究』民俗学篇2		昭和15年6月	193006	1094
三河繻(帝室博物館蔵)		折口信夫	『古代研究』民俗学篇2		昭和15年6月	193006	1095
元禄時代の立ち繻(帝室博物館蔵)		折口信夫	『古代研究』民俗学篇2		昭和15年6月	193006	1096
壬生念仏の古面		折口信夫	『古代研究』民俗学篇2		昭和15年6月	193006	1098~ 1099



図1 『土俗と伝説』  
第1巻1号・2号表紙

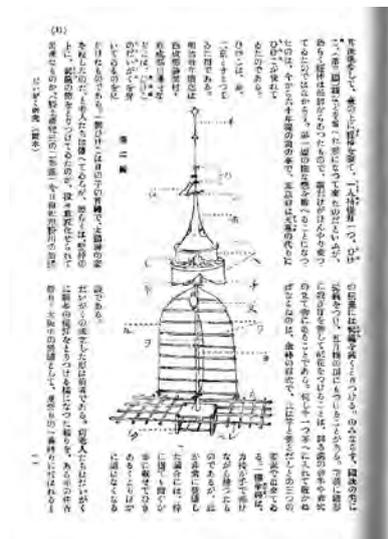


図2 岡本彦七「だいがくの研究」  
に掲載された「だいがく」  
の写真と図  
(『土俗と伝説』第1巻第1号)

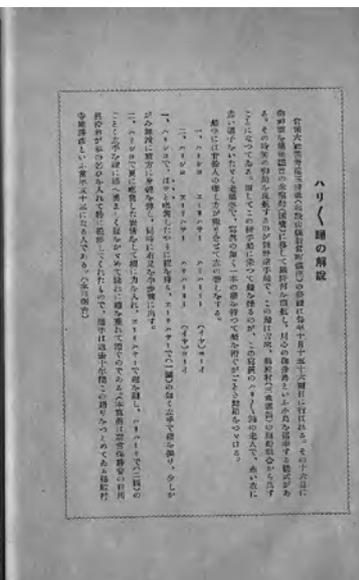


図3 『民俗芸術』第1巻第1号  
の口絵と解説





図6 『絵巻物による日本常民生活絵引』の図と解説



図7 須藤功編『写真でみる日本生活図引』第1巻の「山村の畑」



52 戦時中 昭和35年(1960) 佐藤久太郎撮影

① 軍用靴  
② 軍用靴  
③ 軍用靴  
④ 軍用靴  
⑤ 軍用靴  
⑥ 軍用靴  
⑦ 軍用靴  
⑧ 軍用靴  
⑨ 軍用靴  
⑩ 軍用靴  
⑪ 軍用靴  
⑫ 軍用靴  
⑬ 軍用靴  
⑭ 軍用靴  
⑮ 軍用靴



52 戦時中 昭和35年(1960) 佐藤久太郎撮影

① 軍用靴  
② 軍用靴  
③ 軍用靴  
④ 軍用靴  
⑤ 軍用靴  
⑥ 軍用靴  
⑦ 軍用靴  
⑧ 軍用靴  
⑨ 軍用靴  
⑩ 軍用靴  
⑪ 軍用靴  
⑫ 軍用靴  
⑬ 軍用靴  
⑭ 軍用靴  
⑮ 軍用靴

図8 須藤功編『写真でみる日本生活図引』第1巻の「昼どき」



写真53 お慰いを受ける兵士たち (昭和17(1942)年頃・東山区八坂神社)

写真53 お慰いを受ける兵士たち (昭和17(1942)年頃・東山区八坂神社)

八坂神社の本殿前にお慰いを受ける兵士たち。写真に写っている兵士の服は汚れているので、傷兵の可能性もあるが、当時海軍兵のお慰いは一般的ではなかった。お慰いを受ける兵士は、京都府外に出る際にお慰いを受けていたが八坂神社での例は珍しい。この部隊についての詳細はわからないが、陸軍の歩兵部隊であることが確認できる。

① 晴帽  
② 外巻  
③ 外巻  
④ 外巻  
⑤ 外巻

⑥ 外巻  
⑦ 外巻  
⑧ 外巻  
⑨ 外巻  
⑩ 外巻  
⑪ 外巻  
⑫ 外巻  
⑬ 外巻  
⑭ 外巻  
⑮ 外巻



写真54 戦地での慰問団 (昭和15(1940)年4月19日・撮影場所不明)

写真54 戦地での慰問団 (昭和15(1940)年4月19日・撮影場所不明)

慰問団は特定できないが所蔵されていた他の写真からして、朝鮮半島の平康陸軍演習場である可能性が高い。舞台の後の兵舎とおぼしき建物もレンガ造りであり、外地それも演習場のような寒冷地ではない、朝鮮半島あたりの可能性が高い。その兵舎前に仮設の舞台が設置されて、慰問団の芝居がおこなわれている。

この写真が撮影された時期は、政府の事変不拡大の方針に反して、実際の戦線がさらにエスカレートし、すでに抜き差しならない段階にあった。そうしたなか、内地では数々の慰問団が編成され、兵士たちの慰問のため奔走を遂げた。慰問団の中でも兵士たちに人気があったのが演習場慰問団で、藤田家や後藤家による「わらわし隊」などは、3年間に400編あり、兵士に出た(決定版昭和史第8巻) p.58)。その他、大規模力士や流行歌手あるいは文士慰問団などが

戦地に赴いた。

① 舞台 丸太を組んで仕上げる。資の子を敷き、その上にむしろを敷いて仮設の舞台としている。  
② ゴザ 資の子の上に敷いて見守る兵士たち。兵士たちの服装は、軍衣に軍帽という正装。  
③ 椅子 上官のためのものか。空席が目立つ。

図9 京都市文化財保護課『一枚の写真 - 近代京都庶民生活写真引き - 』





湖水で米をとぐ

沖島では、船の人はみな知り合いで、上その人が来たらずとわかるという。だから、腰巻きをして上半身は背、首から手ぬぐいをたらしこのスタイルは、かつて夏にはごくふつうに見かける姿だった。ここも埋め立てられて遺島となっているが、洗濯機を道路に向けて置く家が多く、水とのつながりのなごりを感じさせられる。



石積みのある浜

湖水で茶や茶碗を洗うと、ハエジゴやホデジゴが既服に群がり、あっという間に掃除していった。「あの頃はちょっとぬむくなった(いたんだ)」ご飯でもお茶ですすいで食べたし、生ゴミは畑におぼんだ(埋めた)。ほんまゴミって出さへんかったわ」と茶谷よし子さん。現在、さん機のあったところは埋め立てられているが、石垣に昔がしのばれる。



近江八幡市神島町 ― [上]1955(昭和30)年8月18日/斎藤義興 [下]1997(平成9)年8月12日/吉谷性直



近江八幡市神島町 ― [上]1955(昭和31)年8月15日/斎藤義興 [下]1997(平成9)年8月12日/吉谷性直

図 12 滋賀県立琵琶湖博物館『私とあなたの琵琶湖アルバム』



図 13A 長野県教育委員会『雪まつり』



図 13B 長野県教育委員会『雪まつり』



図 14 『山に生かされた日々』 新潟県朝日村奥三面の生活誌』



555 ビョウワン 新潟県山形郡



556 新 仏 静岡県安東郡



558 石 塚 新潟県三戸郡

### 喪服と新墓



554 モンガリ 京都府北条郡



557 葬の河原 新潟県三戸郡



551 纏 子 長崎県北松浦郡



550 ソーレン担子 石川県能登郡



548 喪 服 1 香川県三豊郡



552 新 墓 1 青森県西津軽郡



549 喪 服 2 香川県小豆郡



553 新 墓 2 青森県西津軽郡

死者を祀るの上には余った上等小倉米を煮き、川飯あるいは炊き立てきた小石でまきも焼くたきも焼いたきりする。このほか粟の皮打・藁・藁・藁などの竹や、栗めたしをまわすような形に飾り立てる。山火や鼠が死体を掘りかき出すのを防ぐためと説明されている。あるいは灰上げといって、古藁などを立てたり焼いたりするともいふ。

図 15 柳田國男監修『日本民俗図録』の「喪服と新墓」



写真1 ショーロダナ (1994年8月15日) 徳島県下松尾



写真2 ショロダナ (1995年8月15日) 南郷村水清谷 赤堀



写真3 ショロダナ (1995年8月13日) 南郷村水清谷 穂の越



写真9 ショロダナ (1994年8月14日) 延岡市追分江



写真10 ショロダナ (1994年8月14日) 北浦町岡森



写真11 ショロダナ (1993年8月13日) 串間市南方 西下弓田



写真4 ショロサマ (1994年8月16日) 徳島県上之原



写真5 ショロダナ (1995年8月15日) 南郷村上流川 田出原



写真6 ショロダナ (1992年8月15日) 南郷村上流川 田出原



写真12 ガキドンの花 (1993年8月13日) 串間市南方 西下弓田



写真13 ガキドンの花へ供え物をする (1993年8月13日) 串間市南方 西下弓田



写真14 ボンダナ (1993年8月14日) 徳島県本村



写真7 ショーロダナ (1994年8月14日) 延岡市浦城町 折川内



写真8 盆の仏壇 (1994年8月14日) 延岡市浦城町 折川内



写真15 盆踊り会場の初盆の原壇 (1993年8月14日) 川崎町通系

図 16 松村利規「宮崎の精霊棚」(『民具研究』第120号)



# IV

## 研究会 画像資料と近代史 —歴史学研究における記録資料の役割—

文化財担当者柴田常恵の記録—大場磐雄との関連性を軸に— 山内 利秋

楽石雑筆にみる君津地方の遺跡調査 光江 章

酒巻 忠史

登呂遺跡に見る記録写真と大場磐雄 中野 宥

保存科学における記録 大久保 治

登呂遺跡関連大場磐雄資料—ガラス乾板と大場資料— 加藤 里美

近代初期における学術雑誌の写真利用—『考古学雑誌』を事例として—

平澤加奈子

ディスカッション



## 文化財担当者柴田常恵の記録 - 大場磐雄との関係性を軸に -

山内 利秋(吉備国際大学社会学部専任講師)

はじめに - 柴田常恵について -

大場磐雄に関わるこのプロジェクトに関係していて、大場が写真という画像資料を活用する根本になった部分には何が存在するのだろうか？この問題に関して、特に実際に資料を整理していくさまざまな段階において、柴田常恵という人物についてきちんと考えていかないと解決できないのでは、と考えるようになりました。

現在、國學院大學には柴田常恵関連の調査資料類が所蔵されておりますが、これは大場先生自身が國學院大學におられた時に購入したものです。この資料類には、柴田が東大時代から調査したさまざまな写真、フィールドノート、拓本、メモ、草稿等が存在します。

この資料をもとにして、柴田常恵という人物を色々追求していくうちに、いくつか重要なことが分かってまいりました。今日はこの点について若干触れていければ、と思います。

まず、最も多い誤解をここで解いておきたいのですが、柴田常恵については、一般に「しばた じょうけい」と通称で読まれており、現在ではあたかもそれが本名のように思われてしまっているようですが、正確には「しばた じょうえ」です。柴田を紹介した文章の英文には"Jo-kei Shibata"とまで書かれていることも実際にありますが、これは大きな間違いです。「しばた じょうえ」と読んで下さい。

柴田に関しては、よくいわれているのが、明治時代の後期から昭和20年代にかけて活躍した、現在では既に学史上の考古学者として認識されていることが多いのではないかと思います。また、大場先生が築地書館の『日本考古学選集 柴田常恵集』で述べられていますが、「学史上特筆すべき研究があったという訳でもない」とまでいわれております。しかしながら、この考え方は柴田の評価というのを非常に過小化していると思います。むしろ、柴田は研究者としてよりも、近代文化財保護行政を屋台骨として支えてきた人物、特に大正から昭和前期にかかる、実質的な国家の文化財保護担当者として、政策の一端を担ってきたと位置付けた方が妥当ではないかと思います。また、大場磐雄も柴田から研究活動ないしは文化財保護に関わる色々な知見や情報を得ている、ということがあった様です。

### 2. 東大時代の調査と写真資料

柴田は明治10(1877)年に名古屋で生まれ、真宗東京中学高等科、私立郁文館中学の史学館を出て台湾総督府で講師をやっていた時に坪井正五郎の講演を聴き、考古学に非常に興味を持ったみたいです。恐らく自分のほうからアプローチしたのだとは思いますが、結局坪井正五郎の方から東大に来ないか、ということで、理学部の人類学教室の方に行き、採用されたということになっております。この時は副手程度の肩書きだったようです。それが明治35(1902)年のことです。その後正式に助手として採用されています(明治39(1906)年)。

初期の文化財保護行政においては、特に埋蔵文化財に関しては東京大学と帝室博物館の2つが調査を行ない、各地から出土した遺物に関してもそれぞれが収集するというシステムがありました。これは坪井正五郎と三宅米吉との間で取り決められて、いわゆる先史考古学の分野は東大理学部人類学教室、歴史考古学系、特に古墳時代以降のものに関しては帝室博物館がそれぞれ担ったというところがありました。

このような事情から - もちろん学術的な重要性も勘案されておりますが - 、柴田は坪井の命を受け

て、日本各地の色々な所を調査をしております。その中で取り上げたいのが富山県の氷見大境洞穴、また、朝日貝塚の調査です。

朝日貝塚は、日本で最初期の頃に竪穴住居跡が確認された遺跡として学史上位置付けられています。その時の調査写真です(写真1)。また竪穴住居論をこの住居跡をベースにして柴田や大場が後々展開していった上で、非常に重要な遺跡として認識されていました。これはイルカですね(写真2)。

住居跡の検出状況を俯瞰で撮影した結構著名な写真です(写真3)。『石器時代の住居址』という本を柴田と大場 - 当時は谷川磐雄の名前でしたけれども - の共著という形で雄山閣から出しておりますが、その際にも使われている写真です。

同じ様に、大境洞穴ですね(写真4)。先日、富山県氷見市立博物館でこの特別展をやりました(大野編2002)。氷見の図書館の方にこの時の立面図が出てきたということで。麻生優先生がそのことで昔、洞窟遺跡研究会かな。5年位前まで千葉大の方でやっていた研究会ですけども。それの方でもやっておりました。これもその時の調査写真ですけども、鬚を生やしている方が小金井良精ですね。これが柴田が調査しているところの写真です。ここでは一部しか挙げておりませんけれども。これ以外にセクションを綺麗に検出しているところとか、プランを出しているところとかあります。

昭和42(1967)年に平凡社から出された『日本の洞穴遺跡』という本がありますが、その中で有名な、大正7(1918)年に地元の新聞『高岡新報』にも掲載された、同誌主筆の井上江花が出土してまとめられた人骨を確認している写真があります。この時の写真は人骨の隣に大型の石棒、三叉も持っている大型の石棒が立っています。一般的な認識では、その写真を見ると「あっ、石棒はこんな所にたっていたのかな」と思うんですけども。どうもそうではなくて、ずいぶん前から氷見洞穴で個人によって採集されていた石棒をそこに持ってきて一緒に写したようです。この点は東大所蔵の写真で確認しました。

大場はこの写真を昭和42(1967)年に平凡社から出版された『日本の洞穴遺跡』中の論文「日本における洞穴遺跡研究史」の中に使っています。大場の論文中には柴田のコレクションの写真がしばしば使用されています。中には大場の文字で「出版社に貸した」と書いてあって、それきり返って来ない写真もあります。

大境洞穴の調査で重要な点は、洞穴が実際に人類に活用されていたということを初めて確認されている。それ以前に大山柏なんかが『史前学雑誌』等で洞穴居住をヨーロッパの事例として述べていますが、大境は日本で初めて確認された事例であります。それと、竪穴住居の確認ですね。これは大場の研究に随分影響しています。特に大場磐雄は - ご承知の通り - 初期は先史考古学を専門にしておりましたから、初期の大場の研究に大きく影響している。

柴田との共著『石器時代の住居址』または『史前学雑誌』の中に書いた「上代の洞窟遺跡」の中で、この柴田の調査について触れています。

柴田はその後、東京大学の調査で、特に所謂「南洋」、ミクロネシア地域への調査を実施しております。大正3(1914)年に第一次大戦が勃発すると同時に、日本の帝国海軍は南洋諸島 - 当時でいう「南洋」という言葉ですけども - 今のミクロネシア地域に進出して、ドイツが領有していたマリアナ・カロリン・マーシャル諸島を占領しております。

柴田は、東京大学では政策の一端として - 初期の人類学調査はそうでしたから - フィールドワークを実施しています。その時に長谷部言人と松村瞭と共に柴田がその調査に参加しています。特に松村とは行動を共にする機会が多かったです。先程の氷見洞穴でも、人骨がごろごろ出てきたら松村はすぐ電報を打って応援を頼んだりしておりますね。この時の写真は東京大学総合研究博物館から『ミク

『ロネシア古写真資料カタログ』として出されております。この解説は、今大阪の国立民族学博物館にいらっしゃいます印東道子先生が書かれております。

実際の調査は大正4(1915)年の3月から5月の間に横須賀から海軍の加賀山丸に載って、チューク(トラック島) - フィジー - マーシャル - ポーンベ(ボナベ) - コシャエから再びチュークに戻って。長谷部言人はここで帰りましたが、その後も松村と共に新ミクロネシアへ回り、ヤップ島 - パラオ - チューク - サイパンをまわって小笠原に1回立ち寄ってから横須賀に戻っています。

柴田が、これに関する写真を沢山撮っています。実は國學院大學の方で柴田に関するプリントを沢山持っておりますが、東京大学総合研究博物館の方では乾板があるんですね。この乾板は元々理学部の人類学教室の旧蔵資料として、ずっと保管されていたものです。それが赤沢威先生の時代に博物館の方に移動したと。それで徐々にカタログとして今出していっていると。前に鳥居龍蔵の写真が随分話題になって、博物館で特別展を2回位やっております。その写真はよく見ると、では全部柴田が撮った写真と同じなのかということでもないみたいですね。東大時代は勿論、柴田が写真を撮ったやつをプリントとして個人コレクションにして持っているんでしょうけれども。その中でも東大の方に含まれている写真と含まれていない写真というのがあるみたいです。

例えばこれはコロールの首長達です(写真5)。フェフェン島の男性 - 耳を穿孔して肥大化しています - (写真6)。これは結構色々なところで使われていて、一度東大の企画展示でポスターにもなった写真だそうです。これはカロリン系の親子です(写真7)。右の男性の右足が象皮病で腫れているというのが分かっているそうです。

キリスト教の教化を受けてしまっている様な島とまだそれが及んでいない様な島がはっきりと分かれているということが柴田や長谷部、ないしは松村の論文の中に書かれており、写真をもて確かにもそうした傾向があるようです。柴田はこの時の調査について「南洋占領地視察談」という論文を『人類学雑誌』の中に書いておまして。これは人類学会の例会で講演したものを活字におこしたものです。

次に、パラオの建造物(写真8)。集会場とか個人住宅として存在したものです。屋根の妻簷の破風の部分に面白い絵が描かれています。または次のように小型なんですけれどね(写真9)。これはちょっと分からなかったんですけども、遺構みたいな感じですね(写真10)。石が組まれている様なやつ。これはちょっと分かりません。あとは面白いのは、海で船に乗って島に近付いていく様子を幾つも写真に撮っているんですね。段々島が見えてきた(写真11)。近付いてきた。最後に、島民が船に乗ってやってきたところ(写真12)。あるいは港に着いたところかもしれませんが。おそらくこの写真の右端に写っているのは、柴田らが乗船していた日本郵船の加賀山丸の船体だと思います。

柴田は、その時のフィールドノートを残しております。『南洋記』という風に題されて大学ノートに残っています。これは貴重な本、重要なデータだという風に認識しております。というのはその時 - 大正4(1915)年当時 - の調査情報としては、柴田・松村・長谷部によって幾つか論文が出されていますけれども、柴田は1編しか書いていないんですね。この『南洋記』には松村や長谷部が行なった、例えば人類学的な計測のデータとかも全部ここに書いてあります。非常に細かい詳細なものです。恐らく出版する可能性を考えていたようですが、何らかの事情で出来なかったのではなかったかと考えています。

『南洋記』に先程の島が幾つかスケッチされています。こんなのが書かれています。椰子油を入れて使用するカンテラです(写真13)。既に柴田の頃には石油ランプが用いられていたことは柴田が論文の中に書いています。よくよく見ると縄文後期末から晩期の初頭位に東北から関東にあった様な手燭

土器みたいな形をしています。これは島民みたいですが、ちょっとキャプションが無いので、どういった状況なのかは分かりません。ただ、当時の居住の様子というのがよく分かるんじゃないかな、という風に考えています。

この『南洋記』というのが - 今ちょっと色々読んでいるところで。まだ内容についてはじっくりと読んでいないんですけども - 非常に面白いのは、例えば写真のこと。どこどこでどういう写真を撮ったか、そういうことが書いてあると同時に、例えば横須賀から船を出す時に松村が港の波止場に写真機を置きっぱなしにしてしまったと。急いでそれを取った、という様なことも書いてあります。もし松村が写真機を置きっぱなしにしたら、この写真はなかったんじゃないか、ということも分かります。非常に面白い資料です。

印東道子先生は大正4年の調査の写真の多くは長谷部と松村が撮った。それは長谷部と松村の論文に多く使われているから、ということを知っています。ただどうもこれを見ると、柴田も随分の数撮影していたんじゃないか、という風に考えております。

### 3. 内務省から文部省時代の調査

さて、その後柴田は東大から異動することになります。戦前の文化財保護行政は明治期に古社寺保存法が出来てから、社寺行政の一環として実施されてきた経緯があります。その中で文部省と内務省の方でそれぞれ管轄が分かれております。文部省の方は古社寺保存法に関わる業務をやっていた。一方で大正8(1919)年に史蹟名勝記念物保存法が施行され、これが内務省の管轄になりました。内務省地理課において行政事務が開始されたのに伴い、柴田が東大からそちらにシフトしたということです。この時、調査囑託・史蹟考査官という名前になっておりますが、実際は現在でいう行政の文化財保護担当者、文化庁の文化財部の記念物課の調査官あたりのポストだったんじゃないかな、という風に考えております。まあこういう経緯です。

最初は内務省の方でやっていましたが、昭和2(1927)年に文部省へ事務移管されて、異動します。宗教局の囑託という形で業務を行うことになりました。

こういった様な業務にあたったことから、柴田は「指定」に関わる業務を行なう為に、日本各地の文化財調査 - これは勿論埋蔵文化財に限らず - を実施しています。調査を実施するにあたって83冊に及ぶ多数のフィールドノート - 野帳 - を残しています。それで、例えば仏像の法量であるとか、色々な銘であるとかを書いてあります。同時に沢山の写真資料を残しておりました。各地域の写真を撮っております。

写真を記録する時に、例えば中尊寺の写真は『中尊寺大観』『中尊寺総鑑』という写真集に纏まっておりますが、この時は大塚巧芸社を使って、カメラマンを恐らく東京から連れて行ったみたいですが。その一方で、各地域にいた、写真館等を経営していたカメラマン - 「写真師」から営業「写真家」という名前に変わった頃ですけども - を使っていたようです。

岩手県岩手郡玉山村渋民 - 「渋民村は恋しかり」で有名な、石川啄木のふるさとです - の常光寺にある仏像の写真です。詳しい事は分かりませんが、ここで非常に面白かったのは、画面の左下にちょっとサインが入っているんですね。写真14です。写真15はサイン部分を拡大したものです。左下の所に「T.KARA」と書いてあります。何かな、と思ったら「唐 たけし」という、戦前から昭和40年代位まで活躍していたリアリズムの写真家、芸術系の写真家として有名な方だった、という事実が分かりました。これは東京都写真美術館の金子隆一さんと岡塚章子さんのご指摘です。

どうも柴田は、地域にいた写真家を沢山使っていた様な形跡があるんですね。これもそうですね(写

真 16)。正面と背面という風に、きちんと資料写真としての撮り方で撮らせています。唐たけしがこういう資料写真を撮ったという事例は、写真史の専門家の方でも非常に珍しがっておりました。

文化財調査を実施するにあたって、その記録化という行為に関して自らが詳細なフィールドワークを実施していたと同時に、例えばさっきの大塚巧芸社みたいに立派な写真集を作る一方で、普通の調査に関しては地域の専門写真家を使っていたという風に、成果物をどう出すかによって写真家を使い分けているんですね。あともう一つは当然といえば当然ですけども、柴田が自分自身で撮っています。その時は写真としての質は写真家に比べたら落ちるものもありますが、ある程度、どういう風な成果を出すかによって写真家を使い分けているかということを考えさせます。

このような構図というのはよくよく考えたら、現在の文化財の記録化ないしは活用に関わってくる様な基本的なワークフローを柴田がある程度確立していたという可能性を想定させます。そういった行為は、ある程度文化財写真の専門性が高い写真家を柴田が各地域で育成しようとしていたんじゃないか、という風に考えられます。

柴田は『渥美郡史』とか『埼玉県史』という市町村史・県史を編纂しましたが、一方で埼玉郷土会を発足させたりして、地域史を推進させています。それによって、これは初期の文化財保護行政によって柴田一人では勿論出来ない訳ですから、地域の研究をどんどん推進していたということがわかります。そして文化財の色々な保護システムを戦前において確立していこうじゃないか、という考え方があったのではないかなど。また、写真をどうするかという点で、写真家を地域で使うというのもその中の一環で考えていたんじゃないか、という風に私は考えております。

#### 4．大場磐雄と柴田常恵

さて、大場磐雄は柴田に関してどういう風に考えているかという話ですが、大場は柴田と同時期に内務省の神社局の考証課に勤務していました。そのことから柴田と色々関係が出来ていたようです。その後、大場の言葉でいうと「外弟子的な関係」という風になっています。

大場磐雄は築地書館の『日本考古学選集 12』の中で「学史上における柴田常恵の業績」という文章を書いております。その中の一節。「全体に地味で学界を驚かしたという論著は少ないけれども、私たち考古学を学ぶものにとっては忘れることの出来ない数多くの示唆や御指導を受けた。私は大正末年頃からの所謂外弟子の一人であって、少ない私の学問の師の一人として今でも尊敬の念に変わりはない。」「氏の学問は、その中心が考古学にあったことは疑を容れることは出来ないが、その学問的領域の広さから見ると、他の同時代の学者とやや異なっているといつてよいであろう。博学多識という語はまさに氏を指しているかと思う。私たちがしばしば疑問をもつと「まず柴田先生へ聞こう」というのが当時の常識であり、氏はまたこうした後輩の疑問に対して諄々(しゅんじゅん)とたのしそくに解説されたのであった。」という風な文章を書いております。

こういった文章を始め、先述しました『石器時代住居址』を柴田と共著で出し、更には大場の洞穴・岩陰遺跡研究に柴田の影響というのがものすごくくっきりと反映されている点、そして何といつても柴田の調査資料を大場が國學院大学の勤務時代に大学の方に購入させているということを考えてみると、大場が柴田から研究活動の面でかなり影響を受けていたことを改めて理解できるのではないかと、いう風に考えております。

#### 参考文献

大野究編『特別展 大境洞窟をさぐる』氷見市立博物館、平成 14 (2002) 年



写真1 ( sj0138)



写真2 ( sj0150)



写真3 ( sj0168)



写真4 ( sj0187)



写真5 ( sj-np-0048)

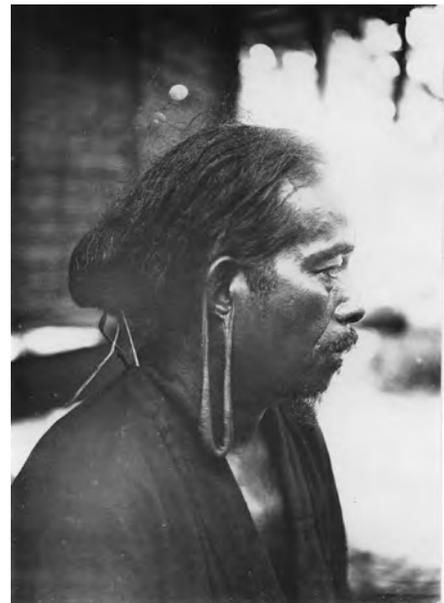


写真6 ( sj-np-0045)



写真 7 ( sj-np-0003)



写真 8 ( sj-np-0030)



写真 9 ( sj-np-0031)



写真 10( sj-np-0024)



写真 11( sj-np-0015)



写真 12( sj-np-0016)



写真 13( sj-np-0017)



写真 14( sj0471)



写真 15( sj0471の部分拡大)



写真 16( sj0472)

写真出典

全て柴田常恵写真資料 (國學院大學所蔵)より

(内は 柴田常恵写真資料目録』 (國學院大學日本文化研究所 2003年)による整理番号  
但し、南洋の写真については目録未刊行につき仮番号 ('sj-np」のもの)を掲載

## 楽石雑筆にみる君津地方の遺跡調査

光江 章(財団法人 君津都市文化財センター)  
酒巻 忠史(木更津市教育委員会)

### はじめに - 楽石雑筆とのかかわり -

光江 章：それでは、「楽石雑筆にみる君津地方の遺跡調査」ということで始めさせて頂きたいと思います。

まず始めに、お手元にあります資料に4名(光江・酒巻・甲斐博幸・稲葉昭智)連記してあります。実はこの4名で『楽石雑筆』を中心にした資料収集とか情報交換で集まりを持っております。今日は都合により出席できませんので、私と酒巻がその4人の代表という事で報告させて頂きます。

まず『楽石雑筆』との関わりですが、木更津にあります菅生遺跡の記述がかなり多くあることは、以前から知られていました。『袖ヶ浦市史』の編纂の過程で、改めて『楽石雑筆』を読んでいますと、菅生に関する記述だけではなく、木更津市内のこれまであまり知られていなかった遺跡の記述ですとか、木更津市内の町の様子とか、そういったものがかなり書かれていますので、非常に興味深いものでありました。

そこで、考古学関係の検討の他に、色々な面からの情報交換を考え、さらに、その情報交換したものを共有化し、将来的にはどういう形になるか分かりませんが、公表も念頭にいた上で一応複数の人間で検討していった方が良いのではないかということで、上に挙げております4名で集まりをもっている訳です。

特に情報の共有化という点でいいますと、個人で、話としては色々知っているんですけども、情報として活かされていないということは、我々の身近でも目にします。個人的に知っていることや、地元の伝承とか言い伝えみたいなものは、その場や個人の段階で途切れてしまえば情報としてはおしまいだ、という部分があります。この場をお借りして、皆さんに知って頂くという非常に良い場を与えて頂いたことを有難く思っております。

それでは、私は「君津地方と大場磐雄」、それから「遺跡調査と大場磐雄」の中で丸山古墳についてのお話をさせて頂いて、その後酒巻に代わりたいと思います。宜しくお願いします。

### 1. 君津地方と大場磐雄

まず、表1をご覧ください。大場磐雄氏の足跡としましては、まず昭和3(1928)年に木更津の方に来られているんです。これが一番最初ですね。この時は丸山古墳というところの資料を見ただけで、特に調査・発掘等はされていません。その後、遺跡の発掘などをされるようになるのが昭和8(1933)年からです。昭和8年から昭和13年にかけて、主に菅生遺跡の調査を中心にされております。

図1に示しましたように、君津地方は千葉県のほぼ東京湾側の中央辺りに位置します。北から袖ヶ浦市、木更津市、君津市、富津市。この4市を一応君津地方と呼んでおりますけれども、この地域を中心に色々調査されております。この他には、千葉県内では銚子ですとか、それから館山方面もかなりいらっやっていますようですが、我々は『楽石雑筆』の中から特に君津地方の資料だけを丹念に読み込んでいますので、他の地域の事についてはあまり深く検討しておりません。

最初に大場氏が君津地方を訪れたのは木更津市の丸山古墳というところです。図1の上ではかなり込み入っておりますが木更津駅の東側にあたります。

それから、安房の方に行かれた際に途中、富津市の上総湊に一度立ち寄られて、その地元の方の資料を見たという記述ですとか、後程お話しします九十九坊廃寺、その途中で牛ヶ作窯跡、葎ヶ作貝塚といったと

ころを色々見て回っていらっしやいます。

菅生遺跡の調査は、かなり『楽石雑筆』の中に書かれているんですけども、その中で特に我々の興味を引いたのは、今まで知られていなかった古墳について写真を撮ったとか、それからその石室の細かい様子であるとか、そういうことが書かれている点です。こういった点で『楽石雑筆』を読むだけではなくて、こちらの大学所蔵のもので何か資料写真などがあるのではないかと、ということで杉山林継先生にお尋ねしたところ、偶然に画像データの整理をされているというお話でした。そこで写真を見せて頂いたところ、今まで見たことがない写真というのがかなりありまして驚いたという様な状況です。

## 2. 遺跡調査と大場磐雄

### (1) 丸山古墳

まず、木更津の丸山古墳という、たまたま個人のお宅の庭先にあった古墳を掘ったところ、遺物が出てきた、ということです。表2「丸山古墳出土遺物一覧」という形で挙げてありますが、第1回、第2回、第3回と分かれて遺物が発見されたようです。このうちの第3回の資料が大場氏が実際に調べた資料になります。第1回の8月6日と8月13日の資料につきましては、『楽石雑筆』の中に資料に示したようなものが書かれてあります。

表の一番右に「東博所蔵品」という事で、現在東京国立博物館の方に所蔵されている資料を挙げております。土器については東博の所蔵品の中からは抜けておりますけども、第1回と第2回のものについては大体所蔵されているように思います。写真1・2は大場氏が撮影したもので、第3回のものにあたるかと思えます。写真1に須恵器が4点並んでいまして、その下に銅鈴が2点ありますが、これは東博の収蔵資料と見比べると、若干違いがありますんで、東博の所蔵品にはなっていないという事です。銅鈴が都合3個出ていますけれども、このうちの1点が東博所蔵品となっていますので、この2点については所在不明です。写真2ですが、これも東博の収蔵資料ではなく、須恵器については収蔵されていないという事がわかります。それと一番左側の、土師器の高坏だと思わんですけども、これは脚部に透かしが入っていて非常に珍しいものといえます。

君津地域では10例ほどですか、こういった資料があります(図2)。菅生遺跡でもこのような資料があるんですけども、丸山古墳から出ているというのは、私初めて知りましたので、この写真を見せて頂いて非常に驚いたというところが正直な感想です。

このように現在見ることが出来ない資料が、大場資料の写真の上では確認出来るということが分かります。それと同時に『楽石雑筆』を見ていきますと、写真と文字資料との対比で、非常に興味深いところが益々出てくるのではないかと考えています。

丸山古墳ですが、一応6世紀の中頃から後半にかけて、という年代観が挙げられております。今後、墳丘の測量とかというのが個人のお宅の中、という事でかなり難しい部分がありますので、これからのことについてはまた報告をしていかななくてはいけない部分かと思えます。

### (2) 牛ヶ作窯跡

光江：次に「牛ヶ作の瓦の窯跡」と「九十九坊廃寺」について酒巻の方から報告します。

牛ヶ作の窯跡は、昭和8(1933)年11月九十九坊廃寺に行く途中、大場氏が立ち寄って瓦を確認しています。昨年(2002年)の12月に木更津市教育委員会で発掘調査を行ないました。これは大場氏が牛ヶ作の窯跡を訪ねて以来70年振りとなります。そういったところの発掘を担当した酒巻が居りますので、大場資料と、今度の発掘資料を比較して話してもらいたいと思います。

酒巻 忠史:木更津市の酒巻と申します。『楽石雑筆』の昭和8(1933)年9月10日の記述からです(史料1)。

大場先生が九十九坊廃寺に足を運んだのは2回でして、昭和8年9月10日と昭和8年11月4日・5日の両日です。

昭和8年9月10日は非常に暑い一日だったとあります。8時21分に、この日は両国を出発しまして、市川の方に寄って、市川を9時44分に出発して、11時に周西駅...今の君津駅です。周<sup>すえ</sup>淮郡の西にあるという事で「周西」という様な言い方をします。周南、周西という様な言い方が今でもありますが。周西駅に着きましたが、そこから迎えないので法木作というところまで歩いていきます。3km位ありますけれども炎天下の中を歩いて行っている様です。

これらを全部読んでいきますと、大場先生は非常に行動力があって。今の我々より若い時だと思のですが、思い立ったらすぐ動く様な、今の私達も見習わなくてははいけない、非常に行動力に溢れた方だったというのが随所で分かります。

大場先生が来ることになりまして、地域の郷土史をやられている小熊吉蔵という方がいるんですが、その方が大場先生の為に場を設定しまして、遺物を全部集めてあげている。それから発掘を、地域の若い人間に頼んでやらせて、見せ場を作ったところに大場先生を呼んできている、という様な状況が良く分かります。

國學院大學の方からご提供頂いた写真をもとに、そのつき合せを『楽石雑筆』の記述としましたけれども。その史料と、牛ヶ作瓦窯址の方は昨年の12月に掘ってみる事が出来たので、それを合せてご紹介致します。

昭和8年の11月26日に波岡村から八重原村へ、という事です(史料2)。今度は牛ヶ作という所がありまして九十九坊に瓦を供給した窯があるという場所を見学をされている様です。この日は小熊氏とは会う事が出来なかった、という風に書いてあります。最初に、この人物が誰かといいますが、この日は篠崎四郎さんと服部という方とそれから大場先生と3人で行動を共にしています。

写真3をご覧ください。小熊吉蔵さんには会えなかったと書いてありますので、この中には小熊さんはいなくて、一番右側の棒を持っている人がこの土地所有者の中原春次さんという方で、現当主のお父さんにあたる方なんです。それから、真ん中に手ぬぐいみたいなものを持って立っている方が篠崎四郎さんですね。他の写真からもこのお顔で間違いありません。それから『楽石雑筆』の中に苗字しか出てこない。「服部君」とか「服部」とか書いてある方なんです。新聞記者ではないか、という風にも思うんですが。左から3番目のメモをとっている方です。左側の2人は恐らく地元の人だろう、と考えています。少し棒の先で掘っている様な状況ですけれども。この時、少し掘ってみただけでも何も出てこなかった。小さな瓦の破片と焼土が出ただけであったと書いてあります。

図4に牛ヶ作の現状図が書いてあります。大場先生達が撮られた部分というのが丁度この真ん中の部分です。それ以前に、大正時代に刊行された『君津郡郡誌』という本があるんですが。その写真にはもう少し上のあたりから瓦が沢山出ている様な写真がでておりまして。その場所ではないところをどうやら掘っているんです。

我々が昨年12月に掘った部分というのが、この大場先生が掘ったすぐ横の部分と、それからその一番北側に「瓦出土地点(地表からスコップ1・2回の深さ)」と書いてあるところを掘らせて頂いて、瓦が沢山出ました。図4の下部に断面図があると思うんですけれども。なだらかな傾斜地に窯が存在したと考えられまして。大場先生はこの田圃の部分の、丁度土手のはじっこを掘っている。私達が掘りました土蔵の下というところからも、土蔵の横のところからも瓦が出てきました。

この断面図の一番上の「君津郡誌発掘推定地」というところは既に県道の土手で埋まってしまっているけれども、これを結ぶとほぼ一直線になって、登り窯の一部とそれから灰原の一部という様な関係になるかと思えます。

(写真4)これが東側から撮った写真で、恐らく昭和2(1927)年に刊行された『君津郡誌』というのに載っている、沢山瓦が出た、というのがこの辺、この上の段だと思うんですが、どういう訳かこの後一行はこの下の部分を掘っています。この中原さんが『君津郡誌』の写真にも写っていますね。かなり瓦を沢山掘り出している写真を撮っている様な状況もあるんですけども、先生達の一行はどういう訳か、その場所ではないところを掘っている様です。

これに写っているのをよく見て頂きたいんですが、先程は5人の人間がいたんですが、この時点では3人になってしまっていて、地元の人は何も出てこないからどうやら帰ってしまったようです。ここに人が、籠かなんか背負っている様な人が写っている様なんですが、どうやら、もう何も出てこないから、という事で帰ってしまったのではないかと、思えます。

(写真5)現在の同じ場所から撮った状況ですね。先程の、人が登っていく坂道というのがここで、生垣がカーブして残っている。先生方が掘った場所というのが恐らくこの部分で。当時は、田圃がこういう風に広がっていたのが今はこの道路を造る為に埋立てられてしまっています。

(写真6)逆側から撮ったものです。元々はこれが随分こっちまで開いていたんですが、全部埋めてしまって。今は道路を作ってしまった、という様な状況です。

(写真7)これが幅が70cm位のトレンチで、大場先生達が掘った近くですね。左上なんですが、ここまですが田圃の層ですね。これが田圃の耕作土で、その下から瓦が沢山出て来ました。ですから先生達は恐らくこの辺を掘っただけでやめてしまった様で、もう少し下まで掘れば、瓦が沢山出てきたのに、と分かりました。先生方が掘った様な形跡はなかったんですが、先程の、先生方が写っている写真には土の量がほんの少ししか出てこなかったの。やはりそこまでいっていないという事が分かります。

(写真8)土蔵の横のトレンチを撮った写真ですが、平瓦が歪んでくっついている写真があります。それと同じ様なものが実はここから出ていまして、5枚位、平瓦と丸瓦が潰れた様な状態でくっついています。丸瓦が扁平に開いてしまっているものもあります。

(写真9)窯址を北側から臨んだところです。両脇が山になっていまして、南北に長い谷の、一番谷頭の部分に窯があります。丁度東京湾からの北風が上手く入り込む様な位置に作られています。

(写真10)平瓦が5枚くっついている写真ですね。これは大場先生がお撮りになったものですが、現在所在が分かっておりません。

(写真11)軒丸瓦の焼き損じたものですが、これも大場先生がお撮りになったものです。

(写真12)これもそうですね。左側の軒丸瓦は写真11のものと同じですが、これは地元の波岡小学校という所に今でも残っていて、それを県立の上総博物館という所が借り受けておいて、それをまた借り受ける形で、久留里城址資料館という - 君津市立ですが - そこに今でも残っています。右側は平瓦が5枚くっついているものを反対側から撮ったものです。

(写真13)これが12月に我々が掘った時に出てきたもので、やはり同じ様な模様なんです。

(写真14)拡大です。割れてしまっていますけれども。

### (3) 九十九坊廃寺址

まず、九十九坊という名前なんですが、これは大場先生もお書きになっているんですが、この地にかつては九十九の坊があって、大伽藍が存在したのではないかと、いう様な伝説が地域にあって、そういう名前

で呼ばれているのではないかと考えられています。塔が真ん中くらいにありまして、その西側に公民館を建てるので平成5(1993)年に調査をしましたところ、掘立柱の建物が沢山出てきました。こういう掘立柱が沢山あった状況を、沢山の僧坊が建っているということで九十九坊という風と呼んだのではないかと、という様な想定が出来るかと思えます。

この九十九坊廃寺というのは、有名な内裏塚古墳群が富津の小糸川の河口の方にありますが、そこに前方後円墳をずっと造り続けて、その後方墳を造り、方墳の時代が終わった後に造られた最初のお寺です。7世紀の第4四半期ですとか、7世紀終末ですとか。そういう言い方をしますが、君津地方の中では非常に古いお寺の一つです。

(写真15)この写真は塔の基壇の写真ですが、これは9月10日に撮ったのではなくて、11月5日に撮ったのだと思います。これが塔の基壇とされているところでして、10年以上前に、発掘調査がありまして、確実に塔の基壇だということが分かったんですけども、図3にお寺の全体図がありますが、その右の真中辺りに「塔」と書いてある。これを東側から見た写真です。多分左側の人物が持っているのが2mのスタッフですが、高さが1m以上ある様な状況だったという点に分かると思えます。

(写真16)現在の状態です。実際はもう少し、この画面の左側から撮った写真だと思うんですが、当時はかなり周りに林があった様ですが、多分戦時中の...色々、材木が要るというような事情で全部刈り取られてしまったのではないかと思われまます。先程の写真にはかなり背後に林が写っていた様なんですが、今ではこういう状態になっております。

(写真17)逆から見た、南側から撮った写真です。この山並みを覚えておいて頂きたいんですが、この山並みが次の写真で分かると思えます。

(写真18)ここに同じ山並みがあると思うんですが、写真18には塔の基壇が写っていましたので、もう少し画面の左側から撮った写真だと思うんですが、今では人家が建っておりまして、撮ることが出来ませんでした。

(写真19)これが千葉県教育委員会の方で学術調査を行なった時の写真で、塔の基壇を綺麗にした写真です。森本和男さんが書かれたこの報告書(『君津市九十九坊廃寺址確認調査報告書』千葉県教育委員会1985年)がありますが、この報告書から引用したものです。

(写真20)これは大場先生が撮られた写真で、真ん中の心礎の礎石ですね。

(写真21)これが千葉県が掘った時の同じ石です。

(写真22)半分埋まった状態の、写真21のまだ掘り出していない状態です。こういう写真もあります。

(写真23)近くの家にあった「犬石」と呼んでいるものです。「犬石」とか「牛石」とかいう風と呼んでいる例があるようです。上総の大寺廃寺にも「犬石」と呼ばれている同じ様な石があるんですが、塔以外の建物に使われた礎石を地元の人が掘り出して、色々なものに転用しているものだと思います。

(写真24)これは最近の写真で、塔の近くにこの様な大きな、一抱えもある様な石が幾つか残されておりまして、これは二つありますが、こんな大きな様な石です。こういうものを指して「犬石」と呼んでいると思えます。

(写真25)これもそうですね。ここにカメラのキャップがありますけれども、こんな大きな石で、すぐ塔の基壇のすぐ近くに半分埋まった状態で残っております。かなりの数が近くにあるという記述が見られます。

(写真26)これがですね、1回目の調査の時に瓦を出してきて、見せてくれたとあります。そして写真を撮りましたということが書いてあるんですけども、地蔵堂というところに安置していた瓦ではないかと思えます。

左側の軒丸瓦につきましては、県立房総風土記の丘というのが龍角寺の近くにありますが、そこに今入っております。右側の軒平瓦については、所在が分かっておりません。この左側と同じ様な瓦が國學院大學の考古学資料館にも1点入っておりますので、御覧になると良いかと思えます。

おわりに

光江：入れ替わりで申し訳ありません。今話しました様に、我々4人で『楽石雑筆』の君津地域の部分を中心に、文字史料とそれから國學院大學からご提供頂いた写真資料に基づいて、検証を細かく行いながら、まず『楽石雑筆』の記載に従ってやっているんですけども、A4サイズで、君津地方の記事だけ抜き出しまして34頁とかなり膨大な量になります。大半が菅生遺跡関係のもので、それについてはまたおいおいという事も考えていますけれども、取り敢えず、九十九坊廃寺、牛ヶ作、丸山古墳という風に進めています。

『楽石雑筆』の中を読んでいますと、先程冒頭の方でお話しました様に、古墳の記述というのかなりあります。菅生遺跡の調査をやっている時に、相里古墳ですとか松面古墳という古墳の調査をされています。これは1日か2日位の調査で、我々の今の感覚からいうとかなり違いがあるんですけども、こういった古墳の調査をされています。というのは多分、大場先生という、東京から著名な方が来られたのだからこの機会に調査をやらしてもらおうじゃないか、ということで古墳の調査をお願いしたんじゃないか、という風に思います。

それと同様に、菅生遺跡の調査の方で、酒詰仲男さんが参加されているんですけども、やはり酒詰さんも君津市の小櫃という所ですね。図1をちょっともう一回開いて頂きたいんですけども、今お話ししました九十九坊廃寺が真ん中辺りにありますが、「九十九坊廃寺[君]」の右側にJRの小櫃という駅があります。その辺りの小学校の校庭から弥生式の竪穴が出たという事で、その小学校の校長先生が発掘を依頼してきてまして、昭和13(1938)年の8月に酒詰さんと江藤さんという方が2日間で発掘をやっています。

君津地方では、住居址の調査としては一番古い事例ではないか、と思われまので、今後はこういったものも活用していきたい、と思っております。

今までの活動の現状をお話するという事で、纏まりがありませんでしたけれども、これで終わりにしたいと思えます。

表2 丸山古墳出土遺物一覽

第1回 (8/6)	第2回 (8/13)	第3回	東博所蔵品
武器	直刀5本 直刀長き分2本 直刀短 2本 直刀破片 7、8本 鏃 (片共) 100個	直刀片数個 鏃 (片共) 数個 刀片及び金具 (鍍金) 2個	直刀残片1点 直刀残片一括 刀装具残欠一括 刀装具残欠一括 銀装 刀装具残欠一括
装身具	金環6個 曲玉2個 切子玉 (水晶) 5個 瑪瑙完1個 瑪瑙破片1個 (琥珀ならん) 瑪瑙片4個 (コハクならん) 瑪瑙小玉16個 緑小玉2個 (ガラスか) 白小玉4個 (ガラスか)	金環8個 勾玉2個 切子玉5個 コハク玉1個 ガラス小玉15個	金環8個 勾玉2個 切子玉5個 緑玉残片3個 小玉一括
	銅鈴1個	銅鈴2個 鉄鐔片1個 石突鏃 銅製品1個 銅塊1個	銅鈴1点
土器	皿 (大小) 6個 皿破片1 高坏12個 高坏 6個 平瓶3個 皿 (大) 1個 皿 (中) 1個 皿 (小) 1個	皿9個 高坏2個 破片6個 高坏蓋4個 破片4個	高坏 (蓋付) 1個 埴盆高坏数個 (片共) 台付埴 (蓋付) 1個 台付埴 (ナシ) 1個 俵壺1個 甕 (小形) 1個
その他			甕石 (自然) 1個

表1 大場磐雄の足跡

昭和3年9月9日	木更津行 丸山古墳 [木]
昭和7年3月6日	安房行
昭和7年7月24日	安房三遊記 上総灘 [葛]
昭和8年7月13日	千葉県下周遊記 富津古墳群：西原古墳・内裏塚古墳・割見塚古墳・ 向原古墳 (宮原古墳)・宮原二号墳 [葛]
昭和8年9月10日	九十九坊廃寺跡調査
昭和8年11月4～5日	九十九坊廃寺 [君]
昭和8年11月25～26日	九十九坊廃寺跡再調査
昭和9年2月10～11日	九十九坊廃寺 [君]
昭和9年2月10～11日	波岡村より八重原村へ 蔵ヶ作貝塚 [木]、牛ヶ作窯跡 [木]
昭和9年2月10～11日	大寺調査
昭和12年11月23日	大寺廃寺 [木]
昭和12年12月12～13日	中郷村予察記 菅生遺跡 [木]
昭和13年1月23～24日	清川村六木遺跡調査 菅生遺跡 [木]
昭和13年1月23～24日	清川村第三回調査 菅生遺跡 [木]
昭和13年2月5～7日	清川村第四回調査 菅生遺跡 [木]
昭和13年3月3～14日	清川村第五回調査 菅生遺跡 [木]、祇園上深作貝塚 [木]
昭和13年4月8～25日	清川村第六回調査 (第二期) 菅生遺跡 [木]、松面 (元新地) 古墳 [木]
昭和13年5月6日～5月13日	清川村第七回調査 菅生遺跡 [木]、相里古墳 [木]、大塚古墳 [木]
昭和13年7月13～31日	菅生第三期調査 (第八回) 菅生遺跡 [木]、松面 (元新地) 古墳 [木]、滝ノ 口子持勾玉出土地 [袖]、真里馬古墳群 [袖]、山行 貝塚 [袖]、鏡ヶ峯古墳 [袖]
昭和13年10月6～8日	菅生調査 (第九回) 菅生遺跡 [木]

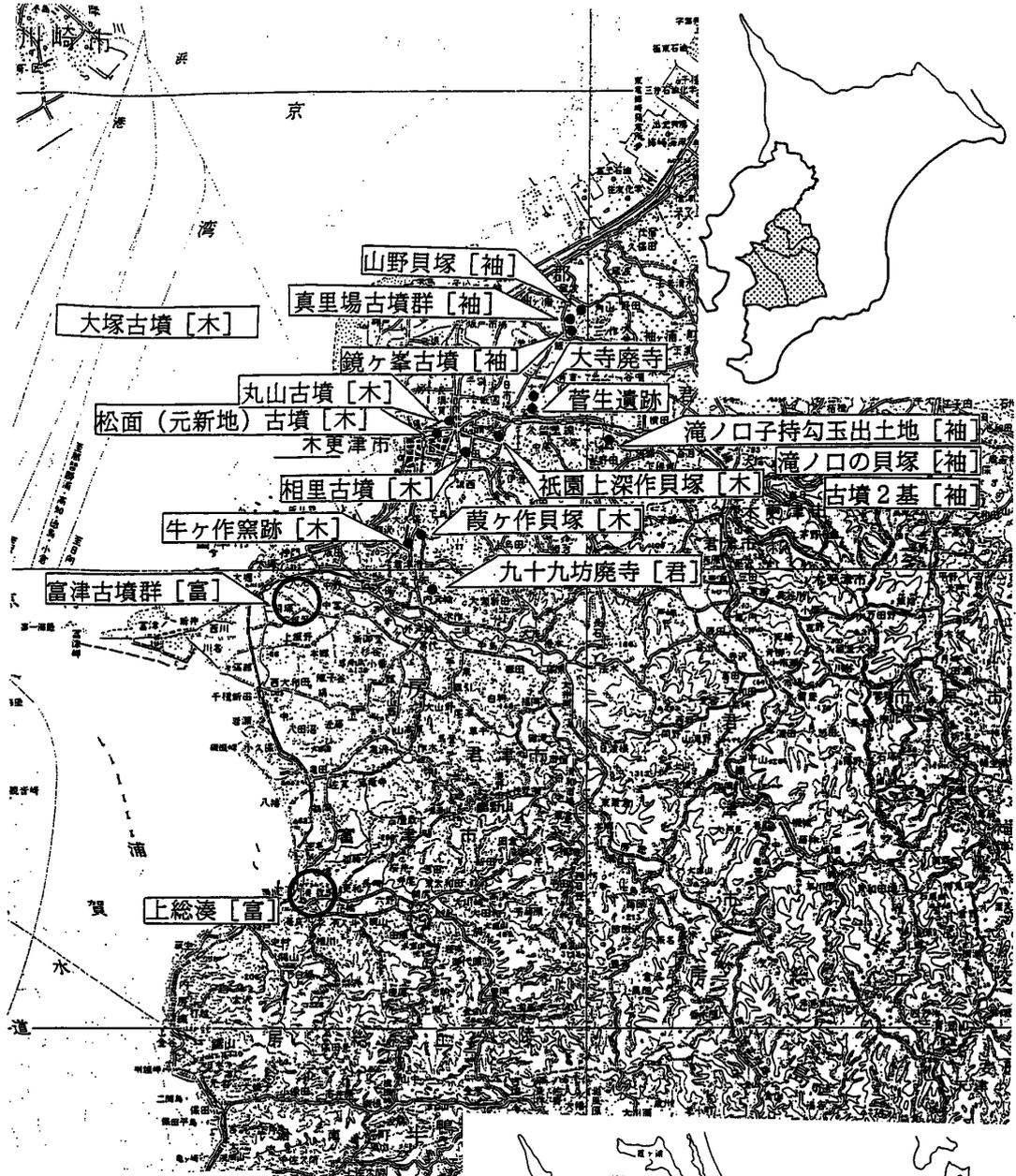
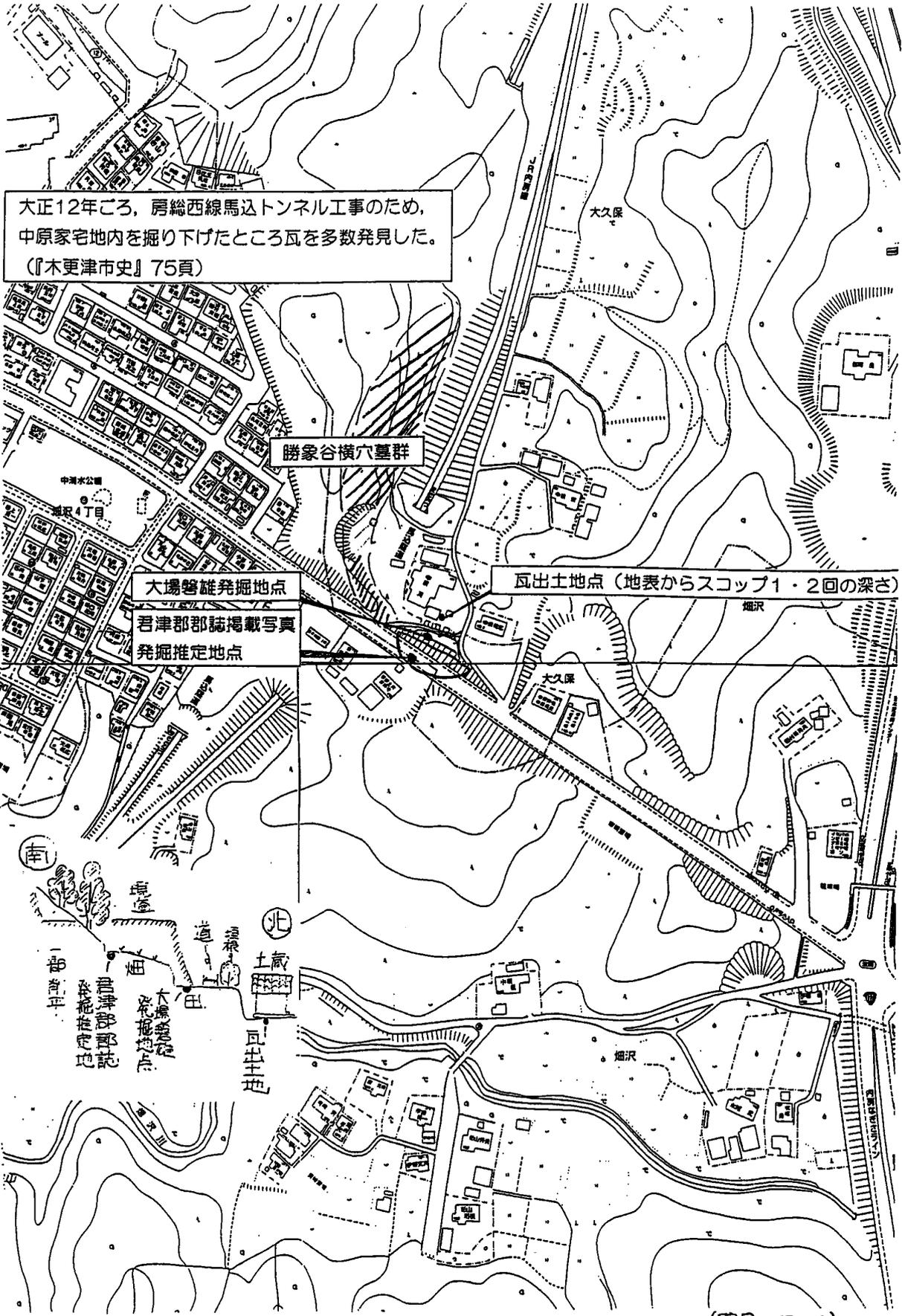


図1 君津地方遺跡分布図



図2 透孔高杯分布図



大正12年ごろ、房総西線馬込トンネル工事のため、  
中原家宅地内を掘り下げたところ瓦を多数発見した。  
(『木更津市史』75頁)

勝象谷横穴墓群

大場磐雄発掘地点

君津郡誌掲載写真  
発掘推定地点

瓦出土地点（地表からスコップ1・2回の深さ）

図3 大久保牛ヶ作瓦窯跡現状図（附聞き取り調査報告）

(縮尺 1/3,000)

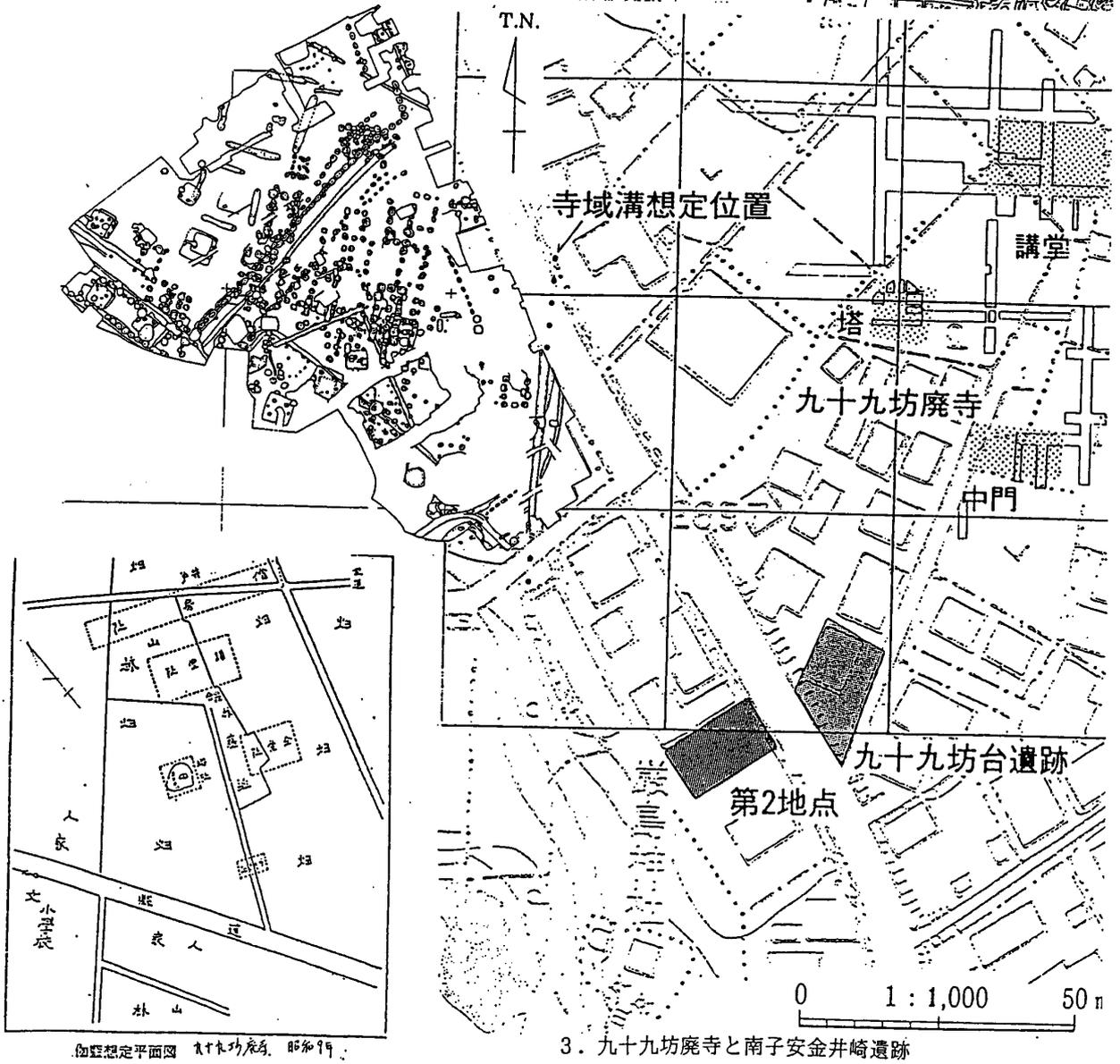


図4 九十九坊廃寺跡関連図

九十九坊廃寺跡調査  
坊廃寺跡の調査を行う。

◎九月十日、かねて調査を思い居たりし千葉県君津郡八重原村大字箕輪字九十九坊廃寺跡の調査を行う。

九時四十分市川発、十一時四十分西原駅着、何人も迎えなきを以て徒歩にてゆく、直熱やぐが如く流汗甚し。漸々八重原村法木作の破路につくに茶店に小熊氏の姿あり、嬉しやと挨拶をのべ休憩す、間もなく同村長齋藤氏も来り、共にバスにて役場に赴く。有志十数人待ち受けたり。一同に会釈して直ちに陳列の遺品を一覧す。

第一に注目し上りしは波岡村大字大久保字牛ヶ谷発見の古瓦類にして一は硫瓦なれど全体ヒドを入りて割れ目入り、又丸瓦の五枚融着せるものにして高度の熱にあいたるもの、明かに窯跡発見遺物にして九十九坊出土のものと同型同文様なり、この地は傾斜せる丘陵の一端にして付近に良水あり、畑地の各所より多数の古瓦類を出土し、且つ木炭等をも伴う。八重原村よりは隣村にて距離も亦遠からず、蓋し九十九坊所用の古瓦窯跡なる事疑を入れず。次に九十九坊廃寺跡出土の古瓦類を見る。主として小学校付近出土のものにして硫瓦、花瓦その他あり、型式は重孤文を有する白鳳期ともいへべきもの往々火中せりと思わるゝものも存す。この地は今八重原村大字内箕輪字九十九坊に属し、役場より東方一二町、小学校より県道をへだてて存するなり。丘陵上にあり、西南に念仏池と称する湧水池あり傍に弁天堂あり、この池嘗て梵鐘投入して鎌倉建長寺に出現せりとの伝説を有す。又この地往昔は九十九の坊ありたる大伽藍存在せりともいふ、又畑中に土壇ありて鐘つき堂とも伝へ、源頼朝の為に焼失せる大寺ありしともいふ。

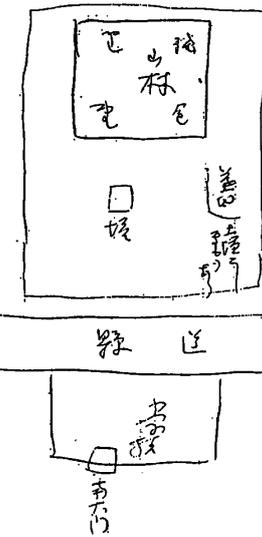
次に八重村三直新聞員塚出土品を見る。薄手式土器(主として安行式)を主とし、磨石斧、鹿角等あり。この記事は谷中国樹氏、考誌十九巻に報告せり。

写真を取りて一同に紹介され谷中氏、八重原小学校長などと名刺を交換し昼食の馳走に預る。午後二時頃一同と共に遺跡を探索す。余は先ず畑中に存する土壇に赴きて付近を見るに古瓦片散在せり。土壇の西端に巨石の存在を認め、ピッケルにて探るに上面に孔ありて青年団員に発掘を依頼して、更に付近をさぐる。土壇の北方二〇間程隔て一巨石あり。俗に大石といひ、もと畑地に存せしを掘り起してこゝにおけり、花崗岩の自然石にして表面平かなり。長さ一メートル、幅九〇センチ、高さ四二センチ位、蓋し礎石の一なるべし、その傍に小祠ありて地蔵堂となし中に付近発見の完全なる硫瓦及同破片類を安置す。先年大石を掘りたる際地蔵尊出現せるを安じて一時大いに信仰ありきと、なおきく所によれば付近の民家に牛石と称する石を存せりと、蓋し同様のものか。それより北は松林にして近年の植林にかかると、蓋し同様の墓地あり。藪草茂りて調査に困難なりとす。きく所によれば植林の際巨石を存し一間おき位に並列せりと、又古瓦類も出土す。蓋し一遺構ありしなるべし。松林のつゞく所小径あり、後は畑地とす。畑の後は丘陵となる。

再びもとに戻りて土壇の状態を見るに西端の巨石は全部をあらわせども一部を欠損し、且つ傾斜せり、孔は径二〇センチ位にて礎石には相違なれども心礎とは認められず。故に更にその中央を発掘せしむ。余は更に県道を隔てり弁天堂より念仏池を見、小学校庭の一部より丘陵のつくる所古瓦の出土せる地を見る。こゝは土壇より西端約一丁余に当る。

畑に戻りて土壇の発掘を見るに中央に於て約三、四〇センチにして巨石の存在を知り、更に掘り広げしに柄穴の存在を認め、明かに塔心礎なるを確かめたり。又は凝灰岩にして西端に傾斜し、上面一部を欠きしが特に技巧を加えし跡なし。長さ一・九五メートル、幅六七センチ、穴は舟底形にくりて幅(径)五二センチ、深さ二〇センチ位その他何もなし。蓋し古瓦と並行する心礎といふべし。土壇は高約一、二メートルほど方形にして一辺約一〇メートル、一辺約一二メートル、心礎はほど中央に存す。蓋し先に掘

りたるものは側柱の礎石ならんか。一同歓呼して更に調査をすゝむ。時に地蔵堂安置の古瓦も保管者より鐘をひらきてとり出す。完全なるものにして型式も亦典型的なり。時に午後五時近し、小学校に入りて写真及拓本をとり更に自動車の来る迄一場の講演をなす。案ずるにこゝに奈良朝前期、一の大伽藍ありしは疑をいれず。試みにその遺構を推定せばほど左の如くなりしか。



即ち塔を中心としその北松林中に金堂、講堂の遺跡あり。県道をへだてり丘陵の一部(西南)に南大門あり、南は沖積層の田に面し、北は丘陵を負う。地形も亦よく適せり。古瓦の文様より見て竜角寺、木下出土のものと同様似し、又更に結城寺、薬師寺等とも匹敵せり。実に顕著なる一遺跡なるべし。しかしいかなる理由によりこゝに建立をみたりしか、蓋しこの地は古への周准郡に属し、なおこの付近に郡家あり。又和名抄の三直郷、湯行郷等あり。これ等古郷、古道、郡家と合せ考ふる必要あり。又古墳の分布より地方豪族の分布を知る必要あり。蓋し郡家の所在と深き関係あるものならんか。

六時半頃一同に別をつけ、市原郡門田村市場より来れる河内竜彦君と共に帰途につく。

波岡村より八重原村へ

○十一月二十八日、考古学会にて講演  
を行う事となりしかば、更に調査の必  
要を感じ十一月二十五、六両日を再び千葉県下ゆく。

◎十一月二十五日、午後正則中学校内に一場の講演を試み(芝公園を中心とする考古学上の遺跡遺物)、これより直ちに円タクにて両国駅へ赴き、服部君と逢い三時十二分発の列車にてゆく。途中一杯のむ、駅につきしは五時一分、それより松川旅館をたずねしに今なしという。やむなく黒板に掲示して余等二人は石井樓に泊る。まもなく篠崎君も来り、これより夕食、篠崎君は真野ヶ谷の寺跡を探せりとて、その遺物を見せる。布目瓦と鬼板らしきものとあり。年代はやゝ降る如し。

十二時過迄大いに酔い且つ話して就床。

◎十一月二十六日、朝七時過起床、乗合にのりおかれてこれより二人は自動車にのり余は徒歩にてゆく。途中神社境内に横田楓江の碑を見又寺に狸塚を見る。これより余は服部氏の自転車にのりしが途中警官におこられバスにてゆき、波岡村に赴く。村に入り役場にて小学校の位置をきゝ道をすゝめば左手に貝殻の散布するあり。且つ標示ありて藪ヶ作貝塚と記す。余は直ちに入りて見るに丘陵の端に貝塚あり。貝は淡水産を主とし土器は縄文土器厚手末期と薄手と安行式あり、二、三採集す。これよりすゝみて小学校へ入る。訓導にきくに小熊氏来りて窯跡の方へゆけりという。我等も直ちに向う。某訓導の案内にて山道を越え波岡村大字久保牛谷の中原家にゆく。こゝにて小熊氏の所在をきゝ途中まで行きしが遂に逢う能わず、引返して再び同家に来り窯跡を見る。窯跡は同家の庭の一部より西方の崖にかけて存したるものゝ如く、殊に道路に面する田の開墾に際して古瓦多数を出せりという。地は丘陵の麓東南に面して窯跡には好適の場所とす、少し発掘せしが何ものも得る能わず、僅かに小瓦片と焼クズ様のものを得たり。カメラに入れて去る。小学校に入りて古瓦及び石器土器類を見る。中に磨製石製の珍物あり。出土不明、又有頭有文石剣の破片あり共におもしろければ貸り受けて帰る。

再び県道に出で徒歩にて九十九坊へゆく。役場にてきくに小熊氏今朝より待ち居れりという。篠崎氏は中村大鷲の窯跡を見にゆき余は服部君と共に寺跡に来り。写真をとり又道傍を探る。役場吏員の案内にて八雲神社へゆく。途中堀の内なる山村中に土壘のあと歴然と残れる箇所あり。何人の居住跡か考うべし。薄暮神社にゆくに村長はじめ有志者祈祷の最中なり、やがて終りて一同社務所に入り直会を頂きつゝ種々雑談。時に社寺より神社蔵の土器(斎瓮)及び祭器と思わるゝ皿等を持参す、又一氏子総代は三直発見の磨石斧を持参し且つ同家(立川氏)に伝来する装束、布衣、采配等を持参せらる。なお古老その他より寺跡に関する伝説をきく

(一)犬石はもと新御堂へ持ち去りしが鳴きやまざりし故もと一返せり。なお同堂には多数礎石を持ち去れりと

(二)寺跡の北方に存する井戸は戦乱の御宝物をなげこみたりと

(三)土壇上にありし鐘は弁天の池へ埋めしが後鎌倉橋材木座の光明寺に上ったと、今もありという

(四)八丁提にある礎石はもとシナリという力士担いでもちいけり

夜に入りて余等二人は辞し途中校長の案内にて法木作の伊藤貞一氏を訪い、同氏が年少の頃鎌倉光明寺にて内篋輪の鐘を見たりし事等きゝたり。更に外篋輪の小樽藤吉氏を訪い、同氏所蔵の「元禄七年甲戌七月廿二日、用水、裁許状」を見る。その裏に古図あり。明かに塔跡たりし事を窺い知り得られ、礎石の所在も見るを得て興味深し。雨来る。篠崎氏も合して三人共に乗合にて木更津より帰京。



写真 1



写真 2



写真 3



写真 4



写真 5



写真 6



写真 7



写真 8



写真 9



写真 10



写真 11



写真 12



写真 13



写真 14



写真 15



写真 16



写真 17



写真 18



写真 19



写真 20



写真 21



写真 22



写真 23



写真 24



写真 25



写真 26



# 登呂遺跡に見る記録写真と大場磐雄

中野 宥(静岡市登呂博物館)

はじめに

登呂遺跡の調査にはさまざまな研究者が関わっておられ、その中の幾人かの先生から調査に関するお話を伺う機会がありました。気が付きましたのは、登呂遺跡が見つかって、応急的な調査が行われ、その後本格的な調査が実施されるといった一連の動きは既に明白なものとなっていると思われていました。ところが調べてみますと、実は曖昧な理解でしかなかったということがわかりました。そこで、登呂遺跡の発見から史跡整備にいたる顛末を物語る資料、あるいは記念的資料を探索し、登呂遺跡の歩んできた道を知ることができないだろうかと思った訳です。この作業の中で感じたことは、登呂遺跡は他の遺跡にはない特別な意味を持っている、ということでした。

一つはいうまでもなく考古学上の特徴で、弥生時代後期の米づくりのムラを表現するのに適当な史料価値を認めることができます。あと一つは現代史上の特徴で、学史上の価値を持っているということがいえるようです。第二次世界大戦における、戦局悪化による工場疎開を契機とした登呂遺跡発見と軍事機密エリアの中で行われた発掘調査という状況は、戦争という事態にはならなかった、あるいは有利な戦局展開という事態だったら、ありえなかったことになり、戦後の本格的調査も実施されることもなかったでしょう。

## 1. 登呂遺跡の発掘調査

戦後の昭和 22(1947)年から行われた本格的な発掘調査は、敗戦という結果の中で実施された訳ですが、当時の社会は、食糧を始めとする諸物資の欠乏、精神的価値観の崩壊、将来に対する不安といった情勢下でありました。

登呂遺跡発見の第一報を世に送った元毎日新聞社の森豊先生にお聞きした話ですと、敗戦という当時の時局柄「登呂遺跡の発掘調査」などとても口に出せる社会の状況で無かったそうです。一方では、平和国家日本・文化国家日本の建設を標榜する社会の動きが生まれ、さらに皇国史観や閉鎖的調査・研究姿勢の反省もあって、歴史学界では、人文科学としての開かれた歴史学研究の第一歩を登呂遺跡発掘調査から進める事で、新しい日本の構築に貢献することになったという事です。

大塚初重先生もよく仰っておられることですが、登呂遺跡の発掘調査は「新しい日本考古学の夜明け」を指し示すものであり、その意味では現代考古学にとって登呂遺跡は、「日本考古学の回帰点」に位置付けられると考えられております。いわば登呂遺跡の発見から戦後の学際的総合調査に至る過程は、その時々々の社会情勢との関係を考えてみますと、実にタイムリーなものであったことがわかります。すなわち、発見・発掘調査という出来事は、「戦争」という情勢があって初めて成り立ったものと言えましょう。登呂遺跡の研究が戦後の新しい歴史学研究の出発点としての価値が認められたのは、昭和 18(1943)年の発見時の様子が鮮烈なものとして印象づけられたからでしょう。

## 2. 登呂遺跡研究の重要性

戦後の発掘調査に、当時旧制中学生による「古代史研究学徒会」会員として参加し、以来亡くなるまで登呂遺跡研究に携わってこられた、「登呂もっちゃん」こと望月董弘先生保管資料の中に、ガラス乾板を密着焼きした写真帳や、静岡県による発掘調査関係の書類がありました。いずれも昭和 18(1943)年の記録で、さらに八幡一郎先生や森豊先生、登呂の発見当初から尽力された安本博先生が

お持ちの資料の提供も受けました。これらの資料の内、写真資料を大場先生の『楽石雑筆』とつき合わせてみますと、大場先生が撮影された写真がかなりある事がわかりました。

昭和 18 年の発掘の時には、大場先生のほか調査主体の静岡県の手によって撮影された写真もあり、そのうちの幾つかは複数枚プリントされ、調査関係者に分けられたらしく重複して保存されたものも見受けられます。大場先生の撮影された写真は、大場先生が直接目にされた遺跡の光景ということになる訳です。

これらの写真の中から大場先生が撮影された写真は、『楽石雑筆』によって選別をすることが可能です。資料 1 のとおり調査に至る経過の表を用意しましたが、これに先生の行動を当てはめてみますと、大場先生がお見えになったのは発掘直前と、第一回目の発掘中ということになります。最も重要な時期においてになって写真で記録なさっている、ということがわかります。

最初に来られたのが 8 月 3 日のようなのですが、8 月 7 日に採集遺物、8 日に杭がたくさん露出した遺構の部分を撮影なさっておられます。発掘調査は 8 月 17 日から 29 日にかけて実施されているのですが、この間大場先生は 21 日から 24 日まで立ち会われておられます。この間の様子は『楽石雑筆』に記載されておりますが、その際先生が撮影された写真をすべての写真の中から選び出し、その撮影状況を知ろうとしました。ある程度の推測はできましたが、その度合いには自信がありません。

ここで写真映像の理解のために、昭和 18 年の遺跡発見・調査時の登呂遺跡の状況の把握が必要と思われるので、その概要をお話しておこうと思います。資料 2 として「軍需工場と登呂遺跡の位置」という図を用意しました。登呂遺跡は静岡平野南縁の海岸から約 2 km 程度内陸の水田地帯にありまして、ここに住友軽金属の航空機用プロペラ工場を建設することになりました。建設地の地固めとして東方の有度丘陵の掘削土を利用していました。図にあるトロッコの架線は、その時の掘削土を運搬するためのものです。戦局が風雲急を告げてくると、応急的に敷地南部の水田を削り最初の工場建設部分に盛土しました。その掘削地域で延々と続く木杭列や、大量の土器破片や木製品が出土し、遺跡の存在が認識されるようになったのです。

当時ここは時局柄工場の性格上、軍事機密性の高い地域でした。一般人が立ち入れる土地でもないし、調査なども考えられる状態ではありませんでしたが、在京の先生方や森豊先生たちのご尽力でかなり早い段階で発掘調査に漕ぎ着けることができました。憲兵隊とのやりとりなど、森先生から当時のエピソードを伺っております。

森先生が遺跡の存在を認識し新聞報道をしたのが 7 月 11 日、それに前後して安本博先生が在京の諸先生に連絡を取り、先生方のご視察が相次いだ訳です。そして 8 月の後半に発掘調査が開始されることとなりますが、その間は約一ヶ月半という短い時間でした。これには、一方で日本民族の優秀性を示すものとして戦争遂行上の思惑も軍部に働いたのではないかと、私は想像しております。

折りしも京都帝国大学より奈良県唐古遺跡の発掘調査報告書が上梓されたのですが、東国でも唐古遺跡に劣らないすごい遺跡が出たと認識されたのでした。昭和 15(1940)年に発生した「静岡大火」の復興事業のため復興局というのが設立されていまして、その局長だった阿倍喜之丞さんという方が、事の重大性を理解され、露出していた木杭列の位置を測量されました。この時の測量図が後に大変に役に立つ訳です。

阿倍局長は技術屋さんですが、古代史や古代文化に造詣があった方ですので、即座に測量による対応を思いつかれたのだと想像します。資料の 3 が「復興局測量図」ですが、平面測量は 7 月 15 日と 8 月 9 日から 12 日までの 2 回実施されております。この図はそのうち 7 月 15 日の測量図と思われます。登呂遺跡の全体図として広く使われております資料 4 の図は、畦畔護岸用の杭・矢板列を点線で表わしているのが水田跡になりますが、昭和 18 年の測量図が基になっています。資料 3 と少々様子が違ってあります。そこでこの図は、恐らく 2 回の測量のうちの早い方の図であろうと考えた訳です。

実は、遺跡は工場建設、終戦直後の再水田化によって破壊の手が及んでいたそうです。住居群のある地域は工場建設のための埋め立てが終了していましたが、水田跡地域はまだ埋め立てられておらず、終戦時には畦畔遺構が露出した状態でした。終戦による工場用地払い下げで再水田化されたのですが、露出した杭などは障害物として大半が撤去されてしまい、壊滅的打撃を受けていたそうです。当時の様子を知るお年寄りが、「杭や矢板は流木と同じでよく燃えたので燃料としてよく利用された」と、話してくれました。

戦後の総合学術調査では水田跡の中で、比較的畦畔遺構の残存状況が良さそうな場所を10ヶ所選んで、発掘をしております。従いまして、戦後の調査時には遺跡発見時のような水田跡の全体の様相を見ることは、不可能となっていました。ですから水田跡全体の理解には、昭和18年の測量図の解析が不可欠であることは申すまでもありません。

資料5は発掘調査報告書『登呂・本編』に掲載されている図で、私たちがよく目にする登呂遺跡全体図の原図となったものですが、大場先生が目になさった遺跡の状況は資料3のようだったろうと推測しています。この二つの測量図には、いくつかの不可解な構造を示す表現が見られます。最も理解に苦しむ構造が、中央水路と呼ばれている水路跡北端の取水口と推定される位置から30m程南に下がった地点に、複雑な構造を考えさせる杭列の表現となっております。具体的にどのような水路施設を想定してよいのか、全く手懸りがありません。

二つの測量図で示された中央水路の南半分の二重構造は、戦後の調査でもB地点・C地点において三条の畦畔状土盛りで挟まれた複式構造が確認されている訳ですが、昭和40(1965)年に実施されました東名高速道路建設に伴う事前調査では、単条の水路構造となっていて水路東側を画する畦畔状の土盛りは認められません。このような近接した調査地点での相違も未だ解釈されていません。

資料3の図ではさらに居住地域に相当する場所に、隅丸方形あるいは楕円形に点列で示された箇所があります。ここには「住居跡」と書かれていますが、昭和18年発掘の住居跡は1棟だけで、報告されている登呂遺跡全体図に照らして見ますと、第二礎板群の位置に相当します。ですから昭和18年発掘住居跡は、正式に報告されている位置と異なっているのかも知れません。

登呂遺跡史跡再整備の問題がここ10年程起ってきまして、本学卒業生の岡村涉さんを中心に5年程再発掘調査が行なわれております。このような相違の解決も目的の一つとされておりまして、本日のテーマからは外れると思いますが、新解釈を織り交ぜながら少し触れてみようと思います。

水田跡については、従来畦畔というものは木杭や矢板でしっかりと護岸されていることが普通であると考えられてきましたが、実はこれは登呂集落成立期からの構造的特徴でなく、洪水(終末のものではない)後の後半期に補強もしくは改修された結果のようです。洪水層に埋もれて水路跡なども上層の遺構と位置を違えずに認められますので、水田構造には変移のあったことがわかります。一部では小区画の手畦が確認されていて、大区画の中をさらに小規模に区画していたことがわかります。

居住地域では、従来12軒の住居と2棟の高床倉庫で成立した集落と教科書的に説明されてきましたが、そんな単純には解釈できなくなりました。洪水層の上下には未検出の建築物遺構が発掘されるなど、さまざまな複層状況が見て取れるようになりました。同時に存在したのは10軒内外でしょうが、遺構としてはあちこちに見られるといった状況で、層位的に建築物を峻別することは困難です。頻繁に建て替えが行なわれていたのでしょう。

集落域の中に空白部分が見えます。中央付近の地域には過去の調査で廃棄された住居跡の残骸が認められていましたが、東南寄りでは複数の住居跡の他、八本柱の掘立柱建物跡が発掘されました。居住域の南縁には水田域と区別するための区画溝が、新旧二条中央水路に接続して掘削されていました。

北側の居住域縁辺には、資料4の図に「川跡」と表示している所があります。砂利層の存在から「自

然流路」と判断されたのですが、ここでは溝状の地形が認められ、その背後は低地へと移行していて、その先の北側はふたたび微高地へと移り、また水田地帯が広がっていた（鷹ノ道遺跡）ものと推測されています。

居住域を載せる微高地の西端部分には、「森林跡」が位置していたと考えられていました。発掘では樹木の根株の下層から溝状遺構が確認され、登呂期初期の土器破片が出土しました。森林は、洪水（恐らく終末の洪水ではない）後に形成されたものと思われ、登呂期には（登呂遺跡が登呂期とその次の時期にまたがっていたとすれば）森林ではなく建物群の存在が窺えます。ちなみに昭和 18 年には、この位置で八本柱の高床倉庫が倒壊した状況で発掘されています。従来認識されております北側を流れる「登呂川」の支流に推定されていたものは、区画溝ではといった指摘もあります。

このように具体的な姿が徐々に明らかにされてくると従来の理解との間に精度的格差が生じてきますが、登呂博物館による調査資料の再検討作業でその差はある程度は埋めることができたと思っています。戦中・戦後の社会事情や調査技術での状況把握は困難だったでしょうから、当時の最高レベルでの理解だったと思います。今まではその理解の上に成り立ち放しとってよく、問題を先送りしてただけで検証することを怠ってきたものといっても過言ではありません。既往資料の再検討、再発掘という手段による検証によって、今や渾然一体となって癒着していたものを一つ一つ剥がしていく事が可能な段階に入ったといえましょう。

再発掘による既往の調査への検証と、従来の諸資料を評価し資料内容のレベルアップをはかる、この二つの作業を通じて新しい登呂遺跡研究を再出発させ、いわゆる「登呂学」を構築していかなければならないと考えております。

私たちはこれらの仕事を「行政」の中でやっていくのですが、確かに現在は財政的にも人材的にもかなり厳しいものがあり、状況としては絶望的です。静岡市は平成 15(2003)年 4 月 1 日に清水市と合併しますが、その中で教育・文化行政の展望は見えてきません。かかる状況の対処法の一つは、行政の上層部や行政全体へ登呂遺跡をアピールしていくことであろう、すなわち、新生静岡市の中の『登呂遺跡』としてその存在感を主張していくことだと考えております。同時に、絶望的環境の中であっても先に申しました二つの作業の手を緩めるべきでない、思っております。

### 3. 画像資料と遺物保存

さて、余談がたいへん長くなってしまいましたが、私たちが研究の対象として目にしている資料は、現在姿のもので、発掘されてから長い時間を経過していますので、本来の姿を失っている可能性も考えられます。そこには出土資料の正確かつ客観的な情報が隠されているかも知れません。そこで資料の持っている全ての情報を呼び戻すためにも、遺物が出土した後の経年変化を出土間際と現在の写真で対比してみようと思います。

ここに用意した写真は、昭和 18 年出土の木製品の写真です。遺跡発見時の出土ですので、出土状況は不明です。登呂博物館に展示している木製資料の八割前後は昭和 18 年当時のものでして、全体として質量共に豊富な内容を持っているといえます。この 18 年の時が、登呂遺跡にとって如何に重要なシーンであったかが分かります。木製品はいずれも自然乾燥で、保存処理は施されておりません。

（写真 1）の容器、舟形木器です。「槽」とも呼ばれていますが、どちらの写真も 2 点ずつ写っています。現在の写真で上の三分の一程度残っている三日月形の破片のものは、50 cm 程度の長さがありますが、左側部分が大きく欠けて失われております。しかし当時の写真からは、全体の様子を知ることができます。

（写真 2）は何かの容器の蓋と思われるものです。昭和 18 年の写真では中央のもの、現代の写真では右から 2 番目のものです。この二つにはほとんど変化が認められず、60 年間という長期間、時間の

影響を受けずに過ごしてきた資料の代表ではないでしょうか。

それから(写真3)の田下駄。三点並んで写っている写真は、昭和18年のものです。右側の田下駄が現状を撮影した写真のものと同じものです。今では二つに割れて離れて、表面も荒れてきてはいますが形態全体はよく保存されています。この資料は割れて出土した物ではない(破損-遺棄品ではない)ことに注目したいと思います。

(写真4)は板状琴です。木製品が3点並んで写っているのが昭和18年の写真で、右側のものが琴です。現在の写真と比較して大した変化は感じさせませんが、出土当時のものを見ると、絃をかける突起の部分は大きく磨耗してしまっていて、琴尻部分が湾曲して凹状になっている部分も磨耗に見えますが、かつては大きく湾曲し人工加工によるものであることが明らかで、ここに集絃機能を窺えさせるものがあります。現在では琴の下端部のくびれ部分は磨耗によるものと思えなくもないのですが、昭和18年の写真には加工痕がはっきりしてしまっていて、鴟尾の未発達の状態を感じさせます。

琴について最近北海道と福岡の大学院生の方が調査に来られたのですが、現状での観察を正確なものと判断されては大変危険と思い、この昭和18年撮影の写真もお見せして、観察に訂正を加えてもらいました。そういう意味では出土直後のこういう記録は、大変貴重なものと言えましょう。

今までの木製品には杉材であるためか極端な変形は見られませんが、広葉樹は全く違います。

(写真5)は又鋏、又鋏かもしれませんが、欒樫だったか白樫だったかちょっと記憶がはっきりしませんが、とにかく欒材です。堅い広葉樹です。これはもう変形著しいものです。とても学術的な資料として耐え得る状況にはなく、昭和18年の写真が頼りです。

この鋏ではなく横鋏と呼ばれているものの石膏模型が、本館一階の展示室に展示してありました。登呂博物館でも同じものを所蔵していますが、これは昭和18年だったか19年だったかに製作したとの記録があります。この模型資料を見ても現物は全く資料的価値が失われていることが分かります。

この横鋏の石膏模型には、写真にもみられますが、鋏身の柄穴に柄の先端部分が嵌った状態で残存した形で複製されています。柄の先端部分は加工されているので、折れて失った柄本体が鋏身に対していずれの側にあっただかが分かります。それから判断すると、この鋏には柄が鈍角に装着されていたことが分かります。同じ様に鈍角着柄の横鋏は、伊豆葦山町の山木遺跡にも見られます。鈍化着柄の農具と鋭角着柄の農具では、用途も使用方法も全く違います。現状の資料には柄が残っていないので、現状の観察だけでは大変な誤りを犯してしまうこととなります。ですから、出土資料は可能な限り出土したその時の形状をさまざまな形で記録し、保存する努力を怠ってはならないと思います。

琴の観察の時にも思ったのですが、レプリカを作っておくこともいいかなとも思います。登呂遺跡出土の木製品は自然乾燥によって既に正確な情報を伝えるものは多くはないと思われませんが、少なくともこれ以上の情報の喪失を防ぐ為には現状を固定する必要があるかと思いました。その意味では現状でのレプリカ製作も、決して意味のないことではないと思ったことがあります。これには大変な手間と費用が掛かりますので、さしあたって手っ取り早いのは、映像として記録しておく、それに大場先生のように日記の形でいいのでメモを付けておく、そうしないと記憶というものは、その人自身のものであるし、しかも時間と共に薄れていくものなので、後に正確に伝えることができない場合も考えられます。ただ観察は観察する人によって対象とするものや精度などが異なるので、他の人間や後の人の使用に耐え得る表現になっていない場合もありますので、広範な使用に耐え得る客観的データの抽出を期待するのであれば、やはりレプリカによる保存も考えていいのではないのでしょうか。

#### 4. 大場磐雄資料と登呂遺跡

それでは写真を見ていただきながら、補足的に説明をさせていただきます。

(写真6)これは大場先生が撮られたものかどうか分かりませんが、「昭和18年発見当時の状況」

という説明が付いていました。木杭があたり一帯に露出しているのが見えます。我々の発掘ではこのように杭が検出された場合、杭の折れた位置が埋没した時の生活面と解釈するのが普通です。この写真では、杭がかなりの長さで立っている状況ですので、既に少なくとも埋没した時の生活面を相当下げてしまっていることが分かります。これら杭の折れた高さが当時の生活面と考えてよいと思います。

ご覧の様に周辺には何もありません。遠くの方、静岡市の中央にある独立丘陵が見えます。この上に森がこんもりとしています。ここに小さな社があります。ここに柚木山神古墳という静岡地方最古の竪穴式石室を内部主体とする前方後円墳が築かれています。

(写真7) これは四本柱の住居跡と考えられるものです。ポールが立っているので大きさはお分かりと思いますが、柱の下に敷く礎板が見えます。1, 2, 3, 4つ目は見えませんがこの辺りだろうと思います。礎板の様子から四本柱だったことが分かります。日誌には中央に炉跡を確認しているので、床面を掘っていたこととなります。写真では炉のある床面と礎板が同レベルに写っています。柱は通常床を40~50cm程掘り込んで建てられていますので、礎板は床面より下位に位置します。ですからこの住居跡では二つの時期のものが同時に検出されたこととなります。

それから住居内部、礎板の一つに接する位置に板が縦に桶状に埋め込まれているのが見えます。輪の直径は凡そ40~50cmと思われませんが、円形の施設の様です。まるで井戸のように見えます。板はいずれもある程度の同じ高さで折れています。この折れた高さはこの施設の所属する床面を想定しますと、礎板の位置はそれより下位になりますから、これら二つの施設は同じ住居に属するものと考えてよいと思います。日誌にある炉跡は別のもので行うことができます。すなわち二つの時期の床面が存在していたということができます。戦後に発掘された住居跡の全てに同様の状況が見て取れます。

一昨年の再発掘調査では、再び一部の住居跡を掘ってみましたが、礎板の切り合いがものすごく複雑に入り組んでいて、八回ほどの建て替えが推定されましたが、四つの礎板のセット抽出は困難でした。それほど建て替えが同じ位置で頻繁に行なわれていた、ということが分かりました。

もう一つ、当時の調査は工場建設による遺跡破壊の事後処理的な性格の緊急発掘だったであろうから止むを得ないと思いますが、住居跡の周囲は丁寧な調査はしていないようです。けれどこの写真にも少し写っていますが、住居跡外側に周溝が巡っていき、溝の淵には護岸のための杭が打ち並べてありました。その溝の両岸の淵に打ち並べられた杭の倒壊を防ぐため、杭の根元部分に支え横木が溝を横断する形で設置されており、しかもこの支え横木は一本で両サイドの杭を支えていました。

今回の発掘調査でもそれぞれの住居跡に周溝が掘削されていることが明らかとなりましたが、岡村さんの作った全体の概念図を一瞥すると、まるで水郷地帯を想像させるものがありました。これらの各々の周溝は有機的な関係にあって、居住域全体を視野に入れた排水溝と思われ、排水は区画溝に導かれているようでした。

(写真8) この写真は一本柱建物といわれる建造物の柱根部分です。大場先生の『楽石雑筆』に記述がありましたが、この写真が先生の撮られたものかどうかは分かりません。この柱は礎板の上に載っていますが、その礎板の脇にも別の礎板が見えます。この上にもかつては柱が載っていた訳で、建て替えのあったことが分かります。

柱を取り囲むように小さな杭の列が円形に巡っているのが見えますが、昭和18年の記録にもそうあります。『登呂・前編』付録や昭和18年の発掘を指導された上田三平先生の『科学雑誌』所収の報告などには、一本柱住居跡と紹介されていました。住居跡かどうか分かりませんが、何らかの建物であったことは、確かでしょう。

しかし、戦後の調査や今回の再発掘調査では全く確認できませんでした。写真にある通りでしたら、登呂遺跡の建築物の構成から得られる集落様相が、従来の理解と違ってきますので、ぜひとも確認しておくべき問題の一つであろうかと思えます。

(写真9)この写真は、『楽石雑筆』記載に該当する写真です。大場先生は「木柱と根株」と書かれ、「第1号の柱と称するもの、この付近北方に大木の根株9本あり。森林の一部なりしならん。次に柱の位置は次の如し。」とあり、スケッチ・メモが挿入されています。さらに「その間隔一定せず。又柱はいずれも傾斜せり。即ち西側は内側と南方へ、東側は外側と南側へ倒れたる状を示せり。」と記載されている場所です。

この写真は、私たちが第1号八本柱高床倉庫跡と呼んでいるもので、周辺には木の株がいくつか写っています。私たちが第1森林跡と呼んでいる、「西方の森林跡」と報告されている場所です。資料4の「登呂遺跡全体図」の西の端、居住地を載せる微高地の西端部分と考えられている所です。現在ではこの部分も特別史跡に指定されていますが、隣接して民家が密集しています。家の中を覗こうと思えば覗ける位置にありますので、下手に見学者を案内しようものなら、叱られそうな場所となってしまいました。今回の再発掘調査の対象地区になっていましたが、広い範囲の発掘は不可能でした。調査の結果、木の株自体は当たりませんでした。先に申した通り巨木の根を検出しまして、その下層に洪水以前の人工の溝の存在を確認しました。これらの溝は、住居跡の周溝や区画溝の性格が考えられます。即ち洪水以前には居住地だったことになるので、八本柱高床倉庫もこれに含めるとすると、「森林の中に佇む穀倉」という今までのロマンティックなイメージは崩れていくことになります。

登呂の公園には復元家屋などがいくつか建っていますが、都市公園として植栽がしてあります。復元家屋などの周囲にも大きな樹木が多く立ってしまっていて、建物に覆い被さっています。雨が降ると雨垂れが屋根の上に落ち、その部分から腐ってきまして、その状態がしばらく続くと、屋根にまるで山岳に刻まれた深い谷のように深い窪みができてしまいます。昭和18年発掘の住居跡の屋根葺代は腐り易いワラが多くを占めるといふ分析結果もあるので、森林という場所にこのような建物が建てられていたと言う従来の解釈は、変更せざるを得ないでしょう。

これらの8本の柱は、みな同じ方向に傾いています。8本の柱が同じ上部構造物に属するものであるなら、建物が倒壊する時には同一方向に傾くなどの規則性が見られます。さらに隣接して両端に挟りのある高床倉庫の壁板材が並んだ状態で発掘されました。復元倉庫のように、井籠組み構造の板壁であったことが分かります。調査日誌には、付近から収納物と思われる大量の刳殻、瓢箪の種、それに杉皮が発掘されたと、記載されています。杉皮は屋根材かとも思ったのですが、葺代としてのワラ材も出土していますので、やはり何かに使う目的で杉皮が収納されていたのだらうと考えてきました。先程、本館1階の展示室の中で復元倉庫の模型を見せて頂きました。あれは茅葺きの上を杉皮で覆ってありました。大変示唆的に思いました。

このことから、建物の復元という問題を取りましても、今後様々な可能性を吟味・検討していく必要があるかと思えます。こういう写真記録は、たとえ古いものであっても、私たちの誤った常識化された知識というものを元に戻してくれる、反省の材料になるもので、写真記録の有用性を改めて感じました。

(写真10)八本柱高床倉庫跡を発掘した写真です。8本の柱の下部が残っておりまして、建物があった位置の横に建築用材が倒壊した状態で出土しました。棒状材がカギの手状に接続していますが、四角形に連なるようです。屋根の構造材とされています。

(写真11)これは、今お話ししました高床倉庫跡の板壁材の出土状況の写真です。写真には3枚の壁板材がきちんと並んで写っていますが、さらに2枚程並んでいたようです。5枚程度が並んでいたとしますと、今の復元倉庫の壁の高さは、これに近い高さになっています。これらの壁板材の付近から、大量の刳殻や剽悍の種、杉皮が発掘されたということです。写真ではなかなか判別が付きませんが、写っているものをさらに検討する価値はあると思います。

(写真12)これは円形の井戸跡と言われているものです。大場先生の『楽石雑筆』に、8月8日、

先程の写真も8月8日に撮影されているのですが、「円形井戸枠側（井戸側ですね）。遺跡の西部小流の辺に有するもの。割り板を縦に用いて作れるもの。今周困破れてはじけたり。中央部の幅約50センチ上部は開きて不明なれど1.1メートルを有せり。」とあります。

登呂遺跡は静岡平野の南部に位置しています。静岡平野の中央部近くにまで北から賤機丘陵が出張ってきていて、その南端に静岡浅間神社が鎮座しています。その南側に駿府城跡が位置しています。丘陵の西側を安倍川が南下しています。安倍川はかなりの急流でして、大量の土砂を運んでいます。賤機丘陵の末端付近から安倍川は広い平野部に出ます。運ばれてきた土砂は平野部に扇状地を形成しながら堆積してきました。

水は堆積した土砂の下を流れ下って、扇状地の末端付近で地表に噴出し、湧水帯を形成しています。登呂遺跡はその湧水帯に位置しているので、頑固な井戸は必要ありませんでした。井戸の中に土が崩れ落ちるのを防ぐ程度の簡単な施設で事足りたと、考えられています。登呂の周辺地域では、今でも水が自噴しています。

ですからこの付近一帯の遺跡からは強固な作りの井戸は、発掘されません。ちょっと手を加えたような施設も、大場先生の目に留まったんですね。

（写真13）これも『楽石雑筆』に記述のある井戸跡です。前のものと同じ8月8日撮影となっていて、「井戸。方形のもの割木を縦に使用しあり。内部より弥生式土器片を拾う。」とあります。これは板材を縦に打ち並べて、四角な井戸を作ったものです。

先程の円形の井戸とこの方形の井戸という風に井戸の形が違っていますが、井戸の目的など、何らかの意味合いの相違があるのか、あるいは時期差なのか、気になるところです。いずれも弥生式土器出ているということですので、大した時間差は無さそうですが、洪水の前と後とで違いがあるものなのでしょうか。

（写真14）この写真も同じ8月8日撮影のようですが、「柵列。東方部の柵列にして、一は西方より東方に向かい蜿蜒続きある様、他は東方より反対に之を見、且つ両柵の交叉して北方へ延びゆく有様を撮影。」となっています。写真では明瞭ではありませんが、これが二列の柵列と当時呼ばれていた木杭列でしょうか。畦の両側に護岸（補強）用に杭が打ち並べてあるというものです。

この写真を大場先生の撮影なさった8月8日の「柵列」の写真だとしたのは、この写真の遠方に写っている、どの人物だったか忘れてしまいましたが、森豊先生が佐野大和先生だと仰ったのを覚えていて、佐野先生が写っているという事は、大場先生が撮影された写真だろうと思った訳です。

（写真15）これも同じです。ここに写っている人物の内の1人がそうだということです。ご覧のように幅広の板材、矢板をずっと打ち並べてある様子が写されています。

板の上端がかなりささくれだっていますが、採土の際の削られて壊されてしまっているように見えます。当時の田面はもう少し高いレベルだったのではないのでしょうか。

先程の岡村さんの調査結果で、登呂遺跡水田跡の洪水前の畦畔では矢板・杭を多用していないという見解を紹介しました。静岡県埋蔵文化財調査研究所が調査した静岡市瀬名遺跡では道路建設の事前調査なので調査区は細長く、調査区の主軸に沿って弥生後期の大畔遺構を200m程の長さで発掘しています。この一続きの畦の護岸設備には、地点によって様子が大きな違いが見られました。ある場所では矢板が間断なく打ち込まれているかと思うと、別の場所では横木を当てて杭で押さえる程度であったり、全くこうした手当てのない所も見られました。

1本の畦でのこのような相違は、基盤層の地形の形状によるものという事でした。水田層を掘り下げた結果、基盤の地形が自然流路であったり谷状の窪地の所では強固な保護設備が見られ、微高地状の上層部分の畦にはそうした設備は認められなかった、とのことでした。即ち、地盤の強弱によって護岸設備の形状に相違が生じたものと言えそうです。瀬名遺跡の場合は基盤層の上層、弥生後期の時

期に地形環境の変動がなかったのですが、登呂遺跡の場合は、岡村さんの調査の結果では、地下水水位の上昇などの影響が全体に現れているとのことで、あるいはそれが水田下層部に環境変化を及ぼしているのかもしれませんが。瀬名遺跡とは状況が異なり、時間の経過と共に畦畔保護施設の形状も変わってきたとも考えられます。しかし、広い範囲での調査ではないので、基盤地形の影響による形状の相違も視野に入れて置く必要があると思います。

登呂遺跡の東名工事の事前調査（昭和40(1965)年）の頃までは、畦畔遺構と言えれば矢板・杭列が必ず伴うものという神話があり、そうした先入観を持って畦畔遺構を発掘しているのに、護岸施設の施されていない畦畔遺構は見逃されている可能性があります。

さらに今回の再発掘調査で、水田域の北側と南側で小区画水田が確認され、登呂遺跡の水田も他の遺跡同様の小区画という形態をしたもので、大区画の中をさらに手畦によって小さく区画していたことが明白になりました。

（写真16）これも先生の記述に「柵樋」とあるもので、「東西の長柵一部に柵と柵との間に檜皮を敷きて樋をつくれる所あり、注目すべき施設とす。」と説明されています。写真ではどれがそうなのがよく分かりませんが、森豊先生は、この畦畔杭列に沿って長く延びている所を指しておられました。

写真には、あたり一面に土の塊が散乱した状況が写されています。戦後の調査の時にはもう少し掘り下げて掘っていますので、田圃らしい光景でしたが、発見当初はこんな状態の中での観察でしたから、明瞭に撮影することは困難だったと思われます。

（写真17）これも『楽石雑筆』に載っているものです。「木樋」となっていて、「この点余等が調査中、偶々土工の今や破壊せんとするの状を見、急ぎ之をとどめて急拠撮影せしむ。自然の大木を刳抜て樋とし、木の根株を通して斜に架せられしもの。幅約9寸、傾斜8度3分。蓋し一種の住居付属施設ならん。」と書いておられます。これは、横から見た写真です。

（写真18）これが今のを前方から見た写真です。「…まさに破壊せんとす…」と言うのは、写真左側にスコップを地面に突き刺してあるのが写っていますが、これなどがその状況を物語っているのではないかと、勝手に思っております。

（写真19）「柵側面」というのがこの写真だろうと思うのですが、「柵の並列せる有様を側面よりとりしもの。柵の構造を明かにすべし。蓋し、これが如何なる理由の下に行われしや。単なる境界か。又は土堤の如きものなりしか今後の調査を期すべし。」となっております。同様の状況の遺構は、昭和40年東名高速道路建設の事前調査の際にも発掘されています。

この時の遺構は、中央水路西側土堤の西縁を保護する杭列でした。杭列を側面から全体を見るために水田側の土を取り除いてみました。土堤の幅は2m程度あるのですが、水路側と水田側の両側に縁を保護する工作が施されていました。両側ともある程度の長さの杭を打ち並べてある、と見るのが普通ですが、よく観察してみると打ち込むために先端を尖らせている杭は僅かです。建築部材の廃材や棒状材が2次加工されることなく使われていました。このことは、打ち込んだのではなく、差し込んだことを意味していると思います。それ程軟弱な土地柄だったということになります。

水路はさらに南に延長され、旧地形の等高線に従って推測すると、海岸付近の汐入遺跡にたどり着きます。私もその遺跡の一部を発掘したことがあるのですが、その遺跡にも杭列を持つ水路遺構があり、杭を採取する時かなり強固に設えていて非常に苦労しました。登呂遺跡を始めとする一帯の弥生時代の水田は、非常に軟弱な土地を開発して開かれていたことが分かります。

（写真20）これは戦後間もなくの、昭和21(1946)年だったと思いますが、B29から撮影した写真と聞いております。登呂遺跡は約40万8千坪という広大な航空機のプロペラ工場の敷地内に位置していますが、この北側には航空機用発動機の約40万坪という広さの三菱重工業の工場敷地が広がっています。両工場とも爆撃を受けたのですが、三菱工場の爆撃写真は残っていました。住友工場の4棟の

建物の内3棟は焼け落ちています。

住友工場の爆撃写真があれば、登呂遺跡発見の際の状況が撮影されている可能性もあると思い、以前アメリカ大使館に聞いて貰ったことがあるのですが、分かりませんでした。この写真は登呂遺跡発見から3年程時間が経ってしまっていますが、水田跡の部分の西側と東側は太陽の光が反射して光って見えるので、水が溜まっている事が分かります。工場建設に当たって、遺跡をできるだけ保存しようとした意識が窺えます。

水田跡やその両側の水溜りの北側一帯が、居住域になります。工場建設の際に埋め立てられた場所で、埋没遺構はそのまま保存されていた場所と考えられます。平面的に見ると一部に切り込み状の埋め残された場所が見えます。その南に隣接する部分の再発掘前の試掘では山土が相当深部にまで及んでいて、かなりの量の土が昭和18年の調査以後採取されていたことが知られました。しかしその北側では水田跡の田面は掘り下げられてしまっていたとしても、終戦直後位までは杭・矢板はかなり残存していたと思われます。戦後の土地払い下げ後の再水田化の際、残されていた杭・矢板類は大半が取り払われて、水田跡は壊滅状態に陥ってしまったことは本当に残念です。

工場敷地の南縁に沿ってベルト状に畑地が見えますが、ここは土地の改変から免れた所で、遺構も埋没したままに残されていた訳です。現在この部分には東名高速道路が走っていて、事前の調査では遺構の保存状況が極めて良かったため大きな成果を挙げることの出来た地区です。東名高速道路は本来もう少し北側を通過することになっていたのですが、遺跡保護のため南側に迂回したのです。そうしたら一番保存状態の良いところに当たってしまったという、皮肉な結果になってしまったのです。西側から延びてきた東名高速道路は静岡インター付近で一旦南に迂回し、登呂遺跡の南端をかすめて東に向かい、有度丘陵に当たると国指定の片山廃寺跡の所から再び北カーブして建設されたのです。

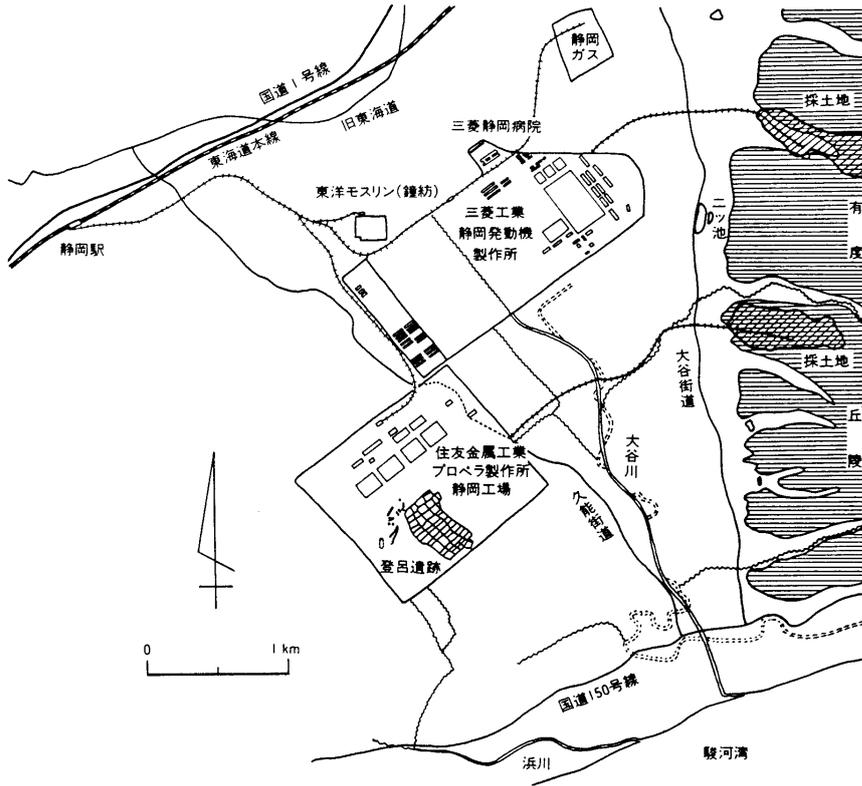
今後発掘調査が望まれる所は住宅化が急速に進んでしまったため、東名高速道路と側道間の緑地帯や付近の公園地などしか残されていませんが、なるべく多くの点を埋めて調査すれば、広域的な全体の様相が掴めるのではないかと考えております。

最近、登呂遺跡の北側を発掘調査する機会が数度ありまして、弥生時代後期の住居跡や水田跡が発掘され、興味ある成果が次々と上がってきています。私たちはこの付近一帯を鷹の道遺跡と呼んでいますが、登呂遺跡と接続していた可能性も指摘されるようになってきました。そうすると今度は登呂遺跡の南方に位置する汐入遺跡との関係の問題も出て参りました。写真の持っている情報は無限の可能性を秘めていますので、住宅化される以前の古い時期に写真を撮っていらっしゃる方が何人か居られますから、今後そのような写真を収集して分析していこうと考えております。以上で終わります。

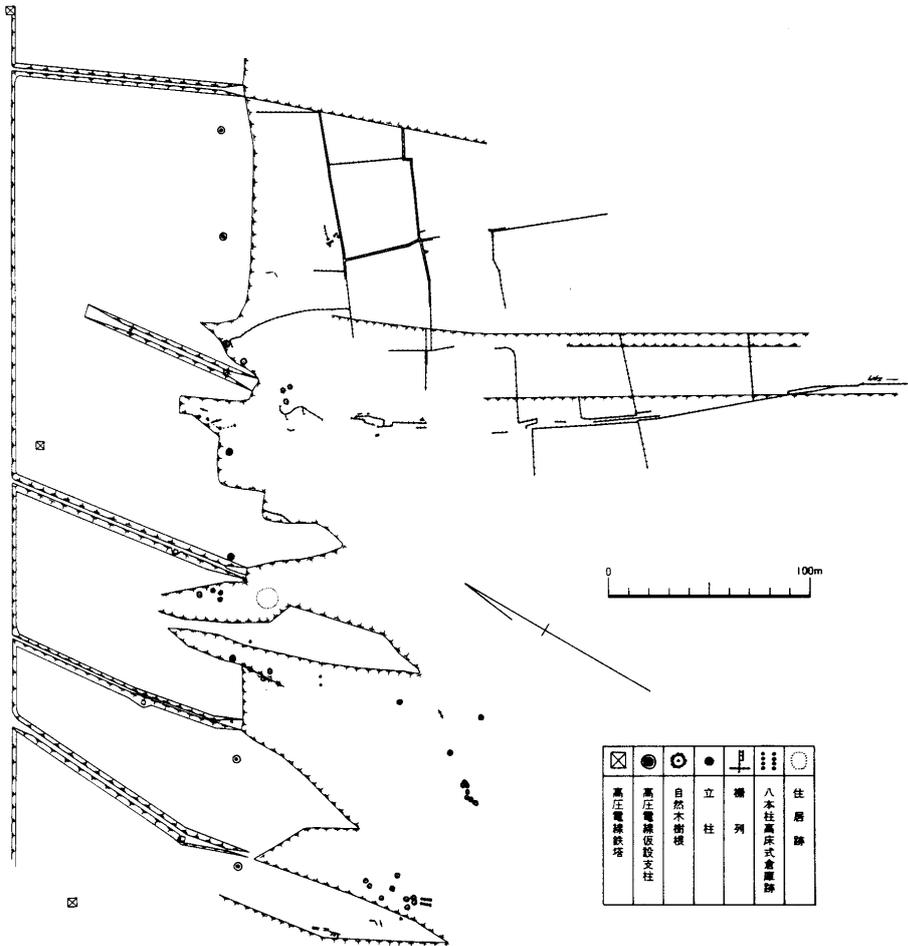
(資料1)

## 調査に至る経過

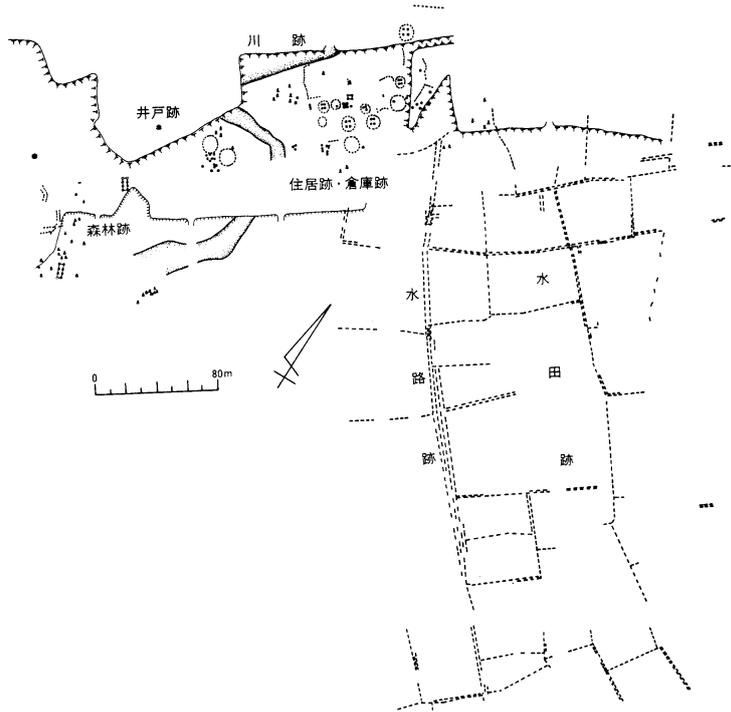
- 昭和18年 1月頃 ・軍需工場建設に伴う採土工事により、遺物の出土が知られる。  
6月中旬 ・中田国民学校に出土資料を収集。安本博氏に通報。  
7月 6日 ・安本博氏、採集遺物実見、遺跡踏査。注目する。  
6日～11日 ・中田国民学校、現場の出土遺物採集。  
7日～31日 ・安本博氏、現場の出土遺物採集。在京の研究者に通報。  
10日 ・安本博氏、毎日新聞森豊氏に遺跡発見を通報。  
11日 ・森豊氏、遺跡発見を報道。  
・山田覚蔵県史編纂委員、中田国民学校にて収集遺物を調査。  
15日 ・阿部喜之丞静岡市臨時復興局長、露出遺構・自然樹根等位置の測量を実施。  
24日 ・安部樹之丞氏、平面測量及びレベル測量を実施。  
以後、在京の研究者、遺跡等たびたび実地踏査。静岡県に対し遺跡の重要性や発掘調査の必要性を説く。
- 8月 2日 ・大場磐雄国大講師、夜静岡到着。  
3日 ・遺跡及び出土遺物調査。夕刻帰京。  
4日 ・静岡県、文部省に対し調査官派遣を依頼。  
6日 ・文部省、上田三平嘱託調査官を派遣。  
・大場講師、三島捨・佐野大和両氏・林写真師を伴い夜来静。  
7日 ・復興局にて出土遺物を実測・撮影。  
8日 ・遺跡にて、各種遺構を調査・撮影。夜帰京。  
9日 ・静岡県、緊急発掘調査実施を決定。西井一孝県内政部長総指揮・上田三平氏指導・川合治栄県史蹟名勝天然記念物調査官書記担当・調査隊隊員に市内国民学校職員と静岡高校（現静岡大学）学生を当てる。  
・遺跡名称を、『駿河富士見原原始農耕聚落遺蹟』に統一。  
9日～12日 ・平面測量・レベル測量実施。  
14日 ・安本博氏・望月勝海静岡高校教授を県史蹟名勝天然記念物臨時調査委員に委嘱、調査員とする。  
16日 ・発掘調査打合せ会、開催。  
・大場講師、佐野氏を派遣。佐野氏20日に帰京し、報告。  
17日～29日 ・発掘調査実施。（前期調査）  
21日 ・大場講師、夕刻来静。  
22日 ・遺跡踏査。  
23日 ・遺跡・遺物調査。県当局と打合せ。  
24日 ・住友工場側と打合せ。県教育課・女子商校にて収集遺物調査。夕刻帰京。  
25日 ・県、加藤忠雄県立葵文庫館長に出土遺物収集を発令。  
27日 ・第1回発掘調査報告書作成打合せ会、開催。
- 9月 1日 ・静岡高校木宮泰彦教授を県史蹟名勝天然記念物臨時調査委員に委嘱、調査員に加える。  
2日～4日 ・追加調査。（後期調査）  
15日～17日 ・再追加調査。（後期調査）  
24日 ・第2回発掘調査報告書作成打合せ会、開催。  
11月 日 ・第3回発掘調査報告書作成打合せ会、開催。  
昭和19年 3月16日 ・第4回発掘調査報告書作成打合せ会、開催。
- 昭和20年 3月～7月 ・軍需工場、たびたび空襲を受ける。遺跡も被害を受けたという。  
6月 日 ・静岡大空襲。県立葵文庫に収集中の出土遺物の一部、発掘調査記録類の多数、印刷中の報告書原稿等、焼失。  
昭和21年12月 7日 ・遺跡再発掘調査の母体とすべく、『静岡県郷土文化研究会』を組織する。  
昭和22年 3月22日 ・在京の研究者中心に、『静岡市登呂遺跡調査会』を組織する。  
7月 日 ・遺跡調査打合せ会、開催。遺跡名称『登呂遺跡』の改称を正式決定。  
これ以後、登呂遺跡における学際的総合学術調査が遂行されていった。



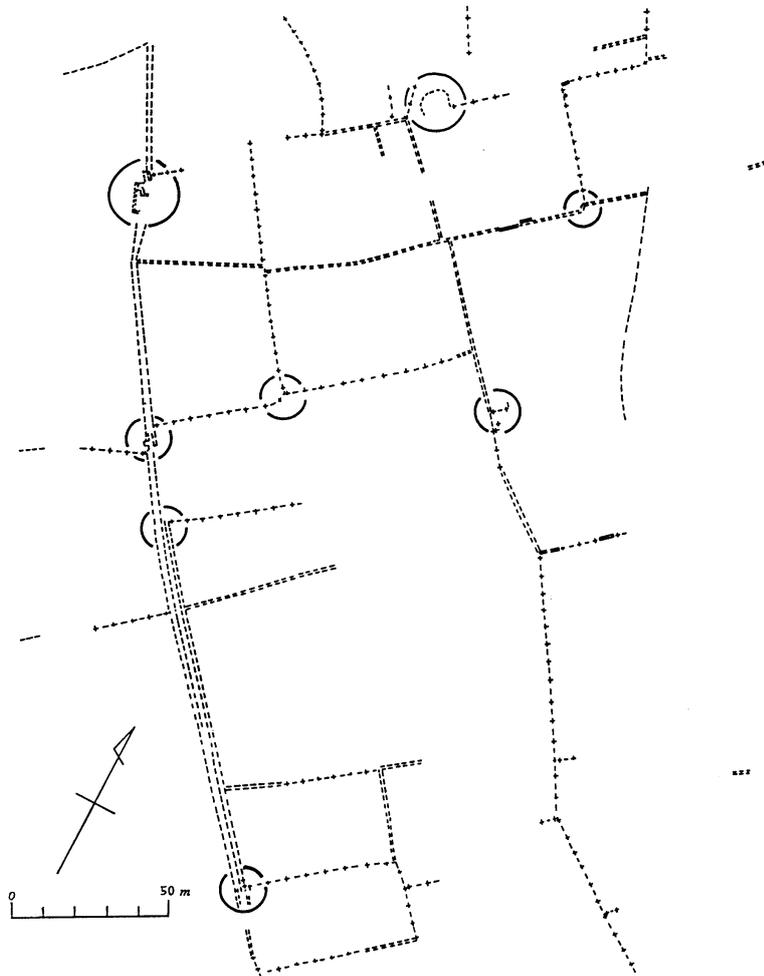
資料2



資料3



資料4



資料5

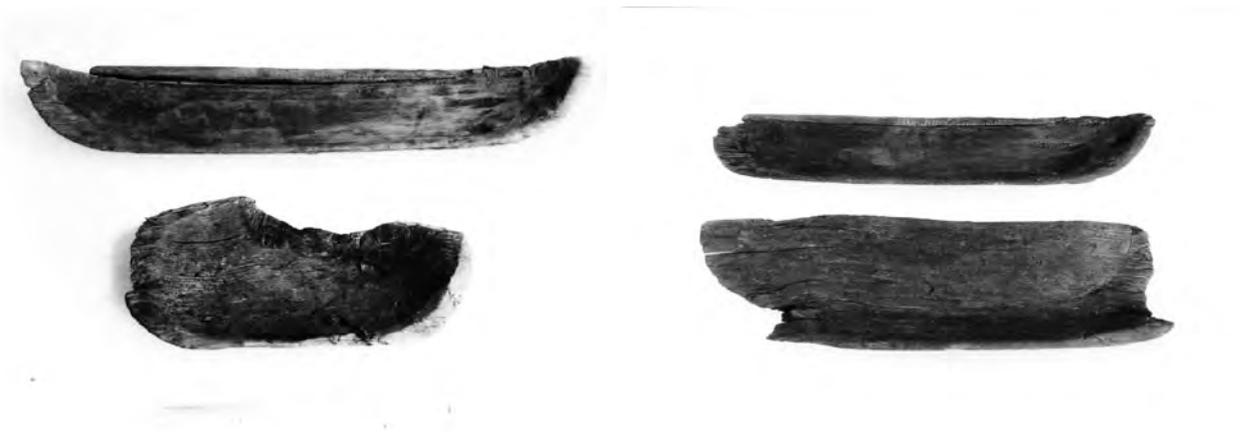


写真1 木槽 (左:昭和18年 右:現在)



写真2 蓋 (左:昭和18年 右:現在)



写真3 田下駄 (左:昭和18年 右:現在)

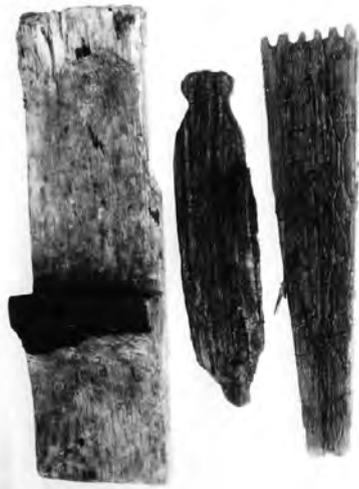


写真4 板状琴 (左:昭和18年 右:現在)



写真5 又鋏 (左:昭和18年 右:現在)



写真6 発見当時の状況



写真7 四本柱の住居跡



写真8 一本柱建物跡



写真9 第1号八本柱高床倉庫跡



写真10 八本柱高床倉庫跡



写真11 高床倉庫跡の板壁材出土状況



写真12 円形井戸跡



写真 13 井戸跡



写真 14 柵列



写真 15 柵列



写真 16 柵列



写真 17 木樋



写真 18 木樋



写真 19 柵列面

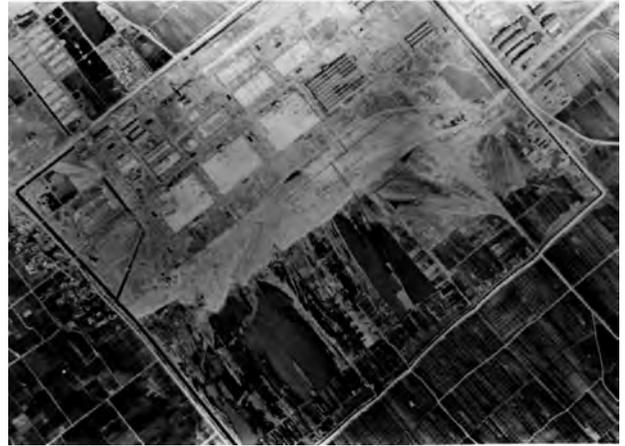


写真 20 航空写真 (昭和2年米軍撮影)

## 保存科学における記録

大久保 治(財団法人 元興寺文化財研究所)

はじめに 文化財保護の歴史

元興寺文化財研究所の大久保です。よろしくお願ひします。今日は「保存科学における記録」と題してありますが、私は、資料の記録写真の撮影を主に行なっていますので、記録としての写真についての話になると思います。

文化財の保存の歴史といひますと、明治元(1868)年の神仏分離令によって廃仏毀釈運動が進み、寺院の仏具や仏典などが大量に廃棄、売買され国外に持ち出されることが多く起こりました。そのため明治4(1871)年に古器旧物保存法が太政官符告で制定されます。これが - ご存知だと思ひますが - 我が国最初の文化財保護法ということになります。

それから30年後、明治30(1897)年に古社寺保存法というのができます。この時、保護の対象となつたのは、社寺に付属する文化財や建造物が主でした。個人所有の物、国や公共団体が有する資料は昭和4(1929)年に制定される国宝保存法まで待つことになります。

そして、昭和25(1950)年の法隆寺金堂の火災に伴ひ、現行の文化財保護法が制定されます。以上が簡単ですが文化財保護の歴史です。

### 1. 「保存科学」とは

このような文化財保護の歴史の中で、「保存科学」という分野は進んできました。

「保存科学」は、文化財を後世に伝えていくための自然科学的な研究をいひ、主な研究として、「材質調査」「構造調査」「環境調査」「保存処理や保存修復にかかわる材料・技術の開発」などがあります。

この「保存科学」という言葉は、昭和27(1952)年東京国立文化財研究所、現在の独立行政法人文化財研究所東京文化財研究所に保存科学部が設置されたのが最初で初代部長の関野克先生が名付けられました。そしてこの言葉が社会的に認識されるのは、昭和47(1972)年の高松塚古墳の壁画発見に起因します。壁画保存のために国内外の保存科学者が召集され、現在の密閉型の保存施設が設計されました。この時、新聞や色々なメディアで「保存科学」がとりあげられ、一般的に認識されるようになりました。

ちょうど2～3日前(平成15(2003)年3月12日)に高松塚古墳の壁画に黒カビが発生したという報道がありました。発見から30年が経過していますので、そろそろ施設の見直しが必要な時期かもしれません。通常保存処理を行つるとその後は何もしなくても保管できると思われる方が多いのですが、一度保存処理を行ないますと、保存環境によっては数年で劣化を起こす事態になりかねません。ですからある程度の年数ごとにメンテナンス - 再処理 - を行なう点を考えて頂かないといけないと思ひます。

私共の研究所は、昭和18(1943)年から同36(1961)年まで行なわれた元興寺禅室・本堂の解体修理と、これに伴う境内の発掘調査で発見された中世庶民信仰に関する資料の調査研究を目的として昭和36年に発足した中世庶民信仰資料調査室が前身となります。その後、中世庶民信仰と出土遺物の保存方法を研究する機関として昭和42(1967)年に財団法人元興寺仏教民俗資料研究所を設立しました。昭和46(1971)年からは、東京と奈良の両国立文化財研究所(現独立行政法人文化財研究所)の指導を受け、埋蔵文化財の保存処理の研究と受託を開始しました。昭和50(1975)年には、埋蔵文化財のほか民俗文

化財の保存修復も手掛けるようになり、昭和 53(1978)年にはすべての文化財に対応できるように、法人名を財団法人元興寺文化財研究所と改め今日まで活動しております。

出土遺物の保存処理の工程は処理前調査、クリーニング、樹脂含浸、接着・復元、処理後調査という順で行なわれます。なかでも処理前調査は処理を行なう上でとても重要です。そのため処理や修復を行なう文化財資料はすべて次の様な処理前調査を行ないます。

- ・資料の処理前の時点での状態を写真やスケッチ等で記録
- ・表面観察や非破壊分析などによる材質調査
- ・X線や電子顕微鏡などを用いた構造調査

以上のような調査を行なった後、それぞれの資料にあった処置方針(処理法)を決め、処理を開始します。

## 2. 保存処理・修理の実例

これから見て頂くものは、私共の方で実際に調査を行い、保存処理・修理を行った資料です。

これは、出土木製品からサンプルを採取し樹脂鑑定を行なった資料です(写真1)。これは広葉樹のクスノキの細胞組織です。向かって左から「木口」「柁目」「板目」となっています。次は針葉樹のスギの細胞組織です(写真2)。同じように向かって左から「木口」「柁目」「板目」となっています。このように木材には、それぞれの樹種によって異なった細胞組織を持っています。ですから、この細胞組織を見ることによって樹種の同定ができます。樹種の同定をすることにより木材の劣化状態や資料自体の制作過程などを確認することができます。

次に見て頂くのは漆器の断面です(写真3)。漆器の破片を研磨して顕微鏡で観察しますと、下の方から上に下地、下塗り、中塗り、上塗りとなっています。このように漆器の木地や下地、塗り重ね、研磨などの制作工程を推測することができます。このような観察を行なうことにより、保存処理や修復、復元作業時の重要な資料になります。

これは絵馬の処理前です(写真4)。彩色がかなり劣化していて顔料が剥がれてしまったところや浮いているところなどが見られると思います。これを保存修復しますと、この様に顔料が浮いていたところなどは元のような状態にまで直すことができます(写真5)。

こちらは文書の修復前の写真です(写真6)。かなりの虫食い状態ですが、漉嵌(すきばめ)法を使って修復を行ないますと、このように文字の判読などや資料の取り扱いが容易になります(写真7)。

これは短甲の処理前の写真です(写真8)。発掘調査がなされてから数年が経過していて、白いところは、石膏を使用して復元がなされています。

これは短甲のX線写真ですが(写真9)、先ほどのものとは違いますが、こういった写真や出土時の資料を参考にしてバラバラの状態から考古学的所見に基づいて位置検討などを行ない、形状の復元を行ないます。同時に保管や展示を視野に入れた支持台やケースも作製しています。これが保存処理後の写真です(写真10)。

これは柄頭です(写真11)。下の方に象嵌の線が見えていると思います。処理をしますとこの様に柄頭全面に象嵌を確認することができる様になります(写真12)。この様に保存処理を行なう前と後では資料の状態が変化します。

これは刀の環頭に象嵌が施されたもののX線写真です。先ほどの柄頭のX線写真を持ってきたら良かったのですが、探し出せなかったので、こちらの写真を持って来ました。この資料はX線写真を撮影するまで、このような象嵌が施されていることは分かりませんでした。このようにX線写真を撮る

ことによって資料の内部構造を確認することができます。

これは刀の柄の部分に巻かれていた繊維です(写真 13)。この様に電子顕微鏡で観察することによって、繊維の種類 絹、綿、麻など - の確認や、制作技法を確認することができます。

ちょっと分かりにくいかも知れませんが、皆さんもご存じの稲荷山古墳出土の鉄剣の保存処理後の写真です(写真 14)。このように、当初は錆で覆われていたものが保存処理をすることによって 115 字の金の文字が甦りました。発掘当初の状態からは、かなり変わっていますが資料本来の姿を取り戻したともいえるでしょう。次の写真は銅剣の処理前です(写真 15)。これは遺跡から取り上げたままの状態です。こちらが処理後の写真です(写真 16)。このように様に保存処理を行なうことにより資料本来の状態に戻ります。

私共が、このように資料の保存処理を行なって納品しますと、発掘当初の状態しか知らない担当者の方は、その状態の変化に驚かれる方が多く、「ここまで綺麗にして頂いて有り難うございます」といわれることもあります。中には「発掘当初の状態と違う」といわれることもあります。私共の保存処理・修復は現状保存を原則として処理を行なっていますが、表面の土や汚れ、取り上げ時の補強や保護の為に使用した樹脂等の付着物を除去しますと、資料本来の姿に戻るわけですが、処理前からは比較にならないくらい変化することもあります。ですから処理前に撮影した写真はとても重要になります。

おわりに

この様に、私共は、色々な自治体から資料を預かり保存処理・保存修復を行なっています。処理が終わると資料は返却しますので、私共にはこれらの資料を取り扱ったことは記録でしか残せません。そのため記録としての写真はとても重要です。ご覧頂いて分かると思いますが、保存処理を行なう前の資料の状態は、写真でしか見ることが出来なくなります。ですから、調査や保存処理を行なう前には必ず詳細な記録(写真)を残すことをお勧めします。

保存科学の記録からは少し離れてしまったかもしれませんが、記録としての写真の重要性は分かっていただけだと思います。以上で、終わりにしたいと思います。

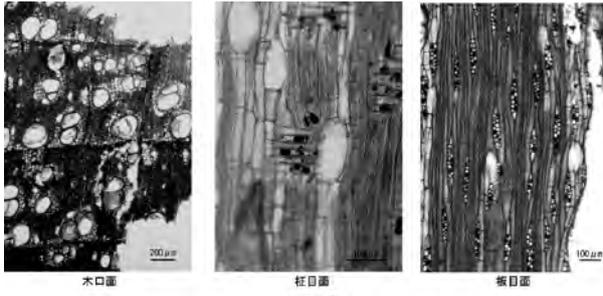


写真1 樹種サンプル(クスノキ)

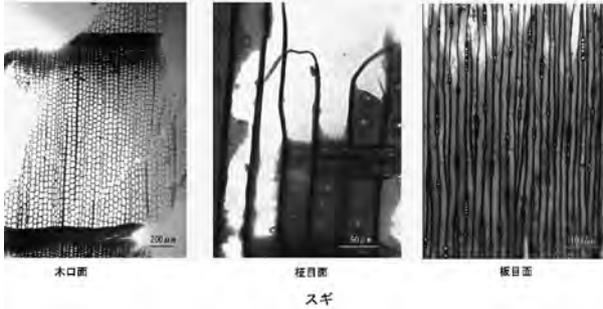


写真2 樹種サンプル(スギ)

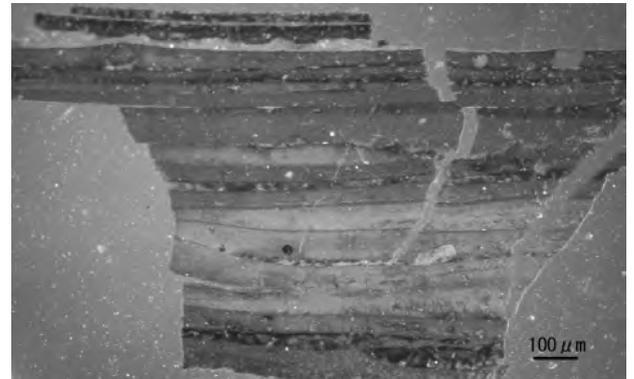


写真3 漆器断面



写真4 鳥取県倉吉市長谷寺歌舞伎図絵馬 処理前



写真5 同左 処理後



写真6 西宮市「年貢免状」 処理前



写真7 同左 処理後



写真8 小野王塚古墳出土短甲 処理前

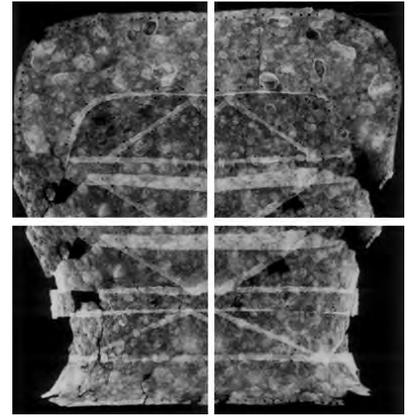


写真9 同左 X線写真



写真10 同上 処理後



写真11 鳥取県立博物館安富コレクション象嵌柄頭 処理前



写真12 同左 処理後

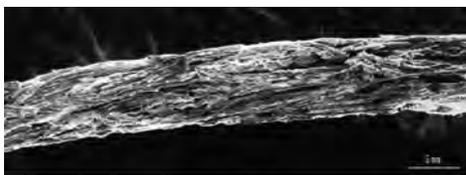


写真14 柄巻き裁断面



写真15 稻荷山古墳鉄剣

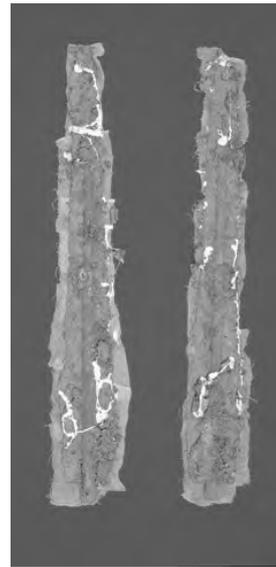


写真16 荒神谷遺跡出土銅剣 処理前



写真17 同左 処理後



## 登呂遺跡関連大場磐雄資料 - ガラス乾板と大場資料 -

加藤 里美（國學院大學日本文化研究所共同研究員）

國學院大學学術フロンティア構想では、平成 11 年度から「劣化画像の再生活用と資料化に関する基礎的研究」事業を実施してきた。フロンティア事業も来年度が最終年度となり節目を迎えるにあたって、これまでの作業を振りかえり、蓄積された成果を有効利用する方法、あるいは成果同士を有機的に連携する方法を模索している。こうした蓄積データの保存と公開に関する有効利用について、問題を提起し、研究促進の一助としたい。

### 1. 大場磐雄博士資料

当プロジェクトが扱っている資料は、神道考古学の創始者である大場磐雄博士資料に始まり、柴田常恵資料、宮地直一博士資料などいずれも近現代日本において学術・文化財行政において活躍された諸氏の記録である。大場博士の資料では、ガラス乾板（3704 枚）を中心とした写真関係の資料を、硝酸セルロースフィルム（574 点）を含めた 4276 点を対象として、画像のスキャニング、写真を保管していた箱や包み紙に記された「箱書き」「メモ書き」をテキスト化するという作業を進めている。まず、ガラス乾板をスキャニングしてデータ化し、保管していた箱や包み紙に記載されている、撮影日や撮影場所、被写体などの記載されたテキストデータを作成する。この記載は大場博士自身が書きとめられたものであり、写真資料に付随する重要な情報である。平成 15（2003）年 3 月現在、スキャニング、箱書き、メモ書きのテキスト化は残すところわずかとなり、被写体とテキスト、『楽石雑筆』などの大場博士の記録と照合している。さらに、こうした写真資料と関連して、我々が「大場資料」と呼称している、大場博士が収集された冊子や絵葉書、実測図なども写真資料とは別に大場博士資料目録として目録作成を進めている。これらは写真 1 に示すような紙製の箱の中に、さらに小分けに封筒に収められているものもあれば、むき出しで納められているものがあり、現状では 12 年度から始めて縄文時代編 18 箱、弥生時代編 13 箱、古墳時代編 32 箱の作業を終えている。残すところ、旧石器時代編、歴史時代編、祭祀遺跡編他をあわせた 100 箱ほどとなった。さらに杉山林継博士が保管されてきた大場博士を主体とした調査記録（35 mmリバーサルフィルム）などを含めると、極めて多量の資料が存在する。他の研究者の資料にもこうした一連の作業が行われていない資料も多く存在する。

上記の通り 写真原版のデジタル化・箱書き、メモ書きのテキスト化、「大場博士資料」の目録作成の 2 つの作業を平行して行ってきたが、これら蓄積されたデータの有効利用、及びそれぞれのデータ間の相関関係の有効利用、情報発信について最良の方法を模索している。以下に大場博士資料のうち登呂遺跡関連資料を取り上げて、この作業の 2 つの作業の有機的関連と、資料利用促進の可能性を述べて問題提起としたい。

### 2. 登呂遺跡資料を例にとって

写真 2・3 はガラス乾板を原版とする、登呂遺跡関連写真の一部である。登呂遺跡を撮影した写真は全体で 90 枚、このうち昭和 18（1943）年から 19（1944）年の調査時撮影ものが 77 枚、戦後の昭和 22（1947）年から 23（1948）年の調査時の撮影が 13 枚であり、9 割が昭和 18 年から 19 年までの調査記録である。写真資料は本作業の開始に当たり任意にナンバーリングを行い、取り込んだ画像・写真原版の規格・劣化状況・被写体・保管箱・包み紙に記載された内容などの情報を同時にデータ化している。この際に、報告書

などの関連資料を再度確認し、資料の位置付けをより明確に示すことを心がけた。平成12年度からは、写真の一部と「大場資料目録」を事業報告に掲載し、写真資料についてはその翌年からインターネット上での公開を開始している。そのうちの登呂遺跡関連写真の何点かは、登呂遺跡調査会発行の『登呂遺跡』と後に発行された登呂遺跡博物館発行の『登呂遺跡写真資料集』に掲載されているものである。以下に写真と表を用いて具体的に話を進めてみたい。

目録作成の作業として、例えば写真1にあるように茶色の紙製の箱の中に更に茶封筒に分けて「登呂遺跡関連文献」というものが保管されている。これらを実際に目録として作成する際には、茶封筒に収められている資料を取り出して、項目分けしていく。これがいわゆる「大場磐雄博士目録」である。さて、茶封筒の中には写真4・5のような小冊子が収められており、発行者も発行年も全て異なるものである。それぞれが登呂遺跡の重要性から社会への認知を高めるために作成され、配布されたものである。さらに写真6のような遺跡発掘調査の様子と発掘された遺物の写真が印刷されたプレートなどが含まれている。

こうした印刷物や出版物とは別に、大場磐雄博士自身が作成した冊子の類が幾つか存在する。例えば、写真7・8にあるような冊子である。まず、写真7を見てみよう。これは、昭和18年の登呂遺跡の調査時の記録を自身で作成した冊子である。表紙には「昭和18年8月調査 静岡市登呂遺蹟写真 大場磐雄」と記されており、恐らく大場博士が調査会から譲り受けたものと個人で撮影した写真を個人で整理したものと考えられる<sup>(1)</sup>。内部には、写真を貼り付けその周囲にコメントが付け加えられており、それぞれの内容は異なったものが3部作成されている。青焼きなどを、反古紙を利用して、使用した面を中側に織り込み、白い裏の部分を利用している。これらを検討することでも興味深い資料を呈するであろう。また、写真8の表紙に「昭和22年度 登呂遺跡第1回発掘写真(登呂遺跡調査会撮影) 幹事大場磐雄控 表紙・目次」とあり、登呂遺跡調査会から控えとして正式に受けとった資料に、説明書きを付け保管することを意図して作成されている。これらの2点を取り上げてみても、大場博士の登呂遺跡調査に対する意気込みが伝わってくる。これらを目録上で確認すると、小冊子は表 、 、手作りの冊子は表 、 で示した部分に相当する(表1)。

このように、当該事業ではガラス乾板の整理・画像資料の保管と、写真資料の目録作成といった別々の作業として行ってきた。情報がデータ化され、以前に比べて格段に便利になると同時に、ガラス乾板をはじめとする写真資料は、原板を使用せずに画像を活用することができ、保存という側面も目標を達成できている。しかしながら、大場博士が調査対象とした「登呂遺跡」という1つの視点から2つの領域にまたがって資料の利用や調査を試みると、それぞれのデータベースを連携させて利用するのは容易ではない。目録を観察しても、表上には写真の内容まで記載していないため、資料の詳細は不明である。従って、登呂遺跡調査関連資料を利用する場合に不便が生じることになる。さらに、大場磐雄資料以外の登呂遺跡関連資料は膨大に存在する。本来であるならば、本学所蔵資料はより活用しやすい環境にあるべきであり、その上で他機関所有の資料との比較や外部利用への提供に努めるべきである。本学所蔵の学術資産の再構築を实践する上での先駆的研究とするためにも、少なくとも大場磐雄資料内の関連事項は、2種類の本データベースを利用することによって得ることができるべきであり、データベース間を結ぶ何らかのシステム構築およびデータ利用環境整備の必要性が指摘できる(図1)。

まとめにかえて

必要な資料を過去のデータの中からピックアップするのではなく、逆の視点から資料を活用することも考えられる。例えば、ある目的をもち大場磐雄が収集した登呂遺跡関連の資料あるいはその後刊行された報告書であるとか、登呂遺跡の博物館で作られている復元の建物など、蓄積されたデータを再検討し様々

な情報をたどることで、登呂遺跡というものを新たにクローズアップしていく事が可能となれば、考古学だけでなく文化財学や民俗学など関連する諸分野への活用も可能となり学会に寄与するところも大きいであろう。現在、こうした活用の拡大化を実現するために、蓄積したデータを学術資料アーカイブとしてどのように機能していくことが望ましい方向性であるのかと定める時期であると考えられる。同時に、こうした活動をアピールする必要があると考えている。

学術フロンティアのホームページは平成12年度から公開を開始し、インターネットを介した情報の提供を試みている。反響としては、外部の機関から写真資料の閲覧、博物館展示への利用、あるいは個人研究者から停滞した地域研究の空隙を埋めるための資料調査の希望などが寄せられてきた。今後は当該学術フロンティアの成果が、学内の他の資料との連携やさまざまな方式における学術資産の有効的利用の環境を整え、研究促進の中心的役割を担うことのきっかけとなれば幸いである。

#### 注

(1) 3月15日の発表時に中野宥氏(登呂博物館)のご教示により写真4は昭和22(1947)年の調査の概要、写真5は昭和25(1950)年、写真6は昭和27(1952)年再版のものということが明確になった。また、印刷されたプレートは販売していたものではなく関係者に配られたものであることも判明した。

#### 引用・参考文献

日本考古学協会『登呂』昭和24(1949)年

日本考古学協会『登呂本編』毎日新聞社、昭和29(1954)年

静岡県立登呂博物館『登呂遺跡出土資料目録 写真編』平成元(1989)年3月

学術フロンティア事業実行委員会『平成13年度 國學院大學学術フロンティア構想「劣化画像の再生活用と資料化に関する基礎的研究」事業報告』平成14(2002)年3月



写真1



写真2



写真3



写真4



写真5



写真6

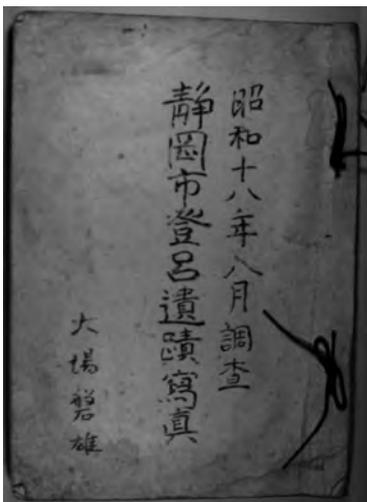


写真7

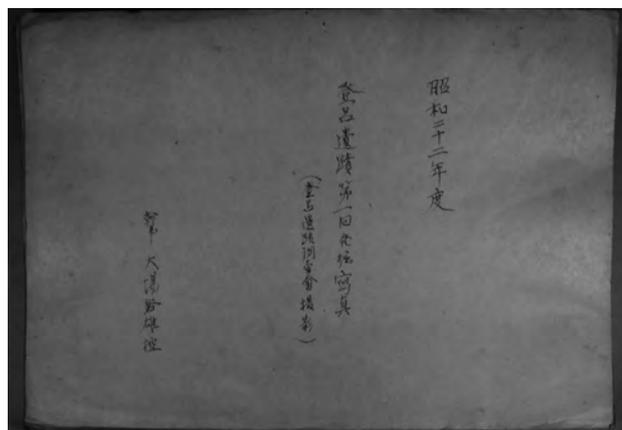
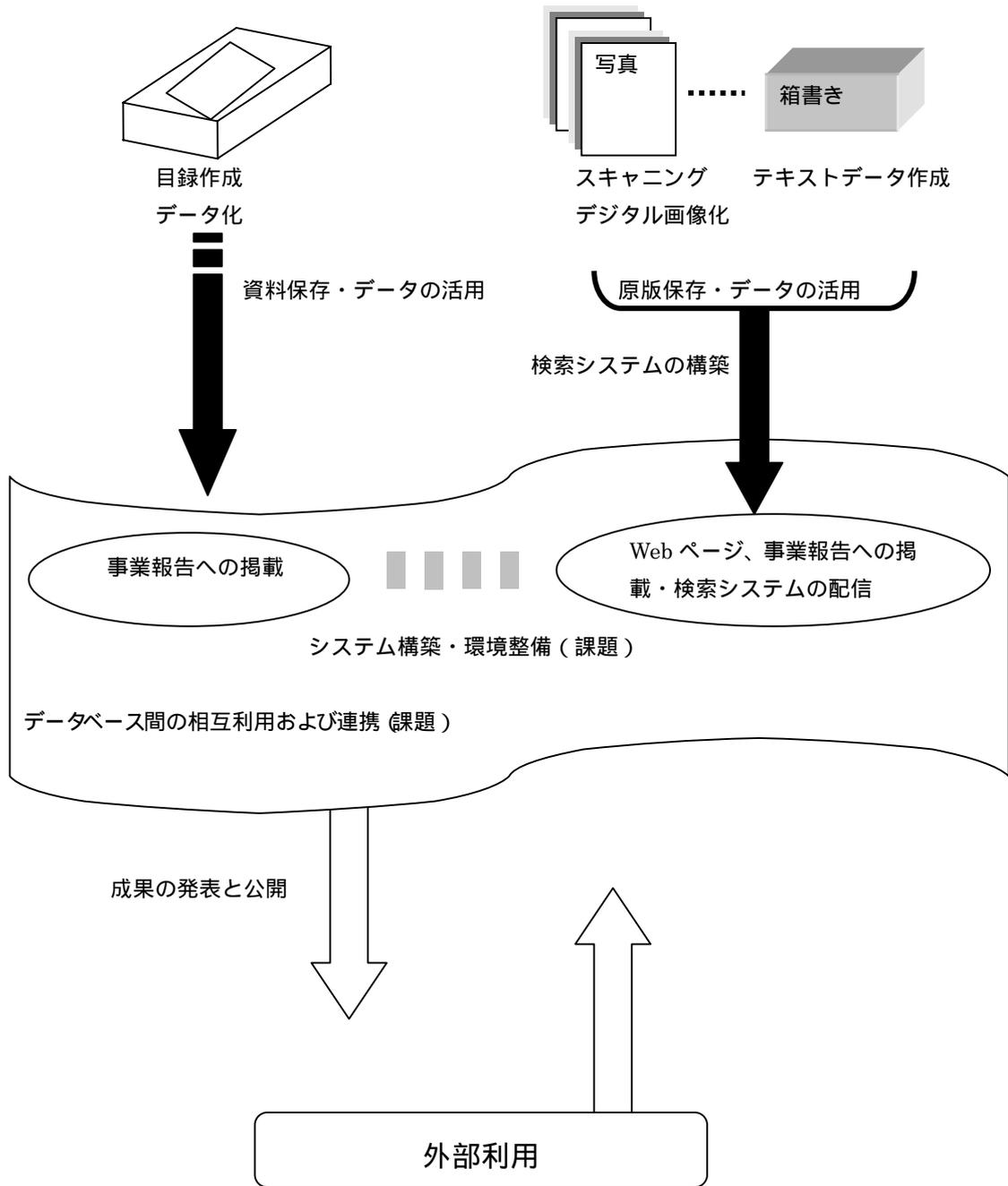


写真8

図1 大場磐雄博士写真資料・周辺資料の保存と活用



箱	封筒	都道府県	遺蹟名・所蔵者・日付け等	種別
13		3静岡県	登呂 登呂遺跡保存顕彰会	遺蹟
13		3静岡県	登呂 J'S25.10編集 静岡市発行	遺蹟
			中略	
13		7静岡県	昭和22年度登呂遺跡第1回発掘写真 登呂遺跡調査会撮影 幹事大場磐雄控 表紙・目次	
			中略	
13		11静岡県	昭和18年8月調査 静岡市登呂遺跡写真 大場磐雄	遺蹟・遺構・土器・木器・卜骨

表1 大場磐雄資料目録 - 弥生時代編 - (抜粋)



# 近代初期における学術雑誌の写真利用 - 『考古学雑誌』を事例として -

平澤 加奈子(國學院大學大学院博士課程後期)

## 1. はじめに

今回報告題名に挙げております「近代初期における学術雑誌の写真利用」、特に今回は『考古学雑誌』を中心としてですけれども、実際は國學院大學学術フロンティア事業のプロジェクト「歴史系学術雑誌に掲載された写真について」における成果の一部であります。このプロジェクトの内容は、日本における近代印刷技術を用いた画像資料の導入期である明治から大正期を対象としまして、歴史学系の雑誌に於ける画像資料の使用時期とその展開、またその中で用いられた印刷技術についてのデータ収集を行いつつ主にやっております。その目的を述べますと、

当時の日本の画像資料における近代写真・印刷技術の変遷との対比

技術者(写真師など)から研究者、一般へとつながる写真技術の拡がり

当時の歴史学界における画像資料導入への取り組み

文化財保護制度や大学など研究機関の動向との関係を明らかにする

という、4つに基づいてこの作業を進めております。

そこで本報告では『考古学雑誌』を素材にいたしまして、近代初期の歴史学系雑誌における画像資料のあり方を分析するという事で、報告させていただきたいと思っております。

## 2. データの提示・グラフ(出版社・図版の変化)

まず基礎データを述べたいと思っております。今回対象としました期間は、『考古学雑誌』の前身雑誌である『考古学会雑誌』1編1号(1897(明治30)年12月)から『考古学雑誌』6巻12号(1916(大正6)年8月)までの約20年間です。雑誌の変遷につきましては、『考古学会雑誌』『考古』『考古界』という前身雑誌を経まして1911(大正元)年9月から『考古学雑誌』として発刊され、今に至っているということです。

画像資料と雑誌との関係ですぐに思い付くものとしては、印刷所の変遷が挙げられると思っております。ただ、この印刷所自体が元来どのようなものを印刷していたのかはなかなか突き止めるのが難しいもので、わからない部分もありますので、教えて頂ければと思っております。建昇堂や弘文堂など数社ありますが、『考古学雑誌』になりましてからは26巻6号まで聚精堂印刷所によって印刷が行われています。

実際データ項目についてですが、雑誌名、巻号数、発行所、印刷所、発売所、page1(総合)、page2(単独)、タイトル、撮影・印刷者、印刷技術、関連論文、その他、出版年月日、備考という14項目を設定し、それに従って入力作業を進めている状況で、現在総データ数は1736です。

## 3. 考察

次に、考察に移らせていただきます。

### a. 『考古学会雑誌』にみる印刷技術(グラフ1参照)

グラフ1を御覧下さい。これを見て頂きますと分かるように、『考古学会雑誌』の特に1編1号~2編9号まではほぼ図版が口絵・論文内を問わず、木版となっております。なかには石版・榻写版と思われるものが各1点含まれておりますが、大部分は木版です。

ちなみに、『東京人類学会報告』-これはのちの『人類学雑誌』なんですが-、これは『考古学会雑誌』

誌』が発刊されるより前からある雑誌ですが、この中では1巻1号(1886(明治19)年2月)から石版が巻末図版として用いられておりまして、なぜ『考古学会雑誌』では木版しか使われていないのかという点につきましては、現段階では不明であります。

またグラフ1の中で注目していただきたいのは2編10号(1899(明治32)年6月)のところですが、ここでは口絵図版に「扇面写経地紙畫」がコロタイプを使って印刷されているのですが、その後コロタイプ印刷は『考古界』 - 『考古学会雑誌』の2つ後の雑誌ですが - の5篇1号(1905(明治38)年9)まで一度も使用されていない状況が見られます。

#### b. 『考古』にみる印刷技術(グラフ2参照)

次に『考古』にみる印刷技術についてですが、まず印刷技術上で特筆すべき点はグラフ2をご覧頂いて分かるように、網版が導入されるということです。特に口絵図版についてはほぼ網版に統一されます。

また口絵図版には、「原田印刷所」・「製版：田中猪太郎」(写真1)といった、印刷所や製版者などの記載がなされるようになってきています。さらに、若林勝邦という当時の考古学界において主導的な立場にあった考古学者が、写真師を連れて撮影していたと記されているものもありまして、当時実際に写真をとる場合に写真師を連れて撮影していたということもわかります。これは文化財の中で画像資料が使われていく変遷と一致するところで、当時の考古学界における写真技術の浸透過程を反映していると考えられるでしょう。

#### c. 『考古界』にみる印刷技術(グラフ3参照)

次に『考古界』の方にいきたいと思いますが、実際の画像資料について撮影者の名前が出てくるといった点が注目されます。例を挙げますと蒔田鎗次郎・摘精三(臨時部員)・関野貞・中島幹・小川一真・鳥居龍蔵などですが、ここでは写真師のみが撮影するに限らず、研究者自身もカメラを入手し写真を撮影するようになったことがわかります。つまり、この時期には研究者が撮影するといったスタイルへ転換する過渡期と位置付けることができるかもしれません。

グラフ3をご覧下さい。木版は未だ多いのですが、今度は口絵図版に写真銅版という技術が使われ始めております。口絵図版は1篇4号(1901(明治34)年9月)以降、網版から写真銅版へと移っていきます。先に述べた『考古』では主に網版が使われていたのですが、『考古界』になりますと1篇4号から写真銅版となり、その後5篇1号からはコロタイプが使われ、6篇11号(1908(明治41)年2月)からはほぼコロタイプに統一されていくといった過程を辿ることが確認できます。

また、4篇以降に見られる事象として、論文中の図版 - 木版が殆どなのですが - の端の部分に図の作者が自分の名前をサインのような形で記すようになります(写真2)。例として本澤清三郎・和田千吉・高橋健自・古谷清が挙げられます。これは他の雑誌との相対化がまだ図られていないことですので、これから検討すべき課題になるうかと思いますが、作成図版に対していわゆる「著作権」が発生するような状況があったのではないかと考えております。

#### d. 『考古学雑誌』にみる印刷技術(グラフ4参照)

『考古学雑誌』に入りますと、コロタイプ印刷が巻末の折込広告にも使われるようになります。それまではほぼ口絵にしか使われなかったものが、広告などの簡易なものにも使われてくるというように、写真技術の進歩が印刷業界や考古学界へと浸透していき、それを利用するようになる碑が分かるのではないかと思います。また写真技術の中ではズンク版を使用した図版もいくつか見られます。

もう一つ特筆すべきは、本文内に使用される図版です。『考古学雑誌』以前はほぼ全てが木版だったのですが、特に写真の図版の場合は網版を使うようになります。しかし、実測図などには木版を変

らず使うという様に、用途による使い分けが為されているといえます。

その他当時の感覚を示すものとして少し述べますと、『考古学雑誌』3巻8号(1913(大正2)年4月)に引かれている『肖像』第1輯の記事には、以下の様な記載があります。

「由来肖像画は原本に比して面貌等毫末の差異なきを貴とするものなれば、写真によること最適当なれども、帝国大学史料編纂掛発行の絵葉書に於いても世間はコロタイプよりも木版彩色刷を歓迎する如く、多少の遺憾はありとも此の如く色彩の現れたる方一般の希望に添うものなるべし」

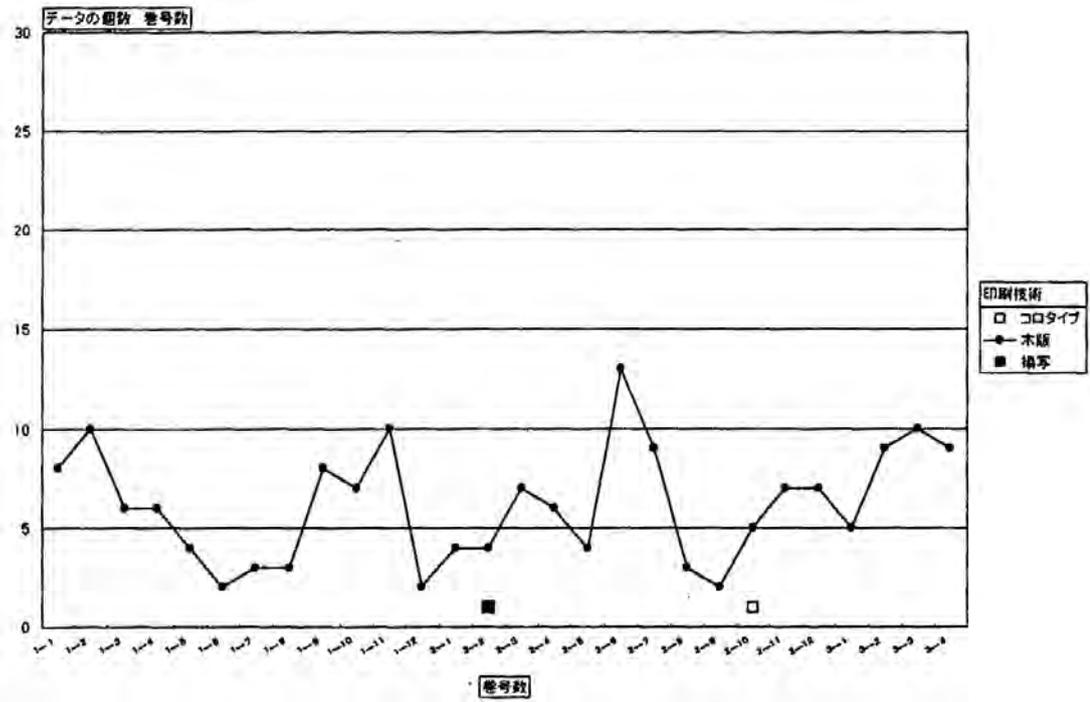
これを見ますと、実際に写真というものが使われてはいるのですが、当時の一般の人々や研究者で絵葉書を作成する側などからすると、やはり木版彩色刷も好んで行なわれていたということが分かるのではないのでしょうか。

#### 4. おわりに

以上、『考古学雑誌』を例に挙げて近代の歴史学系雑誌における画像資料の導入・展開について簡単に述べました。最後になりましたが、このデータベース作成作業の中で、当時における「考古学」の概念は非常に曖昧なものだったのではないかという印象を受けました。それは、雑誌に収められた論文や図版を見れば明らかなことなのですが、その内容が考古学に限らず、民俗学や、文献史学、人類学など、広く他分野に及んでいます。実際には「考古学」が学問として出発した時期から大正年間にかけて、現在のような概念へと徐々に出来上がってくると考えられます。

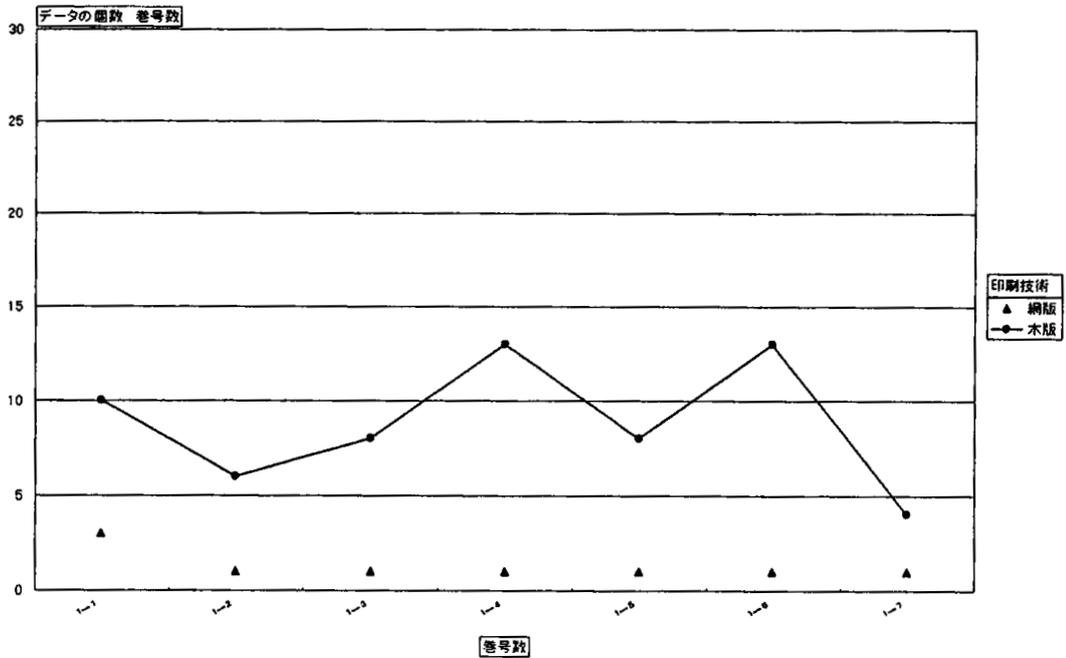
今後、他の雑誌についても同様の検討を行なっていくことで、印刷技術のみならずこの時期の文化財行政や考古学界、研究者の中でどのように画像資料が扱われていくのかといった点などについて考察し、また今回報告のありました大場磐雄氏や柴田常恵氏の研究などともリンクできるようにしていきたいと思っております。以上で報告を終わります。

雑誌名 『考古学会雑誌』



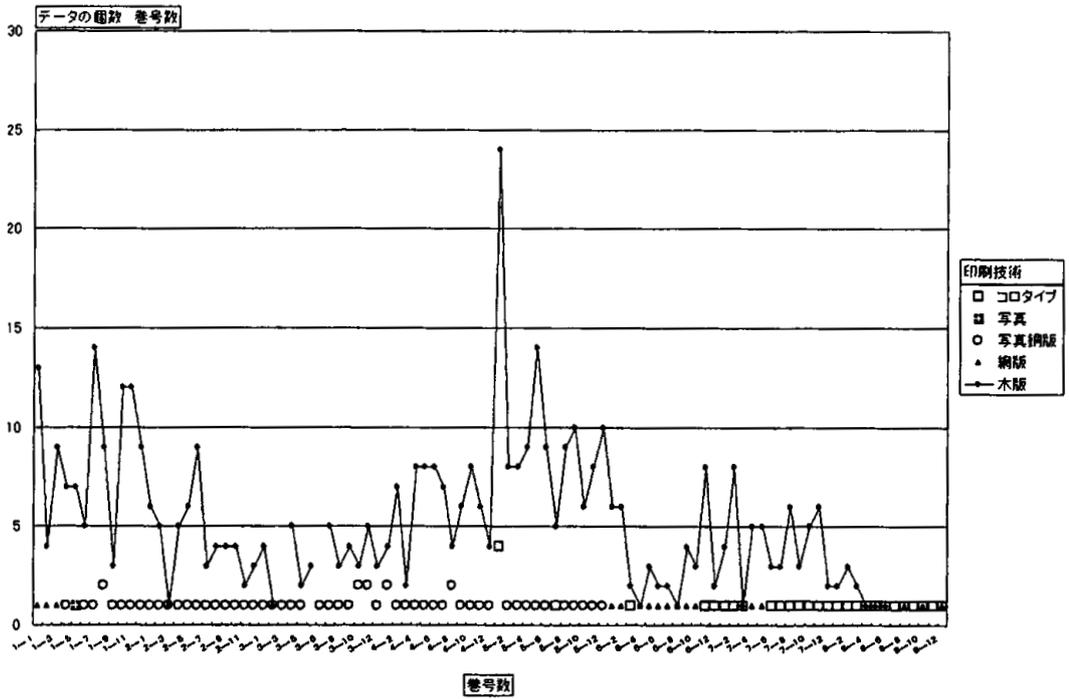
グラフ1 『考古学会雑誌』にみる印刷技術

雑誌名 『考古』



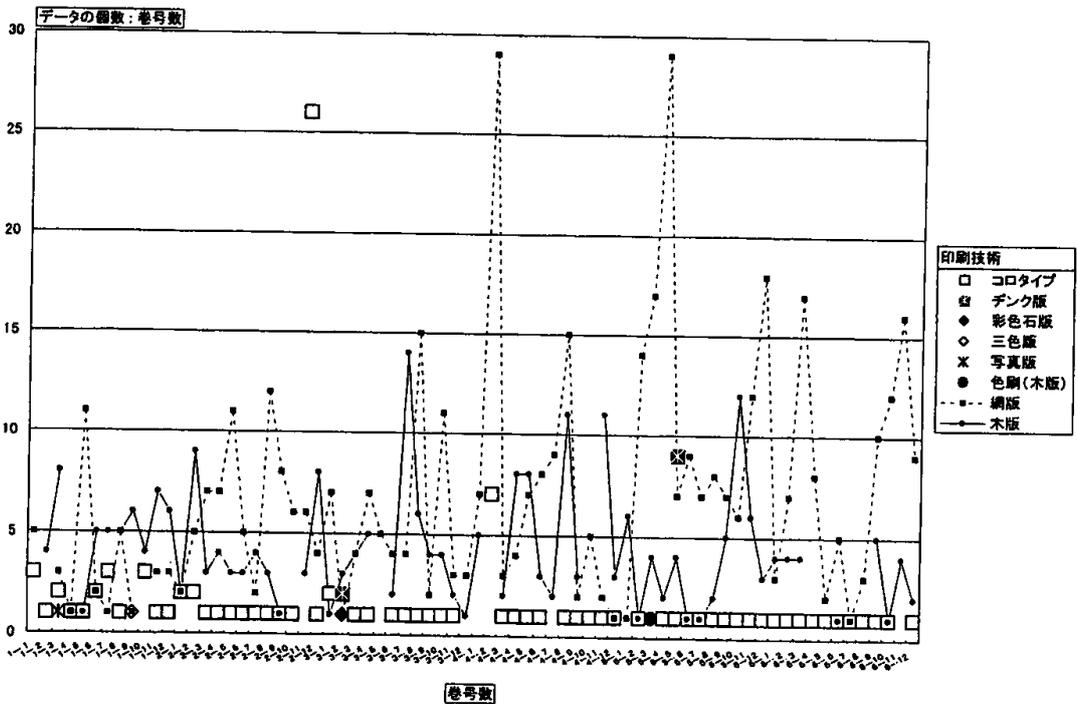
グラフ2 『考古』にみる印刷技術

雑誌名 考古界



グラフ3 『考古界』にみる印刷技術

雑誌名 考古学雑誌



グラフ4 『考古学雑誌』にみる印刷技術

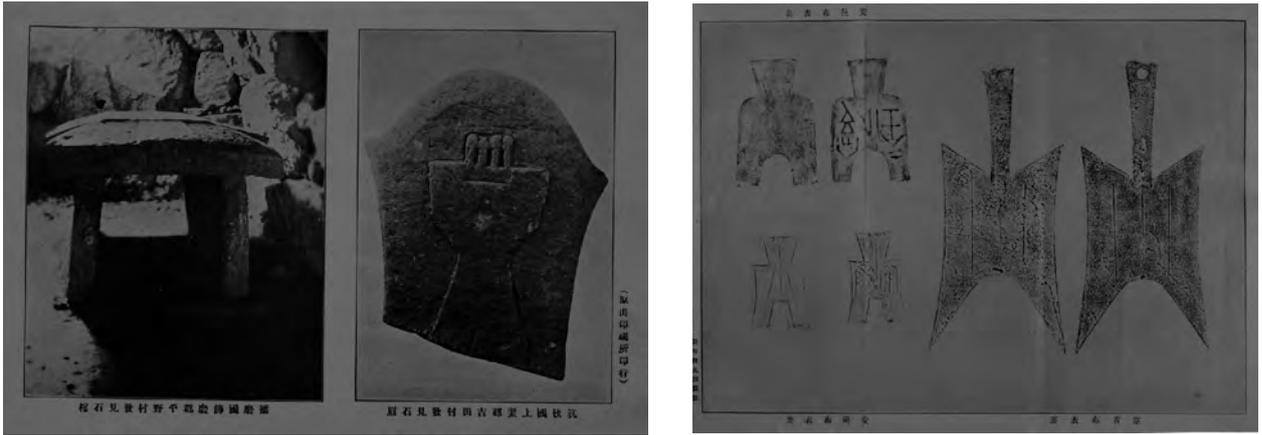
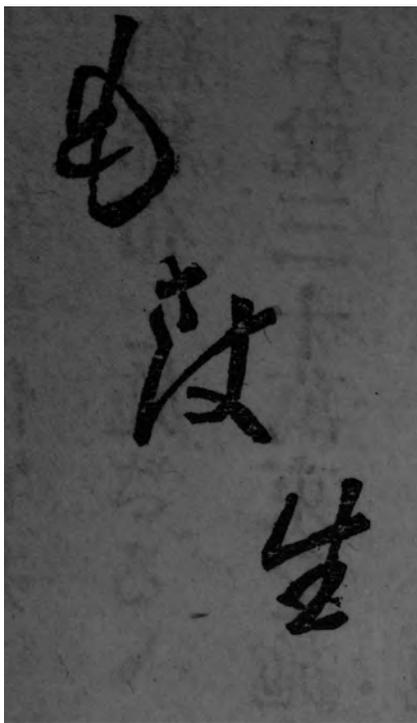


写真1 印刷所・製版者の例（左：原田印刷所 右：田中猪太郎製版）



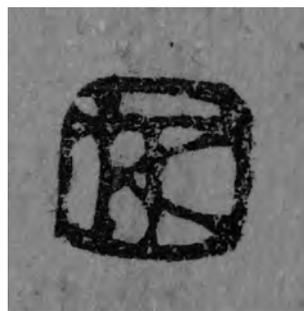
1 本澤清三郎



2 和田千吉



3 和田千吉



4 高橋健自



5 山中笑

写真2 サインの例

## ディスカッション

杉山 林継：それでは、討論という形で本日の研究会の話を纏めていきたいと思います。基本的にはお話し頂いた内容からしますと、個人記録的なものからの部分。つまり柴田常恵や大場磐雄、それから、更にそれを展開していった部分と。あるいは一般化したものとしての記録写真。またその写真の認識というか。学術雑誌上に使われている写真がどのような印刷技術で行なわれていたかということは、それを利用している人達の認識といいますか、利用法といいますか。それがどういう風なニーズに答えてやっているのかにも関係してきますが。

いずれにしても、記録を残そうとしていた人達、それからその利用ということが近代の歴史学研究の中でどう見られるか、という点になっていくかと思うんです。

他の先生方の発表を聞いた上で、修正といいますか、それぞれの方でお話がありましたら付け加えて頂ければと思います。順番通りで、山内さんから。

山内 利秋：柴田常恵の話で、かなり端折りながら話していったんですけども、いくつかあります。まず、私自身が柴田について、あるいは大場について考えていった時にぶち当たった壁みたいなのがいくつかありまして。それはどういうことかという - 皆さんお気づきかもしれませんが - まず、写真資料というのは複製される事が前提で存在している訳であって、プリントされたものが幾つもの色々な所に分散されている事がかなり多い訳ですよ。

ところが一方で、先程の場合ですと東京大学と國學院大學で、お互いに相互に欠けている写真、欠けているけれども補い合える様な状況というのが存在すると。ところが、それらをリンクして見ようといった時に難しいなと思ったのは、それら両方を見る時に閲覧できる様な体制が出来ていない場合がすごく多いという点です。例えば、東京大学であったら、一応全部プリントはしてあるんだけど、柴田の写真かどうかというのは分からない状況なんです。

要するに分類等を行なう時のやり方が、我々(國學院大學)は柴田、大場という各テーマに応じて分類している訳ですけども、必ずしも他ではそういう様な分類の仕方をしていない時があります。その時は我々が例えば「柴田」とか「大場」というテーマに沿って見ようとした時に非常に見にくいな、と思いました。

また、例えば東京国立博物館では、帝室博物館ができた時からの古写真、ないしはそれ以前の社寺宝物調査ですね。フェノロサとか岡倉天心がやった様な。また、それよりも前の、恐らく、近代で一番最初の記録保存の為に写真だと思うんですけども、明治4(1871)年に蜷川式胤が行なった江戸城の写真(『旧江戸城写真帖』)というのがあります。ところが、これらは「写真」という扱いを受けて、写真の内容そのものの研究というのはまた別問題なんですよ。

要するに東京国立博物館の場合ですと、色々な資料がいっぱいあるから、その中の「写真」という位置付けで行なわれてきたという状況があります。ただ、写真の内容に関する調査というのはずっと行なわれてきましたけれども、ではそれを東博ではなくて他の博物館・美術館に持っていった場合、どうなっているかと。要するに、色々な資料の中の「写真」という位置付けであって、内容の具体的なテーマはどうだ、という状況が分からないということです。それでは、我々が例えば「柴田」とか「大場」、あるいはその他でも良いのですけれども、テーマに沿って見ようとした時に、恐らくここにあるんだろうけれども管理している側で分からない状況、というのは結構多いです。

私は大場とか柴田以外にも、特に近代化以降、文化財の記録写真というのがどういう風に扱われてきたか、ということについて今考えています。日本写真学会の学会誌にも書いたのですが(「画像資料と近代アカデミズム・文化財保護制度」『日本写真学会誌』65 - 2、日本写真学会、平成 14 年(2002)年 4 月)、奈良県ですと、大体明治の後半位から文化財専門写真家というのが出てきます。例えば工藤利三郎とか。あとは、「飛鳥園」という写真館があって、そこは今は 2 代続いています。

その辺の有名なところなら良いのですが。先程の柴田の写真で紹介した様な、各地域に写真館があって。そこでも文化財の写真を撮っている訳なんですよ。でもそれは殆ど、どういう風な状況で撮られたのか、あるいは誰が撮ったか、というところまで整備が及んでいない。

恐らく柴田の写真を検証していく時に、色々な各地の写真館を一つずつ訪ねて行ったら、それらが分かってくるのかもしれませんが。そこまで全部このままの状況ではできないな、という様な気がしました。

では今後そういった研究を進めていく為に、それらの相互理解というか、相互で共通する様なシステム作りをどうやっていったら良いのかな、ということは今ちょっと思っています。

ちょっと大場・柴田の研究そのものからはずれましたけれど。そういう様なところでしょうか。

杉山：はい。光江さんと酒巻さん、一言ずつお願いします。

光江 章：今日は大場先生の写真を見せて頂いて、それから今していることという形でお話させて頂いたのですが、山内さんのお話を聞いている中で、大場氏のスタイルが柴田氏のスタイルをかなり踏襲しているというのが分かったのは今日、かなりの収穫だったと思います。

それと、『楽石雑筆』の方が昭和 20(1945)年で終わっていますが、大場先生は戦後も君津地方に来ていて、幾つか重要な遺跡の発掘に立ち会っているという例がありますので、そういったものとの写真とのつき合わせというのが出来れば、という風に考えております。

今一つ、『千葉県史』の関係で扱っている資料なんですけれども、昭和 24(1949)年位に木更津に進駐軍が入ってきまして、そこの将校の方が自分達で発掘をやっている、という様な状況がございました。そういうところを、國學院の関係の方も何人が参加されている様なこともあります。当然、菅生の発掘をやっている時期と重なっているんで、菅生の発掘を見に行けば大場先生も必ずメモしているんじゃないか、という期待もあります。そのあたりもまた、色々な資料を重ね合わせて、また新たなものが出てくるんじゃないか、ということも考えられますので、出来れば『楽石雑筆』の該当部分とのつきあわせをして頂けるとありがたいな、と。

酒巻 忠史：同じ様なことも勿論考えておりますが。今回ご提供頂いた写真を頼りに発掘をしたら、残っていたというのが不思議で。非常に成果があった、という風に思います。結局、従来「無かった」、「もう無くなってしまった」と簡単に考えていたことが改めてこういう写真を元に考えてみると、以外と簡単なお話で残っていたりすることもあるかと思えますし。

あるいは菅生の資料の中に多分混ざっていると思うんですが、例えば松面古墳ですとか相里古墳。相里などの場合、もう場所すらも分からないので、もしそういうものが明らかになれば、なるべく早く、仕事柄調べてみたいと思っています。住宅の下に残っていればそういうところなんだろうけれども。先生が残された資料とか、地元の証言なんかを頼りにして確認したいというのが、私としては一番期待しているところです。

そういう資料が公表されていけば、全国的に同じ様に考える人間が多分出てくると思いますし。末端でやっている人間にとってはそれが一番ありがたいかな、というところでもあります。期待しているところでもある、という風に感じました。

杉山：ありがとうございました。中野さん。

中野 宥：先程仰られた様に、戦後のものは是非知りたい、という気持ちは深く持っております。

それから、これは戦後の調査になる訳なんですけれども、当時の旧制中学の人達も随分参加されています。そういう人達が同窓会を作っています。当時の景品をかなり持っている方もいらっしゃるんです。精力的にそういうのを集めている方もおられまして、その中に「東京から来た先生に頂いた」という写真を幾つか見せて頂いたんですけれども、その中には昭和 18(1943)年のものも混じっていた。丁度あったものですからね。そういう、散らばっている写真をもう一度集めて、集大成して評価していくのもやるべき事の一つかなという感じがいたしました。

余談ですが、写真を撮って記録を集めるというのは、実はうちの民俗の方の学芸員がものすごく精力的に集めている。自分で撮りに行って歩いています。僕らが考古の特別展をやって、図録を作る時にすごく参考になるものがあるんですね。ただ残念ながら、量はものすごくいいんですけれども、記録していないんです。全部自分でなんとかしているんですよ。宝なので、非常に勿体無いんで、誰かやはり若い人にでも入ってもらってやるべきかな、という気がしています。

取り敢えず、写真を撮って、記録を残すというのは本当にすごい精力だ、というのはつくづく感じられます。

杉山：ありがとうございます。それでは、大久保さん。

大久保 治：普段毎日写真撮影して、記録を残している立場なんですけれども、なかなかその記録をとらない。追いつかない部分があります。特にフィルムの場合でしたら、X 線フィルムなどはデュープをおこして委託先に返納するんですけれども、うちで蓄積されている資料というのはかなりの量あります。委託先でしたらそのものしかありませんけれども、うちになりますと結局全国の自治体から資料をお預かりしていますので、比較検討するにはかなりの量の資料(写真記録)が残っていると思うんですけれども、実際、それが使える様な形になっているか、と言われまして、そこまで手が回らない、という様な感じです。

今後、そういったことが出来る様な体制を取っていきたいとは思っているんですけれども、ここに来て発掘調査自体が少なくなってきていますので、予算削減ということで、私共の仕事も減ってきていますので、その辺の調整がつかない部分があります。思いだけはあるんですけれども、なかなか実行には移せないのが現状ですね。

杉山：ありがとうございます。また後で、討論の時にお話頂くとして。加藤さん。

加藤 里美：非常に簡単に終わってしまったんですけれども、日々、大場先生のマメさに感謝しておりまして、全ての事が書かれている。ただやはり達筆でいらっしゃるの、分からない部分もかなり多くて、それは『楽石雑筆』に頼って元に戻ってみて。更に報告書に戻って、遺物名などを確認するとい

った様な作業をここにいる皆さんが実務を担当して下さっている訳なんです。

そういう風に一つ一つ写真の位置とかを決めていっているんですが、昭和20(1945)年以降、やはり大場先生がマメとはいえ、資料がぐっと減ってしまっています。メモ書き程度のものは残っているんですが、1年の間に、それこそ数十箇所の遺跡を見て回られているので、「8月」と書いてあっても実は9月であったりとか。ちょっとしたミスがあったりすると、茨城県の遺跡が埼玉県の遺跡になってしまったりという様なことがあります。実は私達がやっている作業も、ちょっとした齟齬があるのではないかと、という風な不安もあります。

ただ、大場先生の文字を、当時助手をされていた小出義治先生に援助して頂いて、文字をかなり読んで頂いて、更に内容をチェックする、といった体制でやっております。

私も、先程あった茶色の箱を開けたのは、ここ数日前なんですけれども。柴田資料の方は先程山内さんが見せた、冊子の取り込み作業(データ化)をしているんですが、大場資料の方も実は作業をやらなければいけないのではないかと、やるべきであって、それではじめて写真ガラス乾板と、大場先生の集められた資料がリンクしていくのではないかと、と思います。

今日、先生方にお話をさせて頂いたんですが、やはり綿密に、一枚一枚を剥がして行って、また更に組替えて、蓄積していく方法が、時間はかかるけれども一番の方法なのかな、という様な印象を受けました。以上です。

杉山：ありがとうございました。平澤さん。

平澤 加奈子: 今回の報告者の方々が対象にされている時代よりも、私が今回扱った時代は更に古い状況です。特に木版とかですね。実際に遺跡に行ってもスケッチの様な状況で最初は書かれているものが、網版写真、石版コロタイプという形で、段々鮮明に、綺麗になっていくという様な状況を、私の方ではお話をさせていただきました。

その中で - 先程から何度も出ていますけれども - 大場先生が記録している様に、他の研究者の方々も相当微細に記録が書かれていて、それを『考古学雑誌』においては後ろの方、例えば、朝鮮の調査に何度も行かれている八木奨三郎氏などは、事細かに、何日、何処にて、誰と何処へ行って...という情報も全部書いたものを『考古学雑誌』に載せたりする。最初はそういう風に情報を皆で共有する、という状況があります。勿論、その場合に写真資料や画像資料なんかも皆でシェアするという様な状況が特にあったのではないかと、思いますので、そういう様な事例を、もう少し具体的に追っていくことによって、これから、その後の研究の流れにも少しお役に立てるのではないかと、思っております。

杉山： はい、ありがとうございました。平澤さんのは「印刷技術」がもう一枚、加わるものですから。写真だけではなくて、多量に交付をする、といいますか、多量を出していくというところで、印刷技術というのがまた一つ加わると。しかし、皆が希望する正確さとか、色々希望する点もある。日本では浮世絵やなんかの、木版刷りなども相当細かく出来ていた時代もあるわけですし、そういうものも含めて、あるいは考えていけなくてはいけなくなるかもしれないけれども、表現する時のものが、やはり欲しがっている方に対してどこまでできるか。この辺が、単なる写真ということだけではない、と思うんです。

私も実は、写真と印刷の問題について前々から気にはしていました。何故日本で、例えばコロタイ

ブのカラー印刷が無くなっていったのか。日本に技術は入るんですけども、入ったのがまもなく無くなっていく。いまやもう東京のコロタイプ屋はいなくなってしまった。私も何軒かは実際にコロタイプの印刷の中に入って見せてもらいましたけれど、それも無くなった。

それから、グラビア写真もどんどん無くなっていく。そういう様な、印刷技術とその時代の要請というもの - 今でもコロタイプ印刷は私は良いと思うんですけども - 、良いと思ってもそれが皆に維持されるだけの金が出されない、という。そういう状況があつてのことになっていくんだと思うんです。

まァコニヤック版だとか、色々なことがきつと出てくると思いますけれども。その辺は今後、この色々な画像資料の公開面としてはやはり考えていかなければいけない問題だと思うんです。もうワンステップ、平澤さん等で少しメンバーを作ってやってもらうことによって今後、データ集めをやらなければいけないかな。明治なら明治に区切ってかなり細かくやると...明治大正でやれるのかな。そこら辺が微妙だと思うんですよね。そういうのを是非、また進めてもらいたいと思います。

はじめに大場磐雄資料と柴田常恵資料なんですが。今日御覧頂いた登呂の資料などは、今までに御覧になった事がありますか？大場の焼き付けた方の資料。

中野:いいえ。この前、大塚初重先生の講演会がありましたよね。あの時にテーブルの上に載っていましたよね。あれぐらいです。

杉山:そうですね。大体登呂関係が1.5箱位。それは大体纏めてありますから、また御覧頂ければと思うんです。つまり、ガラス乾板がある方は基本的にここで著作権まで持っている、という解釈でいるんですけども。登呂にしてももうそろそろ50年になりましたから良いのかもかもしれません。あの資料の中には、大場先生が貰った資料が入ってきますので、そういう事情もあって、どこまで出せるかということはあるんですが、基本的には両方の資料が相まって登呂の資料というしかない。ある意味で乾板というのはごく一部分のものなんです。ですから、まだこれから整理していかなければいけないものも相当ありますので、是非またご利用頂ければと思います。

今、山内氏等がやっている様な、大場とか柴田の映像に対する態度というか、本当はこれをちゃんとやった上でまだ何人かの人達をやってみないと、やはり難しいんだろうと思うんです。登呂等ではどうですか。他の先生方の資料というのはどの程度お集めになっておられますか。

中野:映像とかそういうのはあまりないですけども。写真関係では昭和22(1947)年以降のものが多いいんですが、八幡一郎先生のものご提供を受けております。あと、資料的に多いのは森豊さんが持っておられたものですね。あとは弥栄先生が、時たま見付かると途中下車で寄って頂いて。

杉山:やはり、それぞれの先生方の資料に対するといいですか、思い込み等がそれぞれあると思うんです。いずれの先生も、考古学をやっている先生というのは発表資料として写真資料があるんだ、という事は十分承知でおられる訳ですから、大事にされていると思うんですけども、そういう先生方のものが纏まってくると、かなり、登呂遺跡の復元が出来てくるかと思うんです。

大久保先生は色々な写真を今撮られて、レントゲン写真や、X線写真といったものも大分なさっておられると思うんですけども、そういう特殊な、普通では撮れない写真類ですね。例えば阿武山の古墓などの、京都大学などで大分撮ってあつてそれが残っていた。つまりその時に発見されなかった

ものが、もう一度写真を見直すことによって発見される様な例もあるかと思うんですけども。

そういう様な意味では確かに撮影の条件とか、どういう状態で撮ったとかいう観察が必要になってくるんだと思うのですが、何かその辺りでどうでしょうか。実際に常に行なわれている最中で。

大久保:そうですね。基本的に、自分がいなくても、誰が見ても分かる様なフィルムの整理ですとか、モノクロ写真でしたら、誰でも焼ける様なフィルム、撮影現場づくりですね。凝ったライティングをして、撮影者しかプリントできない様な状況は避ける様にしています。

杉山:平城宮ができて奈文研ができた時に、そこへ行ってフィルムの整理を見せて貰ったことがあるんです。早い頃でしたけれども。それは事務の方で管理していました。一点一点の35mmのフィルムをチェックしているんですね。あれははっきりいって驚きました。我々研究者がフィルムなんか整理しちゃ駄目だな、と。何ていうか、1回出したらもう戻らない様なことを我々がやるもんですから。そういう意味では、管理システムが相当必要なんだな、というのを見たんですけども。

大久保:そうですね。研究者からはずして別の形で管理するのが良いかとは思いますが。研究者にはデュープフィルムですとか、今でしたらデジタルデータで渡しておく、という様な形で。原版は別に保管される方が。紛失の可能性がかなり高いですから…。

杉山:使ったけれども元に戻らない。「どこいっているんだ。あった筈だ」、というのが一番困る問題です。実際に柴田先生のアルバム等でも大分戻っていないのがありますし。そういう事からすると、管理というものを相当システムのやっつけていかないといけないのだなと。

今、このデジタル化の方でやっていきますと、何が欠けたかはある意味では分かってしまうといえれば分かってしまうですね。

大久保:そういう場合もありますね。貸出に関してはデジタルから出力アウトしたものを貸し出すとか、そういう事もできますので、オリジナルを触る必要が無くなります。

杉山:その辺の管理体制というものを、千葉の方ではどうしているのだろうか。フィルムは調査が終了後にそれぞれの教育委員会に戻しているのでしょうか。

光江:そうですね。教育委員会の管轄に入ります。写真の管理とかに埋蔵文化財の担当者が関わっていれば良いんですけども、役所の中のシステムとして処理しますと、写真というのは永久保存の資料の対象外になってしまいますので、何年か経つと廃棄ということもしているのかと。

杉山:それは確かですね。逆に学術資料としての扱いをした上での事務管理システムがないと駄目だという事になるかな。やはりこれから一番問題になるのは、そういうシステムをどう作っていけるかという、公共団体にしても大学等にしても、そういう点が大きな問題になってくるのかな。それは今回ここでは、少なくともデジタル化で見られる様にすることをやり始めました。これらの資料はガラス乾板だった為に扱いにくかったから残っていたという部分もあって。貸出も、ガラス乾板はほとんど貸し出すという例がなかったものですから。そういう意味では、乾板に関しては残っていた。

しかし、私は卒業論文は大場先生の乾板を借りて、自分で焼いて使っていたんです。私の頃までは、ガラス乾板を扱えたんですけれども、今は扱わなくなってしまいましたし、その辺はどうなんでしょう。そういう時代性の問題。これでデジタルカメラがどんどん入ってくると、逆に残るのかな、残らないのかな、記録って。

山内:幾つもあると思います。例えば東京文化財研究所ではもう暗室を廃止しちゃったんですね。基本的にはもう使わないで新しいフィルムを使う。もう完全なデジタルカメラで撮っていくという方針です。私自身は大学で「文化財デジタルコンテンツ」というのを専門にやっていますけれども。ただ、私自身としては暗室道具を買っているんですよね。ところが、補助金なんかで、大学の方でも暗室を作るというのはなかなか認めてくれないんですよ。「もうこれ、今デジタルだから。何で要るの?」といわれてしまうので。教室とかなかなか難しいんです。だから簡易暗室、お座敷暗室みたいな感じでやらなければ仕方がない部分が出てきます。

あとですね、先程デジタル化の事業に関して、國學院の方で進めていきましたけれども。逆にですね、研究者としての山内にかえてもう1回見た時に、デジタル化では見えてこない状況というのがいくつかあります。それは例えば先程柴田の資料で朝日貝塚の資料がありましたけれども。朝日貝塚の写真だけ妙に良いんですよね。何か綺麗だな、と思って裏を見たら、印画紙に“VELOX”って書いてあるんですよ。要するに輸入物の良いやつを使っているんですよね。そういうのはデジタル化だけでは出てこないです。ですから常にデジタル化される一方で常にオリジナルに帰れる様な状況というのは必要なんだな、ということに気付く訳です。そういう様なシステムを如何に作っていかなければいけないのかな、という風に思いました。

あの、杉山先生のお言葉に「乾板は扱いにくいから残って、プリントしたのは出やすいから出ていってしまった」と。ここの柴田資料の中でも、「雄山閣へ貸出」という風に大場先生の字で書いてありますよね。大場先生の間に出ていってしまったと思うんですけれども。逆に今ですとオリジナルの写真資料とそのデジタルデータという風な位置付けになってきていると思うんです。けれども実際それが戻ってきた時にもう1回、あるいはデジタルというものの自体がオリジナルという風な、同じ様な状況にある可能性がある。そうした時にやはり原点、というか元のオリジナルにどうやって帰れるかを考えてみなければいけない、ということが最近ちょっと思っているところですね。

あとですね、よく公共団体とかに行き、写真資料を使いたいと。あるいは私自身だけではなくて、色々な人が活用したい、といった時にまずいわれるのは「これは個人所有のものであって、文化財は国有の財産だから」といって断られる場合が多いんです。それは個人が、あなたが使うんでしょという言い方をされる。でもこれはすごく本末転倒なんじゃないかな、と思いました。公共団体の中に寝かされている部分をどうして使っちゃいけないんだろう、というのは今でもそういう風に取り違えているところが何件もあったりして、その状況は何とかならないんだろうかと思いました。だから逆にそういうのを上手く出来る様なシステム、モデルケースを作っていくって、それを一般化していくというのを逆に我々が考えていかなければいけないのかな、と思いました。

写真家の資料を持っている美術館とかですと、やはりそういうのは上手くやるんですよね。兵庫県芦屋市の美術館、芦屋写真クラブというのが戦前からあって有名な芸術写真がありますけれども、団体で運営しながらも、例えば広告媒体なんかでその写真を使いたいという時はある程度権利料金を取りながら上手く流している、というやり方をきちんと模索しながらもここ数年で作っていったみたいなんです。そういったようなものを文化財も上手く取り入れられないだろうか、と考えています。

杉山:大久保先生、デジタル化の件はどうか。今写真を撮っておられながら。

大久保:個人的にはまだフィルムなんで。ケース・バイ・ケースになってくると思うんですね、まだ。デジタルカメラを使った方が便利な面もありますし、フィルムの方が便利な面もありますので。

杉山:長期保存を考える時にはどうですか。

大久保:長期を考えますと、フィルムで撮影してからデジタルに落とす、という方向性ですね。逆にデジタルで撮影した場合ですと、現在でしたらまだフィルム出力できますので。一旦フィルムに出力しておくという。ちょっとコストは掛かるんですけども。

杉山:今からデジタルの関係はどんどん精度が良くなっていくでしょうし、その場合に保存しておく時のやり方で、元データのものをどう取っておくかということも出てくるんだろうと思うんですね。今デジタルカメラで撮ったものが、どの様な形で今から整理されていくんだろうか。

最近私も韓国へ COE 関係で出かけてきたんですけども、ほとんどの人が持っていたのはデジタルカメラ。そうすると、要らないものは捨てるにしても、要らないものを捨てる、捨てないが、フィルムの場合には何を捨てているかがまた分かるんですけども。デジタルの場合、はじめから捨ててしまっていくか、それとも撮ってきたものを全部入れておく様なものが必要になってくるのかどうかなんですよね。それは写っていないのは捨てれば良いのかもしれないけれども。しかし、そのどういう行程の中で撮ったものが残ったのか、ということになってくると逆にフィルムの様な形。

ただ、デジタルでもできない事はない筈なんですよね。DVD へ取っておくというやり方はできる訳だから、普段使うものだけ取ってくれば良い訳で。そういうことは出来る筈ですから、やはりこれも整備の仕方によって随分違って来る可能性があるかな、とは思うんですけどね。

皆さんのお話の中で「利用」の問題が大分出てきています。それは基本的にはこの大場資料等を何とかして、少しずつでもオープンにしていこう、ということをごここでやりはじめた状態であるのは事実ですけども。他は、例えば東大などでもこれからはどんどんやってくれるだろうと思うんですけども。そうすると、確か写真美術館などとのシンポジウムの時にも出たと思うんですけども、今度はネットワークを作っていかなければいけないだろうという話も出てくると思うんです。そこら辺はどうでしょうか。何ていいますか、基準的なものを作っていかどうか。何か利用方法に共通性を持たせていくものが必要かどうかということですよ。例えば図書の分類ナンバーみたいな、ああいう様なもので、写真についても皆が共通して検索出来る様な方法を考えないといけないかどうか。私は少し必要じゃないかとは思っているんですけどね。今のうちだとまだ皆がやり始めていない。國學院などでもやり始めたけれども、今のところ「大場資料」といういい方だけでは、これからはちょっと。何かの方法で分類しなければいけないだろうと思うんです。そこら辺をどうするか。検索方法等はどうでしょうか。

山内:文化庁で進めている共通索引システムは、国立博物館を中心にやっていますけれども。公共団体の博物館って必ずしもそれを了承している訳ではないと思います。それはどういうことかということ、1つの共通的なデータを吸い上げる様な形でやってしまうことに関しては異論が多いとか。あと、必ずしもその分類が良い訳じゃないのではないか、という意見が多いんですよ。

少し変な話になりますが、先程の平澤さんの話で非常に面白かったですけれども、コロタイプ印刷というのが出てきた一方で、逆に木版の多色摺りの方が一般には受ける、というお話が非常に面白かったです。写真製版、コロタイプが出てくるというのは、それまで木版とか江戸時代の浮世絵みたいなのがあって、どんどん完成されていて。メディアとして非常に面白いものだった訳です。

それで、色々なものの表現の多様性というのが出てきて。ヨーロッパ等の印象派に影響を与える位、インパクトがあった訳ですけれども、それを全部一度取ってしまって、写真に収めてコロタイプ製版して一つのキャプションに統一してしまう、という行為を明治時代にやった訳です。それはある意味では色々な方言を一つの標準語に纏めようとしたのと同じ動きなんですけど、それに対する反発みたいなものが明治時代に - 結果的に統一されたことがあったのかもしれないけれども - あったんだなあ、というのを思いまして。平澤さんのが面白いなあ、と思ったんです。

現代にそれを置き換えてみると、言葉を1つに統一する事は確かに必要であるし、それがなくては見れない、ということはあるのだけれども、失われてしまう情報も必ず出てくるんだな、という風に思ったんですね。

それで、私も、ある程度検索する為に統一するというのは絶対に必要だし、やらなくては行けない事だし、私自身も進めている事ではあるんですけども、一方で、失われる情報をどうしようか。どうやって補填していこうかという事ももう1つ考えていかなければいけない、という気がします。

杉山: どうですか。私は大雑把な地域とか、大分類的なものだけがあればそこからは探せるのかな、という気がするんです。ただ、複数の検索方法が必要な。例えば「まつり」とか。今、一方の大場資料は大場先生が分類したのが「縄文」とか「弥生」「古墳」。「祭祀遺跡」があって、「歴史時代」があって。それから「民俗」。これは大場先生が自分で100箱の箱を分ける時に、自分が利用しやすい様に考えてやった分類なんですけれども。それで、その中はまた地域分類等になっています。私はそういう様な、もし写真資料についても大雑把な共通分類法が出来てくれば、それによって皆が「およそこれくらい」という意見が出れば、それで良いんじゃないかと思うんですけどね。そうすれば、各地域で、地方とすれば我々の地域のものはどんなものがあるか、というのを探す事が出来るでしょうし。そこら辺を二重、三重の索引方法が出てきたら面白いと思うんですけどね。

登呂等は、ある意味では特定の地点でありますし、遺跡でありますけれども。類似遺跡についてはどうされていますか。例えば、あの当時だと平出だとか菅生遺跡。今は沢山出て来ましたけれども。そういうものに関してのデータ等もやはり集められる事もあるんですか。

中野: 参考にしたいんですけども。現状は、ほとんどデータがありません。個人的な仕事の枠内に留まっております。

杉山: さっきの山内さんの発表の中に、住居址の最小家屋とか。そういう意味では登呂遺跡等も中野先生が発表された様に、学史的な意味も色々持っている遺跡ですから。そういう意味では、当時における他へ与えた影響ということも本当は是非欲しい様な感じがします。

中野: 面白いのは、時々お手紙を貰うんですよ。「何十年振りか来たけれども随分変わっている」と。「昔来た時には正直言ってカルチャーショックを感じた」とかね。それから「ああ、日本の国もこういうものが見られる様になったんだ」とか、そういう感慨を持ったという。それは恐らく20、30年来のお

話だろうと思うんですけども。そういう話をやはり集めておく、という作業が必要だろうと。

杉山:そうですね。それと、山内さんの発表の中に、現地の写真家 - 「写真師」または「写真家」 - そうい  
う人達を利用している。これはやはり地域における文化とも関係してくるとは思うんですけども。  
初期の地方写真家というものの、本当はそれはそれで研究してみる必要があるかもしれない。

それから、大場先生の資料等で出てきた中に、個人研究者というか学校の先生がやっている例が見  
られます。小熊吉蔵が出てきていたけれど、小熊吉蔵は『君津郡誌』を大正年間に作った時に「古墳時  
代」という言葉を使っているんですね。その「古墳時代」という言葉の使い方も、その当時としては私は  
古かったという気がするんですけども。

だから、地元の研究者と中央の研究者、それから地元の写真家との連絡とか。そういう様な、比較  
的中央からの見方が強い中で、そういう地域地域の者との連携等もちゃんと考えていかないといけな  
いだろうし。そして、そういう人達が日常的に撮った写真等を貰ってきている、というか資料を得て  
いる可能性もあるので。そこら辺はやはり資料を整理していく時にはそういう地元というもの、それ  
ぞれの地方というものも考えてみないといけないんじゃないかと思うんですね。

山内:あの、これは駿府城のある中野さんのところは是非注目して頂きたいんですけども、城下町っ  
て写真館が多いんですよ。どうしてなのかな、と思って、科学史とかを見て分かったんですけども。  
旧士族身分、特に下級武士というのが食い扶持にはぐれてしまって、写真館を開く場合が多かつ  
たんですよ。士族ですので、ある程度知識を持っていたので写真機を扱う...当時はまだ化学に近い  
ものでしたけれども、ある程度勉強すれば扱えた、というパターンが多くて。そして写真館という特  
化した職業に就く、というのが随分多いみたいです。

だからその流れで。どうも今見ても、昔の城下町とか、あと伝統的な町並みが残っている様な所と  
いうのは写真館が非常に多いです。私は今倉敷という街に住んでいて。倉敷は城下町ではなく天領で  
すけれども、写真館が多く、1800年代に出来た写真館が未だに営業しています。ちょっとそういうと  
ころは狙い目だな、と考えています。

大久保:それは、結局長崎に幕末時に科学技術 - 医療の方ですけども - 蘭学を各藩から勉強しにいっ  
ている人達が、長崎に集中しているという状況とも一致しますね。

山内:仰る通りで。やはり長崎に派遣しているんです。日本の近代化というのは実は下級武士が科学を  
やって広げた、というのは科学史で結構有名な話らしいんですけども。

大久保:それで、明治維新の時に各地に戻って写真館を営業する、というのは多いみたいですね。

杉山:木更津あたりでは、写真館の流れは追えないんですか? 地方に行くと意外と、「あれが師匠だ」  
とか。その土地で「俺がやっている前はあそこがやっていたんだ」とか。そういういい方をする人が多  
くいるんですね。私の家のそばに清水という写真屋があって。もう90歳位になるから、その人に「こ  
の写真は?」と聞くと「それは俺が撮った写真じゃない。宇田川が撮ったんだ」という訳です。そうす  
ると宇田川という写真屋がいたことは確かで。清水は宇田川写真館の機材を貰ったりしているみたい  
で。そういう様なのが少しずつ、地方によって遡っていけるところがあって。

熊本の富重さんのところみたいに、ずっとやっている家はまた別だけれども、場合によっては一代限りで止めてしまう場合がある。一代きりで止めると、やはりそんなに需要がある訳ではないから、地方では大勢写真屋がいても駄目なんですね。そうすると、いない地域に行ってやっているものだから。そういう風なことから、地方の写真師の系譜を追える可能性がある。そこら辺も。さっきの、現地の写真師の話が出たけれども、そういうこともやってみる必要があるのかもしれないですね。

登呂の時は、さっきの話ではどうなんですか。森さんの写真なんかは。あの人は報道マンということではほとんど自分で撮っているんですか。

中野:撮っていますけれども、皆毎日新聞社のカメラマンが入っていますので。探してもらっても中々出ない、という状況になっています。昭和 18 (1943) 年の調査の時なんかでは、牧田写真館というのがありまして。その牧田写真館が撮っている様なんです。契約を結んでいるみたいですけどね。静岡市内にも、ある写真館があって。その写真館の人は戦中・戦後の写真を随分残している。これはすごく役に立っているんですね。ところが、残念ながら空襲で中心が全部やられているんです。写真館は大体そういうところに集まっていたから、多分残っていないんだろうな、と思っています。

あとは個人的な。要するに原版そのままじゃなくて、紙焼にプリントしたものを持っている。そういうものを集めていくこと位だろうと思うんですけども。

杉山:今日は特別な結論を、という事ではないと思うんです。一番問題になったのは『楽石雑筆』の戦後部分を、というご希望が大分ありましたので、何とかこれも実現したい。せめて昭和 30 (1955) 年位まで...昭和 20 年代といったら良いのかな。昭和 20 年代位の『楽石雑筆』は何とか活字化することを考えないといけないと思います。

もう一つはさっき山内さんがいった、柴田資料の中には活字にできるものがあるということ。これは何かの方法でやはり出さないといかん、という事は大場先生もいっていた。成稿にした、本を作るつもりで書いた原稿がある。それが柴田資料の中にあるので、それは少し考えてみないといけない、と思っているんです。こういうものも、写真資料等を利用すると同時に、そういう書かれたものもちゃんとしておかないといけない、と思いますし。そういう面では柴田資料までは國學院でとにかく扱える範囲です。

それから、実は今年 (2003 年) に入ってからなんですが、内務省の神社局の考証課長をやった、宮地直一先生の資料が國學院に入りました。東大の教授をやりまして、國學院でも授業を持っていましたけれども。この人がやはり、神社関係ではありますが、相当色々な興味を持っていて、全国を歩いて神社調査をやりながら資料を集めています。そういうものもありますので、この整理もいずれやりたい、と思っています。

ですから、國學院は國學院で発信できるものが幾つかあると思いますので。それをできるだけ外へ利用して頂ける様に発信すると同時に、何とかしてそれぞれのメンバーを作って、各大学なり各地方行政機構なり、そういうところでネットワークを作って、お互いに利用できる様にしていけないといけないんだろうと思います。それをみんなが考えて、そっちの方向へ持っていく様にしていくことによって、学問的にも発達していくのかな、という気がするんですけども。

今回、こういう会を、研究会として開きましたけれども、私とするならば、若い人達に少しでも多く参加してもらってネットワークを作ってもらう。こういう研究のネットワークを作ってもらう、ということが必要だろう、という気がします。

どうですか。他に参加している人達で何か一言ありますか？大場先生の字が読みにくいとか、柴田先生の字が読めない、というだけじゃちょっと困るんで。まあこれは、仕方がないので。さっき加藤さんから出たけれども、大場先生のメモが正確だとか正確ではないとか。これは、後から書いたものも確かにあると思います。ですから、日付については非常に気を付けなくてはいけないものがあることは事実です。既にもう『楽石雑筆』と乾板の袋に書かれたメモ等が違っていたりするのは所々に出ていますので、それは何の記録でもそうですけれども、それを「ここではこう書かれていた」としてやるしかないものがあります。それは今後も整理していく上で、直せるものは直していけば良いかとは思いますが、しかし記録としてはそういう記録があった、ということで処理していかなければいけないだろうと思います。

今後については、折角ここまで画像資料をやってきたものですから、この画像資料を多少は発展させる形で進めていきたい。1つには、ネットワーク作りのもの。それは、我々のところで発信する材料がやっと少しずつ出来てきたものですから、この発信する材料を基にしながら、皆さんに何とか、ネットワーク作りに参加してもらいたいような形を取っていかうかな、というのが私の個人的な考えですけれども、皆さんにまた教えて頂きながら決めていきたいと思っています。

大体時間も来ましたし、そろそろ終わりにしましょうか。本日はどうもありがとうございました。

國學院大學學術フロンティア事業 研究報告  
人文科学と画像資料研究 第 1 集  
Kokugakuin University Frontier Reserch Project Bulletin  
Research in Visual Documents within the Humanities Vol.1

発行日 : 平成 16(2004)年 3月 20日

編 集 : 國學院大學學術フロンティア事業実行委員会

URL : <http://www2.kokugakuin.ac.jp/frontier/>

発 行 : 國學院大學 日本文化研究所

〒 150-8440 東京都渋谷区東 4 - 1 0 - 2 8

ISBN : 4 905853 11 7